

基本計画書

基本計画								
事項	記入欄						備考	
計画の区分	学部設置及び通信教育の開設							
フリガナ設置者	ガッコウメイセイメイトウケン 学校法人 明星学苑							
フリガナ大学の名称	メイセイダいがく 明星大学 (Meisei University)							
大学本部の位置	東京都日野市程久保2丁目1番地1号							
大学の目的	明星大学は、設置母体である学校法人明星学苑の建学の精神に則り、「自己実現を目指し社会貢献ができる人の育成」を教育目標とし、この目標を大学における教育研究を通して実現する。							
新設学部等の目的	(教育学部の目的) 教育学部設置の理念・目的は、「教科に関する専門的知識・技能を備えた教育者及び児童福祉についての専門的知識・技能を備えた人の育成」であり、これをもって明星大学の「教育目標」を実現する。							
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地
	教育学部 [School of Education]	年	人	年次人	人		年 月 第 年次	東京都日野市程久保2丁目1番地1号
	教育学科 [Department of Education]	4	320	・	1280	学士(教育学)	平成22年4月 第1年次	
	教育学科(通信課程) [Department of Education]	4	2000	・	8000	学士(教育学)	平成22年4月 第1年次	
計		320 2000	・	1280 8000				
同一設置者内における変更状況(定員の移行、名称の変更等)	<p>明星大学 平成22年4月設置予定(平成21年6月届出)</p> <p>理工学部 総合理工学科 [入学定員] (400) ・学部の学科の設置・</p> <p>人文学部 日本文化学科 [入学定員] (100) ・学部の学科の設置・</p> <p>福祉実践学科 [入学定員] (60) ・学部の学科の設置・</p> <p>心理学科 [入学定員] (110) ・学部の学科の設置・</p> <p>平成22年4月学生募集停止</p> <p>理工学部 物理学科 (廃止) (80)</p> <p>化学科 (廃止) (100)</p> <p>機械システム工学科 (廃止) (100)</p> <p>電気電子システム工学科 (廃止) (100)</p> <p>建築学科 (廃止) (80)</p> <p>環境システム学科 (廃止) (70)</p> <p>人文学部 心理・教育学科 (廃止) (260)</p> <p>心理・教育学科(通信課程) (廃止) (2000)</p> <p>日本文化学部 言語文化学科 (廃止) (100)</p> <p>平成22年度より入学定員の変更</p> <p>人文学部 国際コミュニケーション学科 [定員減] (40)</p> <p>人間社会学科 [定員減] (60)</p> <p>いわき明星大学 平成22年4月設置予定(平成21年4月届出済み)</p> <p>科学技術学部 科学技術学科 [入学定員] (130) ・学部の学科の設置・</p> <p>平成22年4月学生募集停止(平成21年4月届出済み)</p> <p>科学技術学部 電子情報学科 (廃止) (60)</p> <p>システムデザイン工学科 (廃止) (50)</p> <p>生命環境学科 (廃止) (65)</p>							
							上段：通学課程の計 下段：通信課程の計	

教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数			
		講義	演習	実習	計				
教育課程	教育学部 教育学科	331科目	148科目	17科目	496科目	124単位			
	教育学部 教育学科(通信課程)	311科目	141科目	13科目	465科目	124単位			
教 員 組 織 の 概 要	学部等の名称		専任教員等					兼任 教員	
	新 設 分	教育学部 教育学科 教育学科(通信課程)	教授	准教授	講師	助教	計	助手	人
			人	人	人	人	人	人	人
		計	36 (41)	15 (14)	0 (0)	3 (2)	54 (57)	0 (0)	45 (17)
	既 設	理工学部 総合理工学科	32 (40)	17 (17)	3 (3)	0 (0)	52 (60)	0 (0)	57 (11)
		人文学部 国際コミュニケーション学科	8 (9)	3 (3)	1 (1)	0 (0)	12 (13)	0 (0)	18 (18)
		人間社会学科	5 (5)	2 (2)	0 (0)	1 (1)	8 (8)	0 (0)	20 (20)
		日本文化学科	5 (5)	3 (3)	2 (2)	0 (0)	10 (10)	0 (0)	10 (3)
		福祉実践学科	5 (5)	4 (4)	0 (0)	0 (0)	9 (9)	0 (0)	15 (3)
		心理学科	6 (6)	4 (4)	1 (1)	0 (0)	11 (11)	0 (0)	30 (6)
		経済学部 経済学科	9 (12)	10 (7)	4 (4)	0 (0)	23 (23)	0 (0)	21 (21)
		経営学科	6 (6)	6 (6)	2 (2)	0 (0)	14 (14)	0 (0)	11 (11)
		情報学部 情報学科	9 (10)	6 (6)	3 (3)	0 (0)	18 (19)	0 (0)	29 (29)
		造形芸術学部 造形芸術学科	9 (9)	3 (3)	0 (0)	2 (2)	14 (14)	0 (0)	38 (38)
一般教育		18 (19)	7 (7)	2 (2)	1 (1)	28 (29)	0 (0)	106 (106)	
		計	112 (126)	65 (62)	18 (18)	4 (4)	199 (210)	0 (0)	355 (266)
合 計		148 (167)	80 (76)	18 (18)	7 (6)	253 (267)	0 (0)	400 (283)	
教員以外の職員の概要	職 種		専 任		兼 任		計		
	事 務 職 員		165 (165)		68 (68)		233 (233)		
	技 術 職 員		8 (8)		5 (5)		13 (13)		
	図 書 館 専 門 職 員		10 (10)		3 (3)		13 (13)		
	そ の 他 の 職 員		7 (7)		0 (0)		7 (7)		
計		190 (190)		76 (76)		266 (266)			
校 地 等	区 分	専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用		計			
	校舎敷地	212,455m ²	0m ²	0m ²		212,455m ²			
		721,474m ²	0m ²	0m ²		721,474m ²			
	運動場用地	74,314m ²	0m ²	0m ²		74,314m ²			
		94,320m ²	0m ²	0m ²		94,320m ²			
	小 計	286,769m ²	0m ²	0m ²		286,769m ²			
		815,794m ²	0m ²	0m ²		815,794m ²			
その他	0m ²	0m ²	0m ²		0m ²				
	0m ²	0m ²	0m ²		0m ²				
合 計		1,102,563m ²	0m ²	0m ²		1,102,563m ²			

・平成21年6月
設置届出

・平成21年6月
設置届出

・平成21年6月
設置届出

・平成21年6月
設置届出

大学全体

・日野校
・青梅校
・日野校
・青梅校
・日野校
・青梅校
・日野校
・青梅校

大学全体

校 舎		専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計	・日野校 ・青梅校 大学全体					
		164,487㎡ (164,487㎡)	0㎡ (0㎡)	0㎡ (0㎡)	164,487㎡ (164,487㎡)						
合 計		32,714㎡ (32,714㎡)	0㎡ (0㎡)	0㎡ (0㎡)	32,714㎡ (32,714㎡)						
合 計		197,201㎡ (197,201㎡)	0㎡ (0㎡)	0㎡ (0㎡)	197,201㎡ (197,201㎡)	大学全体					
教室等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設	・日野校 ・青梅校					
	88 室	163 室	193 室	19 室 (補助職員 8人)	2 室 (補助職員 2人)						
	23 室	8 室	36 室	4 室 (補助職員 4人)	1 室 (補助職員 1人)						
	111 室	171 室	229 室	23 室 (補助職員 12人)	3 室 (補助職員 3人)	大学全体					
専任教員研究室		新設学部等の名称 教育学部 教育学科		室 数 57 室							
図書・設備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	大学全体での共用分 図 書：627,948冊 〔202,532冊〕 学術雑誌：8,295種 〔2,727種〕			
	教育学部 教育学科 教育学科(通信課程)	48,599〔12,458〕 (43,395〔11,126〕)	417〔143〕 (417〔143〕)	35〔35〕 (35〔35〕)	32〔0〕 (32〔0〕)	898 (898)	14 (14)				
	計	48,599〔12,458〕 (43,395〔11,126〕)	417〔143〕 (417〔143〕)	35〔35〕 (35〔35〕)	32〔0〕 (32〔0〕)	898 (898)	14 (14)				
図書館	面積		閲覧座席数		収 納 可 能 冊 数		・日野校 ・青梅校 大学全体				
	16,865 ㎡		1,180 席		1,526,000 冊						
	4,343 ㎡		292 席		363,000 冊						
	21,208 ㎡		1,472 席		1,889,000 冊						
体育館	面積		体育館以外のスポーツ施設の概要					・日野校 ・青梅校 大学全体			
	8,006㎡		野球場、テニスコート								
	4,928㎡		野球場、テニスコート								
	12,934㎡										
経費の見積り及び維持方法の概要	経費の見積り	区 分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	共同研究費等は 大学全体 図書費には電子 ジャーナル・テーパース の整備費(運用コスト 含む)を含む。 設備購入費は 大学全体	
		教員1人当 り研究費等	実験系		600千円	600千円	600千円	600千円			
			その他		400千円	400千円	400千円	400千円			
		共同研究費等		40,000千円	40,000千円	40,000千円	40,000千円				
		図書購入費	45,000千円	45,000千円	45,000千円	45,000千円	45,000千円				
	設備購入費	40,000千円	40,000千円	40,000千円	40,000千円	40,000千円					
	学生1人 当り納付 金	学部	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	手数料収入及び資産運用収入をもって充当する。		
		理工学部	1,590千円	1,340千円	1,340千円	1,340千円	・ 千円	・ 千円			
		人文学部	1,400千円	1,150千円	1,150千円	1,150千円	・ 千円	・ 千円			
		教育学部	1,400千円	1,150千円	1,150千円	1,150千円	・ 千円	・ 千円			
教育学部 (通信課程)		144千円	114千円	114千円	114千円	・ 千円	・ 千円				
経済学部		1,400千円	1,150千円	1,150千円	1,150千円	・ 千円	・ 千円				
情報学部		1,590千円	1,340千円	1,340千円	1,340千円	・ 千円	・ 千円				
造形芸術学部		1,750千円	1,500千円	1,500千円	1,500千円	・ 千円	・ 千円				
学生納付金以外の維持方法の概要		手数料収入及び資産運用収入をもって充当する。									

大学等の名称	明星大学								所在地	
	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地		
既設大学等の状況	(学部) 理工学部	年	人	年次人	人		倍			東京都日野市 程久保2丁目1番地1号
	物理学科	4	80	-	320	学士(理学)	0.59	昭和39年度		
	化学科	4	100	-	400	学士(理学)	0.66	昭和39年度		
	機械工学科	4	-	-	-	学士(工学)	-	昭和39年度		
	電気工学科	4	-	-	-	学士(工学)	-	昭和39年度		
	土木工学科	4	-	-	-	学士(工学)	-	昭和39年度		
	機械システム工学科	4	100	-	400	学士(工学)	0.55	平成17年度		
	電気電子システム工学科	4	100	-	400	学士(工学)	0.49	平成17年度		
	建築学科	4	80	-	320	学士(工学)	0.93	平成17年度		
	環境システム学科	4	70	-	280	学士(工学)	0.72	平成17年度		
	人文学部						1.08			
	国際コミュニケーション学科	4	140	-	560	学士(国際コミュニケーション学)	0.98	平成17年度		
	英語英文学科	4	-	-	-	学士(英語英文学)	-	昭和40年度		
	人間社会学科	4	140	-	560	学士(社会学)	1.00	昭和40年度		
	心理・教育学科	4	260	-	1040	学士(心理学) 学士(教育学)	1.18	昭和40年度		
	(通信教育部) 人文学部						0.06			
	心理・教育学科 (通信課程)	4	2,000	-	8,000	学士(教育学)	0.06	昭和42年度		
	経済学部						1.16			
	経済学科	4	280	-	1120	学士(経済学)	1.14	平成13年度		
	経営学科	4	160	-	640	学士(経営学)	1.19	平成17年度		
	情報学部						0.96			
	情報学科	4	170	-	680	学士(情報)	0.96	平成17年度		
	電子情報学科	4	-	-	-	学士(電子情報)	-	平成4年度		
	経営情報学科	4	-	-	-	学士(経営情報)	-	平成4年度		
	日本文化学部						0.78			
	言語文化学科	4	100	-	400	学士(文学)	0.78	平成4年度		
	造形芸術学科	4	-	-	-	学士(芸術)	-	平成4年度		
造形芸術学部						0.83				
造形芸術学科	4	150	-	600	学士(芸術)	0.83	平成17年度			

平成17年4月より
学生募集停止
(機械工学科・電
気工学科・土木工
学科)

平成17年4月より
学生募集停止
(英語英文学科)

平成17年4月より
学生募集停止
(電子情報学科・
経営情報学科)

平成17年4月より
学生募集停止
(日本文化学部造
形芸術学科)

既設大学等の状況	(大学院)									
	理工学研究科								東京都日野市 程久保2丁目1番地1号	
	(博士前期課程)						0.77			
	物理学専攻	2	10	-	20	修士(理学)	0.20	昭和54年度		
	化学専攻	2	10	-	20	修士(理学)	0.75	昭和48年度		
	機械工学専攻	2	10	-	20	修士(工学)	0.90	昭和55年度		
	電気工学専攻	2	10	-	20	修士(工学)	0.55	昭和54年度		
	建築・建設工学専攻	2	5	-	10	修士(工学)	1.30	平成20年度		
	環境工学専攻	2	5	-	10	修士(工学)	1.60	平成20年度		
	(博士後期課程)							0.12		
	物理学専攻	3	5	-	15	博士(理学)	0.00	昭和56年度		
	化学専攻	3	5	-	15	博士(理学)	0.33	昭和51年度		
	機械工学専攻	3	5	-	15	博士(工学)	0.06	昭和57年度		
	電気工学専攻	3	5	-	15	博士(工学)	0.00	昭和56年度		
	建築・建設工学専攻	3	3	-	6	博士(工学)	0.00	平成20年度		
	環境工学専攻	3	2	-	4	博士(工学)	0.75	平成20年度		
	人文学研究科									
	(博士前期課程)							0.77		
	英米文学専攻	2	10	-	20	修士(英米文学)	0.30	昭和58年度		
	社会学専攻	2	10	-	20	修士(社会学)	0.25	昭和46年度		
	心理学専攻	2	10	-	20	修士(心理学)	1.80	昭和49年度		
	教育学専攻	2	10	-	20	修士(教育学)	0.40	昭和47年度		
	教育学専攻(通信課程)	2	30	-	60	修士(教育学)	0.89	平成11年度		
	(博士後期課程)							0.50		
	英米文学専攻	3	3	-	9	博士(英米文学)	0.00	昭和63年度		
	社会学専攻	3	3	-	9	博士(社会学)	0.11	昭和51年度		
	心理学専攻	3	3	-	9	博士(心理学)	0.66	昭和53年度		
教育学専攻	3	3	-	9	博士(教育学)	0.22	昭和49年度			
教育学専攻(通信課程)	3	3	-	9	博士(教育学)	1.55	平成18年度			
経済学研究科										
(修士課程)							0.65			
応用経済学専攻	2	10	-	20	修士(応用経済学)	0.65	平成18年度			
情報学研究科										
(博士前期課程)							0.99			
情報学専攻	2	7	-	14	修士(情報学)	0.99	平成10年度			
(博士後期課程)							0.00			
情報学専攻	3	3	-	9	博士(情報学)	0.00	平成12年度			

大学等の状況	大学の名称		いわき明星大学					開設年度	所在地			
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学員定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率					
	(学部)	年	人	年次人	人		倍					
既設大学等の状況	科学技術学部						0.69		福島県いわき市中央台飯野5丁目5番地1	平成19年4月より入学定員変更 電子情報学科 80 60 システムデザイン工学科 80 50 生命環境学科 80 65		
	電子情報学科	4	60	-	260	学士(工学)	0.81	平成17年度				
	システムデザイン工学科	4	50	-	230	学士(工学)	0.51	平成17年度				
	生命環境学科	4	65	-	275	学士(理工学)	0.73	平成17年度				
	理工学部											平成17年4月より学生募集停止 (環境理学科・電子情報学科・機械工学科)
	環境理学科	4	-	-	-	学士(工学)	-	平成13年度				
	電子情報学科	4	-	-	-	学士(工学)	-	昭和62年度				
	機械工学科	4	-	-	-	学士(理工学)	-	昭和62年度				
	人文学部						1.04					平成19年4月より入学定員変更 表現文化学科 100 90
	表現文化学科	4	90	-	370	学士(文学)	0.93	平成17年度				
	現代社会学科	4	95	-	380	学士(社会学)	0.97	昭和62年度				
	心理学科	4	90	-	360	学士(心理学)	1.23	平成13年度				
	言語文化学科	4	-	-	-	学士(文学)	-	平成13年度		平成17年4月より学生募集停止 (言語文化学科)		
	薬学部						0.55					
	薬学科	6	150	-	450	学士(薬学)	0.55	平成19年度				
	(大学院)											
	理工学研究科											
(修士課程)							0.42					
物質理学専攻	2	15	-	30	修士(物質理学)	0.49	平成4年度					
物理工学専攻	2	20	-	40	修士(物理工学)	0.37	平成4年度					
(博士課程)							0.00					
物質理工学専攻	3	5	-	15	博士(理工学)	0.00	平成6年度					
人文学研究科												
(修士課程)							0.46					
日本文学専攻	2	5	-	10	修士(日本文学)	0.30	平成4年度					
英米文学専攻	2	5	-	10	修士(英米文学)	0.00	平成7年度					
社会学専攻	2	5	-	10	修士(社会学)	0.30	平成4年度					
臨床心理学専攻	2	10	-	20	修士(臨床心理学)	0.85	平成17年度					
(博士課程)							0.33					
日本文学専攻	3	2	-	6	博士(日本文学)	0.33	平成6年度					
附属施設の概要	該当なし											

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
全学共通科目	情報法制論	2・3・4前		2											兼1	
	地球惑星学 1	1・2・3・4前		2					1							
	地球惑星学 2	1・2・3・4後		2					1							
	科学技術論 1	1・2・3・4前		2					1							
	科学技術論 2	1・2・3・4後		2					1							
	統計学 1	1・2・3・4前		2											兼2	
	統計学 2	1・2・3・4後		2											兼2	
	基礎数学 1	1・2・3・4前		2					2						兼4	
	基礎数学 2	1・2・3・4後		2					2						兼4	
	生物学 1	1・2・3・4前		2					1							
	生物学 2	1・2・3・4後		2					1							
	物理学 1	1・2・3・4前		2											兼3	
	物理学 2	1・2・3・4後		2											兼3	
	化学 1	1・2・3・4前		2											兼3	
	化学 2	1・2・3・4後		2											兼3	
	自然科学入門 1	1・2・3・4前		2											兼1	
	自然科学入門 2	1・2・3・4後		2											兼1	
	生物学 3	2・3・4前		2					1							
	生物学 4	2・3・4後		2					1							
	人類と環境	2・3・4前		2											兼1	
	特別講義 1	1・2・3・4前		2											兼1	
	特別講義 2	1・2・3・4前		1											兼1	
	特別講義 3	1・2・3・4後		2											兼1	
	特別講義 4	1・2・3・4後		1											兼1	
		小計(181科目)	-	9	279	0				12	2	0	1	0	兼150	-

科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
学 科 目 目	教育学入門	1前	2						2					兼1
	教育原理	1前	2						2			1		兼1
	教育の制度と経営	1後	2						3					兼1
	教職入門	1前	2						1	5				
	自立と体験2	1後	2						7	1		1		
	教育学基礎演習1	1前	1						15	1		1		
	教育学基礎演習2	1後	1						15	1		1		
	教育インターンシップ1	2前	1						1	9		1		兼5
	教育インターンシップ2	2後	1						1	9		1		兼5
	教育心理学	2前	2						1	2				
	教育実践ゼミ1	3前	1						15					
	教育実践ゼミ2	3後	1						15					
	教育実践ゼミ3	4前	1						15					
	卒業研究	4通	8						13					
	教職実践演習(教諭)	4後			2				7	7				
	人材教育研究	4後			2				1			1		
	教育哲学	2後			2				1					兼1
	教育社会学	2後			2									
	比較教育制度	2後			2				1					
	環境教育論	2前			2				4					オムニバス
	健康と食育	2前			2							1		
	臨床心理学	2後			2									兼1
	人材教育論	2後			2									兼1
	企業内教育論	2前			2									兼1
	障害者教育総論	1前			2				1					
	発達障害論	1後			2									兼1
	障害児教育概論1	1前			2				1					
	障害児教育概論2	1後			2				1					
	音楽療法	2前			1				1					
	表現療法	2後			1									兼2
	発達指導支援法1	2前			1				1					兼1
	発達指導支援法2	2後			1				1					兼1
	教育行財政1	3前			2				1					
	教育行財政2	3後			2				1					
	教育インターンシップ3	3前			1				1	3				兼4
	教育インターンシップ4	3後			1				1	3				兼4
	教育インターンシップ5	4前			1					2				兼1
	教育インターンシップ6	4後			1					2				兼1
	教育の歴史と思想	3前			2				1					
	教育の最新事情	1前			2				1					
	教育法規1	2前			2				1					
	教育法規2	2後			2				1					
情報教育1	3前			2				1						
情報教育2	3後			2				1						
授業研究1	3前			2				1						
授業研究2	3後			2				1						
外国語活動指導法研究1	3前			2				1						
外国語活動指導法研究2	3後			2									兼1	
小計(48科目)			27	60	0				29	12	0	2	0	兼15

科目区分	授業科目の名称	配当年度	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考				
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手					
学 科 目	小 学 校 教 員 コ ー ス	国語（書写を含む。）	1前	2						1						兼1		
		社会	1前	2						1			1					
		算数	2前	2														
		理科	2前	2							1							
		生活科	1前	2						1								
		音楽	1前	2						2								
		音楽実技1	1前	1							1							
		音楽実技2	1後	1							1							
		図画工作	1前	2						2								
		家庭科	1前	2													兼1	
		体育	1前	2						3	2		1					
		児童心理学	2前	2							2							
		保育学1	2前	2						1								
		保育学2	2後	2						1								
		初等教育課程論	2前	2						2							兼2	
		初等国語科教育法（書写を含む。）	2後	2							1							
		初等社会科教育法	2後	2						2			1					
		初等算数科教育法	2後	2													兼1	
		初等理科教育法	2後	2							1							
		初等生活科教育法	2後	2						1								
		初等音楽科教育法	1後	2						2								
		初等図画工作科教育法	1後	2						1							兼1	
		初等家庭科教育法	1後	2													兼1	
		初等体育科教育法	1後	2						3								
		道德教育の指導法（小学校）	3前	2						1	1							
		特別活動の指導法（小学校）	3前	2							1						兼1	
		初等教育方法学	2前	2						2								オムニバス
		児童・進路指導論	3前	2							1							
		初等教育相談の基礎と方法	3後	2						1								
		幼児理解の理論と方法	2後	2						1	1							
		保育内容総論	3後	2							1							
		保育内容A・健康	1後	2						1	1							
		保育内容B・人間関係	3前	2													兼1	
		保育内容C・環境	3後	2						1							兼1	
		保育内容D・言葉	3後	2						1							兼1	
		保育内容E・表現1	2前	2						1							兼1	
		保育内容F・表現2	2後	2							1							
		初等教育実習指導	3後	1						2	5						兼3	
		初等教育実習	4通	4						2	5						兼3	
		特別教育実習	4通	4						1	1							
小計（40科目）			0	81	0				18	11	0	2	0	兼10	-			
教 科 専 門 コ ー ス	共 通	中等教育課程論	2前	2												兼2		
		道德教育の指導法（中学校）	3前	2							1							
		特別活動の指導法（中高）	3前	2							1					兼1		
		中等教育方法学	3前	2						2							オムニバス	
		生徒・進路指導論	3前	2							1							
		中等教育相談の基礎と方法	3前	2												兼2		
		中等教育実習指導	3後	1							2					兼1		
		中等教育実習A	4前	2							3							
		中等教育実習B	4後	2							1					兼1		
		小計（9科目）			0	17	0				2	4	0	0	0	兼4		

科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考			
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手				
学 科 区 分 教 科 専 門 コ ー ス	国語学概論	1前		2												兼1	
	日本文法 1	1前		2												兼1	
	日本文法 2	1後		2												兼1	
	日本語表現法	1後		2												兼1	
	国文学	1前		2					1								
	国文学史	1後		2					1								
	日本文学概論	2前		2					1								
	古典文学	2前		2						1							
	近代文学	2後		2					1								
	漢文学	2後		2					1								
	書道 1	2前		2												兼1	
	書道 2	2後		2												兼1	
	国語科教育法 1	2前		2					1								
	国語科教育法 2	2後		2					1								
	国語科教育法 3	3前		2					1								
	国語科教育法 4	3前		2					1								
	初等国語指導法研究 1	3前		2						1							
	初等国語指導法研究 2	3後		2						1							
	小計 (18科目)		-	0	36	0				1	1	0	0	0		兼3	-
	社 会	日本史概説	1前		2												兼1
日本史各論 1		1前		2												兼1	
日本史各論 2		1前		2												兼1	
外国史概説		1後		2												兼1	
外国史各論 1 (東洋史)		1後		2												兼1	
外国史各論 2 (西洋史)		1後		2												兼1	
人文地理学		3後		2												兼1	
自然地理学		3前		2					1								
地理学入門 (地誌を含む。)		2前		2												兼1	
地誌学概説		3後		2												兼1	
法律学概論 1 (国際法を含む。)		1前		2												兼1	
法律学概論 2 (国際法を含む。)		1後		2												兼1	
政治学概論 1 (国際政治を含む。)		3前		2												兼1	
政治学概論 2 (国際政治を含む。)		3後		2												兼1	
社会学概論		2前		2												兼1	
経済学概論 1 (国際経済を含む。)		2前		2												兼1	
経済学概論 2 (国際経済を含む。)		2後		2												兼1	
哲学概論		3後		2												兼1	
倫理学概論		2後		2												兼1	
宗教学概論		2後		2												兼1	
心理学概論		2前		2							1						
社会・地理歴史科教育法 1		2前		2							1						
社会・地理歴史科教育法 2		2後		2							1						
社会・公民科教育法 1		3前		2							1						
社会・公民科教育法 2		3前		2							1						
初等社会指導法研究 1		3前		2									1				
初等社会指導法研究 2		3後		2									1				
小計 (27科目)		-	0	54	0				1	3	0	1	0		兼12	-	

科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
学 科 区 分 数 学 科 専 門 コ ー ス	代数学 1	2前		2					1						兼1
	代数学 2	2後		2					1						兼1
	幾何学 1	1前		2											兼1
	幾何学 2	1後		2											兼1
	解析学 1	1前		2											兼1
	解析学 2	1後		2											兼1
	確率論	2前		2											兼1
	統計学	2後		2											兼1
	コンピュータ演習 1	1前		1					1						
	コンピュータ演習 2	1後		1					1						
	コンピュータ演習 3	2前		1					1						
	コンピュータ演習 4	2後		1					1						
	数学科教育法 1	2前		2					1						
	数学科教育法 2	2後		2					1						
	数学科教育法 3	3前		2					1						
	数学科教育法 4	3前		2					1						
	初等算数指導法研究 1	3前		2											兼1
	初等算数指導法研究 2	3後		2											兼1
小計 (18科目)	-	0	32	0				2	0	0	0	0	0	兼4	-
理 科	物理学概論 1	2前		2					1						
	物理学概論 2	2後		2					1						
	物理学実験 (コンピュータ活用を含む。)	2後		1					1						
	化学概論 1	2前		2					1						兼1
	化学概論 2	2後		2					1						
	化学実験 (コンピュータ活用を含む。)	2前		1					1						
	生物学概論 1	1前		2					1						
	生物学概論 2	1後		2					1						
	生物学実験 (コンピュータ活用を含む。)	1後		1					1						
	地学概論 1	1前		2					1						
	地学概論 2	1後		2					1						
	地学実験 (コンピュータ活用を含む。)	1前		1					1						
	理科教育法 1	2前		2					1						
	理科教育法 2	2後		2					1						
	理科教育法 3	3前		2					1						
	理科教育法 4	3前		2					1						
	初等理科指導法研究 1	3前		2					2	1					
	初等理科指導法研究 2	3後		2					2	1					
小計 (18科目)	-	0	32	0				4	1	0	0	0	0	兼1	-

科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
学 科 区 分 音 楽	ソルフェージュ1	1前		1					1							
	ソルフェージュ2	1後		1					1							
	声楽・歌唱1	1前		1					1							
	声楽・歌唱2	1後		1					1							
	声楽・歌唱3	2前		1					1							
	器楽1	1前		1						1						
	器楽2	1後		1						1						
	器楽3	1前		1						1						
	器楽4(和楽器)	2後		1											兼1	
	指揮法	2後		2						1						
	音楽理論1	1後		2						1						
	音楽理論2(楽典)	2前		2						1						
	音楽理論3(音楽史)	2前		2						1						
	作曲・編曲法1(基礎)	2後		2						1						
	作曲・編曲法2(応用)	2後		1						1						
	音楽科教育法1	2前		2						1						
	音楽科教育法2	2後		2						1						
	音楽科教育法3	3前		2						1						
	音楽科教育法4	3前		2						1						
	初等音楽指導法研究1	3前		2						1						
	初等音楽指導法研究2	3後		2						1						
小計(21科目)		-	0	32	0				4	1	0	0	0	0	兼1	-
学 科 区 分 美 術	デッサン1	1前		1						1						兼1
	デッサン2	1後		1												兼1
	絵画1	1前		1						1						兼1
	絵画2	1後		1												兼1
	映像メディア表現1	1前		1					1							
	映像メディア表現2	1後		1					1							
	彫塑1	1前		1												兼1
	彫塑2	1後		1												兼1
	デザインA	2前		1					1							
	デザインB	2後		1					1							
	平面構成基礎	2前		1					1							
	立体構成基礎	2前		1					1							
	映像メディア表現3	2前		1					1							
	映像メディア表現4	2後		1					1							
	工芸基礎A	2前		1												兼1
	工芸基礎B	2前		1												兼1
	工芸A	2後		1												兼1
	工芸B	2後		1												兼1
	教職美術入門(鑑賞)	1前		2					1							
	美術理論1	1前		2					1							
美術理論2	2後		2					1								
美術史概論	1後		2												兼1	
日本・東洋美術史	2後		2												兼1	
美術科教育法1	2前		2					1								
美術科教育法2	2後		2						1							
美術科教育法3	3前		2						1							
美術科教育法4	3前		2					1								
初等図画工作指導法研究1	3前		2					1								
初等図画工作指導法研究2	3後		2					1								
小計(29科目)		-	0	40	0				3	1	0	0	0	0	兼4	-

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
学 科 区 分 教 科 専 門 科 目 保 健 体 育 コ ー ス	教職体育実技 1	1前		1												兼1
	教職体育実技 2	1後		1												兼1
	教職体育実技 3	2前		1					1							
	教職体育実技 4	2後		1								1				
	体育原理	1前		2					1							
	体育経営管理学	1前		2						1						
	体育社会学	1後		2					1							
	体育心理学	1後		2					1							
	運動学 (運動方法学を含む。)	1後		2					1							
	スポーツコーチング論	3前		2					1							
	バイオメカニクス	2後		2					1							
	スポーツトレーニング論	3前		2					1							
	生理学 (運動生理学を含む。)	2前		2						1						
	運動生理学演習	2後		1						1						
	衛生学 (公衆衛生を含む。)	1後		2									1			
	スポーツ医学	3後		2									1			
	学校保健 A (学校安全・救急処置を含む。)	2前		2									1			
	学校保健 B (小児保健・精神保健を含む。)	2後		2									1			
	発育発達論	3前		2							1					
	保健体育科教育法 1	2前		2						1						
	保健体育科教育法 2	2後		2						1						
	保健体育科教育法 3	3前		2						1						
	保健体育科教育法 4	3前		2						1						
	初等体育指導法研究 1	3前		2							1					
	初等体育指導法研究 2	3後		2						1						
小計 (25科目)		-	0	45	0				5	3	0	1	0		兼2	-
英 語	英語学概論	1前		2												兼1
	英文法	1後		2												兼1
	英米文学 1	1前		2					1							
	英米文学 2	2後		2					1							
	英語コミュニケーション 1	1前		2					1							
	英語コミュニケーション 2	1後		2												兼1
	英語コミュニケーション 3	2前		2												兼1
	英語コミュニケーション 4	2後		2												兼1
	異文化理解 1	1前		2					1							
	異文化理解 2	2後		2					1							
	英語科教育法 1	2前		2												兼1
	英語科教育法 2	2後		2					1							
	英語科教育法 3	3前		2					1							
	英語科教育法 4	3前		2					1							
小計 (14科目)		-	0	28	0				2	0	0	0	0		兼5	-

科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
学 科 目	知的障害者の心理	2後		2					1						兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1
	知的障害者の生理・病理	2後		2											
	肢体不自由者の心理・生理・病理	2前		2					1						
	病弱者の心理・生理・病理	2後		2											
	特別支援学校教育課程論	2前		2					1						
	知的障害者の指導法 1	3前		2					1						
	知的障害者の指導法 2	3後		2					1						
	肢体不自由者の指導法	3前		2											
	病弱者の指導法	3後		2											
	視覚障害教育総論	3前		2											
	聴覚障害教育総論	3後		2											
	重複障害教育総論	2前		2					1						
	L D 等教育総論	2前		2					1						
	特別支援教育実習	4後		3					3	1					
小計(14科目)	-	0	29	0	-	-	-	3	1	0	0	0	兼6	-	

科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
学 科 科 目	社会福祉論	1前		2									1			兼1
	社会福祉援助技術論	1後		2												兼1
	子ども福祉論	1前		2												兼1
	養護原理	1後		2									1			
	保育者論	1前		2					1							
	保育課程論	3前		2					1							
	幼児教育思想史	1後		2					1							
	学童保育論	3後		2												兼1
	発達心理学	1前		2					1	1						
	小児保健1(講義)	2前		2												兼1
	小児保健2(講義)	2後		2												兼1
	小児保健(実習)	2後		1												兼1
	小児栄養(演習)	2前		2												兼1
	子どものメンタルヘルス	2前		2												兼1
	子育て支援論	3前		2												兼1
	保育者・教師のメンタルヘルス	3後		2												兼1
	子どもの発達臨床	3後		2					1							
	家庭教育論	3後		2					1							
	乳児保育1	2前		1					1							
	乳児保育2	2後		1					1							
	障害児保育	3前		2					1							
	養護内容	2前		2									1			
	乳児保育実践論	3前		2												兼1
	子どもと文化	1前		2							1					
	子どもと環境	1後		2												兼1
	子どもと遊び	1前		2					1							
	養護方法論	2後		2									1			
	子どもと表現	2後		2												兼1
	幼児の体育	3前		2							1					兼1
	幼児の音楽	2後		2												兼1
	幼児の造形	1後		2												兼1
	保育実習	2通		5						4				1		兼2
	保育実習2	3前		2						2						兼2
	保育実習3	3前		2						1						兼2
小計(34科目)		-	0	68	0				5	3	0	1	0		兼13	-
合計(496科目)		-	36	833	0				36	15	0	3	0		兼198	-
学位又は称号	学士(教育学)		学位又は学科の分野			教育学・保育学関係										
卒業要件及び履修方法						授業期間等										
全学共通科目から32単位以上、学科科目から必修科目27単位を含む92単位以上、合計124単位以上修得すること。 〔履修科目の登録の上限：45単位(年間)〕						1学年の学期区分			2学期							
						1学期の授業期間			15週							
						1時限の授業時間			90分							

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
全学共通科目	情報法制論	2・3・4通		2											兼1	印刷教材
	地球惑星学 1	1・2・3・4通		2					1							印刷教材
	地球惑星学 2	1・2・3・4通		2					1							印刷教材
	科学技術論 1	1・2・3・4通		2					1							印刷教材
	科学技術論 2	1・2・3・4通		2					1							印刷教材
	統計学 1	1・2・3・4通		2											兼2	印刷教材・面接
	統計学 2	1・2・3・4通		2											兼2	印刷教材・面接
	基礎数学 1	1・2・3・4通		2					2						兼4	印刷教材
	基礎数学 2	1・2・3・4通		2					2						兼4	印刷教材
	生物学 1	1・2・3・4通		2					1							印刷教材・面接
	生物学 2	1・2・3・4通		2					1							印刷教材・面接
	物理学 1	1・2・3・4通		2											兼3	印刷教材
	物理学 2	1・2・3・4通		2											兼3	印刷教材
	化学 1	1・2・3・4通		2											兼3	印刷教材
	化学 2	1・2・3・4通		2											兼3	印刷教材
	自然科学入門 1	1・2・3・4通		2											兼1	印刷教材
	自然科学入門 2	1・2・3・4通		2											兼1	印刷教材
	生物学 3	2・3・4通		2					1							面接
	生物学 4	2・3・4通		2					1							面接
	人類と環境	2・3・4通		2											兼1	印刷教材
	特別講義 1	1・2・3・4通		2											兼1	面接
	特別講義 2	1・2・3・4通		1											兼1	面接
	特別講義 3	1・2・3・4通		2											兼1	面接
	特別講義 4	1・2・3・4通		1											兼1	面接
		小計(181科目)	-	9	279	0				12	2	0	1	0	兼150	-

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
学 科 目 目	教育学入門	1通	2						2					兼1	印刷教材
	教育原理	1通	2						2			1		兼1	印刷教材
	教育の制度と経営	1通	2						3					兼1	印刷教材
	教職入門	1通	2						1	5					印刷教材
	自立と体験2	1通	2						7	1		1			面接
	教育学基礎演習1	1・2通	1						15	1		1			面接
	教育学基礎演習2	1・2通	1						15	1		1			面接
	教育心理学	2通	2						1	2					印刷教材
	教育実践ゼミ1	3・4通	1						15						面接
	教育実践ゼミ2	3・4通	1						15						面接
	教育実践ゼミ3	3・4通	1						15						面接
	卒業研究	4通	8						13						面接
	教職実践演習(教諭)	4通			2				7	7					印刷教材・面接
	人材教育研究	4通			2				1			1			面接
	教育哲学	2・3通			2				1						印刷教材
	教育社会学	2・3通			2									兼1	印刷教材
	比較教育制度	2・3通			2				1						印刷教材
	環境教育論	2・3通			2				4						印刷教材
	健康と食育	2・3通			2							1			印刷教材
	臨床心理学	2・3通			2									兼1	印刷教材
	人材教育論	2・3通			2									兼1	印刷教材
	企業内教育論	2・3通			2									兼1	印刷教材
	障害者教育総論	1・2・3通			2				1						印刷教材
	発達障害論	1・2・3通			2									兼1	印刷教材
	障害児教育概論1	2・3通			2				1						印刷教材
	障害児教育概論2	2・3通			2				1						印刷教材
	音楽療法	2・3通			1				1						面接
	表現療法	2・3通			1									兼2	印刷教材・面接
	発達指導支援法1	2・3通			1				1					兼1	面接
	発達指導支援法2	2・3通			1				1					兼1	面接
	教育行財政1	3通			2				1						印刷教材
	教育行財政2	3通			2				1						印刷教材
	教育の歴史と思想	3通			2				1						印刷教材
	教育の最新事情	1・2・3通			2				1						面接
	教育法規1	2・3通			2				1						印刷教材
	教育法規2	2・3通			2				1						印刷教材
	情報教育1	3通			2				1						印刷教材
	情報教育2	3通			2				1						印刷教材
	授業研究1	3通			2				1						印刷教材
	授業研究2	3通			2				1						印刷教材
	外国語活動指導法研究1	2・3通			2				1						面接
	外国語活動指導法研究2	2・3通			2									兼1	面接
小計(42科目)			25	56	0				29	10	0	2	0	兼10	-

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
学科科目	小学校教員コース	国語(書写を含む。)	1・2通	2						1					印刷教材・面接
	社会	1・2通	2						1			1			印刷教材・面接
	算数	2通	2												印刷教材・面接
	理科	2通	2							1					印刷教材
	生活科	1・2通	2						1						印刷教材
	音楽	1通	2						2						印刷教材・面接
	音楽実技1	1・2・3通	1							1					面接
	音楽実技2	1・2・3通	1							1					面接
	図画工作	1通	2						2						印刷教材・面接
	家庭科	1・2通	2												印刷教材
	体育	1通	2						3	2		1			印刷教材・面接
	児童心理学	2通	2							2					印刷教材・面接
	保育学1	2・3通	2						1						印刷教材・面接
	保育学2	2・3通	2						1						印刷教材・面接
	初等教育課程論	2通	2						2						印刷教材
	初等国語科教育法(書写を含む。)	2通	2							1					印刷教材・面接
	初等社会科教育法	2通	2						2			1			印刷教材・面接
	初等算数科教育法	2通	2								1				印刷教材・面接
	初等理科教育法	2通	2								1				印刷教材
	初等生活科教育法	2通	2						1						印刷教材
	初等音楽科教育法	1・2通	2						2						印刷教材・面接
	初等図画工作科教育法	1・2通	2						1						印刷教材・面接
	初等家庭科教育法	1・2通	2												印刷教材
	初等体育科教育法	1・2通	2						3						印刷教材・面接
	道德教育の指導法(小学校)	3通	2						1	1					印刷教材・面接
	特別活動の指導法(小学校)	3通	2							1					印刷教材
	初等教育方法学	2通	2						2						印刷教材・面接
	児童・進路指導論	3通	2							1					印刷教材
	初等教育相談の基礎と方法	3通	2						1						印刷教材
	幼児理解の理論と方法	2・3通	2						1	1					印刷教材
	保育内容総論	3通	2							1					印刷教材
	保育内容A・健康	1・2通	2						1	1					印刷教材・面接
	保育内容B・人間関係	3通	2												印刷教材・面接
	保育内容C・環境	3通	2						1						印刷教材・面接
	保育内容D・言葉	3通	2						1						印刷教材・面接
	保育内容E・表現1	2・3通	2						1						印刷教材・面接
	保育内容F・表現2	2・3通	2							1					印刷教材・面接
	初等教育実習指導	3通	1						2	5					印刷教材・面接
	初等教育実習	3・4通	4						2	5					面接
	特別教育実習	3・4通	4						1	1					面接
小計(40科目)			0	81	0				18	11	0	2	0	兼10	-
教科専門コース	共通	中等教育課程論	2・3通	2											印刷教材
		道德教育の指導法(中学校)	3通	2						1					印刷教材
		特別活動の指導法(中高)	3通	2						1					印刷教材
		中等教育方法学	3通	2					2						印刷教材
		生徒・進路指導論	3通	2						1					印刷教材
		中等教育相談の基礎と方法	3通	2											印刷教材
		中等教育実習指導	3通	1						2					印刷教材・面接
		中等教育実習A	3・4通	2						3					面接
		中等教育実習B	3・4通	2						1					面接
		小計(9科目)		0	17	0				2	4	0	0	0	兼4

科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
学 科 区 分 教 科 専 門 コ ー ス	国語学概論	1・2・3通		2											兼1	印刷教材
	日本文法 1	1・2・3通		2											兼1	印刷教材
	日本文法 2	1・2・3通		2											兼1	印刷教材
	日本語表現法	1・2・3通		2											兼1	印刷教材
	国文学	1・2・3通		2					1							印刷教材
	国文学史	1・2・3通		2					1							印刷教材
	日本文学概論	2・3通		2					1							印刷教材
	古典文学	2・3通		2						1						印刷教材
	近代文学	2・3通		2					1							印刷教材
	漢文学	2・3通		2					1							印刷教材
	書道 1	2・3通		2											兼1	印刷教材
	書道 2	2・3通		2											兼1	面接
	国語科教育法 1	1・2・3通		2					1							印刷教材・面接
	国語科教育法 2	2・3通		2					1							印刷教材・面接
	国語科教育法 3	2・3通		2					1							印刷教材・面接
	国語科教育法 4	3通		2					1							印刷教材・面接
	初等国語指導法研究 1	2・3通		2						1						面接
	初等国語指導法研究 2	2・3通		2						1						面接
小計(18科目)	-	0	36	0	-	-	-	1	1	0	0	0	兼3	-		
社 会	日本史概説	1・2・3通		2											兼1	印刷教材
	日本史各論 1	1・2・3通		2											兼1	印刷教材
	日本史各論 2	1・2・3通		2											兼1	印刷教材
	外国史概説	1・2・3通		2											兼1	印刷教材
	外国史各論 1 (東洋史)	1・2・3通		2											兼1	印刷教材
	外国史各論 2 (西洋史)	1・2・3通		2											兼1	印刷教材
	人文地理学	3通		2											兼1	印刷教材
	自然地理学	3通		2					1							印刷教材
	地理学入門(地誌を含む。)	2・3通		2											兼1	印刷教材
	地誌学概説	3通		2											兼1	印刷教材
	法律学概論 1 (国際法を含む。)	1・2・3通		2											兼1	印刷教材
	法律学概論 2 (国際法を含む。)	1・2・3通		2											兼1	印刷教材
	政治学概論 1 (国際政治を含む。)	3通		2											兼1	印刷教材
	政治学概論 2 (国際政治を含む。)	3通		2											兼1	印刷教材
	社会学概論	2・3通		2											兼1	印刷教材
	経済学概論 1 (国際経済を含む。)	2・3通		2											兼1	印刷教材
	経済学概論 2 (国際経済を含む。)	2・3通		2											兼1	印刷教材
	哲学概論	3通		2											兼1	印刷教材
	倫理学概論	2・3通		2											兼1	印刷教材
	宗教学概論	2・3通		2											兼1	印刷教材
	心理学概論	2・3通		2						1						印刷教材
	社会・地理歴史科教育法 1	1・2・3通		2						1						印刷教材・面接
	社会・地理歴史科教育法 2	2・3通		2						1						印刷教材・面接
	社会・公民科教育法 1	2・3通		2						1						印刷教材・面接
	社会・公民科教育法 2	3通		2						1						印刷教材・面接
	初等社会指導法研究 1	2・3通		2								1				面接
	初等社会指導法研究 2	2・3通		2								1				面接
小計(27科目)	-	0	54	0	-	-	-	1	3	0	1	0	兼12	-		

科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考			
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手				
学 科 区 分 教 科 専 門 コ ー ス	代数学 1	2・3通		2					1						兼1	印刷教材	
	代数学 2	2・3通		2					1						兼1	印刷教材	
	幾何学 1	1・2・3通		2											兼1	印刷教材	
	幾何学 2	1・2・3通		2											兼1	印刷教材	
	解析学 1	1・2・3通		2											兼1	印刷教材	
	解析学 2	1・2・3通		2											兼1	印刷教材	
	確率論	2・3通		2											兼1	印刷教材	
	統計学	2・3通		2											兼1	印刷教材	
	コンピュータ演習 1	1・2・3通		1					1								面接
	コンピュータ演習 2	1・2・3通		1					1								面接
	コンピュータ演習 3	2・3通		1					1								面接
	コンピュータ演習 4	2・3通		1					1								面接
	数学科教育法 1	1・2・3通		2					1								印刷教材・面接
	数学科教育法 2	2・3通		2					1								印刷教材・面接
	数学科教育法 3	2・3通		2					1								印刷教材・面接
	数学科教育法 4	3通		2					1								印刷教材・面接
	初等算数指導法研究 1	2・3通		2											兼1	面接	
	初等算数指導法研究 2	2・3通		2											兼1	面接	
	小計 (18科目)		-	0	32	0				2	0	0	0	0	兼4	-	
理 科	物理学概論 1	2・3通		2					1							印刷教材	
	物理学概論 2	2・3通		2					1							印刷教材	
	物理学実験 (コンピュータ活用を含む。)	2・3通		1					1						兼1	面接	
	化学概論 1	2・3通		2					1							印刷教材	
	化学概論 2	2・3通		2					1							印刷教材	
	化学実験 (コンピュータ活用を含む。)	2・3通		1					1							面接	
	生物学概論 1	1・2・3通		2					1							印刷教材	
	生物学概論 2	1・2・3通		2					1							印刷教材	
	生物学実験 (コンピュータ活用を含む。)	1・2・3通		1					1							面接	
	地学概論 1	1・2・3通		2					1							印刷教材	
	地学概論 2	1・2・3通		2					1							印刷教材	
	地学実験 (コンピュータ活用を含む。)	1・2・3通		1					1							面接	
	理科教育法 1	1・2・3通		2					1							印刷教材・面接	
	理科教育法 2	2・3通		2					1							印刷教材・面接	
	理科教育法 3	2・3通		2					1							印刷教材・面接	
	理科教育法 4	3通		2					1							印刷教材・面接	
	初等理科指導法研究 1	2・3通		2					2	1						面接	
初等理科指導法研究 2	2・3通		2					2	1						面接		
小計 (18科目)		-	0	32	0				4	1	0	0	0	兼1	-		

科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
学 科 区 分 音 楽 科 専 門 コ ー ス	ソルフェージュ 1	1・2・3通		1					1						面接
	ソルフェージュ 2	1・2・3通		1					1						面接
	声楽・歌唱 1	1・2・3通		1					1						面接
	声楽・歌唱 2	1・2・3通		1					1						面接
	声楽・歌唱 3	2・3通		1					1						面接
	器楽 1	1・2・3通		1						1					面接
	器楽 2	1・2・3通		1						1					面接
	器楽 3	1・2・3通		1						1					面接
	器楽 4 (和楽器)	2・3通		1											面接
	指揮法	2・3通		2							1				印刷教材
	音楽理論 1	1・2・3通		2						1					印刷教材
	音楽理論 2 (楽典)	2・3通		2						1					印刷教材
	音楽理論 3 (音楽史)	2・3通		2						1					印刷教材
	作曲・編曲法 1 (基礎)	2・3通		2						1					印刷教材
	作曲・編曲法 2 (応用)	2・3通		1						1					面接
	音楽科教育法 1	1・2・3通		2						1					印刷教材・面接
	音楽科教育法 2	2・3通		2						1					印刷教材・面接
	音楽科教育法 3	2・3通		2						1					印刷教材・面接
	音楽科教育法 4	3通		2						1					印刷教材・面接
	初等音楽指導法研究 1	2・3通		2						1					面接
	初等音楽指導法研究 2	2・3通		2						1					面接
小計 (21科目)	-		0	32	0				4	1	0	0	0	兼1	-
美 術	デッサン 1	1・2・3通		1						1					兼1 面接
	デッサン 2	1・2・3通		1											兼1 面接
	絵画 1	1・2・3通		1						1					兼1 面接
	絵画 2	1・2・3通		1											兼1 面接
	映像メディア表現 1	1・2・3通		1					1						面接
	映像メディア表現 2	1・2・3通		1					1						面接
	彫塑 1	1・2・3通		1											兼1 面接
	彫塑 2	1・2・3通		1											兼1 面接
	デザイン A	2・3通		1					1						面接
	デザイン B	2・3通		1					1						面接
	平面構成基礎	2・3通		1					1						面接
	立体構成基礎	2・3通		1					1						面接
	映像メディア表現 3	2・3通		1					1						面接
	映像メディア表現 4	2・3通		1					1						面接
	工芸基礎 A	2・3通		1											兼1 面接
	工芸基礎 B	2・3通		1											兼1 面接
	工芸 A	2・3通		1											兼1 面接
	工芸 B	2・3通		1											兼1 面接
	教職美術入門 (鑑賞)	1・2・3通		2					1						面接
	美術理論 1	1・2・3通		2					1						印刷教材
	美術理論 2	2・3通		2					1						印刷教材
美術史概論	1・2・3通		2											兼1 印刷教材	
日本・東洋美術史	2・3通		2											兼1 印刷教材	
美術科教育法 1	1・2・3通		2					1						印刷教材・面接	
美術科教育法 2	2・3通		2						1					印刷教材・面接	
美術科教育法 3	2・3通		2						1					印刷教材・面接	
美術科教育法 4	3通		2					1						印刷教材・面接	
初等図画工作指導法研究 1	2・3通		2					1						面接	
初等図画工作指導法研究 2	2・3通		2					1						面接	
小計 (29科目)	-		0	40	0				3	1	0	0	0	兼4	-

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
学 科 区 分 英 語 教 科 専 門 コ ー ス	英語学概論	1・2・3通		2											兼1	印刷教材
	英文法	1・2・3通		2											兼1	印刷教材
	英米文学1	1・2・3通		2					1							印刷教材
	英米文学2	2・3通		2					1							印刷教材
	英語コミュニケーション1	1・2・3通		2					1							面接
	英語コミュニケーション2	1・2・3通		2											兼1	面接
	英語コミュニケーション3	2・3通		2											兼1	面接
	英語コミュニケーション4	2・3通		2											兼1	面接
	異文化理解1	1・2・3通		2					1							印刷教材
	異文化理解2	2・3通		2					1							印刷教材
	英語科教育法1	1・2・3通		2											兼1	印刷教材・面接
	英語科教育法2	2・3通		2												印刷教材・面接
	英語科教育法3	2・3通		2												印刷教材・面接
	英語科教育法4	3通		2												印刷教材・面接
小計(14科目)	-		0	28	0				2	0	0	0	0	0	兼5	-
特 別 支 援 教 員 コ ー ス	知的障害者の心理	2・3通		2					1							印刷教材
	知的障害者の生理・病理	2・3通		2											兼1	印刷教材
	肢体不自由者の心理・生理・病理	2・3通		2					1							印刷教材
	病弱者の心理・生理・病理	2・3通		2											兼1	印刷教材
	特別支援学校教育課程論	2・3通		2					1							印刷教材
	知的障害者の指導法1	3通		2					1							印刷教材・面接
	知的障害者の指導法2	3通		2					1							印刷教材・面接
	肢体不自由者の指導法	3通		2											兼1	印刷教材・面接
	病弱者の指導法	3通		2											兼1	印刷教材・面接
	視覚障害教育総論	3通		2											兼1	印刷教材
	聴覚障害教育総論	3通		2											兼1	印刷教材
	重複障害教育総論	2・3通		2					1							印刷教材
	L D等教育総論	2・3通		2					1							印刷教材
特別支援教育実習	3・4通		3					3	1						面接	
小計(14科目)	-		0	29	0				3	1	0	0	0	0	兼6	-

科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
学 科 科 目	子ども福祉論	1・2・3通		2									1		印刷教材
	社会福祉援助技術論	1・2・3通		2											兼1 印刷教材・面接
	子ども福祉論	1・2・3通		2											兼1 印刷教材
	養護原理	1・2・3通		2									1		印刷教材
	保育者論	1・2・3通		2					1						印刷教材
	保育課程論	3通		2					1						印刷教材
	幼児教育思想史	1・2・3通		2					1						印刷教材
	学童保育論	3通		2											兼1 印刷教材
	発達心理学	1・2・3通		2					1	1					印刷教材・面接
	小児保健1(講義)	2・3通		2											兼1 印刷教材
	小児保健2(講義)	2・3通		2											兼1 印刷教材
	小児保健(実習)	2・3通		1											兼1 面接
	小児栄養(演習)	2・3通		2											兼1 面接
	子どものメンタルヘルス	2・3通		2											兼1 印刷教材
	子育て支援論	3通		2											兼1 印刷教材
	保育者・教師のメンタルヘルス	3通		2											兼1 印刷教材
	子どもの発達臨床	3通		2					1						印刷教材
	家庭教育論	3通		2					1						印刷教材
	乳児保育1	2・3通		1					1						印刷教材・面接
	乳児保育2	2・3通		1					1						印刷教材・面接
	障害児保育	3通		2					1						印刷教材・面接
	養護内容	2・3通		2									1		印刷教材・面接
	乳児保育実践論	3通		2											兼1 印刷教材
	子どもと文化	1・2・3通		2						1					印刷教材・面接
	子どもと環境	1・2・3通		2											兼1 印刷教材・面接
	子どもと遊び	1・2・3通		2					1						印刷教材・面接
	養護方法論	2・3通		2									1		印刷教材
	子どもと表現	2・3通		2											兼1 印刷教材・面接
	幼児の体育	3通		2						1					兼1 面接
	幼児の音楽	2・3通		2											兼1 面接
	幼児の造形	1・2・3通		2											兼1 面接
	保育実習	2・3通		5					4				1		兼2 面接
	保育実習2	3・4通		2					2						兼2 面接
	保育実習3	3・4通		2					1						兼2 面接
小計(34科目)		-	0	68	0			5	3	0	1	0		兼13	-
合計(465科目)		-	34	784	0			36	15	0	3	0		兼196	-
学位又は称号	学士(教育学)		学位又は学科の分野			教育学・保育学関係									
卒業要件及び履修方法						授業期間等									
全学共通科目から32単位以上、学科科目から必修科目25単位を含む92単位以上、合計124単位以上修得すること。そのうち面接授業30単位以上修得すること。						1学年の学期区分			1期(通年)						
						1学期の授業期間			30週						
						1時限の授業時間			80分						

授 業 科 目 の 概 要			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	自立と体験 1	本学の教育目標を達成する最初の科目であり、自己実現の第一歩として設ける。初年時教育の一環として、新入生全員を対象に行う。30人程度のクラスを4～5班に分け、グループワークを通じて他者とのコミュニケーションスキルを向上させるとともに、最終的には「自分史」を執筆することにより自らの目標を明確化させて大学生としての自覚・自立を促していくことを目的とする。	
	哲学 1	哲学は、時代・地域に限定されない根源的な考察を展開する思考の営みである。そのために哲学は、人間の知的・文化的活動にかかわる広範囲な分野に繋がっている。本講義では、文学や芸術、宗教などを素材としながら、哲学という思考の大筋を理解できるようにしたい。「哲学とは何か」という基本的な問題から始めて、哲学において用いられる術語や概念などに馴れ親しむことができるように、原典の解説などを含めて、哲学の基本的な考え方を紹介する。	
	哲学 2	「他者」とは何か。他人が気にならない人はいない。我々が日常味わうストレスは、詰まるところ他人との関係に起因している。また、時に我々は、誰も見ていないのに誰かに見られているという思いにとりつかれる。このどこからやってくるのか分からない「視線」は、高ずれば人の神経・精神を侵すに至る。「他人・他者」とは、我々の生き方に根底において関わってくる何ものかである。この問題について、主にフロイトとラカンの精神分析的な立場から幾人かの哲学者・文学者の観点について検討する。	
	倫理学 1	行為の善悪に深くかかわる倫理学の問題は、同時に人間の生への問いでもある。有限な人間が、自分自身を凌駕し拘束する規範や原理へと応じるといって課題がそこには含まれるからである。「自分とは何か」といった根本的な問いかけから始まり、他者との関係、世界との関係へと展開する人間の生の活動全般が、ここでの考察対象である。ヨーロッパの倫理学を中心としながら、人間の基本的条件やその存在のあり方を深く考えることを目的とする。	
	倫理学 2	私たちは「生活」上の、より多く幸福、より少なく不幸などといった比較級に現を抜かしている。その生ぬるい比較級に意識を奪われている。私たちは「人生」の幸福を忘れて生きている。最上級(それは比較級の極まったものに過ぎない)というより、むしろ原級の幸福を忘れている。「人間よ、何故幸福を求めて先を急ぐ。彼は知らないのである。立ち止まれば、その場で幸福であるのに。」このことは、社会学や心理学の対象比較研究では暗点となっている。ひとり反省の学・倫理学のみがこれを考える。	
	論理学 1	本講義は、思考の基礎をなす論理を対象とする。私たちが何かあることについて考えている場合、そこでは何らかの「推論」が行われている。そして、推論には正しい推論と正しくない推論がある。この授業では、正しい推論とはどのようなものか、そして正しい推論を行うためには何が必要なのかを理解し、正しい推論と誤った推論を区別する能力を身につけることを目標とする。論理的な思考について理解を深め、正確な文章読解の力を養うことが狙いとなる。論証のタイプの相違なども理解したうえで、論理的思考力の広がりや深まりを期したい。	
	論理学 2	本講義では、論理学の基礎を、記号や推論方式の区別などを素材に、一貫して理解することを目的とする。そのために、通常の文章を記号によって表現する能力を習得し、真理表を作成するなど、論理学の基本的手順を解説する。論理学に関するこうした形式的な手順を習得することによって、正しい推論と正しくない推論を明確に区別し、論理的に一貫した思考の習慣を身につけることを目指す。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	宗教学 1	宗教学とは何か、そもそも宗教学はどのような出自を持ち、どのように展開してきた学問なのか。本講では、宗教学の成り立ち、その構造を確認するとともに、宗教現象を、信じる者、信じる対象、その両者を結ぶ媒介としての象徴・儀礼から構成されるものと考え、それぞれに即して、宗教学の立場からその見方を提示する。	
	宗教学 2	宗教とは何か、という問題を、宗教哲学的に（例えば、宗教と悪の問題）、宗教社会学的に（例えば、宗教と現代社会・世俗化概念の意味とその帰趨）など、さまざまな角度から検討し、人間と宗教の関わり、人間にとって宗教の意味とその役割などについて理解を深める。	
	美学 1	美や芸術に関する重要な概念、主題、思想を取り上げ、具体例を交えながら解説する。「作品」や「表現」など、日常的に用いられる言葉が、美学・芸術学のなかではどのように理解され、またその理解にどのような変遷と広がりがあるかを解説する。そのために、伝統的な美や芸術のみならず、革新の著しい現代の美や芸術に関わる諸問題も取り上げたい。そして、古今東西の美や芸術の諸現象について全般的な理解を深めていくことで、私たちが生きる現代の感性とは何かを探ることを目標とする。	
	美学 2	一方に真善美正利快の序列の中に確とした位置を占める古典美がある。美と快についての「感」がつく。即ち、美感、快感。（正義感とは正義漢の誤用）ニヒリズムの中でニーチェは、最下位の「快」こそ生命の高揚であるという。とすれば「美」の位置はどうなるのか。古典美においては知性×感性の図式内で考えられてきた。位置の揺らいだ「美」は元の位置に戻されねばならぬ。それが、遡って十七世紀、知性の学に倣う感性の学aesthetics即ち美学の誕生であった。こうした学は可能か。むしろ日本的な「感」にこそ、その可能性があるのではないか、これを探る講義である。	
	心理学 1	心理学の基本的な考えを理解した上で、実証的な心理学に対する興味や関心を高めることが、本講義の目的である。講義では、知覚心理学、思考心理学、感情心理学、社会行動心理学等を通して、人がなぜ誤ったり騙されたりするかについて、「誤り」、「エラーとバイアス」、「騙し」をキー概念にして、人の情報処理過程について心理学の様々な領域について解説していく。日常生活で経験する「誤り」について知ることで、人の情報処理過程についての理解を深め、日常生活で間違えたり騙されたりしないためにいかにすべきかについて自分で考えられる力を付ける。	
	心理学 2	心理学は、自分ではその存在を確信できるのに、いざ客観的に考えようとする、捉えどころがないように感じられる心の問題を科学的に解明するものである。心理学にはどのような分野があり、それらの分野で心の問題がどのように扱われているかについて、実験心理学を中心に知覚、学習、認識、発達の順序で講義を行う。一般的には、心理学は実際には広範な研究分野があり、それらの具体的な考え方とそこから明らかにされた心の様々な側面を理解することで、心についての考えを深める。	
	教育学 1	当科目の教育目標は、歴史的展開を理解すること、法規的・制度的に理解すること、行政的に理解すること、教育思想史的に理解すること、社会問題的に理解すること、以上の5点にあるが、授業では、教育の目的、子供の成長と教育、主にルソーの近代教育思想、デューイ等の現代教育思想、近代学校教育制度の発展の歴史等の順序で講義を行う。なお、現代は教育問題が山積し、教育の制度改革が急激なので、時事的な教育問題について関心を持ち、日頃から自分の考えを形成することを達成目標とする。	
	教育学 2	当科目の教育目標は、歴史的展開を理解すること、法規的・制度的に理解すること、行政的に理解すること、教育思想史的に理解すること、社会問題的に理解すること、以上の5点にあるが、授業では、各国の学校教育制度と教育改革、日本の学校教育制度との比較、現代教育の課題と改革、教育行政の諸問題等の順序で講義を進める。なお、現代は教育問題が山積しているが、現代の教育問題を憲法、教育基本法、学校教育法その他の教育法規的視点および教育の歴史的観点から考えることを達成目標とする。	
倫理学 3	現在、生命倫理や環境倫理などさまざまな場面で倫理的思考が要求されるようになった。このような状況を受けて、倫理の基本について学ぶことを目的とする。安楽死やインフォームド・コンセント、現代の環境破壊など、具体的で切迫した問題を手がかりとして、現代における倫理学の展開を考える。加えて、文学や歴史など教養の根底にある倫理的思考を考察する。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	倫理学 4	人間の生のあり方を問う倫理学は、原理的な考察を要求すると同時に、その時代に応じた具体的問題との取り組みが迫られる領域でもある。そのために、人間が実際に生きている社会や歴史をどのように考えるかという問いは、倫理学の重要な問題となる。現代の倫理学にとっては、戦争と平和の問題、グローバル化への応答などが不可欠である。本講義では、基本的な社会論・歴史論を概観したうえで、現代固有の問題を考察する。	
	美学 3	現代の美術・芸術は、既成の価値観や美意識を覆し、新たな美的感性に訴えかけるものとなっている。きわめて難解な前衛芸術から始まり、新たな技術的手段を支えられたコンピュータ・アートやグラフィック、または伝統的には美の対象にならなかった主題までが、現代では美学の対象となっている。ファッションやサブカルチャーなど、現代の多彩な展開を見据えながら、美学の新たな方向と可能性を探っていく。	
	美学 4	有史以前から人間は洞窟壁画や舞踏をはじめ、表現活動を文化の一部として繰り返してきた。本講義では、狭義の芸術に限らず、人間の表現活動全般を多角的に考察することにする。建築・音楽・舞踏・舞台芸術・文学・絵画など、人間の表現活動はきわめて多彩であり、そこには宗教や思想、政治などが複雑に絡み合っている。そうした多様で複雑な文化的営為を「表現」というキーワードで広く考えることを目的とする。	
	哲学 3	哲学の歴史とは、それぞれの歴史的時代の具体的な状況の中で、人間が哲学的思索を行った足跡を如実に示すものである。そこからは、それぞれの時代や状況が提起を知ることができる。本講義では、そうした哲学の歴史的展開を、主にヨーロッパ哲学を中心に概観する。古代・中世・近代へと時代が進むに従って、どのような問題意識が現れ、それが現代にとってどのような意味をもつのかを考察していく。	
	哲学 4	フロイト『精神分析入門』の第1部「錯誤行為」と第2部「夢」を中心に扱う。フロイトの言う無意識というものが人間の生活においてどのような意義をもっているか、具体的にフロイトの文章を辿りながら検討する。神経症に対する臨床的な医療行為から始まった精神分析が、人間についての深い洞察を支えられた一つの倫理思想であることが理解されるだろう。	
	思想への招待	哲学・倫理学・宗教学・美学など、人文系思想科目について、広く全般的な案内となることを目標として、それぞれの分野での中心的思想家・著作を紹介していく。抽象的で難解と思われがちな思想・哲学を、なるべく多くの学生が親しみをもてるようなかたちで展開し、初年次用の導入科目とする。	
	健康・スポーツ科学論	現代社会を生きる人々にとって、心と体の健康を維持することは豊かな生活基盤を築く上で大切な課題である。その為には、自らの心や体に対する知識や理解、健康的ライフスタイルの創造(思考・判断力)など「生きる力」を高めるための総合的な学力の獲得が必要である。授業では、運動生理学や健康科学、栄養学、スポーツ科学などの知見を活かしながら講義を展開し、健康を実践的に維持・向上させるための学力の獲得をめざす。	
	健康・スポーツ演習 1	本演習では、バスケットボール、太極拳、剣道、リズムダンス、トレーニングなど各種スポーツの中から1種目選択し、各スポーツ種目の実践を通して、思考力・判断力・コミュニケーション能力を向上させていくことをねらいとする。そのために、学生一人一人が自己の興味や能力に応じた課題を持ち、目的によっては、グループで協力して、スポーツの実践や調査、測定・分析などを行ない、最後に成果についてレポートなどによって報告する。本演習を通じて、健康で活動的な生活を送るための、運動やスポーツ実践の意義や重要性について理解することを目的とする。	
健康・スポーツ演習 2	本演習では、バスケットボール、太極拳、剣道、リズムダンス、トレーニングなど各種スポーツの中から1種目選択し、各スポーツ種目の実践を通して、思考力・判断力・プレゼンテーション能力を向上させていくことをねらいとする。そのために、学生は「健康・スポーツ演習」で取り組んだ課題をさらに発展、あるいは、新しい課題に挑戦するなどして、スポーツの実践や調査、測定・分析などを行ない、最後に成果についてレポートを提出する。本演習を通じて、生涯にわたって主体的に運動やスポーツに取り組むことのできる姿勢を育てることを目的とする。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	健康・スポーツ演習 3	本演習では、バスケットボール、太極拳、剣道、リズムダンス、トレーニングなど各種スポーツの中から1種目を選択し、各種スポーツの実践を通して知識・思考力・判断力・表現力・コミュニケーション能力などを向上させることをねらいとする。そのために、学生は「健康・スポーツ演習」で取り組んできた課題をさらに発展させ、選択したスポーツ種目と関連した調査、測定・分析などを行ない、その結果について、自己の考えや仲間の考えをまとめるなどしてレポート提出する。本演習を通じて、身体能力の育成に努めるとともに、生涯にわたって自らが主体的、意欲的に仲間とともに運動やスポーツに関わることが出来る姿勢を育てることを目的とする。	
	健康・スポーツ演習 4	本演習では、バスケットボール、太極拳、剣道、リズムダンス、トレーニングなど各種スポーツの中から1種目を選択し、各種スポーツの実践を通して思考力・判断力・表現力・リーダーシップ能力などを向上させることをねらいとする。そのために、学生は「健康・スポーツ演習」で取り組んできた課題をさらに発展させ、体験的事実を正確に理解したり、情報を分析・評価し、論述したりする。さらには、課題について、構想を立て実践し、評価・改善することができるようにする。本演習を通じて、学生自らが身体能力の育成に努めるとともに、4年間の演習授業の経験を生かし、卒業後も地域や職場の仲間とともに計画的・継続的な運動環境の調整に関わることができる力を培うことを目的とする。	
	外国語（英語）1 A	全学共通で履修する英語授業で、英語の基礎基本を固めることにより、国際社会で生きる日本人としての基礎的英語力を身につけるとともに、3年生からの専門分野での英語にも対応できる地盤作りをする。英語1 Aは、4技能（聞く・読む・話す・書く）のすべてを学習対象とするが、特に「読む・書く」技能を伸張させる。授業中の学習に加え、それと同時間以上の個別学習を自己管理のもと実施し、日々の継続的学習を実現していく。	
	外国語（英語）1 B	全学共通で履修する英語授業で、英語の基礎基本を固めることにより、国際社会で生きる日本人としての基礎的英語力を身につけるとともに、3年生からの専門分野での英語にも対応できる地盤作りをする。英語1 Bは、4技能（聞く・読む・話す・書く）のすべてを学習対象とするが、特に「聞く・話す」技能を伸張させる。授業中も「積極的にコミュニケーションをしようとする態度」が求められ、授業外でも意欲的に学習を展開していく自律性が求められる。	
	外国語（英語）2 A	全学共通で履修する英語授業で、英語の基礎基本を固めることにより、国際社会で生きる日本人としての基礎的英語力を身につけるとともに、3年生からの専門分野での英語にも対応できる地盤作りをする。英語2 Aは、4技能（聞く・読む・話す・書く）のすべてを学習対象とするが、英語1 Aをさらに発展させ、特に「読む・書く」技能を伸張させる。授業中の学習に加え、それと同時間以上の個別学習を自己管理のもと実施し、日々の継続的学習を実現していく。	
	外国語（英語）2 B	全学共通で履修する英語授業で、英語の基礎基本を固めることにより、国際社会で生きる日本人としての基礎的英語力を身につけるとともに、3年生からの専門分野での英語にも対応できる地盤作りをする。英語2 Bは、4技能（聞く・読む・話す・書く）のすべてを学習対象とするが、英語1 Bをさらに発展させ、特に「聞く・話す」技能を伸張させる。授業中も積極的にコミュニケーションをしていける技能が求められ、授業外でも意欲的に学習を進展させていく自律性が求められる。	
	外国語（ドイツ語）1 A	1 Aは初級者を対象にしてドイツ語文法の説明と理解を中心におく授業である。テキストもそれに見合ったものが用意される。文法中心とはいえ平易なドイツ語文・会話などを発音、聞き取り、音読などをしながらドイツ文に親しんでゆく。音声・映像メディアなども駆使しつつ、ドイツ語を通して異文化理解を深める。本科目履修後はドイツ語2 Aを履修することが望ましい。	
	外国語（ドイツ語）1 B	1 Bは初級者を対象にして1 Aよりもドイツ語の文章に多く接することをねらいとしている。とはいえ、初心者が対象であるから文法項目も段階を追って進行する。語彙、言い回し、簡単な実用語、会話文などの練習をつづけて理解を深める。本科目履修後は、ドイツ語2 Bを履修することが望ましい。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	外国語（ドイツ語）2 A	2 Aは初級者を対象にしてドイツ語文法の説明と理解を中心におく授業である。テキストもそれに見合ったものが用意される。文法中心とはいえ平易なドイツ語文・会話などを発音、聞き取り、音読などをしながらドイツ文に親しんでゆく。音声・映像メディアなども駆使しつつ、ドイツ語を通して異文化理解を深める。ドイツ語1 Aの内容を受けて展開するため、同科目を履修済みであることが望ましい。	
	外国語（ドイツ語）2 B	2 Bは初級者を対象にして2 Aよりもドイツ語の文章に多く接することをねらいとしている。とはいえ、初心者が対象であるから文法項目も段階を追って進行する。1 Bで補い得ないもの、語彙、言い回し、簡単な実用語、会話文、講読などの練習をつづけて理解を深める。ドイツ語1 Bの内容を受けて展開するため、同科目を履修済みであることが望ましい。	
	外国語（フランス語）1 A	フランス語の基礎の学習です。視聴覚教材を取り入れて、まず眼と耳でフランスとフランス語に接し、この1 Aでは初級文法の前半を学びます。2 Aと併せて、最終的にフランスとフランス語に親しみ、話し、読み、書くことの初歩をマスターすることが目標です。	
	外国語（フランス語）1 B	語学+フランス文化。コンピュータ教材を用いた初級語学の勉強に加えて、文学、美術、音楽、映画、歴史、社会など、フランスの文化を視聴覚教材を用いて、広く親しみやすく紹介します。フランスの文化を通じてフランス語に親しむことが目標です。	
	外国語（フランス語）2 A	「フランス語1 A」の学習を基礎にした初級文法の学習が中心になります。この2 では、その後半を学びます。1 A同様に視聴覚教材を用いて、目と耳からフランス語を取り入れます。	
	外国語（フランス語）2 B	語学+フランス文化。1 Bの続きです。コンピュータ教材を用いた初級語学の勉強に加えて、文学、美術、音楽、映画、歴史、社会など、フランスの文化を視聴覚教材を用いて、広く親しみやすく紹介します。フランスの文化を通じてフランス語に親しむことが目標です。	
	外国語（中国語）1 A	中国語学習の準備完了を目指す中国語入門クラスである。最も大切な中国語の四声・ピンインの基礎的な練習から行う。また同時に中国語入門の段階における中国語文法の初歩を学ぶ。当該授業を学び終えた時には、正確な発音と基礎的な文法・語彙を習得し、平易な中国語を聞き、話すことができることを目標とする。当該授業においては、学生が中国語検定試験準4級レベルに到達できる簡単な日常挨拶語を約50～80を習得する。	
	外国語（中国語）1 B	中国語1 Bにおいても中国語の四声・ピンインの基礎的な練習から行うが、主として、基本的にはネイティブが担当するので、簡単な会話の練習に重点を置く。そして、やはり、当該授業を学習を学び終えた時には、正確な発音と基礎的な文法・語彙を習得し、平易な中国語を聞き、話すことができることを目標とする。当該授業においては、学生が中国語検定試験準4級レベルに到達できるようにする。	
	外国語（中国語）2 A	中国語1 Aで学んだ中国語の基礎を復習しながら、中国語入門から初級に至る段階における、中国語の語彙、文法を学び中国語の基礎をマスターし、簡単な中国語を聞き、話すことができるようになることを目標とする。当該授業においては、学生が中国語検定試験準4級から4級レベルに到達できることを目標とする。	
外国語（中国語）2 B	中国語2 Bにおいても中国語1 Bで学んだ中国語の基礎を復習をおこなうが、主としてネイティブが担当するので、中国語入門から初級の段階における中国語会話を学び終えた時には、比較的日常的な中国語会話を話すことができることを目標とする。当該授業においては、学生が中国語検定試験準4級から4級レベルに到達できるようにする。常用語500～1000による中国語単文の日本語訳と日本語の中国語訳ができるようにする。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	外国語（韓国語）1 A	韓国語は初習外国語の中でも文字（ハングル）とその発音を最初に学習する必要があるため、韓国語を母国語とする教師がおこなう外国語（韓国語1 B）との連携は必須である。連携することによって効果的な学習が出来る。最初に母音、次に子音、そして合成母音、最後に子音で終わるパッチムを学習する。ハングルと発音とを結びつけることが目標となる。一応ハングルが読めるようになってから指定詞による肯定文と否定文の学習をおこなう。簡単だが基本的な文型となるのでしっかりと身につける。	
	外国語（韓国語）1 B	韓国語を母国語とする教員によっておこなわれ、日本語を母国語とする教員が担当する外国語（韓国語）1 Aと連携しつつ学習される。ハングルと発音の学習においてはネイティブの教師によって発音に注意される。最初に母音、次に子音、そして合成母音、最後に子音で終わるパッチムを学習する。ハングルと発音とを結びつけることが目標となる。一応ハングルが読めるようになってから指定詞による肯定文と否定文の学習をおこなう。簡単だが基本的な文型となるのでしっかりと身につける。	
	外国語（韓国語）2 A	1 A, 1 Bで学習したことを踏まえて基本的な文法事項の学習をおこなう。動詞、形容詞、存在詞による肯定文と否定文。尊敬の表現、過去形などについて学ぶ。また同時に語彙数を増やすことを目標とする。この授業は日本語を母国語とする教員によっておこなわれ、韓国語を母国語とする教員が担当する外国語（韓国語）2 Bと連携しつつおこなわれる。助詞、数詞などの使い方についてもしっかりと学びたい。また文章や単語に現れる韓国文化の特徴についても注意していきたい。	
	外国語（韓国語）2 B	日本語を母国語とする教員が担当する外国語（韓国語）2 Aと連携しつつおこなわれる。ネイティブによる授業であるので、特に発音に注意したい。また学習する内容に合わせた簡単な会話の練習なども取り入れた学習を行う。基本的な文法事項として、動詞、形容詞、存在詞の肯定文と否定文。尊敬の表現、過去形などについて学ぶ。	
	日本語1 A	「聞く」「話す」「読む」「書く」の能力を総合的に伸ばしながら、大学教育に対応した高度な日本語能力 講義を理解し、ノートを取り、資料や文献を収集し、レポートを書き、質疑応答や研究発表を行うといった大学生としての基礎能力 を定着させることを目標とする。講義を聴く技法、ノートをとる技法・情報の整理法、レポートを書く技法、発表する技法、資料・文献の収集法、レポートを書く技法を中心テーマとして取り上げて、テーマに沿った課題を出し、提出した課題を分析しながら授業を進める。	
	日本語1 B	新聞、雑誌、小説、映画、アニメ、歌曲などさまざまなメディアやジャンルの日本語表現にふれ、日本語能力の奥行きを広げるとともに、日本の社会や文化への理解を深めていく。語彙力、読解力を高め、新聞記事や短編小説の大意をつかみ、要約文や粗筋をまとめることができるレベルを目標とする。授業ではさまざまなジャンルの文章を多読・精読し、要約をまとめてもらう。また、映画やアニメーションを鑑賞しながら、その表現の特質を考えていく。	
	日本語2 A	「聞く」「話す」「読む」「書く」の能力を総合的に伸ばしながら、大学教育に対応した高度な日本語能力 講義を理解し、ノートを取り、資料や文献を収集し、レポートを書き、質疑応答や研究発表を行うといった大学生としての基礎能力 を定着させることを目標とする。日本語1 Aで習得した技法を確認・復習しながら、授業で調査・研究結果の発表方法、論文を読む技法を検討する。さらに、実際に課題を決め、関連する課題図書を読んで、研究成果を発表するという形で授業を進める。	
	日本語2 B	新聞、雑誌、小説、映画、アニメ、歌曲などさまざまなメディアやジャンルの日本語表現にふれ、日本語能力の奥行きを広げるとともに、日本の社会や文化への理解を深めていく。書く能力、発表能力の強化を図り、自分の意見や感想を的確に発表・記述できることを目標とする。授業では日本社会の幾つかのトピックスを取り上げ、関連する資料を読解しながら、質疑応答や討論を行った上で、各トピックスに対する感想文を提出し、それに対してフィードバックを行うという形で授業を進める。	
	情報リテラシー a	この授業では、情報を適切に収集し、加工し、自ら情報を表現（発信）するまでの基礎的な技能や知識を学習し、さらに情報を活用する上での情報倫理（モラル）や、情報機器及び情報通信ネットワークの機能など基本的知識や能力の習得を目標としている。 情報リテラシー a では、情報倫理と基本的なアプリケーションの基礎を中心に習得する。 Win基礎・情報倫理・情報検索・画像処理（Photoshop）・ホームページ作成（HTML）・Word基礎と応用	講義 6時間 演習 24時間

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	情報リテラシー b	この授業では、情報を適切に収集し、加工し、自ら情報を表現（発信）するまでの基礎的な技能や知識を学習し、さらに情報を活用する上での情報倫理（モラル）や、情報機器及び情報通信ネットワークの機能など基本的知識や能力の習得を目標としている。 情報リテラシー b では、情報処理の基礎と基本的なアプリケーションの基礎と応用力を中心に習得する。 情報処理の基礎・Excel 基礎と応用・データベース体験（Access）・プログラミング体験（Basic）・PowerPoint 基礎と応用・総合的な課題	講義 3 時間 演習 27 時間
	言語学 1	「言語学」は、人間性を代表する人間の機能について、生物学を初め、あらゆる学問分野を通して考える。とくに、大学人として言語の使用は不可欠である。ただ、その由来、構造、とその使用の表象についてあまり意識がない。これらを理解することで、言語の可能性と限界を発見しながら、自分の使用を再確認し、他者の使用について態度を寛容にする。授業では、言語学とは何か、音声学(母音・子音)、音韻論、音節構造、形態論、言語の種類、語彙と文法、統語論、ジャンル分析等について講義を行う。	
	言語学 2	「言語学」は、人間性を代表する人間の機能について、生物学を初め、あらゆる学問分野を通して考える。とくに、大学人として言語の使用は不可欠である。ただ、その由来、構造、とその使用の表象についてあまり意識がない。これらを理解することで、言語の可能性と限界を発見しながら、自分の使用を再確認し、他者の使用について態度を寛容にする。授業では、語彙の意味論、意味と比喻、言語変種、言語の変化、言語獲得論、言語教育の前提、言語能力の評価、言語と人間性等について講義する。	
	言葉の思想	これは言語学の講義ではない。言語学は、言ってみれば、通時的或いは共時的に言葉を採集し標本化して、これを観察分類系統づけを行う。ここでは、言葉は死物である。言葉自身の抜け殻である。この講義は、「生」きた言葉を扱う。しかし社会的に「活」用されていていればそれで生きた言葉ではない。むしろ言葉の発「生」の現場に立ち会おうとする講義である。と言ってもホモ・サピエンスの登場するはるか昔のことのことではない。今ここにたち現れる言葉について考える。	
	科学コミュニケーション論	科学コミュニケーションは、一般に「研究者、メディア、一般市民、科学技術理解増進活動担当者、行政当局間等の情報交換と意思の円滑な疎通を図り、共に科学リテラシーを高めていくための活動」ととらえられている。本講義は、大学生の科学リテラシー向上を図るための教養教育の一科目として新規に開講するものであるが、狭義の「科学コミュニケーション」にとらわれることなく、人間以外の生物間コミュニケーションにおける“ことば”、人間と植物・微生物のコミュニケーション産物としての“うつくしさと文化”も主要テーマとして論じる。	
	映画と音楽で学ぶ英語	本授業の目的は、英語への興味関心を喚起し、英語学習への意欲を高めることである。学習者の多くが最も興味を持つ文化的分野として、音楽、スポーツ、アート等があるが、映画の中にはこれらの多様な文化が混在している。本授業は、特に映画のシナリオ（英語の会話）と音楽（英語の歌詞）の理解を通して、英語による表現法と様々な英語圏の文化とを学ぶ。映画と音楽が持つ、「人の心に訴える力」を牽引力に、学習者が英語を学ぶ魅力を十分に実感し、これを機に、積極的に英語に取り組むようになることを期待する。	
	異文化体験	The purpose of this course is to prepare students for study trips abroad. It is expected that students taking this course will be studying abroad at one of Meisei 's affiliated Universities at some time during the current academic year. The emphasis will be on developing coping strategies for living and functioning safely in a different culture where the language of communication is English. English will be the medium of instruction and such topics as Travel Information; Useful English for travel; Homestays; Comparative cultures and customs; Travel Documents; Insurance, health and safety will be covered. Students will be assessed on their participation, degree of understanding and preparation, and the successful completion of the study trip abroad. 本講義は学生の海外研修旅行の準備を目的とする。受講者は研修旅行出発前に、異文化社会でのさまざまな場面における英語での対応や対処の仕方を学ぶ。講義は英語で行い、海外渡航及び滞在に必要な事柄についての知識、情報を得る機会とする。受講態度と講義内容の習得、及び研修旅行への参加により評価される。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	異文化で学ぶ英語	「言葉は文化である」と言われる。言葉と文化は一体なのか。分離することはできるのか。教養外国語への導入として、この科目では異文化をテーマにこの問題を追究ながら、英語という言語文化に迫る。言語は文化理解なしには解読することはできない。講義では、先ず、英語文化圏の生活文化を中心に探訪をする。主要な民族言語として英語が話される地域の衣食住について学び、英語文化を理解する。次に、異文化としての英語を探究する。日本語と対照しながら身の回りの言語事実から言葉のおもしろみを発見し、外国語への誘いとする。	
	外国語（英語）3 A	全学共通で履修する英語授業で、英語の基礎基本を固めることにより、国際社会で生きる日本人としての基礎的英語力を身につけるとともに、3年生からの専門分野での英語にも対応できる地盤作りをする。英語3 Aは、4技能（聞く・読む・話す・書く）のすべてを学習対象とするが、日本人講師のもと、特に「読む・書く」技能をさらに伸張させる。授業中の学習に加え、それと同時間以上、個別学習を自己管理のもと実施し、日々の継続的学習を実現し、自分でさらに発展させていく。	
	外国語（英語）3 B	全学共通で履修する英語授業で、英語の基礎基本を固めることにより、国際社会で生きる日本人としての基礎的英語力を身につけるとともに、3年生からの専門分野での英語にも対応できる地盤作りをする。英語3 Bは、4技能（聞く・読む・話す・書く）のすべてを学習対象とするが、外国人講師のもと、特に「聞く・話す」技能をさらに伸張させる。授業中も積極的にコミュニケーションをしていける技能が求められ、授業外でも意欲的に学習を進展させていく自律性が求められる。	
	外国語（英語）4 A	全学共通で履修する英語授業で、英語の基礎基本を固めることにより、国際社会で生きる日本人としての基礎的英語力を身につけるとともに、3年生からの専門分野での英語にも対応できる地盤作りをする。英語4 Aは、4技能（聞く・読む・話す・書く）のすべてを学習対象とするが、日本人講師のもと、3 Aの内容をさらに発展させ、特に「読む・書く」技能をさらに伸張させる。授業中の学習に加え、それと同時間以上、個別学習を自己管理のもと実施し、日々の継続的学習を実現し、自分でさらに発展させていく。	
	外国語（英語）4 B	全学共通で履修する英語授業で、英語の基礎基本を固めることにより、国際社会で生きる日本人としての基礎的英語力を身につけるとともに、3年生からの専門分野での英語にも対応できる地盤作りをする。英語4 Bは、4技能（聞く・読む・話す・書く）のすべてを学習対象とするが、外国人講師のもと、3 Bの内容をさらに発展させ、特に「聞く・話す」技能をさらに伸張させる。授業中も「積極的にコミュニケーションをしようとする態度」が求められ、授業外でも意欲的に学習を進展させていく自律性が求められる。	
	外国語（ドイツ語）3 A	3 Aの履修者は既に1 A・2 Aを履修済みであることがのぞましく、さらにドイツ語中級へとステップアップを図る。文法事項の確認はドイツ語文章のなかで確認し、文章の組み立て方を理解する。簡単なドイツ語文を書けることもねらいとしたい。同4 Aもこうした文の構造・語順などを文法的にさらに理解を深めるようにしたい。	
	外国語（ドイツ語）3 B	3 Bの履修者は既に1 B・2 Bを履修済みであることがのぞましく、さらにドイツ語中級へとステップアップを図る。テキストは講読中心である。さまざまな読み物が教材となりうる。3 Aよりはおおくの読み物に接することをねらいとしたい。また視聴覚メディアを用いて内容を理解してゆくことも試みたい。同4 Bについてもその延長上にある。	
	外国語（ドイツ語）4 A	4 Aの履修者は既に3 Aを履修済みであることがのぞましく、引き続きさらにドイツ語中級へとステップアップを図る。文法事項の確認はドイツ語文章のなかで確認し、文章の組み立て方を理解する。簡単なドイツ語文を書けること、表現することもねらいとしたい。またこうした文の構造・語順などを文法的にさらに理解を深めるようにしたい。	
	外国語（ドイツ語）4 B	4 Bの履修者は既に3 Bを履修済みであることがのぞましく、引き続きさらにドイツ語中級へとステップアップを図る。テキストは講読中心であり、さまざまな読み物が教材となりうる。さらに「話せるドイツ語」もテーマとしたい。4 Aよりはおおくの読み物に接することをねらいとしたい。また視聴覚メディアを用いて内容を理解してゆくことも試みたい。	
外国語（フランス語）3 A	1年次に学んだ1・2の初級の学習を基礎にして中級レベル前半の文法学習に入ります。1・2と同様に視聴覚教材を用いて感覚的に、また実践的に具体的な状況の中で文法を理解する練習をします。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	外国語（フランス語）3 B	語学+フランス文化。1・2Bの続きです。コンピュータ教材を用いた中級語学の勉強に加えて、文学、美術、音楽、映画、歴史、社会など、フランスの文化を視聴覚教材を用いて、広く親しみやすく紹介します。フランスの文化を通じて総合的にフランス語を学ぶことが目標です。	
	外国語（フランス語）4 A	これまでの学習を基礎にして中級レベル後半の文法学習に入ります。1・2・3Aと同様に視聴覚教材を用いて感覚的に、また実践的に具体的な状況の中で文法を理解する練習をします。	
	外国語（フランス語）4 B	語学+フランス文化。1・2・3Bの続きであり、その発展です。コンピュータ教材を用いた中級語学の勉強に加えて、文学、美術、音楽、映画、歴史、社会など、フランスの文化を視聴覚教材を用いて、広く親しみやすく紹介します。フランスの文化を通じて総合的にフランス語を学ぶことが目標です。	
	外国語（中国語）3 A	中国語2 Aで学んだ中国語の基礎を復習しながら、中国語初級から中級の段階における中国語文法・語彙を学ぶ。当該授業を学び終えた時には、自分で応用力を養いうる基礎的能力の保証をします。基本的な文章を読み、簡単な会話ができることを目標とする。授業計画としては、3回の授業でテキストを一課進み、まとめと小テストを行い、期末には期末試験も行う。当該授業においては、学生が中国語検定試験4級から3級レベルに到達できるようにする。	
	外国語（中国語）3 B	中国語2 Bで学んだ中国語の基礎を復習しながら、中国語初級から中級の段階における中国語文法・語彙を学ぶ。当該授業を学び終えた時には、自分で応用力を養いうる基礎的能力の保証をします。基本的な文章を読み、簡単な会話ができることを目標とする。授業計画としては、3回の授業でテキストを一課進み、まとめと小テストを行い、期末には期末試験も行う。当該授業においては、学生が中国語検定試験4級から3級レベルに到達できるようにする。	
	外国語（中国語）4 A	中国語3 Aで学んだ中国語を復習しながら、初級から中級の段階における中国語文法・語彙を学ぶ。当該授業を学び終えた時には、比較的長い文章読解ができ、簡単な中国語会話を話すことができる。授業計画としては、3回の授業でテキストを一課進み、まとめと小テストを行い、期末には期末試験も行う。当該授業においては、学生が中国語検定試験4級から3級レベルに到達できるようにする。常用語は1000～2000による中国語複文の日本語訳と中国語訳ができる	
	外国語（中国語）4 B	中国語3 Bで学んだ中国語を復習しながら、中国語初級から中級の段階における中国語文法・語彙を学ぶ。当該授業を学び終えた時には、比較的長い文章読解ができ、簡単な中国語会話を話すことができることを目標とする。授業計画としては、3回の授業でテキストを一課進み、まとめと小テストを行い、期末には期末試験も行う。当該授業においては、学生が中国語検定試験3級レベルに到達できるようにする。	
	外国語（韓国語）3 A	1 A、1 B、2 A、2 Bを履修していることを前提として授業を進める。これまで使用した教科書の復習からはじめ、さらにその教科書の上級編を進める形をとるが、韓国語3 Aにおいては日本語話者教員を配置して文法事項の説明および練習問題等に比重を置く。既に基本的な文法事項は習得されているはずであるから、ここでは初級韓国語学習で最後に残された重要文法事項である連体形を中心に、練習を繰り返して定着を図る。もちろん、3 B担当教員との密接な連携のうえに行われるのは当然である。	
	外国語（韓国語）3 B	1 A、1 B、2 A、2 Bを履修していることを前提として授業を進める。これまで使用した教科書の復習からはじめ、さらにその教科書の上級編を進める形をとるが、韓国語3 Bにおいては韓国語話者教員を配置してある程度の会話訓練も授業に取り入れる。学習が二年目に入っている学生が基本的な対象であるので、韓国語のみならず、韓国・朝鮮文化への関心を維持させる上でも会話能力を磨くことは有益である。もちろん、3 A担当教員との密接な連携のうえに行われるのは当然である。	
外国語（韓国語）4 A	基本的には日本語話者教員を配置して3 Aから継続して教科書を進めていくが、教科書を終わらせることを目的とはしない。一般に二年次用の韓国語教科書は後半に入るに従って日常会話で使われる表現を多く取り入れる傾向があるが、未だ基盤が未熟な段階で高度な会話形を教えていくことにはあまり意味がないので、韓国語の基礎段階として必須の文法事項習得を終えた段階で、その韓国語能力をもって読解可能な文章を辞書を使って読むことに重点を移していく。それが結局は、会話形も含めた韓国語能力全般の底上げにつながると思う。なお、基礎的な会話訓練は4 Bにおいて行うこととなる。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	外国語（韓国語）4 B	韓国語話者教員を配置して、プリント等の教材を使用して主に会話訓練を行うが、4 Aの進捗状況を確認しつつ、使用可能な文法事項を増やしていく。その際、あまり高度な会話形を追求するのではなく、もっとも基本的な形を確実に身につけられるように指導する。往々にして、「生きた韓国語」のスローガンのもと、学生の処理能力を超えるような会話形を教えるケースがあるが、既修文法レベルがさして高度ではなく、またその定着も十分ではない状況においては逆効果である。	
	日本語3 A	この授業では既習の日本語表現を確認し、より論理的な文章を書く方法を提示する。文体によってことばの選び方や文末表現が違ふので、教材や様々な文章例を参考にして何度も作文を重ね、書きことばの表現能力を向上させることをめざす。いろいろな書きことばの文体を学んだ後、物事の前関係、仕組み・手順・方法、因果関係、行為の理由・目的、物事間の共通点・相違点、伝聞・引用などを表す表現を取り上げ、作文の練習をするというスタイルで授業を進める。	
	日本語3 B	本講義は対人関係を考慮した総合的なコミュニケーション能力の向上をめざす。後半に話しことばと似た性格を持つ電子メールの練習をして、両者の共通点と相違点を認識してもらうことを目標とする。授業は、まず話し言葉の特徴を考え、その後日本語の改まり度や敬意表現、伝言、勧誘、許可、情報の提示、依頼、申し出などの機能を担う表現を取り上げ、ロールプレイやディベートといった形でそれらの表現を含む会話練習をする。さらに、会話と電子メールの共通点と相違点を検討し、電子メール表現の特質を考える。	
	日本語4 A	この授業ではより論理的な文章を書く方法を提示する。教材や様々な文章例を参考にして何度も作文を重ね、書きことばの表現能力を向上させることをめざす。また、自分の意見と、参考にした文章との違いを明確に書き分けられることを目標とする。自分の考えを述べ、物事の変化・推移、賛成意見・反対意見などを表す表現を取り上げ、作文の練習もする。さらに、テーマと目的やアウトラインを考え、情報を整理して、レポートにまとめるというスタイルで授業を進める。	
	日本語4 B	本講義は対人関係を考慮した総合的なコミュニケーション能力の向上をめざす。また、文章をもとに、プレゼンテーションをする力を身につけることも目標とする。授業ではまず、不満・言い訳、提案、感想表現といった対人関係を考えた基本的な会話表現を練習する。その後、電子メールと手紙の共通点と相違点を考える。後半ではインタビューとそのまとめ、発表の練習をし、さらに実際にインタビューによる調査とそのプレゼンテーションを行う。	
	上級英語1	英語1及び英語2で養成した基礎力をもとに、国際社会で生きる日本人として必要な、実践的英語力を身につけることを目指す。そのために、4技能のバランスの取れた学習をするが、中でも話す技能・書く技能といった発信力に重点を置き、スピーチ・プレゼンテーション等を通じて、自己を表現し他者に意思伝達する力をつける。1では、それに必要な基本的な語彙、フレーズを学ぶ。	
	上級英語2	英語1及び英語2で養成した基礎力をもとに、国際社会で生きる日本人として必要な、実践的英語力を身につけることを目指す。そのために、4技能のバランスの取れた学習をするが、中でも話す技能・書く技能といった発信力に重点を置き、スピーチ・プレゼンテーション等を通じて、自己を表現し他者に意思伝達する力をつける。2では1に続いて、表現や伝達に必要な基本的な語彙、フレーズの学習をさらに発展させる。	
	上級ドイツ語1	上級ドイツ語とは何か味わいのあるドイツ語文をていねいに読んでみたい、あるいはドイツ語で表現してみたい、ドイツ人の生活文化、芸術、学術、文芸、経済・商業、スポーツ、政治・外交、教育、漫画、国際ボランティア活動、ジャーナリズムなどをのぞいてみたい、という人に開かれたドイツ語です。テキストも担当者がその意向をうかがいます。さらにまたドイツ語の資格試験にチャレンジしたいというひと、ドイツ語技能検定試験（独検）という5級～1級までのものとか、日本政府観光局（JNTO）がおこなう「通訳案内士試験」にむけて指導します。	
	上級ドイツ語2	上級ドイツ語とは何か味わいのあるドイツ語文をていねいに読んでみたい、あるいはドイツ語で表現してみたい、ドイツ人の生活文化、芸術、学術、文芸、経済・商業、スポーツ、政治・外交、教育、漫画、国際ボランティア活動、ジャーナリズムなどをのぞいてみたい、ドイツ留学をしてみたいという人に開かれたドイツ語です。テキストも担当者がその意向をうかがいます。さらにまたドイツ語の資格試験にチャレンジしたいというひと、ドイツ語技能検定試験（独検）という5級～1級までのものとか、日本政府観光局（JNTO）がおこなう「通訳案内士試験」にむけて指導します。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	上級フランス語 1	フランス語のコミュニケーション能力の向上を目指した実践的練習を行う。これまで学んできたフランス語を実際に運用できるようになるために、基本的な言語表現を、その表現が用いられる状況に即した形で用いることができるようになることを目標にして、DVD、CD等、視聴覚教材を活用しつつ、話す、聞く、読む、書くという4つの作業をフランス語で行う。	
	上級フランス語 2	既習フランス語の運用能力を高めるとともに、フランス語世界についての知識を深めることを目標とする。フランス語世界の歴史、文化、社会問題等について、フランス語で書かれたテキスト（新聞・書物等）を利用し、また文学作品のテキストやその映画化されたもの、さらにオペラなどのDVDを活用しつつ、フランス語世界の具体相に触れ、受講者をその世界へ触発する。	
	上級中国語 1	上級中国語 1 を学習することによって、中国語検定試験 4 級～3 級の習得を目指します。そのために、中国語を「書く」と「話す」を定着させ、簡単な通訳もできることを目標とします。さらには、上級中国語 2 へと発展できるように、中国語を「話す」から自分のメッセージを「語る」へとつなぐ基礎的段階を習得します。また、中国語スピーチコンテストに積極的に挑戦するような中国語コミュニケーション能力の向上を図ります。	
	上級中国語 2	上級中国語 1 から、段階的に学習することによって、中国語検定試験 3 級の習得を目指します。そのために、中国語を「書く」と「話す」を定着させ、簡単な通訳もできることを目標とします。さらには、上級中国語 2 へと発展できるように、中国語を「話す」から自分のメッセージを「語る」へとつなぐ基礎的段階を習得します。また、中国語スピーチコンテストに積極的に挑戦するような中国語コミュニケーション能力の向上を図ります。	
	上級韓国語 1	韓国語の基礎の学習を終えた段階で、語彙、文法、表現の増強を図り、実践的に表現しうる能力を養う。用言の活用の様々なタイプに習熟し、話しことばと書きことば、敬意体と非敬意体、連体形や接続形、引用形などの様々な文法を学ぶ。加えて、基礎的な語彙力の拡充をはかり、「電話の表現」、「感謝を表す」、「許可を得る」、「提案する」、「意志を述べる」といった、より洗練された談話表現の獲得にも力を注ぎ、実践的な表現力を増強する。	
	上級韓国語 2	韓国語の基礎の学習を終えた段階で、会話力と作文力を実践的な練習を通して身につける。まず、発音の練習を徹底して繰り返す。次に、会話における「場」の重要性を認識し、いつ、どこで、誰と、何を、どのように、なぜ、言葉を用いて話すのか常に意識し、やり取りする練習を行う。また、自分の考えや感想を韓国語の自然な表現で表し、まとめる力を養う。加えて、韓国語学習の成果の一つとしてハングル検定試験 3・4 級合格を目指し、試験対策も行う。	
	上級英語 3	英語 1 及び英語 2 で養成した基礎力をもとに、国際社会で生きる日本人として必要な、実践的英語力を身につけることを目指す。そのために、4 技能のバランスの取れた学習をするが、中でも話す技能・書く技能といった発信力に重点を置き、スピーチ・プレゼンテーション等を通じて、自己を表現し他者に意思伝達する力をつける。3 では、1、2 で学んだ表現方法を使って、様々なテーマのもとに、自己表現活動、伝達活動の実践をする。	
	上級英語 4	英語 1 及び英語 2 で養成した基礎力をもとに、国際社会で生きる日本人として必要な、実践的英語力を身につけることを目指す。そのために、4 技能のバランスの取れた学習をするが、中でも話す技能・書く技能といった発信力に重点を置き、スピーチ・プレゼンテーション等を通じて、自己を表現し他者に意思伝達する力をつける。4 では、3 に続いて、実践活動をさらに発展させる。	
	上級ドイツ語 3	上級ドイツ語とは何か味わいのあるドイツ語文をていねいに読んでみたい、あるいはドイツ語で表現してみたい、ドイツ人の生活文化、芸術、学術、文芸、経済・商業、スポーツ、政治・外交、教育、漫画、国際ボランティア活動、ジャーナリズムなどをのぞいてみたい、ドイツ留学してみたいという人にかかれたドイツ語です。上級ドイツ語 3 では同 1・2 の内容をさらに発展させて展開します。またドイツ語の資格試験にチャレンジしたいというひとと、「ドイツ語技能検定試験」（独検）という 5 級～1 級までのものとか、日本政府観光局（JNTO）がおこなう「通訳案内士試験」にむけて指導します。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	上級ドイツ語 4	上級ドイツ語とは何か味わいのあるドイツ語文をていねいに読んでみたい、あるいはドイツ語で表現してみたい、ドイツ人の生活文化、芸術、学術、文芸、経済・商業、スポーツ、政治・外交、教育、漫画、国際ボランティア活動、ジャーナリズムなどをのぞいてみたい、ドイツ留学をしてみたいという人に開かれたドイツ語です。上級ドイツ語 4 では同 3 の内容を受けて講義を展開します。またドイツ語の資格試験にチャレンジしたいというひと、「ドイツ語技能検定試験」(独検)という 5 級～1 級までのものとか、日本政府観光局(JNTO)がおこなう「通訳案内士試験」にむけて指導します。	
	上級フランス語 3	「上級フランス語 1」に続いて、フランス語のコミュニケーション能力の向上を目指した実践的練習を行う。これまで学んできたフランス語を実際に運用できるようになるために、基本的な言語表現を、その表現が用いられる状況に即した形で用いることができるようになることを目標にして、DVD、CD等、視聴覚教材を活用しつつ、話す、聞く、読む、書くという4つの作業をフランス語で行う。	
	上級フランス語 4	「上級フランス語 2」に続いて、既習フランス語の運用能力を高めるとともに、フランス語世界についての知識を深めることを目標とする。フランス語世界の歴史、文化、社会問題等について、フランス語で書かれたテキスト(新聞・書物等)を利用し、また文学作品のテキストやその映画化されたもの、さらにオペラなどのDVDを活用しつつ、フランス語世界の具体相に触れ、受講者をその世界へ触発する。	
	上級中国語 3	上級中国語 3 を学習することによって、中国語検定試験 3 級～2 級の習得を目指します。そのために、中国語を「書く」と「話す」ということから、さらに進んで、自分の伝えたいメッセージを「語る」ということへつないでいきます。さらには、中国語スピーチコンテストや中国語ビジネス資格試験へ積極的に挑戦できる中国語コミュニケーション能力の習得を目標とします。	
	上級中国語 4	上級中国語 3 から、段階的に上級中国語 4 を学習することによって、中国語検定試験 2 級の習得を目指します。そのために、中国語を「書く」と「話す」ということから、さらに進んで、自分の伝えたいメッセージを「語る」ということへつないでいきます。主として、中国の新聞や映画なども「見て、聞いて」自然に分かるようにします。さらには、中国語スピーチコンテストや中国語ビジネス資格試験へ積極的に挑戦できる中国語コミュニケーション能力の習得を目標とします。	
	上級韓国語 3	韓国語の中級を学んだ学生を対象とする。より豊かで自然な韓国語表現力を養うことを学習目標とする。日本語と韓国語の対照言語学的な観点も考慮にいれ、両言語の類似点と相違点に気付き、さらに直訳では不自然な、高度な表現の習得にも力を注ぐ。また、韓国で出版された小説、童話、詩集、新聞記事等を教材とし、豊かな表現の学習とともに、そこに反映されている韓国文化や価値観、考え方等を知り、理解することを目指す。	
	上級韓国語 4	韓国語の中級を学んだ学生を対象とする。より豊かで自然な韓国語でのコミュニケーション能力を養うことを学習目標とする。まず、聞き取りや会話練習に重点を置き、映画やドラマ等を題材にし、さまざまな表現を学び、応用できる練習を行う。また、日記や感想文を課題にし、自分の考えや主張等を効果的に伝えるための文章力を養う。加えて、韓国語学習の成果の一つとしてハングル検定試験 2・準 2 級合格を目指し、試験対策も行う。	
	日本事情 1	原則として留学生を対象とした科目である。日本文化や大学生生活に必要なと想定される一般的な事象について提示し、受講者の既成概念との違いを確認し、ディスカッションを行う。それらを通して、より専門的な言葉を理解しつつ、自分のまとまった意見が述べられるようにすることを目標とする。また、異なる文化・考え方を理解することで共生への方法を考える。講義では日本の風土、芸術文化、娯楽、家族・人生観、大学生生活、衣食住文化等をテーマとして取り上げる。	
	日本事情 2	原則として留学生を対象とした科目である。日本文化や大学生生活に必要なと想定される一般的な事象について提示し、受講者の既成概念との違いを確認し、ディスカッションを行う。それらを通して、より専門的な言葉を理解しつつ、自分のまとまった意見が述べられるようにすることを目標とする。また、異なる文化・考え方を理解することで共生への方法を考える。講義では労働・産業構造、技術革新、教育、交通・物流、コンビニエンス・ストアなどの業態、コミュニケーションの様々な形態等をテーマとして取り上げる。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	外国事情 1	明治維新以後、日本の近代化に多大な影響を及ぼしたのはヨーロッパ諸国であった。講義では、ペローの童話(シンデレラ)を取り上げ、そこに描かれる家族像から、ヨーロッパ近代社会を支える「家族」の意味を考え、ヨーロッパの文化・精神性への理解を深める。具体的には、ヨーロッパの地理や歴史、伝承文学、原作者ペローの紹介、夫婦と子どもの位置関係、家族内のいじめ、母親と父親の役割、日本の昔話との関係、ヨーロッパにおける精神性の基盤、ヨーロッパの昔話における「家族」の特徴等の順序で講義を行う。	
	外国事情 2	アメリカ合衆国は、今日世界最大国であり、世界に対する影響は絶大であり、日本にとって最も親密な国であり、アメリカの知識は不透明な21世紀において日本の将来を考える際に大いに参考となる。講義では、第一に今日のアメリカを理解する上で必要な基礎知識、すなわち、日米関係、アメリカ合衆国成立の経緯(歴史)、地理、人種・民族、政治、文化(文学をも含め)等、様々な分野の基礎知識を身につけ、次にこれらの知識を利用して、現代日本をアメリカと比較して検討するという視点を養うことが目的とする。	
	日本の文学 1	最も好家的な学問であると思われがちな文学を単なる教養ではなく、社会批評の学問として再認識する。「詩」や「物語」という概念を拡張し、社会の様々な物語の存在に気づくことが出来、かつそれらに批評的な視点を持つ方法を有する。授業では、日本近代「文学」研究の誕生、作家論・「作家」をめぐる物語、作品論・研究としての文学、テクスト論・研究から再び批評へ、実証研究の意義・文学の基礎、読者論・様々なレベルの読者、サブカルチャーとメインカルチャー、「文学史」をめぐる物語等のテーマについて講義を行う。	
	日本の文学 2	文学を読むことと文学を研究することは違う。文学は、作品を読み、時代や文壇のことを調べ、作家の意図をさぐる単なる謎解きでもない。今や文学だって単なる好家的な営為とは違う段階に来ている。文学史の再教育としてではなく、文学を研究する方法を講義することによって、単なる文化的教養ではなく、新たな思考法の獲得の機会とすることを旨とする。具体的には、文学を物語と考え、社会の多くの言説がその構造に支えられているということを知り、如何に物語に批評的な立場を取りうるかという方法の獲得を目指す。講義のテーマは、モダンとポストモダン、批評から研究へ等である。	
	外国の文学 1	外国文学を原著で読むことで翻訳では感じるのが難しい文化的背景や語感等を把握することを目的とする。「ハリー・ポッターと賢者の石」(シリーズ第一巻)を購読する。映画や翻訳などでストーリーになじみのある児童文学ではあるが、イギリスの子供たちにとって大前提となっている文化的事実など、異文化理解のために学ぶべきことがたくさんある。講義では原文(英語)を丁寧に読みながら、言葉の面白さにも注目し、原文の持つ響きを理解することを説明する。	
	外国の文学 2	この授業では以下のことを到達目標とする。(1)外国文学を原書で読むことに親しむ。(2)必要以上に日本語に頼らずに英文を理解する。(3)文学作品の社会的・文化的背景を理解する。(4)言葉の面白さを楽しむ。講義では、ロアルド・ダールの「チャーリーとチョコレート工場」を、次には同じくダールの短編小説を講読します。ダールの優れた人間観察力から描き出される筆致には引き込まれるものがある。講義では原文(英語)を丁寧に読みながら、言葉の面白さやイギリスの文化を理解する上で欠かせない知識などを学ぶことを説明する。	
	文化人類学 1	異文化理解の学問として始まった文化人類学の概要を学説史をたどることによって理解する。文化人類学の特徴は西欧にとって異なる社会を対象とした研究だけではなく、人間の全活動を文化として総体的に理解しようとしたことにある。そのような文化人類学の考え方を、啓蒙期から進化主義の人類学、機能主義人類学、構造主義人類学、象徴主義人類学、解釈人類学とたどっていくことで明らかにする。現代の社会における文化人類学の果たすべき役割も重要なテーマである。	
	文化人類学 2	文化人類学 1 で学んだ基本的な考え方をふまえて、文化人類学が扱う個別のテーマについて共に考えてみる。扱われる問題は、家族と親族、結婚、ジェンダー、宗教、ナショナリズム、グローバリズムなど多岐にわたるが、そのうちのいくつかが選ばれ解説され、学生自身の問題として討論されることになるだろう。身近な問題を通して世界をどう捉えることができるかを学生に認識させることが目標となる。自身が社会や世界とどのようにつながっているかを考えることにより、自身への理解が深まることを期待している。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	人文科学論 1	人文科学とは、辞書的には「人類の文化についての諸学問」と規定される。ここでの「文化」は、一般的に理解されている芸術文化という意味だけではなく、人類の生活様式・思考様式全般にまで及ぶ。この講義では、人類の諸文化を明らかにする切り口を設定し、人類の文化について多角的な面から考察し、いわゆる「現代社会」そのものを相対化できる、柔軟な思考力を身につけることを目指す。	
	人文科学論 2	日本だけでなく、世界的に見ても上演頻度の高いシェイクスピアの戯曲は、単にイギリスの文学・演劇であるにとどまらず、全世界で数世紀にわたり受容され、演劇のみならず、オペラ、バレエ、映画でも、シェイクスピア戯曲は表現されてきた。ドイツ、ロシアでも、シェイクスピアは数世紀にわたり、ほとんど自国の作品として受容されており、また日本では歌舞伎、能狂言の形で改作されている。いまや世界文化ともいえるシェイクスピア文化を、英文学の枠外から見直し、日本を始めとして各国の(演劇)文化にシェイクスピアがどのような衝撃を与えたかを観ていきたい。	
	日本史 1	最近の日本史研究の進展により、日本史を日本列島だけで考えることではすまなくなってきた。日本列島とユーラシア大陸、その他の諸地域との国際関係・国際交流が重視されているのである。中学校・高等学校の日本史教科書もそのような視点で書かれるようになってきた。本講義ではアジアからみる日本史として、前近代社会を中心に、古代の大陸との外交、中世の国際関係、鎖国下での国際関係等をテーマとし、日本とそれを取り巻く国際社会について歴史的に考える。	
	日本史 2	日本史 1 をうける形で、明治期以降の日本の対東アジア外交史を扱う。まず、伝統的な東アジア朝貢貿易システムを西洋型の万国公法体制に転換させようとする明治政府の基本的な外交方針を確認し、その具体的発現形態としての対朝鮮、対中国外交を概観する。それを通して、近代日本が帝国主義時代を帝国主義国として生き抜くことを決断した時点で不可避的に東アジアへの抑圧を伴わざるをえなかったことを示し、未来の対東アジア関係について考えさせる契機とする。	
	西洋の歴史と文化 1	<キリスト教を通して知るヨーロッパ史 1>キリスト教の発展と密接な関係を持っているヨーロッパの歴史をよく理解するためにはキリスト教の知識が必要である。講義では、まずイエス・キリストが生まれた時代のユダヤの状況を理解するためにメソポタミア時代からユダヤ王国建国、ローマ帝国による支配にいたるユダヤ民族の歴史とユダヤ教を概説し、その上で、イエス誕生の経緯と新約聖書に見られるイエスの言動を通してキリスト教の基礎的教義と古代キリスト教会の歴史を概説する。	
	西洋の歴史と文化 2	<キリスト教を通して知るヨーロッパ史 2> ヨーロッパの歴史はキリスト教の発展と密接な関係を持っているので、ヨーロッパをよく理解するためにはキリスト教の知識が必要である。講義では、まずキリスト教の基礎的知識を明らかにし、中世ヨーロッパ社会にキリスト教がどのように浸透したか、また、ローマ・カトリック教会がいかなる社会的勢力となったか等の問題を検討し、中世ヨーロッパ社会の特質を概説する。次に近代初頭のマルティン・ルターの宗教改革の原因と社会に対するその影響を概説する。	
	中国の歴史と文化 1	<漢字の変遷と中国の歴史> 東アジア社会では、民族と国家がそれぞれであるが、その共通性を追求すれば、漢字はその一つである。講義では、東アジアにおける共通した漢字を軸に、その歴史をさかのぼって、文化理解を深めることを目指すが、まず漢字の起源を甲骨文字まで遡り、次に史上の「六書」における漢字の変遷、秦始皇帝による漢字統一や書体の変化を、また墨や紙等、漢字の書写道具と材料の変化を明らかにし、漢字の発展が中国の歴史と文化にどのような影響を与えたかを考察する。	
	中国の歴史と文化 2	<漢字の変遷と中国文化・日本文化> 東アジア社会の共通性を追求すれば、漢字はその一つである。横文字の世界に対して、こうした共通の漢字文化は東アジアを繋ぐ一つの絆になった。東洋史の一側面として、その漢字の今昔及び各地域での様相を考察することは、まさに近年以来大いに騒がれる東アジア共同体構築の基盤を理解することとなる。講義では、西夏文字等漢字の派生文字の歴史、さらには日本字における漢字の由来等を検討することによって、中国文化と日本文化等の関連性を明らかにする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	考古学 1	考古学という学問の概説をおこない、学問の基礎的な考え方を学ぶ。先史人類の生活と文化の変遷を学ぶことによって人類と文化の発達の意味、人類と環境の関係について考える。これによって自己存在の位置づけを認識する一助とし、また過去を糧として現在と未来の生活指針を設計する態度が身につけられるであろう。講義と共に、遺跡や遺物も視覚的に捉えていく。学生にはその背後にある人間についていかに考えるかが課題として与えられるであろう。	
	考古学 2	考古学 1 を踏まえて考古学がどのように人間の歴史を理解しているかについて考える。考古学は先史文化の学問であるばかりではなく、無文字社会の歴史を理解する上でも欠かせない。幾つかの無文字社会を扱い、文化の発達と衰退について学ぶことによって、人類と環境との関係、現代と未来の人間社会について考察することを目指す。過去を現在の自分自身に投影することによって、将来の生活指針を設計することができることを学ぶことができるであろう。	
	日本の芸能 1	日本には様々な芸能が存在している。民間でおこなわれてきた様々な芸能は現在でも年中行事などと深く結びついておこなわれてきている。近世になると民間の芸能が民衆を対象とする職として成立してきた。その一つが落語である。この講義では「上方落語」に焦点を当ててみる。落語の言葉は、生きた古語とも言うべきもので、落語に親しむことによって他の日本の伝統芸能、人形浄瑠璃文楽や歌舞伎などへの関心も生まれていく。広い視点から落語を日本の伝統文化の中に位置づけたい。	
	日本の芸能 2	日本が世界に誇る伝統芸能の一つとして人形浄瑠璃文楽がある。歌舞伎などとも関係が深いこの人形浄瑠璃文楽の歴史、特徴について知ることによってまた歌舞伎などの伝統芸能への関心も生まれてくるだろう。講義では概説の後に、具体的な例として作品を取り上げる。台本の購読・解説をおこなうので古文に慣れ親しむきっかけにもなる。音源資料や映像資料を使って人形浄瑠璃文楽の実際のあり方についても解説をおこなう。能や狂言、歌舞伎などといった舞台芸能についても人形浄瑠璃文楽と共に考えてみたい。また学生が関心を持ち、伝統芸能の公演に触れるようになることが期待される。	
	日本民俗学 1	日本民俗学は近代日本の学問の中においては西欧化の輸入ではない日本独自のものとして形成されてきた点で特異である。それは何よりも近代日本におけるアイデンティティの問い直しであった。その学問形成歴史を踏まえながら、日本民俗学が関心を寄せてきた日本の生活文化について講義をおこなう。生活文化を考える際には社会（人間関係）の分析が重要であることを認識したい。沖縄文化の解説をおこないながら学生には自分たちの周囲の生活文化を考えていききっかけを与えたい。	
	日本民俗学 2	柳田國男によって創始された日本民俗学は、何よりも現実を直視することにあつた。身の回りの常識を疑い、その意味を探ることにその本質はあつたともいえる。そのような日本民俗学の成果を踏まえながら、我々の生活文化の再検討をおこなうことを目標とする。親子関係、婚姻関係、ジェンダーとセクシュアリティ、老い、生活革命、年中行事の変化、伝統文化の作られ方などが問題となるであろう。近年の日本民俗学の新しい展開を踏まえながら、これらの問題について概説をおこなう。学生は感心に合わせて身の回りの生活文化に関するレポートを作成する。	
	自然科学史	「顕微鏡」といえば、肉眼ではみにくいものを拡大して観察することができる道具として、ほとんどの方がプラスのイメージを持つであろう。しかし、17世紀におけるその普及が、実は発生学の分野においては後退を招くものであったという事実は広く知られていない。本講義では、博物誌と生命論、不老不死思想と錬金術の関係、原子論と分子論、周期表の誕生、分類学と進化論、自然発生説等を題材に、科学の光と影、失敗と成功の「おもしろさ」を味わいながら、科学とは何かを改めてとらえ直してほしい。	
	図像学	美術作品といわれるものの中でも、文化や宗教の違う国の作品や、日本でも古い時代の作品には、予備知識なしに見ただけでは理解できないものもある。そこでこの授業では、西洋・東洋の宗教絵画・物語絵画の意味を、ギリシャ神話・聖書・仏教・日本の伝説や物語などを通じて学ぶ。その姿や場面の意味するものや、物語の内容を知ることによって、個々の絵画を理解するのみならず、各国の物語や神話を比較しつつ鑑賞することにより、多様な文化への興味を深めることも期待される。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	人文科学論 3	日本文化論・日本人論というのは、ブームになっている。その論点は、日本文化や日本人の独自性・特殊性を論ずるものが多いようである。しかし文化は、相互交流の中から生まれ、そこには独自性とともに普遍性も存在するといえる。この講義では、いわゆる「日本文化」を対象にして、文化の持つ特殊性と普遍性の問題について考える。具体的には、福沢諭吉・柳田国男等、「日本文化」に関わるいくつかの言説について紹介しながら検討する。	
	人文科学論 4	日本の列島社会やそれをとりまく地域の中にはさまざまな文化圏が存在している。いわゆる日本文化は、そのような文化との影響を受け、さらには相互交流・受容の中から生み出されたものといえる。本講義では、列島をとりまく文化圏と日本文化との関わりについて、具体的な事例から考えたい。縄文文化と弥生文化、山の文化と海の文化、琉球文化とアイヌ文化、中国・朝鮮文化と日本文化、ヨーロッパ文化と日本文化等をテーマにして学ぶ。	
	日本史 3	高校まで学んだ知識を再確認しながら、19世紀後半、すなわち幕末維新期以降の日本が歩んだ歴史を概観していく。特に、欧米諸国などの近代国家建設を目指した日本が、いかなる葛藤や矛盾をみせながら、新たな社会を形成していったのか、政治経済面、対外問題、戦争を中心にいくつかの事例をとりあげて講義する。そのうえで、高校までに学んだ歴史の知識と、実際に語られる歴史の差異をいかに把握すべきか、受講者とともに考えてみたい。	
	日本史 4	高校までの日本史は、政治面を中心にしながら主に国家の歩みを教える内容といえる。その一方で歴史を形作るのは、いつの時代であろうと、人やモノの移動・交流がおりなした所産にほかならない。そうした、高校までは詳しく教えられることのなかった歴史のうち、世界規模での移動・交流が盛んになった近代の日本を舞台としながら講義していく。また、近代的価値観を求められた激変の時代のなかで、人びとはいかなる価値観をいだいていたのか、モノの交流がいかに社会を変貌させていったのかについても注目して講義してみたい。	
	社会の仕組みと人間の営み 1	この科目では社会学的なものの見方や考え方を学んでいくことを第1の目的とする。日常生活において当たり前すぎて気にもとめない、私たち自身の行為や他の人々との関係のあり方、あるいは、私たちが取り巻く様々な社会の制度について取り上げ、それらがどのような意味をもつのかを考える。具体的には、社会学とはどんな学問か、私と社会、アイデンティティ、国民であること、エスニシティ、エスニック・スクール、関係を築く、地域社会とエスニシティを取り上げる。	
	社会の仕組みと人間の営み 2	社会学的なものの見方や考え方を身につけながら、私たちが取り巻く社会がどのような仕組みをもち、そのなかで私たちがどのように生きているのかを考える機会としたい。本科目では、具体的に次の内容になる。はじめに、社会制度のなかにおける教育と学校について考察し、その中で外国人児童生徒問題を取り上げる。さらに、集りのなかにおける個人と集団というテーマについて考え、現代社会全般について考察を発展させる。	
	法学 1	本科目は法学を専門としない学生を対象として、法の基本的な知識を習得させることを目標とする。それゆえ最初に我々の通常の生活に存在する法を指摘し、社会における法の役割を考え理解する。その次に、法と他の社会規範との比較、法の効力の範囲、法の分類、法的関係としての権利と義務、法の適用と解釈等の課題を通じて法を多角的視点から学んでいく。	
	法学 2 (日本国憲法)	本科目は法学を専門としない学生に、最高法規である日本国憲法の基本原理を理解させることを目標とする。最初に憲法を理解するために憲法概念、近代憲法の原則等の基本を論じる。次に日本国憲法の原理を明らかにし、平和主義の理念、統治組織としての国会、内閣、裁判所の各々の性格と権能、人権保障の意義と種類等を学んでいく。尚、法学2に入る前に、法学1の知識を習得しておくことが望ましい。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	現代政治を読み解く 1	<p>若者の政治離れが指摘される一方で、インターネットでは無責任で過激な政治的主張が若者の間で展開されている実状がある。受講生が政治上の重要テーマを学習し、偏った見方に陥ることなく、自分なりの政治に対する意見と市民としての自覚を持つようにすることが、本講座の目的である。</p> <p>「現代政治を読み解く 1」では、そのような観点から、憲法 9 条の問題や日本の国際貢献、自衛隊の P K O 参加など、重要な政治的テーマを取り上げ、その背景にさかのぼって詳しく解説を行う。</p>	
	現代政治を読み解く 2	<p>若者の政治離れが指摘される一方で、インターネットでは無責任で過激な政治的主張が若者の間で展開されている実状がある。受講生が政治上の重要テーマを学習し、偏った見方に陥ることなく、自分なりの政治に対する意見と市民としての自覚を持つようにすることが、本講座の目的である。</p> <p>「現代政治を読み解く 2」では、今日の政治状況を考えたときに、欠かすことができないと考えられるテロリズムの問題、そして日本の安全保障の問題を特に取り上げ、詳しく解説を行う。</p>	
	社会科学論 1	<p>社会科学は政治学、経済学、法学、社会学など、多様な分野から構成される学問である。講義では、政治、経済、憲法・法律、社会にかかわる様々な問題を扱うことで、受講生が社会科学に対する全体的イメージをつかめるように心がける。</p> <p>「社会科学論 1」では国家の役割や民主主義の歴史と概念、アメリカやイギリスの政治制度、さらにはエネルギー問題などを取り上げる。</p>	
	社会科学論 2	<p>社会科学は政治学、経済学、法学、社会学など、多様な分野から構成される学問である。講義では、政治、経済、憲法・法律、社会にかかわる様々な問題を扱うことで、受講生が社会科学に対する全体的イメージをつかめるように心がける。</p> <p>「社会科学論 2」では、各国の選挙制度、日本国憲法、人権問題、地球環境問題などを扱う。現代社会が直面する様々な問題への関心を深め、学生が自分なりの見方や考察ができるようになるのが、本講座の重要な目的である。</p>	
	国際関係論 1	<p>世界は日々刻々、ダイナミックに動いている。重要なことは学生の国際的視野を養い、外の世界の動きへの関心を高めることである。</p> <p>「国際関係論 1」では、まず基礎固めの意味で、国際社会の生成と仕組みを詳しく学習し、その後、国際連盟、国際連合、その他国際機関の活動、国連平和維持活動 (P K O)、日本の政府開発援助 (O D A) などの重要事項について扱うことになる。</p> <p>また必要に応じて、最新の世界情勢に関する解説も行う。</p>	
	国際関係論 2	<p>世界は日々刻々、ダイナミックに動いている。重要なことは学生の国際的視野を養い、外の世界の動きへの関心を高めることである。</p> <p>「国際関係論 2」では、戦後の国際社会の歴史を取り扱う。すなわち冷戦の開始から終結にかけての流れを詳しく学習し、さらに冷戦後の混沌とした世界情勢についての解説を行う。国際社会がこれまで歩んできた歴史をきちんと学習してこそ、今日の世界情勢への理解も深まると考えられる。</p>	
	21 世紀経済への視点 1	<p>21 世紀を迎えた今日、日本はずいぶん豊かになったはずだが、暮らし向きはむしろ厳しくなってきた。なぜなのだろうか。経済格差や人口の減少も問題になっている。われわれの暮らしはこれからどうなっていくのだろうか。経済学の基礎知識を利用しながらこんな疑問に答えていく。具体的には、マクロ経済主体の結びつきと国民所得、家計、企業、政府、外国、グローバル化の波、国民所得、金融・財政政策、マーケットにおける価格の決定、消費者の合理的行動、生産者の合理的行動、市場メカニズム、競争の利益と不利益を取り上げる。</p>	
	21 世紀経済への視点 2	<p>本科目の目標は、日本経済の流れを考えつつ、身近な経済現象などについて知り、そして、本当の暮らしの豊かさ貧しさについて考えることである。具体的には、経済と経済観の変遷、高度経済成長、豊かな社会、モノの豊かさよりも心の豊かさを、国債の大量発行問題、自由化への動き、規制緩和と構造改革、失われた 10 (15) 年、少子高齢社会の恐怖、産業資本主義からポスト産業資本主義へ、家庭を取り巻く経済環境の変化、円高・円安の不思議 (円高で得する人と困る人)、消費と貯蓄 (ミクロの考え方とマクロの考え方) を取り上げる。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	グローバル時代の経営 1	企業経営活動は生産活動である。それは利潤の生産と財やサービスといった商品を生産する。その生産過程では、生活の糧を提供したり、人々の「豊かさの創造」機会を生み出したりもする。企業が存続するためには、利潤達成と同時に、社会的責任の遂行がなされなければならない。具体的には、経営学とは何か、企業の基本的な特質、企業形態、株式会社制度の特質、企業集団、コーポレート・ガバナンス、企業経営とステークホルダー、中小企業論、非営利組織論等を取り扱う。	
	グローバル時代の経営 2	経営学を幅広く理解することと現実の企業経営における諸問題を整理し、考察するための方法論を学ぶ。本講義では、こうした観点に立って企業経営を考えるとともに、グローバル時代における経営戦略という視点を導入する。具体的には、経営学史を学ぶ、科学的管理法、科学的管理法の深化、管理過程論と管理原則論、人間関係論、現代組織論の源流、環境適応理論、経営戦略論、人的資源管理論、日本の経営論、国際経営、環境経営、CSRと企業倫理という個別テーマを取り上げ、話題を展開する。	
	情報社会文化論 1	文字の発明からインターネットまで、人類社会が今日に至る文化・文明を築いてきた意味を「情報」という視点から見る。とくに本科目では、情報の意味について理解することからはじめ、量として測れることを知る。ひるがえって、遺伝子情報、人間の記憶能力、文明の発祥と文字の発明、粘土板・パピルス・紙といった記録媒体、社会的記憶装置である図書館などについて、古代からギリシア時代あたりまでを概括する。歴史の発展、文化・文明の展開を「情報」という視点から見る「情報史観」を導入する。	
	情報社会文化論 2	文字の発明からインターネットまで、人類社会が今日に至る文化・文明を築いてきた意味を「情報」という視点から見る。紙の発明は人類に何をもたらしたか、同様に、印刷術の普及はどうかであったか、また、レコードやフィルムといった音声・画像・映像などの情報メディアが社会や文化にどのような影響を及ぼし変革をもたらしたのかについて学ぶ。さらに、数表、計算する道具、電子計算機など、情報社会を形作ってきた事物・事象の生成・展開について、原動力となった要因を社会的・歴史的・文化的背景を踏まえて概説する。	
	生涯学習論 1	生涯学習時代といわれて久しいが、この科目では、生涯学習及び社会教育の本質と意義の理解を図り、教育に関する法律・自治体行財政・施策、学校教育・家庭教育等との関連、並びに社会教育施設、専門的職員の役割、学習活動への支援等の基本を解説する。具体的には、生涯学習・生涯教育論の展開と学習の実際、生涯学習社会における家庭教育・学校教育・社会教育の役割と連携、生涯学習振興施策の立案と推進、教育の原理とわが国における社会教育の意義・発展・特質等を取り上げる。	
	生涯学習論 2	この科目では、生涯学習及び社会教育の本質と意義の理解を図り、教育に関する法律・自治体行財政・施策、学校教育・家庭教育等との関連、並びに社会教育施設、専門的職員の役割、学習活動への支援等の基本を解説する。具体的には、社会教育行政の意義・役割と一般行政との連携、自治体の行財政制度と教育関連法規、社会教育の内容・方法・形態（学習情報の提供と学習相談、評価を含む）、学習への支援と学習成果の評価と活用、社会教育施設・生涯学習関連施設の管理・運営と連携、社会教育指導者の役割を取り上げる。	
	図書館の基礎と展望	図書館の機能や社会における意義や役割について理解を図り、図書館の歴史と現状、館種別図書館と利用者ニーズ、図書館職員の役割と資格、類縁機関との関係、今後の課題と展望等の基本を解説する。具体的には、図書館の現状と動向、図書館の構成要素と機能、図書館の社会的意義、知的自由と図書館、図書館略史、公立図書館の成立と展開、館種別図書館と利用者のニーズ、図書館職員の役割と資格、図書館の類縁機関・関係団体、図書館の課題と展望などを取り上げる。	
	社会に生きる私たちの人権	「人権」という言葉を辞書で引くと「人間が、人間として当然に持っている」とされる権利。基本的人権。」とある。この権利は、わが国では日本国憲法によってすべての国民に保障されているのだが、果たしてどうであるのか。わが国の歴史のなかには、多くの差別の事例が見られる。また、世界を見渡せば、国や地域によって、必ずしも完全な形で人権が守られているとはばかりは言えない状況がある。人権や差別にかかわる思想的・歴史的な経緯を確認しながら、人種・性・障害者などの差別問題、学校・職場におけるハラスメントについて考えていく。	
	女性の生き方	一般に女性論・女性学は、社会的存在としての女性について、その自立などを論じる。だがそれは、自然的存在としての女性を忘れることであってはならないだろう。むしろ社会的存在としての女性を論ずるためにこそ、社会的及び自然的存在を包括する「自然（ジネン）的存在」としての女性が見られねばならぬ。したがって、女性の生き方と言っても、単に社会の中で女性はいかに生きるかのみを問題とするのではなくむしろ女性の存在を通じて謂わば新たな自然存在論を試みるというのが本講義である。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	地図を読む	自分の進むべき道を自ら発見し、たくましく生きることの大切さを体験的学習する。「地図」と呼ばれるものには、例えば、国土地理院発行の「地図」や、哲学的な意味での人生の「地図」など、様々なものがある。講義では「地図」という言葉をキーワードに、教科書のみ依存した学習ではなく、人生を歩む上で役立つ実践的な知識も学ぶ。	
	ボランティア論	他人のために自分は何ができるかと考えたことや、他人や社会に役立ちたいと思ったことはないだろうか。社会には援助が必要な人々や無償の労働が必要な分野がたくさん存在する。そこで、ボランティアということを考えてみよう。この科目では、自分のボランティア体験を振り返り、まず、ボランティアという言葉に対する自分のイメージを検証することから始める。そして、ボランティアとは何か、その活動分野、受ける側の考えとニーズの理解、必要な態度とルールの理解、歴史と基本的理念、市民参加の重要性、NPOとNGOを取り上げる。	
	情報法制論	平成17年4月に完全施行された個人情報保護法をはじめ、情報公開法・著作権法など、情報をめぐる個人・法人の権利の保護に関する法律を中心に、その制定経緯から説き起こし、理論上・実務上の要点を解説する。特に、マスメディアや企業内で活躍する際に特に留意すべき法的争点を取り上げる。具体的には、法律学における「情報」、マスコミ倫理と法制度、「知る権利」、プライバシー保護、コンプライアンス、著作権の歴史、著作権法の基本概念、パブリシティの権利、不正競争防止法・企業秘密、工業所有権法の基礎、ビジネスモデル特許を取り上げる。	
	地球惑星学 1	本講義概要は地球惑星科学の基礎を学び理解することである。地球惑星学1では「地球表層、マントル、コアのダイナミクス」すなわち「プレートテクトニクス理論」と「ブルームテクトニクス理論」の概要と原理を学ぶ。さらに太陽系誕生のメカニズムと「46億年前の地球誕生から生命誕生」までをひも解く。講義内容は最新の研究成果及び話題を織り交ぜ解説する。	
	地球惑星学 2	本講義概要は「46億年の地球史」を学び、「地震」と「火山」の概要と原理を学ぶ。とくに地球誕生から46億年かけて形成した気圏、水圏、地圏、生物圏における物質、エネルギー循環とその相互作用について学び、地球を一つのシステムとして捉え、地球環境の変動メカニズムについて理解する。講義内容は最新の研究成果を織り交ぜ解説する。	
	科学技術論 1	現代社会における科学技術の発達は見れば見る物があるが、我々はそうした中で社会生活を送らなければならないのも事実である。そこで、科学技術論1では例えば将来必ずや身近な物となるであろう介護用ロボットをはじめとするロボット開発の現状や衝突しない自動車の開発、さらにはリアモーターカーによる高速鉄道の簡単な原理など、それぞれのテーマに関する最先端技術について正しく理解するための知識を分かりやすく講義する。	
	科学技術論 2	科学技術論2では、我々が生活する上で欠かせないエネルギー問題をメインテーマに講義計画を立てており、例えば現在の社会生活において欠かせないエネルギー源である原子力エネルギーの安全性とその重要性について、また、地球外資源の開発と言う観点から国際宇宙ステーションを中心とした宇宙開発の必要性和現状について等より具体的な内容で構成する。我々は好むと好まざるとに係らず最先端科学技術の真ただ中で生活するわけで、それに対する正しい知識を持つきっかけとなればと考えている。	
	統計学 1	統計学の本質を出来る限り解説し、我々の日常生活の身のまわりにある具体的なデータを取り扱って講義中に取り上げる。たとえば単回帰分析、3つの変数の関係を知る法、正規分布、標準化、Zスコア、Tスコア、偏差値、五段階評価、統計的仮説検定、平均値の検定。	
	統計学 2	統計学の本質を出来る限り解説し、我々の日常生活の身のまわりにある具体的なデータを取り扱って講義中に取り上げる。たとえば新旧両製法を比較する法、統計的推定、等分散検定、平均値の差の検定、2つの母集団の異同を判定する法、同一人に2つの処理をした場合の結果の差の判定法、適合度検定。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	基礎数学 1	コンピュータ技術、CD/DVDの読み取り、経済、金融、金利、統計、測量の他、Excelでの処理等、日常生活で数学に関連する事柄は多様である。基礎数学 1 では、整数、二次方程式と関数の初歩、数列、微分積分の基礎、確率と統計に関する内容を出来るだけ身近な話題と関連づけて扱うことにより、数学の基礎的素養を習得し、問題を論理的に考えられる力を養う。また、いくつかの物理や自然現象と数学の関係についても触れる。	
	基礎数学 2	日常生活で数学に関連する事柄は多様である。また、数学は物理学・天文学の問題を解きたいという欲求から発達したという一面も持っている。基礎数学 2 では、ピタゴラスの定理、直線、平面、円、面積、体積の計算といった幾何学を中心に日常生活と数学に関するトピックを出来るだけ身近な内容と関連づけて扱う。授業を通して、数学の基礎的素養を習得し、問題を論理的に考えられる力を養う。また、いくつかの物理や自然現象と数学の関係についても触れる。	
	生物学 1	本講義では「食と人間」をテーマに、我々の日常生活における様々な要素とその意義をとらえ直すことにより、「生物とは何か」「人間とは何か」「生きるとは何か」を考えることを目標とする。前半では、我々はなぜ食事をとるのか、食べたものはどこに行くのか、人間はなぜ動くのかといった講義を通して「食からだ、行動」のプロセスを論じる。後半では、生命の起源、生物の変遷、人類の歴史と絡めながら、生態系における人類の「住と食事」を論じる。	
	生物学 2	生物の示す多くの現象は「遺伝子」に書き込まれている情報の発現調節に因る所が大である。このことを踏まえて、身近な遺伝現象の調節機構・「遺伝子」の概念・「遺伝子」の実体を理解することを旨とする。併せてヒトが現生の生物の中で特別な存在ではないことを理解し、特別な存在である自分を考える基盤を作って欲しい。	
	物理学 1	人類は昔から宇宙や自然の本質に大変関心を抱き、自然現象を色々な形で日常生活に採り入れてきた。物理学 1 では身近な太陽系の中での話題を中心に講義を進める。一見複雑に見え、別々の約束事にしたがっているように見えるさまざまな自然現象が、実はいくつかの基本的な物理法則という約束事で説明出来る事を学習する。また物理学の発展の歴史をたどり、何が原因で何が結果であるか、という因果律を学ぶ事で問題解決に対する取り組み方や論理的なものの考え方を学ぶ。	
	物理学 2	銀河系とその外に広がる宇宙の姿、系外惑星の発見と地球外生命に関する話題、20世紀初頭に誕生した相対性理論の世界を紹介する。さらに、ハッブルによる宇宙膨張の発見とビッグバン理論とその観測的証拠である宇宙背景放射の発見とそこから読み解く現在の宇宙の姿を扱う。また、宇宙に存在する様々な物質が究極的にはクォーク等の基本粒子によって作られており、これらが宇宙誕生の際いかに物質が作られてきたのかについても触れる。	
	化学 1	現代に生きる者として必要な教養としての以下に示す化学の基礎を身につけることを目標とする。(1)原子の構造について説明できる。(2)元素の種々の性質と原子中の電子配置の関係を説明できる。(3)化学結合の種類や特徴について、結びついている原子やイオンの性質と関連づけて説明することができる。(4)物質を原子、分子、イオンといったものの集合体としてイメージすることができる。(5)化学式・化学反応式の意味を理解し、正しく読み書きができる。	
	化学 2	私たちの身のまわりの生活や私たちの体に関わる化学現象、化学技術について理解し、各人が生活の中で化学とつきあうための教養を身につけることを目標とする。生活で使っている製品や私たちの体を構成している物質について、どのような化学的な意味があるのか正しく理解し、(1)私たちがどのようにして金属を利用しているのか、化学的性質に基づいて、(2)私たちの身のまわりの様々な有機化合物について、その性質や用途を化学的に、(3)私たちの体をつくっている物質について理解し、説明できるようになることを目指す。	
	自然科学入門 1	自然科学の発展の歴史や現代の自然科学の進歩、功績や問題点の学習を通じて、自然科学という学問の全体像を理解し、科学的見方、考え方を目標とし、「自然科学」への入門についての講義をする。そのために、自然科学の発展の歴史、宇宙、物質とエネルギー、地球環境、生命などを中心に講義する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	自然科学入門2	自然科学の発展の歴史や現代の自然科学の進歩、功績や問題点の学習を通じて、自然科学という学問の全体像を理解し、科学的見方、考え方を目標とし、「自然科学」への入門についての講義をする。そのために、自然科学の発展の歴史、宇宙、物質とエネルギー、地球環境、生命などを中心に講義する。なお、自然科学入門 で取り扱う内容を踏まえて講義する。	
	生物学3	「遺伝子」の働きが明らかになる現象の一つが生物の形作りである。動物が示す多様な形を生み出すシステムの実体が多く遺伝子の発現調節の絡み合いであること、その鍵になる遺伝子が見つかることを理解して欲しい。さらには、人類が生物を改変する力を手に入れようとしている今日、生物としての自分の尊さを理解し、これからの充実した人生を紡ぐための礎として欲しい。	
	生物学4	微生物は時に黴菌と呼ばれ、病気や食中毒を引き起こす悪者のイメージがある。しかし、発酵食品をはじめ医薬品、環境修復等さまざまな分野で微生物が利用されている。本講義を通して、微生物の「素晴しさ」「おもしろさ」が伝わる事を期待する。具体的には、「味噌、醤油を考える」「清涼飲料水と微生物」「抗生物質とバイオ医薬品」「微生物でまちづくり」のように、我々の生活、産業、医療・福祉、環境などにおける微生物とその利用例を紹介する。また、組換えDNA技術等の倫理的問題、循環型社会の構築等の資源・環境問題に関して議論する。	
	人類と環境	現代社会において環境問題は避けて通ることの出来ないものの一つとなっている。本講義では一般的に語られる環境問題とは異なり、環境とは何か、人類と環境との関わりとは何かを問い直すことによって環境問題への関心を高めることを目的とする。私たちが暮らす地球環境そのものの理解、生物は如何にして多様な地球環境に適応し多様な地球環境を形成しているかについての理解、人類の様々な環境への適応のやり方、人類社会における環境利用の方法、人類の歴史と環境との関わり方の理解などについて授業を行う。	
	特別講義1	本講義は、他大学との単位互換制度などにより単位を履修した学生に対し、その単位互換授業を特別講義として単位を修得させるものである。明星大学も参加しているネットワーク多摩による単位互換制度等がその対象となる。	
	特別講義2	本講義は、他大学との単位互換制度などにより単位を履修した学生に対し、その単位互換授業を特別講義として単位を修得させるものである。明星大学も参加しているネットワーク多摩による単位互換制度等がその対象となる。	
	特別講義3	本講義は、他大学との単位互換制度などにより単位を履修した学生に対し、その単位互換授業を特別講義として単位を修得させるものである。明星大学も参加しているネットワーク多摩による単位互換制度等がその対象となる。	
	特別講義4	本講義は、他大学との単位互換制度などにより単位を履修した学生に対し、その単位互換授業を特別講義として単位を修得させるものである。明星大学も参加しているネットワーク多摩による単位互換制度等がその対象となる。	

授 業 科 目 の 概 要			
(教育学部 教育学科)			
科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 目	教育学入門	教育学を概観することにより、教育の本質について考え、自分に向き合いながらその基礎・基本を理解します。そこで、自らの教育観を求め、めざすべき目標に向けて自発的に学ぶ意欲、自律と自立を目標に、教育の課題を理解し、教育者になるための動機づけの明確化、自尊感情や命の大切さなどの見識を深めます。同時に、発達課題についての基礎的な知識、子どもを取り巻く環境の変化、現代の社会、学校や教育の課題などについて講義や討論を通じて総合的に学びます。また、4年間を見通した学習ポートフォリオを作成します。	
	教育原理	受講生は教育学の初学者であることに留意し、また教職の「教育の基礎理論に関する科目」であることに留意し、教育原理の内容としての基本的・基礎的な知識の習得と、教職への意欲を高めることをねらいとして講義する。平易に説明するために、学校教育の実践と先人の思想の関連付けを図りながら具体的に論じたい。例えば、教育の考え方の説明においては教育実践の一場面を紹介し、先人の思想との関連付けを試みたい。教育の現状を考える契機として、歴史的視点での重要性も強調する。	
	教育の制度と経営	我が国教育制度の構造と特質を明らかにしつつ、学校が公教育の目的の実現に向かって、組織としてまとまった活動を実施・展開することの重要性等を考察する。具体的には、我が国公教育制度の基本的枠組みと今日的課題、社会的環境の変化に伴う学校経営の課題、学校の組織編制と管理運営の仕組みと課題、組織マネジメントとリーダーシップの在り方、学校におけるPDCAサイクルの導入と「評価・公開」の在り方、地域人材の活用と学校経営への地域参画、予算と裁量権の拡大による自立的経営の課題等について講義する。	
	教職入門	本授業は、「教員とは何か」「教員の専門性」「教職の魅力と責任」等を探りながら、教員としての力をどう備えるかを学んでいくことがねらいとなる。具体的には、現在の教員に何が求められているか等基本的な内容を理解すること。教員の専門性や教職の魅力と責任について理解を深めること。教員の適格性を身に付けるために何を努力すればよいか自己課題を知ること。授業を通して思考力、洞察力、分析力をつけることなどである。	
	自立と体験2	「自立と体験1」を継承し、「体験教育」の実践と理論の構築により「自己実現と社会貢献ができる人の育成」をめざし、体験ワークショップを通じて、自然や子どもと触れ合い、自ら企画立案した体験プロジェクトの実行により、職業・人生観の基礎を培います。実験教室、模擬授業、自然観察、野外活動、キャンプなどを通じ、またフレッシュマン・キャンプの体験を活かし、人間関係構築と問題解決・段取り力、課題を見つけ実践的に学び合う態度の基礎を養います。また、ポートフォリオを作成しまとめます。	
	教育学基礎演習1	教育の基本的な課題について教え合い学び合うことを通じて、教員として必要な資質能力の基礎と、豊かな人間性を備えた実践力ある指導者の育成を期して体験的指導を行います。小論文の書き方、文献の調べ方などを学び、さらに総合的な力を養うために、教育の課題に関して、個人の発表やグループディスカッション、プレゼンテーションを行うことにより、それらのスキルとともに、批判的思考力や相手に対する受容的態度の基礎を養います。また、担当教員がポートフォリオ作成とまとめも行い、学生生活の指導や教育相談も担当します。	
	教育学基礎演習2	教育の基本的な課題について教え合い学び合うことを通じて、教員として必要な資質能力と、豊かな人間性を備えた実践力ある指導者の育成を期し、「教育学基礎演習1」を発展させて指導します。文献の調べ方などを発展させ、教育と子どもに関する知識を身につけ、総合的な力を養うために、グループディスカッションやディベート、学習指導案作成と模擬授業を行い、それらのスキルとともに批判的思考力や受容的態度などを養います。また、担当教員がポートフォリオ作成とまとめも行い、学生生活の指導や教育相談も担当します。	
	教育インターンシップ1	近隣8市教育委員会と提携した明星大学インターンシップ制度などにより、教育支援活動を毎週半日以上25時間程度実践し、大学内の省察的授業による「体験教育」すなわち理論と実践の融合を図ります。派遣先での学校教員は、教師としての基本を指導します。これにより、教育に対する関心と子どもとの交流の基礎を培うことをねらいとします。学内の授業では、インターンシップに関する事項の伝達と、各自の体験や疑問に沿って共感し、考え、検討します。教員は派遣校を訪問し、学生を指導します。ポートフォリオ作成も行います。	

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科 共通 科目	教育インターンシップ 2	近隣 8 市教育委員会と提携した本インターンシップ制度などにより、教育支援活動を毎週半日以上25時間程度実践し、大学内の省察的授業による「体験教育」で理論と実践の融合を図ります。派遣先の教員は、教師としての基本を指導。これにより、教育に対する問題意識と教職に対する具体的なイメージがもてるようになることをねらいとします。授業では、インターンシップに関する事項の伝達と、各自の体験や疑問に沿って共感し、考え、検討します。授業担当教員は派遣校を訪問し、教育支援学生を指導します。ポートフォリオ作成も行います。	
	教育心理学	本講義では、教育心理学の基本的な知識を習得するとともに、教育現場の諸問題を教育心理学的な視点から理解し考察することを目的とする。具体的には、1)教育心理学の歴史と研究法、2)心身の発達、3)学習意欲と学習のメカニズム、4)教授と学習の方法、5)教育評価、6)知的能力、7)パーソナリティ、8)社会性、9)不適応と心理臨床、10)障害児の心理と特別支援教育に関するテーマについて学習し、教育現場の様々な問題との関係性について考察する。 本講義では、教育心理学の基本的な知識を習得するとともに、教育現場の諸問題を教育心理学的な視点から理解し考察することを目的とする。具体的には、1)幼児、児童及び生徒の心身の発達、2)学習意欲及び学習のメカニズムと教授法、3)教育評価の目的と方法、4)知的能力、パーソナリティ、社会性の理論と測定法、5)学級集団における教師と子ども・子ども同士の関係、6)不適応と心理臨床、7)障害児の心理と特別支援教育に関するテーマについて学習し、教育現場の様々な問題との関係性について考察する。	
	教育実践ゼミ 1	卒業研究としての論文、フィールドワーク卒業研究報告書や制作テーマの設定に向けた取り組みの基礎を養うために、進路や教育実践、興味・関心を踏まえた課題に基づき基本的な指導をコースの担当教員の専門に応じ行います。学生は自分の取り組むテーマに沿って研究領域を設定し、コースの中から専門領域を選択できるようにします。また、学校や幼稚園と連携もしくは「教育インターンシップ」と関連させ、教育現場をフィールドとした省察的授業による「体験教育」理論と実践の融合を図ります。ポートフォリオ作成も行います。	
	教育実践ゼミ 2	卒業研究として、論文、フィールドワーク卒業研究報告書や制作テーマに向けた発展的な取り組みを通して、進路や教育実践、興味・関心を踏まえた課題について基本的な指導をコースの担当教員の専門に応じて行います。学生は自分の取り組む課題に沿って選択した研究領域の基本的知識と技能を学びます。また、学校や幼稚園と連携もしくは「教育インターンシップ」と関連させ、教育現場をフィールドとした省察的授業による「体験教育」により理論と実践の融合を図り、実践的研究のスキルも学びます。ポートフォリオ作成も行います。	
	教育実践ゼミ 3	卒業研究として、論文、フィールドワーク卒業研究報告書や制作テーマに向け、さらに発展的な取り組みを通し、進路や教育実践、興味・関心を踏まえた課題を掘り下げた指導を各コースの担当教員の専門に応じて行います。学生は選択した取り組むべき課題について、論文作成や制作のための知識と技能をさらに発展的に学びます。学校や園と連携もしくは「教育インターンシップ」と関連させ、教育現場をフィールドとした省察的「体験教育」による実践的研究として卒業研究報告書にまとめるスキルを学びます。ポートフォリオの作成も行います。	
	卒業研究	学修の集大成として、卒業研究として、卒業論文、フィールドワーク卒業研究報告書、卒業制作の課題を設定・推進し、完成することが目標です。一人ひとりの将来の進路や教育実践、興味・関心を踏まえて課題を設定し、進捗状況に応じた柔軟な指導を各コースの担当教員が行います。また、学校や幼稚園と連携もしくは「教育実践ゼミ」「教育インターンシップ」や「教育実習」と関連させ、教育現場をフィールドとした実践的研究とそれをまとめるスキルを指導します。実証的な研究活動や、制作活動などを推進することが求められます。	
	教職実践演習（教諭）	教職課程全体を通じた教職指導と履修カルテ（ポートフォリオ）に基づき、少人数の演習できめ細かな指導を行って、教員としての使命感・責任感、教育的愛情をもって教科及び生徒指導等を実践できる資質能力を形成することがねらいです。模擬授業、ロールプレイング、事例研究、グループディスカッション、また教育委員会・学校・園と連携したフィールドワークや現職・前教員の講義も取り入れた主体的で実践的な授業の成立を図ります。また、個々人の履修カルテや学校種に応じて、本授業目的達成のための補完的な個別指導も実施します。	
	人材教育研究	人材はあらゆる組織の経営にとって大変重要な資源です。産業界・教育界における人材を重要な経営資源として教育的側面から、人材教育システムと教育の在り方について取り上げます。企業や教育委員会、保育施設などにおいて、その人材をいかに育成するののかについて研究し、理解することを目標とします。グループディスカッション、ディベートや発表などにより、企業などが求める人材の理解と自分自身のキャリアデザインを結びつけて、人材教育システムと職業観についての知見を深めることもねらいとします。	

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 共 通 科 目	教育哲学	難解とされがちな教育哲学を身近な学問として理解することをねらいとして、先人の理論と教育の実際の関連付けに留意して講義する。そのために現在では自明と思われている教育的考え方の源泉を検討し、今日の教育課題を再考する契機を提供したい。論じる視点としては、大人にとって「子ども」が教育の対象としてどのように考えられてきたか、を主として考察する。具体的には、今日の「子ども観」形成に影響を与えたと考えられる思想家への言及や、日本の学校教育における「子ども＝児童観」の変遷などを検討したい。	
	教育社会学	教育社会学と教育社会社会学の最も基本的な考え方である「社会化」について初めに講義します。教育社会学とその基本的な考え方について理解してもらった上で、次に教育社会学の多様な研究分野の中から「社会集団における子どもの社会化」について取りあげ、その基本的な姿を現代的状況・問題点について講義します。次に「学校・学校教育に関する教育社会学的考察」として、学校・学校教育に関して教育社会学的な視点から見るとどのようにとらえられるかについて講義します。	
	比較教育制度	公教育制度は、一国の歴史的・社会的・文化的文脈の中で形成される特性があるものの、グローバル化した今日の世界において、各国における教育制度・教育内容改革の取組みの現状と課題に学び、我が国の教育制度・内容の改革に生かしていくことの重要性を踏まえ、授業においては、英国・米国・フランス・ドイツなどの主要国における教育行政の仕組み、学校教育制度の特色と運用の実際、教育課程行政と教育課程編成の実際と特色、教育改革の課題と取り組みなどについて講義する。	
	環境教育論	(概要) オムニバス形式で環境教育について学ぶ。 (オムニバス方式 / 全15回) (13 金子慶之 / 4回) 最近の地球環境問題である「地球温暖化問題」と「オゾン層の破壊」を取り上げる。 (20 篠山浩文 / 4回) 循環型社会形成にかかわる諸問題と可能性について、地球環境、生活環境の側面から概説する。 (22 清宮義博 / 4回) 最新科学技術によって進められている環境回復状況についていろいろ例を基に解説する。 (35 柳澤伸 / 3回) オゾン層の破壊や「環境ホルモン」が生物に及ぼす影響について概説する。	オムニバス方式
	健康と食育	近年、児童生徒の偏食や朝食欠食等の食生活の乱れが、学力低下や生活習慣病を引き起こす一因であることが懸念されている。家庭だけでなく学校教育においても「食育」を推進することが健全な学校生活を送る上で重要となってきた。本講義では食育基本法成立の背景と内容について学び、現在の児童生徒の食生活や心身の健康状態を調査結果から把握し、問題点や対策について考える。またライフステージ別の栄養摂取の意義やスポーツ選手における食生活についても理解を深める。	
	臨床心理学	発達段階、脳と心、発達障害、鑑別診断をキーワードに、児童期・青年期の心の問題に関する理論を学ぶとともに、人間発達という視点に立って、臨床発達心理学、教育臨床心理学にかかわる観点から講義を進める。学生は、自らの人間発達をみつめ、児童・青年期の心の適応の問題を考える。	
	人材教育論	産業社会で働くとはどういうことか。その意味を考えながら、人材教育のあり方を学ぶ。実際に企業がどのような人材像のもとにどのような人材能力を求めているか、その具体的な実態を演習によって把握する。その上で、教員が企業の第一線で携わっている人材教育プログラムを事例体験する。これらを踏まえ、学生自らが人材教育プログラムを企画デザインし、相互発表、相互評価を行う。授業にあたっては、授業テーマにそって自分の考えをまとめたり情報収集をし、授業後に受講感想を記入することで、予習と復習ができるようにする。	
	企業内教育論	企業、行政をはじめ、そこにおける個人・集団・組織は、いかにしたら元気になるか。現在の産業社会では、「活性化」ということが叫ばれ、その教育論が求められている。この授業では、企業組織におけるマネジメントの姿と組織開発教育を学ぶ。企業の生態とマネジメントの基礎知識を習得後、教員が企業と行政で実際に取り組んでいる組織開発教育プログラムを実例として演習体験し、企業内教育の素養を養う。演習体験では、随時事前調査や発案作業を行い、演習テーマごとにレポートをまとめることで、予習と復習ができるようにする。	
	障害者教育総論	障害の概要(概念、種類・原因)と障害児の心理・生理・病理について、障害児教育の現状について総説した上で、現在わが国で進められている特別支援教育の基本的考え方とシステム、対象となる障害、教育課程や個別的教育支援計画と個別の指導計画などについて触れ、さらに特別支援学校と小・中学校の特別支援学級における教育、通級における指導等を対比しながら、障害児の教育支援について解説する。	
発達障害論	発達障害について、医学・生理学的な基礎知識を学ぶ。具体的には、まず正常な小児の発達と成長を学び、次に発達障害の病因と疫学、診断、治療方法、及び予後予測を概観する。さらに、知的障害と個々の発達障害について詳細な理解を深め、発達障害児支援教育者としての基盤を形成する。		

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 共 通 科 目	障害児教育概論 1	教育実践にはそれぞれの障害が抱える特性を把握し、それに応じた教育方法を工夫するとともに、その一方で生徒個人に対しては「～障害の子供」という枠にとらわれない人間観を持つことが不可欠である。 概論 1 では障害児教育の歴史と背景、身体障害（視覚・聴覚・言語・病弱虚弱・運動）及び知的障害の特性と教育に焦点を当てる。	
	障害児教育概論 2	前期の概論1に引き続き、本講義では自閉症や軽度発達障害（LD、ADHDなど）の問題、特別支援教育の現状と課題、学齢期以後の障害者になった段階で問題となる様々な制約、健常者を中心とする社会の側にある偏見・差別などのバリア、それらを軽減する方策としての統合教育と障害理解教育、そして今後より重要な就労による自立を目指した学齢期後の支援、高等教育のバリアフリー化、障害者自身の社会参加の方策などについて学習する。	
	音楽療法	音楽療法とは何か概要を学び、子どもを中心として、実践的な演習を含みながら、音楽療法の実践について学ぶ。障害のある児童・生徒、保護者、指導者などを対象として、心身の健康と回復に効果的な実践力を身につける。音楽療法に使われる楽器、方法論、対象者に対する理解、療法の目的、セッションの組み立て、評価方法などについても学ぶ。	
	表現療法	(概要)表現の楽しさを体験し、直観力や創造性、表現力、人間理解を美術や音楽の体験学習から学ぶ。 (オムニバス方式/全15回・合同ガイダンス1回・各7回) (75 相澤るつ子：7回) 表現アート療法の演習により感情の安全な表出方法を体験し、自己洞察を深めながら共感力や感性を養い、子どもの創造性を尊重した支援力を身につける。 (98 多田羅康恵：7回) 音楽療法の総合的な演習により、ノンバーバルな対話力のスキルを身につけ、様々なコミュニケーション方法を体験し、自己発見を通して教師の資質を磨く。	オムニバス方式
	発達指導支援法 1	学内の特別支援演習用のブレイルームで各月の第二・四土曜日に実施しているMSP（明星大サポートプログラム）の機会を利用し、実際に発達障害やいはその疑いのある児童に対し、ゲームを通じた小集団SST（社会的スキル訓練）のセッションを実施し、その補助トレーナーとして関わる。他の週はセッションの記録を分析し、指導方法に関する振り返りと次回への準備を行う。	
	発達指導支援法 2	MSP（明星大サポートプログラム）の機会を利用し、実際に発達障害やいはその疑いのある児童に対し、ゲームを通じた小集団SST（社会的スキル訓練）のセッションを実施し、支援法で培った経験を基礎に、指導評価プログラムを立案し、担当教員の監督の下にメイントレーナーをつとめ、生活指導の方法について実践的に習得する。	
	教育行財政 1	国家行政の一作用としての「教育行財政」について、その歴史的沿革を踏まえながら、どのような制度的枠組みの中で成り立っているのか、その基本的構造の特質を明らかにする。このため、教育行財政の基本的事項について幅広く取り上げることとし、具体的には、我が国公教育制度の成立と発展、国と地方における教育行政と財政の基本的仕組み、学校制度や就学制度、学校の組織編制と管理運営、教職員の身分と勤務、学校の評価と公開、地域の参画などの現状と課題を明らかにし、今後の教育行政の方向性・あり方について講義する。	
	教育行財政 2	国家行政の一作用としての「教育行財政」について、その歴史的沿革を踏まえながら、今日、どのような制度的枠組みの中で成り立っているのか、教育行財政の基本構造の特質を明らかにする。このため、具体的には、教育行政の「制度的事項」に加え、教育課程行政の基本的枠組みと運用の実際、生徒指導の在り方、学校評価と教員評価、学校の保健安全管理と「学校事故」、学校情報の取り扱いと個人情報・情報公開とのかかわりなどの課題について、その現状と課題を明らかにし、今後の方向性等を考察する。	
	教育インターンシップ 3	近隣8市教育委員会などと提携した明星大学インターンシップ制度などにより、教育支援活動を毎週半日以上25時間程度実践し、大学内の省察的授業による「体験教育」すなわち理論と実践の融合を図ります。派遣先での学校教員は、教師としての基本を指導します。これにより、教育に対する実践的問題意識を培うことをねらいとします。学内の授業では、教職インターンシップなどに関する事項の伝達と、各自の体験や疑問に沿って、お互いに共感し、考え、検討します。授業担当教員は派遣校を訪問し、教育支援学生を指導します。	

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科 共通 科目	教育インターンシップ 4	近隣 8 市教育委員会などと提携した本インターンシップ制度などにより、教育支援活動を毎週半日以上25時間程度実践し、大学内の省察的授業による「体験教育」すなわち理論と実践の融合を図ります。派遣先での学校教員は、教師としての基本を指導。これにより、実践的問題意識を深め、具体的な教職観を培うことを目標とします。学内授業では、教職インターンシップなどに関する事項の伝達と、各自の体験や疑問に沿って、お互いに共感し、考え、検討します。授業担当教員は派遣校を訪問し、教育支援学生を指導します。	
	教育インターンシップ 5	近隣 8 市教育委員会などと提携した明星大学インターンシップ制度などにより、教育支援活動を毎週半日以上25時間程度実践し、大学内の省察的授業による「体験教育」すなわち理論と実践の融合を図ります。派遣先での学校教員は、教師としての基本を指導します。これにより、実践的問題意識を深め、教職観・教育観を培うことをねらいとします。学内の授業では、教職インターンシップなどに関する事項の伝達と、各自の体験や疑問に沿って、お互いに共感し、考え、検討します。授業担当教員は派遣校を訪問し、教育支援学生を指導します。	
	教育インターンシップ 6	近隣 8 市教育委員会などと提携した本インターンシップ制度などにより、教育支援活動を毎週半日以上25時間程度実践し、大学内の省察的授業による「体験教育」すなわち理論と実践の融合を図ります。派遣先での学校教員は、教師としての基本を指導。これにより、実践的問題意識を深め、具体的な教職観・教育観をもてるようになることを目標とします。学内授業では、教職インターンシップなどに関する事項の伝達と、各自の体験や疑問に沿って、お互いに共感し、考え、検討します。授業担当教員は派遣校を訪問し、教育支援学生を指導します。	
	教育の歴史と思想	教育の本質に関わる問題を考察するためには、長い歴史の中で鍛えられてきた教育思想などを振り返る作業が重要になります。教育史と教育思想について、主として西洋教育史を中心に概観します。それによって、日本国憲法第26条および教育基本法などに示されている高邁な教育理念や精神は、思想として歴史上に現れ、実現するために人類は長い闘いをしてきたことを学びます。我が国の現代の教育を支える理念、内容、方法意識などがどのようにして成立してきたかを、歴史的に考察します。	
	教育の最新事情	教職についての省察 子どもの変化についての理解 教育政策の動向についての理解 学校の内外での連携協力についての理解、に関する最新事情を理論的に考察する。教育の最新事情の検討には、その不易と流行の視点が重要だと考える。このような視点を踏まえて学習指導要領等に関連しつつ、さまざまな方法により、上記の内容に関する各種基準に従って探究する。	
	教育法規 1	「教育政策として議会によって定立された法に則って、行政主体である国又は地方公共団体が教育政策を具体的に実現する作用」ととらえられる「教育行政」は、「法律主義」の原則に従い、執行される性格のものであることを具体的に明らかにする。このため、教育行政と教育法とのかかわり、教育法の基本原理としての憲法の教育条項と教育基本法の基本的枠組み、学校制度と就学の仕組みと法、学校の組織編制・管理運営と法、教職員の意義・役割並びに身分・服務と法、国と地方の教育行財政と法について講義する。	
	教育法規 2	「教育政策として議会によって定立された法に則って、行政主体である国又は地方公共団体が教育政策を具体的に実現する作用」ととらえられる「教育行政」は、「法律主義」の原則に従い執行される性格のものであることを具体的に明らかにする。このため、学習指導要領の意義・役割と各学校の教育課程編成とのかかわりや教科書等の問題、在学関係と児童生徒の基本的な人権をめぐる問題を含む生徒指導の在り方、学校の保健安全や学校事故の問題、学校情報の取扱いと情報保護・情報公開とのかかわり等について、「教育法」の視点から考察する。	
	情報教育 1	情報通信技術の進歩による情報活用方法の多様化、高度化を支えられている情報化社会における教育の考え方、学習内容、学習方法を学び、情報化社会が教育へもたらす影響について光と影の両面から考える。具体的には、情報教育の実践について挙げられている3原則である、情報化の進展に即応した教育、教育の活性化への情報通信技術の活用、情報化の影への対応に関して、教師自身が身に付けるべき情報活用能力と教師が児童生徒に学ばせるべき実践的な内容を学習する。	
情報教育 2	情報通信技術の教育への主な適用分野である、CAI：コンピュータ支援による学習とCMI：教授者活動の支援に関して、情報教育実践の観点から学ぶ。情報教育を推進する上で活用する各種教育ソフトを実際に利用体験し、それら教育ソフトの個々の評価を通じて、CAI、CMIの現状を評価分析し、実際の学校現場での有効性と適用上の課題を学習する。また、総合的な学習の時間、普通教室における各種教科等、実践的な場面での情報教育の進め方や、情報公開、個人情報保護等の法制度の学校教育において配慮すべき点についても具体的に学ぶ。		

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科 科目 目	授業研究 1	内容として、大きく 第二次大戦後から昭和 2 6 年まで、 昭和 3 3 年から昭和 4 3 年まで、 昭和 5 2 年から平成 1 5 年まで、 今回平成 2 0 年の学習指導要領の改訂の特質の 4 期に分け、それぞれの時期の教育的特質や理論的背景を解説するとともに、 各学校で教育課程を編成する際の基本を解説することにする。	
	授業研究 2	内容としては、 わが国における「指導要録」の歩みとその特質、問題解決評価・その意義、最近の評価の 3 つの機能と絶対評価の導入、評価の観点、ポートフォリオ評価の意義、ルーブリックの作成、授業と評価の実際に分けて解説することにする。	
	外国語活動指導法研究 1	小学校で英語を教えることの意味や問題点を話し合い、各自が目的、内容、目標を設定する。英米の絵本や児童文学、アニメーション、歌など、子どもたちが興味を持つ内容を扱いながら、英語の音に慣れ、基本的な単語や表現例を用いて英語で聞き話すことを中心に言語活動を行い、異なる言語や文化に対する関心を高め、異文化を尊重する姿勢を身につけられるような教材を考え、教育法を工夫する。指導案を作り、模擬授業を行い、お互いにフィードバックしながら、さまざまな状況に対応できる実践力をつけていく。演習形式で行う。	
	外国語活動指導法研究 2	小学校で英語を教える教員は、実践に振り回されることなく、確固たる理論に裏付けされた授業を行なう必要がある。小学校英語教育に関する賛否両論を、1 つ 1 つ分析することを通して、地域や学校が置かれた教育環境を冷静に捉え、よりよい授業を行うための素地を養成し、必要に応じて実践への具体的手がかりを考える。	
小学校 教員 コース	国語（書写を含む。）	「国語教育」と「国語科教育の」の違いは何か。国語科教育はどのような教科なのか。国語としての日本語の特質はどのようなものなのか。日本語についての一般的包括的な基礎的な素養を身につけ、国語科教育の役割、意義を考察する。とりわけこれらの社会によりよく生き、自己実現するためになくてはならない自分自身の学びとしての国語科の指導の在り方について考究する。以上のような観点から、国語及び国語科について、小学校及び中学校、高等学校の国語科教科書に掲載された教材をとりあげ国語を学ぶ魅力を伝える。	
	社会	小学校の社会科は、社会生活についての理解を図り、公的質質の育成の基礎を養う教科であり、学習者の身近な社会事象や産業などを教材とする。実際の場合では、学習者が自ら活動し、主体的に学ぶ姿勢を重視する。このような社会科の特色を常に意識しながら、目標と内容を考察し、社会科に対する認識の深化をめざす。社会科の意義や史的展開に関する基本的原理と、他の教科目との関連などの諸課題を学び、基礎的な素養を身に付ける。同時に社会的現実も加味しながら、社会科という教科のあり方も考察する。	
	算数	学習指導要領「算数科」をもとに、その目標と内容を取り上げ、その特徴について取り上げる。また、算数の教育評価や 5 段階評価や偏差値など算数教育全体の中から取り上げる。算数の教材研究だけでなく、算数科教育の目標、内容、指導法、評価、算数教育の歴史などについて幅広く考察する。	
	理科	本講義では学習指導要領が示すところの「理科の目標及び内容」を理解し、理科教育の役割とその指導法や方法論を学ぶ。理科教育の具体的な内容や指導法や優れた教材、実践例などを通して、「たのしい科学の学び方・教え方」について学習する。「教材研究のあり方」「いかにしたら生徒が興味・関心を示す理科の授業を創造することができるか」「実験とは何か」「科学的に考えるとはどういうことか」「評価論」などについても学ぶ。「理科離れ」を克服する理科教育のあり方についても学習する。	
	生活科	内容としては、まず 生活科の誕生の意義や背景を取り上げ、次に生活科の目標や内容を、さらには 生活科の方法（教師像、個に応じた指導、チーム・ティーチング等）を、さらに 生活科の評価の特質、生活科の単元指導計画の作成等を理論的側面から検討します。また、必要に応じ、話題や題材を学校現場に求めることにします。	
	音楽	教育および保育の現場で必要とされる音楽に関する知識と基本的技能を、ソルフェージュおよび楽典を中心にしながら学ぶ。「表現」および「鑑賞」の活動を行い、子どもたちのなかに音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるためには、指導にあたる教員が音楽に関する基本的知識と技能を十分に身につけていることが必要である。この授業においては音を感じ取ること、聴き取ることから初め、記譜、視唱や視奏などを行いながら、楽典、楽式などについての認識を深め、音高、音程、旋律、基本的な和声についても学ぶ。	
	音楽実技 1	授業運営、生徒指導の成果に大きな影響を与えうる教員の「声」。一般教科においては教育内容の伝達、音楽教科においては楽器、それ以外の時間は子供達とのコミュニケーションに使われる。ここでは腹式呼吸を中心に、徹底した声のトレーニング、およびそれを使った表現、そして音楽的な「声」による表現を考え、実践する。	

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科科目 小学校教員コース	音楽実技 2	ピアノ実技を行う。小学校歌唱共通教材の演奏、弾き歌いの実習を行う。ピアノ初心者においては「バイエルピアノ教則本」を用いて基礎から学習を始め、ある一定レベルに到達した後に歌唱共通教材の弾き歌いに移行する。	
	図画工作	図画工作科は「表現」と「鑑賞」活動を通して、児童それぞれの個性的なものの見方、感じ方、考え方、表し方に気づかせ、造形的な創造活動の基礎的な資質・能力と、豊かな感性・情操を育む教科である。よって、造形的表現活動の本質・本源的な意味・価値・効用や原理的表現型を、子どもの造形的表現に見出せることが当該教科の理念的な前提であり、児童それぞれにとっての豊かな表現性を、自分らしくかつ他者に通じるかたちで発現できるように涵養することの可能性を研究する。	
	家庭科	少子高齢化等に対応する観点から新学習指導要領においては家族と家庭に関する教育の一層の充実が目指されたが、その趣旨を踏まえて再構成された「内容」にある「A家庭生活と家族」「B日常の食事と調理の基礎」「C快適な衣服と住まい」「D身近な消費生活と環境」を平易に解説・講義する。中教審の「答申」にある「改善の基本方針」に示されている家庭科の今日における意義・役割を、各「内容」の説明において具体的に強調したい。	
	体育	小学校の体育授業を担当するための基本的な知識の獲得を目的とする。特に現代社会では、運動と健康の関連が指摘され、小学校においても運動領域と保健領域を一層関連させた内容で指導することが求められる。運動と健康については、生理学的・心理学的な観点からも、アプローチする。そして、機能的な発育・発達というものは、児童・生徒各個人がどのようにして獲得していくのか、その経緯と特徴を把握するとともに、この時期の子どもたちにどのような運動が必要か、またどのような運動種目が最適かを理論的に学習する。	
	児童心理学	本講義では、人生全体の発達段階の中でも特に児童期に焦点を当て、(1)児童期に特徴的な心と体の発達、言語・認知機能の発達、学習・学業達成と動機づけ、社会性の発達、パーソナリティと自己の発達、家族関係・仲間関係、問題行動、発達障害に関するテーマについて概観するとともに、(2)現代の子どもの様々な問題を心理学的な視点から考察することを目的とする。	
	保育学 1	本科目では先ず、子どもの現状、保育の現状を取り上げる。現在の子ども達の生活の現状、家庭保育、幼稚園教育、保育所保育の現状を取り上げる。これらの現状を先ず知って、そのあとで、何故保育が必要なのかを、子どもとはどういう存在かという視点を中心にして取り上げる。人間としての子どもがどういう存在かという問題と、現代社会との関係をも視野に入れて取り上げる。	
	保育学 2	本科目では、先ず子どもの育ちの理解として発達の基本的な理解と特徴を取り上げる。次に保育と環境の問題を、自然環境、物的環境、人的環境に分けて取り上げる。三番目には、保育内容と方法を取り上げる。その際に保育の諸原理を先ず述べ、次いで「幼稚園教育要領」と「保育所保育指針」の保育内容と方法を取り上げる。四番目に保育の計画と実践・評価を取り上げ、最後に園と家庭、学校との連携について取り上げ、保育者の在り方に繋げる。	
	初等教育課程論	教育課程という語はきわめて多様に使われている。歴史的に見ても学校が社会の中で果たす役割や機能の変化につれてその意味は変遷をみせているし、現在の意味内容も実態もまた多様である。およそ教育が意図的、組織的で継続的に行われているところでは、教育は「誰に」対して、「誰が」働きかけるのか、それは「何の目的のために」「何を媒介としてどんな内容で」「どんな技術を駆使して」その目的を達成するのか、そしてそれを支える行政・制度はいかなるものかといった初等教育課程の諸問題について考えたい。	
	初等国語科教育法(書写を含む。)	小学校学習指導要領に示されている国語科教育の「目的」・「内容」・「言語活動」・「言語文化と国語の特質に関する事項」等の基本を学ぶ。とりわけ、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」、「書写」の内容を概括的に理解し、自ら言語活動を通して、今求められる指導法の基礎的な素養を習得し、教師として必要な国語科教育についての指導観を身につける。また、将来教師となる上での自分自身の課題を見つけるとともに、国語に対する関心を一層深め、国語を尊重する態度を育てる。	
	初等社会科教育法	初等社会科は、科学的・合理的な社会認識と社会参加力の形成を通して公民的資質の基礎を育成する教科です。「国際社会に生きる民主的、平和的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う」ために、教育方法についての実践的な知識を養うことを目標にします。地理、歴史、公民的知識を、子ども自身の生活に生きて働くものにする教育の成立を図るための初等社会科の教育方法と、社会・自然環境の中で、自己実現と共生を担う自律的な人格の基礎を養う「生きる力」をめざす初等社会科教育について具体的に学びます。	

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科科目 小学校教員コース	初等算数科教育法	算数科の四領域の内容から主要なことがらを取り上げる。また「算数的なものの見方・考え方」については、児童の具体的な解答例をもとに検討し、解説を加える。そして、学習指導案を作成する。	
	初等理科教育法	教材研究や学習指導案の作成などを通して、「具体的な指導法」や「子どもの科学的認識」「優れた教材とは」「子どもが興味・関心を持つ理想的な理科の授業とは」などについて学んでいきます。その学習の過程で実践的な指導力を身につけてもらいます。また、自分でも「たのしい授業ができる」という自信を持ってもらったり、「早く先生になって授業をしてみたい」と思ってもらえたらと考えています。「学習指導要領」のねらいについても学習します。	
	初等生活科教育法	内容としては、まず生活科の誕生の意義や背景を復習した後、生活科の年間指導計画の作成（目標や内容等の研究、単元の開発、T T、指導時数の割り振り等）、生活科の学習指導の検討（問題解決学習の展開、個に応じた指導の展開、T Tの展開等）、生活科の評価の進め方、以上を踏まえた単元指導計画の作成作業やその指導面及び評価面からの検討をします。また、必要に応じ、話題や題材を学校現場に求めることにします。	
	初等音楽科教育法	小学校の教育における音楽科についての知識を得ると同時に、授業実践に必要な基礎的スキルを身につける。音楽科の変遷、目標、内容、指導法、評価について解説し、授業実践についての考え方、捉え方などを学ぶ。そして、そこから「表現」および「鑑賞」の各々の活動の中で、子どもたちの音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるための授業の実践的内容について検討する。	
	初等図画工作科教育法	図画工作科は「表現」と「鑑賞」の活動を通して、児童それぞれの個性的なものの見方、感じ方、考え方、表し方に気づかせ、造形的な創造活動の基礎的な資質・能力と、豊かな感性・情操を育てる教科である。よって、すべての児童にその子なりの達成感を味わわせ、自己表現が可能であるところに当該教科独自の性格と役割がある。その実現のための基礎的な理念、指導の内容と方法について、実制作を含む教材研究、指導案作成などを通して学ぶ。	
	初等家庭科教育法	小学校家庭科の教員としての実践的な知識・技術の習得をねらいとして授業を構成する。新学習指導要領にある家庭科の目標、内容の趣旨を踏まえて、まず、カリキュラムの考え方、学習指導の実際、評価のあり方などの基礎的な検討を行う。次に、授業の実際を学習するために、年間や単元など、指導計画の作成を体験する。これらの内容を通じて現代の社会生活における家庭科教育の重要性の理解を深めていく。	
	初等体育科教育法	体育及び体育科では、現在の子供たちの置かれている生活環境の劣悪化に伴う、心と体の諸問題について取り組む。生きる力・工夫する力などの問題解決が出来る力を身につける指導を見つけて。また保健領域の拡大についての考え方と各学年及び各領域別種目の特性を理解し、合理的で効果のあがる運動指導が出来るよう指導する。特に運動種目の特性とそれぞれの教材内容を理解し、単元計画と学習指導案（時案）の作成方法も学習する。	
	道徳教育の指導法（小学校）	新学習指導要領において、「道徳教育は、道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行うものである」ことが明示されました。そこでまず、小学校学習指導要領「道徳」の目標や内容、及び指導計画の作成、道徳の時間の指導の特性等について理解を深めます。次に、実際に授業で使用する資料の分析・検討方法を追求します。そして資料分析を基に発問を精選し、板書計画を盛り込んだ学習指導案を作成します。さらに、道徳の実践に結び付けるために教育活動全体を通じて行う指導のあり方、家庭や地域社会との連携の仕方等を追求します。	
	特別活動の指導法（小学校）	特別活動はその目標に「望ましい集団活動を通して」とあるように、学級を単位とする集団や学級・学年の枠を超えた集団による活動をするとその特徴がある。つまり、特活では実際の生活経験や体験経験による学習、「なすことによって学ぶ」（learning by doing）ことを通して、全人的な人間形成を図るという点が強調される。このことを達成するために特活の内容は〔学級活動〕〔児童会活動〕〔クラブ活動〕〔学校行事〕となっている。特別活動の内容それぞれがもつ固有の価値について理解するように進める。	
初等教育方法学	（概要）初等教育における教育方法の理論的・実践的課題を考察し、授業展開能力の育成をめざす。学校での教育方法の類型と現状や、情報機器の活用方法を学ぶ。 （オムニバス形式 / 全15回） （1）大橋有弘 / 7回）情報通信技術を活用した教育の考え方や指導方法を習得する。情報通信技術を活用したデジタル教材の作成方法や、それらを使った授業の実践方法を学ぶ。 （31 菱山寛一郎 / 8回）学校教育の中心である授業を多角的に分析し、具体的な学習指導法を習得する。教材研究の手順と方法、学習指導案の作成なども扱う。	オムニバス方式	

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目 小 学 校 教 員 コ ー ス	児童・進路指導論	本講義では、小学校の教員として学校における様々な生活指導上の課題や進路指導に関する内容について、その対応と指導ができる資質・能力を習得することを目的とする。 児童理解に関する内容 児童の問題行動や不適応に関する内容 進路指導（キャリア教育）に関する内容 その他	
	初等教育相談の基礎と方法	1. カウンセラーとは異なる教師・保育士の行う教育相談の役割と特徴を理解し、教育相談の方法の基礎にある理論を学ぶ。2. 乳幼児期から児童期までの子どもとその家庭に関する臨床的問題の実際、及び現代の教育・保育現場における諸問題を理解する。3. 多様な保護者・様々な困難を抱える子どもとのつながり方・理解の仕方の原則を理解し、内外の資源と連携しながら支援するための知識と技能を習得する。	
	幼児理解の理論と方法	本授業は、教職に関する科目である「生徒指導、教育相談及び進路指導に関する科目」を「教育相談研究」と共に構成している幼稚園教諭免許状取得のための必修科目として位置づけられている。幼児の発達の様子については、保育学・心理学で取り上げられており、ここでは、集団の中での幼児の実態への理解を通じて幼稚園の中での育ちとはどういうことかを知ることを目指す。	
	保育内容総論	現在の保育環境や幼児をとりまく社会環境について学習する。次に幼稚園現場の実践例をもとに保育の諸領域や保育計画を学び、そのなかで幼児がどう発達したのか（どのような力をつけたのか）、また、どんな問題が発生し、どう解決したのかを学習する。これらを通して、これからの乳幼児の健全な発達を保障する保育には、いかなる保育内容と保育計画が求められるのかを考える。	
	保育内容A・健康	保育内容の研究A(健康)の領域では、生まれて日の浅い未分化な幼児・園児の発育・発達について理解する。幼児・園児の生活能力に応じた、毎日の正しい生活習慣を学ぶ。また、未発達ながら身体を動かしたい、友達といっしょに運動をしたい気持ちになるような種目を挙げ、初歩的な指導理論を考察する。特に保育園・幼稚園内での安全教育について研究する。	
	保育内容B・人間関係	乳幼児期にかかわる力（コミュニケーション能力）の発達過程を理解しつつ、幼児期にどのようにして豊かに人とかかわる力を育てるかについて考える。乳幼児期の愛着形成、幼児期の自己信頼と自立性が、子どもと保育者の相互作用、子どもと子どもの社会的相互作用によって形成されることを理解する。	
	保育内容C・環境	本授業は、幼稚園教諭免許状取得のための必修科目である「教育課程及び指導法に関する科目」として位置づけられている。ここでは、領域「環境」で示されているねらいと保育内容を理解する。加えて保育所・幼稚園における環境教育の意義について取り上げる	
	保育内容D・言葉	乳幼児の発達全体をふまえながら、領域「言葉」の理解と考え方、言葉の発達と言葉を育てる保育のあり方、保育者の働きかけと言語環境、言葉と感性の問題等について理解する。その際、幼児期から小学校児童期への接続期の教育の現状も踏まえ、話し言葉から書き言葉への連続性と教育方法についても学習する。	
	保育内容E・表現1	保育の現場において、子どもたちの表現の活動を援助するために保育者が身につけるべき知識および技能を習得する。子どもたちが美しいものなどに対する豊かな感性を持ち、感じたことや考えたことを自分なりの表現で発露することを、子どもたちの発達過程に配慮しつつ援助することについて学ぶ。具体的には歌うこと、リズムに合わせて身体運動を行うこと、簡易な打楽器を活用した活動を行うことなど、子どもたちが表現を楽しむことができる場をつくることについて検討する。	
保育内容F・表現2	幼児期における表出・表現活動の中でも、とくに絵を描いたりモノを作ったりする造形的な表現活動の、原理的な発達段階を中心に取り扱う。本来は誰しもにとって自由で自発的な表現活動であるが、特にこの時期の子どもは活発で意欲的な内発的要因・動因による表現活動に、喜びや自信を持たせながら、意欲的な表現活動を子ども自身のものとして定着させ、豊かな感性や表現力を育むための理論と方法論を研究する。		

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学科 科目	小学校 教員 コース	初等教育実習指導	(小学校) 本授業では、教育実習に向けての意識を高めるとともに、教職への知識や実践力の向上を図り、求められる教師としての資質・能力の育成を目的とする。 教育実習の意義や心構え、自己課題を明らかにする。 教材研究の在り方や指導計画・学習指導案の作成を通じた模擬授業教師としての基礎的な知識を習得し、資質・能力を培う。 (幼稚園) 初等（幼稚園）教育実習の事前教育として実施する演習科目である。幼稚園での実習に円滑に取り組めるように、対象となる幼稚園を取り巻く状況や幼児の理解をはかり、幼児教育の方法・技術・技能について演習する。幼稚園教師の役割を体感できるように、シミュレーション（simulation）授業を多用し、実践力・応用力のある幼稚園教師養成を目指して、その基礎演習を展開する。	
		初等教育実習	(小学校) この科目では、実際の教育現場での実習が意義ある充実したものであるための授業です。そのために、小学校で教育実習を行う際に必要な事柄を学びます。 指導案の作成等や模擬授業を通して、教育観や教師観を深め、教育実習の意義やその内容について理解する。 教育実習後は、授業記録や実践した指導案に基づき、自身の授業の検証と分析を行い、資質の向上を図る その他 (幼稚園) 実習の事前に実習前教育として、明星幼稚園における3歳児新入園児保育への補助を体験し、分離不安の高い幼児をターゲットに、行動観察を行い、記録する。その際、担任教師の対応方法についても、意を払う。その成果をもとに幼稚園教師のあり方について分析・考察し、4週間、幼稚園現場において教育実習を行う。	
		特別教育実習	東京都教育委員会の東京教師養成塾の教育実習生を対象に、同塾と連携して小学校への訪問指導をし、省察的授業を展開します。特別教育実習は1年間にわたって行われるため、教科と生徒指導などの準備と必要な取り組みを学びます。いかに教育実践や研修会においてそれを実現しているかを確認・省察することにより、実践的な指導力を養います。授業観、生徒指導観、教職観を実践的に育成します。事前には前年度の特別教育実習生の体験談を、後期には次年度の特別教育実習生も交えて模擬授業や実習経験を発表し、相互に課題を深め合います。	
教科 専門 コース	共通	中等教育課程論	教育課程という語はきわめて多様に使われている。歴史的に見ても学校が社会の中で果たす役割や機能の変化につれてその意味は変遷をみせているし、現在の意味内容も実態もまた多様である。およそ教育が意図的、組織的で継続的に行われているところでは、教育は「誰に」「対して」「誰が」動かせるのか、それは「何の目的のために」「何を媒介としてどんな内容で」「どんな技術を駆使して」その目的を達成にするのか、そしてそれを支える行政・制度はいかなるものかといった中等教育課程の諸問題について考えたい。	
		道徳教育の指導法（中学校）	新学習指導要領において、「道徳教育は、道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行うものである」ことが明示されました。そこでまず、中学校学習指導要領「道徳」の目標や内容、及び指導計画の作成、道徳の時間の指導の特性等について理解を深めます。次に、実際に授業で使用する資料の分析・検討方法を追求します。そして資料分析を基に発問を精選し、板書計画を盛り込んだ学習指導案を作成します。さらに、道徳的实践に結び付けるために教育活動全体を通じて行う指導のあり方、家庭や地域社会との連携の仕方等を追求します。	
		特別活動の指導法（中高）	特別活動はその目標に「望ましい集団活動を通して」とあるように、学級を単位とする集団や学級・学年の枠を超えた集団による活動をするところにその特徴がある。つまり、特活では実際の生活経験や体験経験による学習、「なすことによって学ぶ」（learning by doing）ことを通して、全人的な人間形成を図るといった点が強調される。このことを達成するために特活の内容は〔学級活動〕〔児童会活動〕〔学校行事〕となっている。特別活動の内容それぞれがもつ固有の価値について理解するように進める。	
		中等教育方法学	(概要) 中等教育における教育方法の課題を検討し、情報活用能力を含めた教育的な実践力の育成をめざす。理論の把握と技術の習得を関係付けながら学ぶ。 (オムニバス形式/全15回) (1 大橋有弘/7回) 情報通信技術を活用した教材作成や授業実践の方法を習得する。情報通信技術を活用した、学習結果の評価・分析方法を学び、指導方法、学習内容、教材等の評価改善方法を習得する。 (31 菱山覚一郎/8回) 教育方法の理念及び歴史を学ぶだけでなく、教育現場の実態に即した学習指導方法を習得する。特別活動や「道徳」の教育方法も扱う。	オムニバス方式

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科 科目 共通 専 門 コ ー ス	生徒・進路指導論	本授業は中学校・高等学校の教員として生徒指導についての確かな指導ができる資質・能力を習得することを目的としている。生徒指導の本来の意味と、直面する問題行動や不適応行動についての指導法などについて学ぶ。また、学習指導要領(学級活動)に示す進路指導のあり方についても学習し進路指導計画・進路指導の組織とその運営についても理解する。	
	中等教育相談の基礎と方法	学校にいじめ、暴力等様々な問題が山積する中で、教師による教育相談の力が求められている。受講生は、思春期の生徒が育つ現代の背景を多面的に理解するとともに、発達障害を含めた子ども理解について科学的な知見を学ぶ。また、カウンセリングの基礎を学ぶ中で、学級経営や教科指導を支える教師の感性としての気づき、観察力、傾聴、ことばかけ等を事例を通して考察し、教師としての教育相談の実践力を培う。	
	中等教育実習指導	本授業では、教育実習に向けての意識を高めるとともに、教職への知識の深化や実践技術の向上をねらいとする。具体的には、教育実習の心構えや自己課題を明らかにした上で授業実践の方法を取得する。また、グループに分かれて教材分析や学習指導案の作成、模擬授業等を行うとともに、履修者どうして授業分析を行うなどして授業実践力を身に付ける。履修者が学びあいながら、教師としての資質を高めていく。	
	中等教育実習 A	本授業は、教育実習においてこれまで学んだことを実証的に検証し、机上では得られない教師としての能力や力量を育成することがねらいとなる。具体的には、事前指導として教育実習の意義や内容についての理解を深めるとともに、学習指導案の作成、模擬授業による授業実践、模擬授業の相互評価などを実施する。また、教育実習の事後指導として、実習中の成果や課題を整理・共有し、中学校・高等学校の教員となるための資質・能力の向上を目指す。	
	中等教育実習 B	本授業は教育実習の直前指導を通じ、教育実習に自信をもって臨めるようにするための授業である。そのために、指導案作成・模擬授業による授業実践・模擬授業の相互評価などを実施する。また、教育実習の事後指導として実習中の各々の収穫や課題を整理・共有し、中学校教師になるための資質・能力を習得する。	
	国 語	国語学概論	日本語とはいかなる言語であるのか、その基本的な構造と特徴を体系的に学ぶだけでなく、日本語をできるだけ客観的に把握する方法を修得する。具体的には、日本語の音韻・文法・語彙などにおける特徴を概説し、それらの言語事象が受講生自らの言語にどのように現れているかを観察させる。そして、その言語事象のさらなる特徴はないか、新たな変化の兆しはないかなどを討論し、自らの日本語がいかに記述できるかという作業を通して、自分の言語と文化を見直す機会とする。
日本文法 1		日本語文法の基礎知識を修得し、主として古典文学の解釈に必要な基礎的文法事項について、具体例をもとに学んでゆく。古典文法の分析・考察の仕方を身につけるとともに、古典を読解する力の向上を図ることが目標である。また、現代語の文法についても、その概略と特徴を古典語文法と対比的に把握させ、文法的知識が机上のものとならないよう、現実の言語使用と結び付けて理解させることも目標である。そのために、実際の言語事象を文法的に説明する作業を取り入れ、文法の意識化を目指す。	
日本文法 2		古典の文法的解釈を実践的に学ぶ。具体的な材料には、中学校・高等学校の教科書に採録されることの多い『徒然草』『枕草子』『伊勢物語』『宇治拾遺物語』などの作品を用い、複数の注釈書を比較検討しながら読み進め、文法的解釈の方法論を実践的に修得することとする。また、可能ならば、注釈が公刊されていない作品を取り上げ、受講生自らが作品内容を文法的に把握する作業を通して、文法事項の理解を確認し、合わせて読解力の向上をはかりたい。	
日本語表現法		日本語の表現法の基礎を実践的に学ぶ。日本語の基礎的知識を踏まえた上で、実用的な文章からレポート・論文等の文章作成の基本事項を修得し、具体的な問題設定と材料の組み立てを意識した課題レポートを作成する。また、書き言葉と話し言葉の差異を理解し、日常会話の表現技術を確かめるとともに、口頭発表や討論などにおける効果的な表現を修得する。併せて、日本語の表現力をさらに高めるべく、辞書の使い方やワープロの利用法等についても言及する。	
国文学		短歌という小さな定型詩は日本人にとって、不思議な力を秘めた言葉の器であり、千数百年の遠い昔から現代に至るまで、私たちはこの器を、力ある言葉と美しい調べによって満たそうと繰り返し続けてきた。生活の希薄化や言葉の空疎化が叫ばれている現在、短歌の命脈の底に流れる、日本人の生と死に関わる心の真実を見つめ直すことで、日本人らしい生き方とは何かを学ぶ。	
国文学史		日本の古代から近世までの代表的な文学作品を原典で講読する。日本最古の作り物語である『竹取物語』や随筆『枕草子』から俳文『奥の細道』まで、日本文学がどのように生まれ、どのように展開したのかを、主としてジャンルの生成という観点から捉え、個別の作品読解を通じて、その諸相を確認してゆく。古語辞典を引きながら、テキストをひとつずつ味読し、それぞれの受講者が基本的な文学史観を形成できるよう心がける。	

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科 科目 教 科 専 門 コ ー ス	国語		
	日本文学概論	近代詩は、明治時代に西洋の影響によって生まれた。和歌や俳句といった日本の伝統的な詩歌とは異なる新しいジャンルである。その自由なスタイルは、いまなお人々を惹きつけてやまない。若い世代によって、詩は次々と生み出され、新しい感受性の発露として、時代を牽引するものとなっている。ここでは、そのような最先端の詩を書き続ける詩人13人を厳選し、その詩的世界に迫る。	
	古典文学	古典文学を概観し歴史や時代背景、特徴等を学ぶとともに、疎遠に成りつつある古文を自ら読み、分かる言葉を手がかりに未知を創造する読みの地平を拓くことを目的とする。なぜならば、読者が意味を見つけ創造することで、古文は現代に生き次の時代に受け継がれるからである。小学校・中学校学習指導要領「伝統的な言語文化に関する事項」を視野にいれ、昔の日本人が愛唱し、日本文化の根底を創った名詩、名文を読み、朗誦、暗唱、交流を通して古典文学についての素養を培う。	
	近代文学	日本の近代文学の見取り図を示した上で、詩「雨二モマケズ」や童話「銀河鉄道の夜」で知られる近代の代表的詩人・童話作家である宮沢賢治の作品を読む。大正13年に刊行された生前唯一の童話集・イーハトヴ童話『注文の多い料理店』に収録された作品をはじめ、「雪渡り」「やまなし」「氷河鼠の毛皮」など、同時代のメディアに発表された作品を中心に取り上げ、近代文学のあり方について考える。	
	漢文学	故事成語とは、故き事の語と成れるもの、すなわち昔から伝わっている事柄が熟語となって慣用的に用いられているもの、という意味である。私たちが普段、何気なく使っている言葉の中には、中国の故事に基づいて成立したものが案外に多い。固有の文字を持たなかった日本人は、漢文との出会いによって初めて、書き言葉を手に入れたからである。その、日本の古典としての漢文について、ここでは代表的なものを学んでゆく。	
	書道 1	学習指導要領の内容や、国語科書写の指導に必要な知識、技能、学習指導法について概説するとともに、実技を通して書写力の向上を図る。また、基本的な学習指導法について考え、学習指導案を作成する。	
	書道 2	「書道 1」に引き続き国語科書写の指導法を概説するとともに、実技を通して書写力の向上を図る。また、学習指導内容に即した基本的な学習指導法について考え、学習指導案を作成し、模擬授業を実施する。	
	国語科教育法 1	中学校・高等学校の国語科教員を目指すうえで必要な知識や教養を学ぶ。国語力は、あらゆる科目の基礎となる力である。国語科を教える者には、それ相応の重い責任が課せられていると言える。その国語科教育の意義や目標。そもそも国語科とは、どのような科目であり、生徒への教授を通じて、何ができるのか、などを考える。中学校・高等学校の学習指導要領を紐解きつつ、これからの国語科教育のあるべき姿を探る。	
	国語科教育法 2	実際の授業を想定して、教材研究と学習指導案の作成を行う。著者研究と本文構成の検討、叙述と注解、発問及び板書の作成という手順で進めてゆく。事典や辞書を引いて調べたり、生徒に質問する事柄を体系的に考えることになる。取り上げる作品は、各社の教科書に採用されている現代文の小説の中から、芥川龍之介『羅生門』、川上弘美『神様』、江國香織『草之丞の話』、赤川次郎『記念写真』。	
	国語科教育法 3	実際の授業を想定して、教材研究と学習指導案の作成を行う。著者研究と本文構成の検討、叙述（訳述）と注解、発問及び板書の作成という手順で進めてゆく。事典や辞書を引いて調べたり、生徒に質問する事柄を体系的に考えることになる。取り上げる作品は、各社の教科書に採用されている現代文の評論の中から、山崎正和『水の東西』、大岡信『車座社会に生きる日本人』、古典の中から、清少納言『枕草子』、兼好法師『徒然草』。	
国語科教育法 4	国語科教育法 2 及び 3 で作り上げた学習指導案に基づいて、模擬授業を体験する。教材研究の成果をいかに魅力あるものとして具体化してゆか。教師の視線や表情、身振り、手振りのあり方も含めて、検討してみたい。教師の出発点は、授業という空間を演出し、指導してゆく積極的な立場に立つことである。受講者同士の討議を重ねて、よりよい授業の実現を目指してゆく。		
初等国語指導法研究 1	本科目は、小学校国語科の教材を実践的に考究し、必要な国語科に関する専門的な素養を培うものである。具体的には、小学校学習指導要領国語科の【内容】「A 話すこと・聞くこと」、「B 書くこと」、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の目的、内容、方法について講ずる。また、それぞれ実際に指導する場面を想定した教材研究を行い、指導案等を作成する。また、模擬授業を通して具体的な国語科の授業姿を描けるようにする。		

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 専 門 コ ー ス	国語		
	初等国語指導法研究2	本科目は、小学校国語科教育について実践的に考究することで、必要な国語科に関する専門的な素養を培うものである。具体的には、小学校学習指導要領国語科の【内容】「C 読むこと」について、その目的、内容、方法について講ずるとともに、また、それぞれの実際に指導する場を想定した教材研究を行い、指導案等を作成する。模擬授業を通して具体的に国語科授業の姿を描けるようにする。	
	社会		
	日本史概説	原始時代の日本から江戸時代の成立期まで前近代史を中心に各時代の基本的な事項と特徴、大きな歴史の流れについて旧来の理解と最近の研究動向との相違を意識しながら講義を行う。	
	日本史各論1	日本史の具体的な展開を江戸・東京地域の中世史を通して理解させ、特に地域に残る様々な歴史資料（文書・記録のみならず石造物・建築物・棟札といった物的資料、遺跡など考古資料、祭りや伝承など民俗資料）の教材化の視点を含めながら講義を行う。	
	日本史各論2	日本史上で13世紀後半～14世紀は激動の時期であるといえよう。初めての本格的な対外戦争であるモンゴルとの戦いが行われ、日本もいやおうなく世界史の中に巻き込まれていく。政治もそれに対応することがせまれ、徳政が行われるものの、鎌倉幕府は滅亡し、建武政権を経て60年間に及ぶ戦争が開始され、日本をめぐる国際関係も大きく変化する。学習指導要領で国際関係の学習が重視されていることに対応し、この時期について講義を行う。	
	外国史概説	本講義は、最初に歴史研究の学問的意味、歴史研究方法論、史料論等について説明し、外国史を理解する上での基礎的知識のみならず、外国史を教える際に把握しておくべきポイントをも明らかにすることを目的とする。具体的には、まず、外国史の西洋史、東洋史の地理的区分、それぞれの時代区分、特質等を説明し、次に、西洋史、東洋史両者に共通な要素をもつ古代四大文明についてその相違点とともに、後半は西洋史の古代ギリシャ民主制の発展とその特徴、古代ローマ共和制から帝政への変遷過程を概説する。	
	外国史各論1（東洋史）	近世から近代に至るまで、中国の歴史は、内陸民族間の対抗と融和、漢族文化の発展と変容、東西の経済および軍事の衝突など、一層波瀾万丈の激動状態にあった。講義では、今日のアジア大国である中国の諸相を理解するキー・ワードをその千年間の歴史に見つけること、さらにかつての朝貢体制や漢字文化圏は、現在のアジア諸国とのつながりを考える上で極めて重要であることを認識することを目的とする。具体的には、隋唐から、宋元、明清にいたる王朝の歴史とそれぞれの特徴について説明する。	
	外国史各論2（西洋史）	本講義では、西洋史研究の事例として、中世以降のヨーロッパ社会の変遷、及び、市民革命等の問題を取り上げ、それぞれ詳細に説明する。具体的には、中世ヨーロッパの特性(封建制度の特質、ローマカトリック教会成立による中世精神的世界の理念)、ルネサンスにおける人文主義やルターによる宗教改革の社会的影響、最後に近代、現代の市民社会成立のきっかけとなった市民革命の一例としてロシア革命を取り上げ、ロシア革命の要因や勃発経過やソヴィエト政府の成立と諸問題について講義する。	
	人文地理学	この講義は教職課程の学生を主な念頭に、人文地理学の基本を解説する入門講義です。講義ではまず人文地理学の誕生・発展の経緯や、主なテーマについて概観した後、自然環境と人間生活との関係、地域のまとまりの形成、地域間のつながり、都市と村落の秩序、環境問題など、毎回テーマごとにわけて解説していきます。	
	自然地理学	地球の自然環境を構成する要素は、大きく岩圏、気圏、水圏および生物圏に分けられる。これらはそれぞれ内部に独自の仕組みを持ち、さらにそれぞれが相互作用を及ぼしあっている多様で複雑なシステムである。本講義では、自然地理学の基礎概念や自然環境の仕組み、そしてさまざまな自然環境とそのとらえ方・考え方を解説する。	
	地理学入門（地誌を含む。）	地理学は古代ギリシャ以来のきわめて古い伝統をもつ学問であり、古典的でオーソドックスな構成が今でも根強く残っているが、一方、地域社会で生起し、日々変化を遂げる諸事象を直接扱う学問であるため、そのデータの入手方法や、加工・検討の方法も、近年めざましい発展を遂げてきている。本講義では、地理学のそういう新たな側面にもできるだけ注目し、地図や統計、フィールドワークといった従来からの調査・研究手法とともに、地理情報システム（GIS）やGPSなど、最新の地理情報技術の動向についても紹介を行う。	
地誌学概説	この講義は、将来中等教育で地理を教える学生を念頭に、特に人文地理的な側面から、世界各地の産業や政治、暮らしの特徴などを地域の地理的な特徴に結びつけて説明します。まずユーラシア大陸の地形的特徴を整理した後、世界地図を見ながら各回に地域ごとの特徴を解説していきます。		
法律学概論1（国際法を含む。）	講義形式 国内法のみならず国際法を含めた法が私たちの生活の中でどのような役割を果たしているのかを明らかにしていく。たとえば、人権保障の分野で国内法と国際法がどのように連携しているのかを明らかにする。		

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科 科目 教科 専門 コース	社会 法学概論2（国際法を含む。）	講義形式 国内法のみならず国際法を含めた法が安全保障、環境保護、犯罪、紛争解決などどのように運動しているのかを検証する。	
	政治学概論1（国際政治を含む。）	政治学概論1では、政治の定義や現代政治学の特徴、さらには権力や支配といった政治の基本概念を詳しく学習し、基礎固めを行う。 なお内容的には抽象的・理論的な説明が中心となってしまうが、受講生は現実の政治問題に対する関心を常に持ち、本講座で学習した知識をもとに、偏った見方に陥ることなく政治を語れるようになってほしいと考えている。	
	政治学概論2（国際政治を含む。）	政治学概論2の主要なテーマは、政治学の歴史的発展である。すなわち古代ギリシアから現代に至る重要な政治思想や理論を詳しく学習し、政治学への理解を深める。	
	社会学概論	社会科学としての社会学の性格を、まず確認する。社会学的思考を身につけ、社会現象に対する科学的把握ができるようにする。まず、科学とは何か、その基本的枠組みを確認する。そして科学としての社会学の視点を自分のものにできるようにする。次に具体的な社会現象の内容について、家族、現代社会の特徴などを中心に検討していく。現代における家族の構造や機能、家族が抱える現代の諸問題などについて眺めていく。また、他の社会現象と家族との関係についても、考察していく。	
	経済学概論1（国際経済を含む。）	売り手と買い手が自由に競争する市場においては、必然的に双方が満足する「均衡」に至る。まずこの過程を解説し、このとき、社会的な満足が最大になること、そして、外国貿易が行われるならこれがさらに増大することを説明する。また現実には、近年の日本で行われてきた自由化に伴う問題、貿易・資本の自由化によって生じる問題を取りあげ、自由化は人びとの満足を高める一方で、不利益をもたらすこともあることを説明する。	
	経済学概論2（国際経済を含む。）	マクロ経済における国民所得決定の仕組みを学び、好景気、不景気が発生する仕組みを考える。次に、それに対して金融政策や財政政策がどう対応するかを学ぶ。そしてそれらの効果がかつてに比べて小さくなってきた事情を考える。また、対外取引の自由化によって、日本経済と外国経済との関係が緊密になってきたことから生じるグローバル化時代の経済問題について述べる。	
	哲学概論	哲学とは、人間が世界や人間自身について思いをめぐらせる思考の技法である。本講義では、哲学の基本的な理解を得るために、西洋哲学史の流れに即して哲学の個々の概念や学説の理解に努めたい。古代ギリシアより始まる哲学が中世・近代を経て、どのような変貌と深まりを見せるのかを通覧していきたい。そうした作業を通じて、人間の思考の可能性を探求することを目的とする。	
	倫理学概論	哲学の一部門である倫理学は、人間のあり方を中心に、その生の意味や価値を問い直すものである。本講義では、倫理学の基本思想を理解することを目標とし、倫理学の歴史に即しながら、それぞれの学説の理解を深めることにしたい。	
	宗教学概論	宗教学とは何か、それはどのような出自を持ち、どのように展開してきた学問なのか。本講では、宗教学の成り立ち、その構造を確認するとともに、宗教現象を、信じる者、信じる対象、信じるということがそれを通して成立する儀礼・象徴へと分節し、それぞれに即して、宗教学の見方を提示する。	
	心理学概論	人がどのように出来事や世界を捉えているのか、個人が他者からどのように認識されるのか、またどのように他者と関わって生活しているのかなどについて取り上げる。その際、身近な事例や実際の研究例、実験例などを示しながら解説していく。	
	社会・地理歴史科教育法1	本授業は、社会科の目的や歴史等について学習するとともに、学習指導要領を中心に中学校社会科（地歴分野）・高等学校地理歴史科の目的・内容及び指導法について理解することがねらいとなる。講義に際しては、実際の現場の授業の様子等を紹介しながら、教科に係る基礎的・基本的な指導の在り方とともに、創意・工夫のみられるより実践的な指導法についても学んでいく。	
	社会・地理歴史科教育法2	本授業は、中学校社会科地理的・歴史的分野並びに高等学校地理歴史科の実際の指導法について、模擬授業等を通して体験・理解することが主なねらいとなる。具体的には、グループに分かれ学習指導要領を踏まえた教材分析や学習指導案の作成を行うこと。グループ内での授業の試行を経て、履修者全員の前で模擬授業を行うこと。授業後は、全員で授業分析（協議）や授業評価を行うことなどを通して授業実践力を身に付ける。	
	社会・公民科教育法1	基礎的・基本的な知識、概念を習得させるとともに、現代社会に対する関心を高め、人間としての生き方を考えさせる授業づくりをめざします。そして教材の工夫をはじめとして、言語活動を多く取り入れた活動にも配慮した学習指導の在り方を追求していきます。普段の授業は講義形式で進めていきますが、我が国の抱えている諸問題などについては必要に応じグループ討議などを取り入れ、主体的に授業に参加する機会を設けます。	

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科 教科 専門 コース	社会		
	社会・公民科教育法 2	学習指導案の作成に関する指導の後、それぞれの班ごとに主題を決め、学習指導要領を踏まえて学習指導案を作成することになります。出来上がった指導案をもとに実際に授業を行います。ここで大切なことは互いに授業を観察しあうことで授業を評価する力も高めていくことにあります。この活動を繰り返していくことで授業の在り方、進め方などを学び、公的的分野の学習指導力を育てていきます。	
	初等社会指導法研究 1	本授業は初等社会科に関する講義と、初等社会科の授業実践（学習指導案の作成や模擬授業など）を中心に展開します。平成20年3月の学習指導要領改訂に伴い、「生きる力」の理念の継承と、その具体的な手だての確立が求められています。講義ではまず社会科の成立背景や初等社会科の特色について学習します。次いで、学習指導要領の変遷と今次改訂について学び、小学校学習指導要領に見られる社会科の教育目標・教育内容を把握します。その上で、実践を想定した学習指導案の作成を行い、初等社会科の指導法を検討します。	
	初等社会指導法研究 2	本授業は初等社会科に関する講義と、初等社会科の授業実践（学習指導案の作成や模擬授業など）を中心に展開します。「生きる力」の理念の継承に伴い、主体性や個性を尊重した教科のあり方と、学習や生活の基盤となる知識・技能の習得が求められています。講義では、初等社会科の指導法の特徴を学習し、学習指導案作成の具体的なポイントや授業分析の方法を理解します。さらに、教材研究や評価、年間指導計画の作成を通じて、実践に即した指導法を検討します。	
	数学		
	代数学 1	線形代数、すなわち行列・行列式及びベクトル空間の理論を学んだ後、いわゆる抽象代数学の群・環・体の概念に、具体例を多く取り上げることにより、慣れることを目標とする。準備的教材として写像概念を重視する。2項演算、群の定義、生成系と基本関係、有限置換群、シロー群の定理、正規部分群の列、準同型定理、群の行列表現、などの項目を学ぶ。	
	代数学 2	代数学 1 を学んだ後、ガロア理論を専門的ではなく、やさしく取り扱う。特に多くの具体例を学ぶ。5次以上の一般代数方程式が解の公式を持たないことと、群と体の相互双対性(ガロア対応)を強調する。すなわち、解たちを単に集合として考えるだけでなく、それら解たちの変換全体を新しい空間としてとらえる幾何的アイデアを持って、ガロア群を考える。可解群、巾零群、有限体、円分体、環上の加群、作図問題、正規拡大体、分離拡大体、などの項目を学ぶ。	
	幾何学 1	ユークリッド幾何学についての講義を行う。主な内容は次の通りである。三角形の五心、三平方の定理(ピタゴラスの定理)、オイラー線、チェバの定理、メネラウスの定理等。ユークリッド幾何学に関する基本的な知識を学ぶことを目的とする。予備知識として、基本的な用語(平行、垂直、中点等)、記号(2本の直線が平行であることを表す記号、2本の直線が垂直であることを表す記号等)、基本的な定理(三角形の合同条件、円に内接する四角形に関する定理、円周角の定理等)は仮定する。	
	幾何学 2	作図・作図問題についての講義を行う。内容は以下の通りである。作図のルール、基本的な作図(平行線・垂直の引き方、辺の2等分線・3等分線の作図等)、加減乗除と平方根の作図、具体的な作図問題(正五角形の作図等)、作図可能性と不可能性。講義は、実際にコンパスと定規を用いて作図を行いながら学習を進めていく。ギリシャの3大作図問題(角の3等分問題、立方倍積問題、円積問題)を考えていくことを通して、作図の不可能性(例えば、角の3等分線の作図不可能性)をどのように証明することができるのかを理解することを目的とする。	
	解析学 1	逆三角関数や指数関数や対数関数などいろいろな関数をとりあげる。また、媒介変数表示や極方程式、双曲線関数も取り上げた後に、それらの導関数、たとえば逆三角関数などの導関数も説明し、対数微分法にもふれる。	
解析学 2	媒介変数の微分法や偏導関数を取り上げる。またいろいろな型の不定積分や定積分を取り上げた後、異常(特異)積分なども取り上げる。さらに2重積分計算まで行う。		
確率論	確率論の本質を出来る限り平易に解説し、例題や問題演習を中心に行うことによって身につくような授業展開を目標とする。授業展開は初心者にとって具体的に確率論の理解ができるように、我々の日常生活の身のまわりにある具体的な例題を取り扱って学習する。		
統計学	統計学の本質を出来る限り平易に解説し、例題や問題演習を中心に行うことによって身につくような授業展開を目標とする。授業展開は初心者にとって具体的に統計学の理解ができるように、我々の日常生活の身のまわりにある具体的なデータを取り扱って行なう。		

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科 科目 教 科 専 門 コ ー ス	数学 コンピュータ演習 1	数学文書作成用に開発されたTeXの使い方を学習する。現在では直接TeXを用いるというよりも使いやすいLaTeXを用いることが一般的であるので、授業においてもLaTeXを使う。毎時間、様々な文章形式を取り上げLaTeXで実際に文書作成を行う。具体的には箇条書き・引用・表の作成などである。特に数式表現に長けているソフトウェアなので、数式表現（演算子・括弧・数学記号・行列など）は重点的に学習する。LaTeXはフリーソフトで、様々なOS上で動くので自宅PCでも使用することが可能である。	
	コンピュータ演習 2	C言語を用いて、簡単なプログラム作成の方法を学び、数学の問題をプログラム処理して解くことを学習する。まず、プログラム作成で基本となる演算・変数型、条件分岐、繰り返し・配列などの使用法を学習する。これらの演習を通して、プログラム作成とエラー修正及びプログラムの実行がスムーズに行え、エラー修正に関しては、エラーメッセージにより自らエラー修正が出来るようになることを目標にする。これらのプログラム処理を応用して、数学の問題を解いたり簡単なアルゴリズムについても学習する。	
	コンピュータ演習 3	数式処理ソフトウェアの基本的な使い方を取得し、それらを応用して数学教材作成などに応用できることを目標とする。数値計算、数式の簡略化と展開・因数分解、方程式、微分積分、行列、グラフなどを扱う。教材作成のためにWord、Powerpoint、LaTeXなどの連携使用についても学習する。数式処理ソフトウェアは結果が出るまでの途中経過が表示されないで、単に命令を入れて答えを出すだけに終わらず、結果が出るまでのアプローチを自分でフォローすることが必要である。	
	コンピュータ演習 4	この演習では、数値計算の基礎及びJavaアプレットの演習を行う。コンピュータ演習3では数式処理ソフトウェアを用いて方程式を解いたりしたが、この演習ではプログラム言語を用いて方程式を解く。二分法やニュートン法、逆行列やガウスの消去法による連立方程式の解法などを演習する。また、Web上で視覚的にわかりやすい数学教材を作成するためにJavaアプレットについての簡単なプログラム演習を行う。	
	数学科教育法 1	中学校や高等学校における数学及びそれらに関連する高等数学を取り上げ、その内容について学習する。高等数学での考え方は小・中・高校で学んだ算数・数学の考え方が基礎となっているので、それらの考え方を復習しつつ新たな数学の知識を得ることを目的にする。改めて「数」とは何かを考え、素数・命題論理・集合などについて取り上げる。	
	数学科教育法 2	中学校や高等学校における数学及びそれらに関連する高等数学を取り上げ、その内容について学習する。高等数学での考え方は小・中・高校で学んだ算数・数学の考え方が基礎となっているので、それらの考え方を復習しつつ新たな数学の知識を得ることを目的にする。図形やベクトル、微分法・積分法、確率・統計などについて取り上げる。	
	数学科教育法 3	中学校における数学教育を取り上げ、学習指導要領にある目標・内容について理解し、実際に学習指導案を作成し模擬講義を行うことにより実践的な指導法を身につけることを目標とする。前半では、学習指導要領に書かれている目標や指導内容を押さえつつ、中学数学の教材研究や指導法について学習する。後半では、実際に学習指導案を作り模擬授業を実施する。	
	数学科教育法 4	高等学校における数学教育を取り上げ、学習指導要領にある目標・内容について理解し、実際に学習指導案を作成し模擬講義を行うことにより実践的な指導法を身につけることを目標とする。前半では、学習指導要領に書かれている目標や指導内容を押さえつつ、高等学校における数学の教材研究や指導法について学習する。後半では、実際に学習指導案を作り模擬授業を実施する。	
	初等算数指導法研究 1	新学習指導要領算数科では、四領域の内容がどのようになっているかについて、1年から6年の内容の全体を見通し把握し、その特徴をつかむ。そして、算数科の目標や反復（スパイラル）がどのように扱われているか、また具体的に「算数的活動」の取り扱いや留意点について解説する。	
	初等算数指導法研究 2	A数と計算、B量と測定、C図形、D数量関係の教材研究を算数的活動を考えた授業、教材研究を行う。そして、具体的に「学習指導案」作りを行う。	
理科	物理学概論 1	物理学概論1では古典力学の初歩を学ぶ、ニュートン力学の基本的な3法則から物体のさまざまな運動がどのように理解されるのかを知る。これらの事象について我々の日常生活でのいろいろな現象と結び付けることで力学理論をより身近なものとして感じる事ができると同時に興味や理解度が増し、その考え方を自然と身につけることができるように講義の中で解説する。	

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 専 門 コ ー ス	物理学概論 2	現代物理学はニュートン力学や電磁気学等の古典物理学を土台として、20世紀初頭の原子論、相対性理論、量子論を契機に広大な宇宙から極微の世界を対象に大きく発展してきた。物理学概論2で取り上げる諸概念は、我々の日常の感覚から懸け離れたものであるが、本講義はこの領域の幾つかの分野を取り上げ、我々の日常生活に応用されている測定機器や観察機器さらにはリニアモーターカーなどへの応用例を上げながら、その考え方の有用性について初心者にも分かりやすくかつ興味が持てるような内容として解説する。	
	物理学実験（コンピュータ活用を含む。）	物理学は近代実証科学の一つであり、理論的仮説と実験的検証を繰り返すことで、自然を記述する概念の理解を深めてきた。これは自然科学全体に共通する手法であるが、特に物理学実験は基礎的な概念と実験結果を結び付けることが比較的容易である。すなわち、この手法を実践するのに適している学問といえる。この物理学実験により、自然科学に共通して不可欠な、「現象を適切に観察・測定し、得られた結果を適正に取り扱い、客観的な結論を得ると同時にその過程を報告する」技能を修得することを目標とする。	
	化学概論 1	一見、常識と思われがちな学習者が抱く化学に関する疑問（例：「空気に重さはあるのか」、「元素記号はいつから存在するのか」、「モルは必要か」、「水はなぜ常温で液体で、色々なものを溶かすのか」、「有機と無機の違い」等）を教師のファシリテートにより学習者が主体的に解決していくという設定で、「理科教師として必要な化学の基本的なことは・考え方」、「化学の歴史」、「化学教授法」を総合的に学ぶ事を目標とする。また、内容によっては、分子模型による演習、簡単な実験・演示実験を行う。	
	化学概論 2	化学とは「物質とその変化」を対象とする分野である。本講義では、日常生活における「物質とその変化」を以下の具体的な事例で紹介し、受講生が化学をより身近なものとして感じ、将来の授業づくりのヒントとなることを期待する。取り扱う事例：食と化学（食品成分、食べ物のゆくえ、発酵と腐敗、肥料と農薬）；健康と化学（医薬品とサプリメント）；衣・住と化学；環境と化学（汚染物質、環境保全、地球温暖化）；生命の起源と化学進化。	
	化学実験（コンピュータ活用を含む。）	基礎的な化学実験や衣食住に関わる実習を通して、化学実験に関わる基礎的な知識を得るとともに、実験器具の取り扱いや簡単な実験操作を習得することを目的とする。また、試薬の取り扱いや実験廃棄物の処理などの安全教育、環境教育も可能な範囲内で盛り込む。さらに、実験の意義、実験データの取扱い、レポートの書き方、コンピュータを用いた演習についてもあわせて指導する。教員になった時の演示実験を想定しながら実験に臨んでほしい。	
	生物学概論 1	現代の生命科学において、共通の基盤となっている遺伝子の概念、遺伝子の実体、遺伝情報発現の調節が理解されるにいたる歴史を振り返り、さらに近年得られた知見までを紹介することで生物を考えるフレームワークを構築する。これは日常生活において遭遇する多様な生命科学諸領域の知見を自ら位置づけるために必須のものである。	
	生物学概論 2	教科書の模式図にあるような細胞は存在するのか？植物と動物の違いは？そもそも生物とは？寿命とは？教育の現場でも直面するであろう多くの素朴な疑問に対する回答を探し求める力を養成することを目指して、生物を構成する単位である細胞を中心に据えた生物体の構造・生物の形態形成を考える。	
	生物学実験（コンピュータ活用を含む。）	キャンパスの豊かな自然（特に植物相）を利用して、四季の移り変わりや生物間の相互作用を観察する方法を考える。身近な食材の解剖を行う事で生物の体のつくりを学び、顕微鏡を用いた観察を通じて生物を構成する単位が細胞であることを確認する。実験・観察で得られた結果（特に画像）をまとめ、発表するためにコンピューターを利用する方法についても演習する。これらを通じて、教育の現場において活用できる素材の蓄積、技術の向上をはかる。	
	地学概論 1	本講義は地学（地球科学）の基礎を学び理解することである。地学概論1では「地球表層、マントル、コアのダイナミクス」すなわち「プレートテクトニクス理論」と「ブルームテクトニクス理論」の概要と原理を学ぶ。さらに「太陽系誕生のメカニズム」と「46億年前の地球誕生から生命誕生」までをひも解く。最新の研究成果及び話題を織り交ぜ解説する。	
	地学概論 2	本講義は「46億年の地球史」を学び、「地震」と「火山」の概要と原理を学ぶ。とくに地球誕生から46億年かけて形成した気圏、水圏、地圏、生物圏における物質、エネルギー循環とその相互作用について学び、地球を一つのシステムとして捉え、地球環境の変動メカニズムについて理解する。最新の研究成果を織り交ぜ解説する。	

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科 科目 教科 専門 コース	理科		
	地学実験（コンピュータ活用を含む。）	本実験では、フィールドワークとしての地学の本質を、野外実習や室内実験などを通して学ぶことを目的とする。実験の前半では、野外調査実習を集中的に行い、関東近郊に分布する世界的に注目されている地層の観察、さらに岩石・鉱物や化石の採集などを通して、フィールドワークにおけるものの見を身につけてもらう。後半はおもに実験室内において、岩石観察用薄片試料の作成と顕微鏡観察を行い、野外調査地の地質学的歴史（地史）を組み立てる作業を行う。また、地学データ等を活用し、コンピューターを用いたデータ処理の実際を学ぶ。	
	理科教育法 1	理科教育法は、物理、化学、生物、地学の各分野で修得した知識と体験をもとに、実際の教育現場である中学校、高等学校の生徒に「自然科学の基本原則と法則」や「自然科学の調査方法」を深く、楽しく、学んでもらえるような優れた方法論と指導力を養成する講義です。理科教育法 1 では自然科学領域の一つとして、地学分野教育について理解を深める。また、地学分野を実際に指導する場面を想定し、学習指導案の作成や教材研究を組み入れ実践的な指導力を身につける。	
	理科教育法 2	理科教育の現場は教室に限らない。日々の生活の中にある機会を生かし理科の楽しさを生み出すための実践的な方法を考える力を養成することを旨とする。理科教育法 2 では、「私達が生物であること」、「生きていくために他の生物を体に取り入れることが必要であること」に注目して、生物学領域の教育に資する指導案や教材の開発について食材を利用することを考える。	
	理科教育法 3	「理科が“得意”な先生」は、「理科好き」の子どもたちを育てているのだろうか。現在の科学体系を常識化し、その常識を疑問視する子どもたちの「なぜ」「本当か」を受け止めず、「理科嫌い」を育成していないだろうか。本講義では、「科学・科学的に関する議論」「科学（化学）史における“常識”」「仮説展開型の化学教材」等を通して、科学は疑問から始まり、思考と行動で解決へ導くものであると感じ、さらにその科学の楽しみを実感できる理科授業の可能性を探索する事を目標とする。	
	理科教育法 4	本授業では、理科の各分野の目標、教育内容、指導計画、指導方法、実験・観察、更には視聴覚教材の利用などについて授業のなかでどのように役立てて行くかについて学ぶ。各学校教育における理科教育、特に物理分野について新たな認識を持ち、教科書に出てくる現象や法則について常に実験・実証といった立場に立った教育手法を学ぶと共に「物理が楽しくなる」望ましい物理授業について、定理や法則を数式だけで説明するのではなく、簡単な実験を介して興味を持って学ぶことができるような実践的指導方法を身につける。	
	初等理科指導法研究 1	「初等理科教育法」に引き続き専門的な教材研究、実験の方法、指導案作り、模擬授業の訓練を重ねて、実践的な指導力を確実に身につける。まずは、「小学校・理科」の内容を学び合い、次に、その内容をどのように教えると、子どもたちが意欲的になり、かつ有効に学んでいくのか、の実践的な研究をする。理想的な指導案作り、実験の方法についても学ぶ。模擬授業を行いつつ授業力を高める。	
	初等理科指導法研究 2	「初等理科指導法研究 1」に引き続き、さらに専門的な教材研究、実験の方法、指導案作り、模擬授業の訓練を重ねて、実践的な指導力を確実に身につける。「中学・理科」の内容を学びつつ、さらにそれをどのように教えると、子どもたちが意欲的になり、かつ内容を確実に自分のものにするのかなど実践的な研究、学習を行う。模擬授業をやることで、しっかりとした実践力を身につける。さらに中学理科を正面に据えることで、小・中連携教育を担当することの出来る力を身につける。	
	音楽		
	ソルフェージュ 1	音楽性豊かな表現をするための基礎的能力を養うために欠かせないソルフェージュの学習を、演習形式で多角的に展開してゆく。音程・リズム・フレーズ等、楽譜を見て歌うことが出来る力、すなわち正確な読譜力、音楽を形づくっている要素を聴き取る聴取力、さらに記譜の能力などを併せて養成する。また声楽を中心に、器楽や作曲などとの関連についても配慮して学習をすすめる。	
ソルフェージュ 2	音楽性豊かな表現をするための基礎的能力を養うために欠かせないソルフェージュの学習を、演習形式で一層高める。正確に楽譜を見て歌う読譜力を伸ばし、曲の構成や美しさを感じ、音楽のもつ味わいを深く読み取ることを重視する。さらに音楽を形づくっている要素を聴きとる聴取力、記譜の能力などの充実をはかり学習する。		
声楽・歌唱 1	声楽・歌唱表現においては、私たちの体内にある発声器官が楽器であるということを認識することが重要である。この授業においては肉体的機能、音声学的知識をふまえ、発声の基本である姿勢・呼吸法・共鳴法等、基本的な発声法を演習形式で学ぶとともに、楽曲の表現内容を明確化し、その意図を明確にしながら創造的な表現を行うことを学ぶ。また、歌唱においては歌詞が重要な関連を持っており、言葉におけるリズム・アクセント・イントネーション等のように結びつけてゆくか、基礎的な技術を併せて習得する。		

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科 科目 教 科 専 門 コ ー ス	音楽		
	声乐・歌唱2	声乐・歌唱表現においては、私たちの体内にある発声器官が楽器であることを前提とし、発声の基本である姿勢・呼吸法・共鳴法を重視し、日々のトレーニングと声に対する感性を高めることができるように指導を行う。歌詞や曲想にふさわしい表現を充実させるには、徐々に声域を広げ無理のない豊かな発声を身につけることである。さらに声乐・歌唱には言葉が重要な関連をもち、言語の発音・意味など言葉を音楽化する表現力を演習形式で習得する。	
	声乐・歌唱3	声乐・歌唱2の履修によって得た発声を更に伸ばし、言語の発音等これまで習得した技術を応用し、歌唱体験で培われた諸能力を生かして、より一層充実した豊かな歌唱表現を追究する。さらに作品が作曲された意図を探り、曲の構成を把握するとともに、言葉のニュアンスが音程にどのように結び付いているかを感じ取り、感性を高めながら創造性と豊かな表現について学ぶ。	
	器楽1	アルトリコーダーの基本奏法、合奏ならびに打楽器演奏法の基本を学習する。パロック（イギリス）式運指のアルトリコーダーを用いて、実習を行う。また、打楽器奏法の基礎をマスターし、Snare Drum（小太鼓）、Bass Drum（大太鼓）、Cymbal（シンバル）、Triangle（トライアングル）等を始めとする各種打楽器の取り扱い、演奏法をマスターする。	
	器楽2	アルトリコーダーの独奏、合奏、アンサンブルならびに編曲法を学習する。パロック（イギリス）式運指のアルトリコーダーを用いて、独奏、合奏、アンサンブルを行うとともに、ソプラノリコーダー、テナーリコーダー、バスリコーダー等も加えた合奏、アンサンブルの実習を行う。また、リコーダーを中心としながら、編曲法の基礎をマスターする。	
	器楽3	ピアノ実技を行う。歌唱教材の伴奏、弾き歌いを通じてピアノ演奏法、伴奏法の実習を行う。個別指導を中心とする。	
	器楽4（和楽器）	中学校・高等学校音楽科表現活動における和楽器実技に対応するための箏を用いた器楽指導の基礎を学ぶ。我が国の伝統音楽の学習には、器楽の基礎指導に加えて、和楽器の指導を通じて子どもたちに「和の感覚」を伝えていくことが重要な視点である。本演習では、初めて和楽器および日本音楽に接するものを対象として、「箏」の基礎的奏法の実技指導を中心に、伝統的な歌唱・日本的な学習法を生かした器楽指導・鑑賞指導のポイントも含めた講義を行う。	
	指揮法	合奏、合唱等で必要な指揮法の基本を学ぶ。斉藤秀雄氏の「指揮法教程」を素に「予備運動」「叩き」「平均運動」「しゃくい」「先入」「引掛け」「数取り」「はね上げ」等の基礎運動をマスターし、実際の曲でどの様にそれぞれのテクニックを用いるかを学習する。講義科目ではあるが、実習が大半を占め、実技科目に等しい内容になる。課題曲、自由曲は受講生相互のピアノによる演奏とする。	
	音楽理論1	音楽の基礎的な成り立ちと構造を解説し、グレゴリオ聖歌から始まるヨーロッパ音楽の歴史的発展の実例をまじえた幅広い音楽分析の能力を養う。CDの鑑賞、ピアノ演奏等を伴った基礎的かつ総括的な活動を取り入れた、より深い理解をもたらすための分析的授業を展開する。また、日本の古典的音楽についても実例をまじえ、鑑賞、分析、解説を行い、これらについて豊富な体験を通して学んでゆく。	
	音楽理論2（楽典）	音程、音階、調性等の音の高さの關係の詳細な理論を音楽の鑑賞、分析、実践する立場から明解に解説し、楽曲の形式、拍子、様々な楽語、楽器等に関する事項はCD、DVD、ピアノによる実演等の実例をひきながら、より幅広く、具体的な理解を深めてゆく。	
音楽理論3（音楽史）	ヨーロッパのクラシック音楽の黎明からバロック、古典派、ロマン派、近代音楽から現代音楽までの流れを中心に、シャンソン、ポップス、ジャズ等クラシック以外の音楽までを視野にいれた音楽風景を講ずる。また、それらをCD鑑賞、ピアノなどの楽器による実演に触れることにより、総括的でより深い理解に導く活動を行う。 能楽、長唄、古典的な箏曲から現代邦楽に至る日本の音楽、あるいは中国、イラン、インドその他、非ヨーロッパ圏の音楽も視野に入れた学習を行う。		
作曲・編曲法1（基礎）	簡単な2小節程度のメロディーのモチーフを与え、8～16小節のメロディーを作曲させる。主要三和音の適正な使用により、メロディーにピアノ伴奏を付ける。自作のモチーフによる16～32小節程度のピアノ、あるいは歌、あるいは他の楽器のための作曲を行う。以上の活動を通して完成した作品を共有したり、評価し合ったりするための演奏や発表の場を設けることも併せて行う。		
作曲・編曲法2（応用）	副三和音、副七の和音、借用和音及び転調の技術など、ある程度高度な和声を使用した楽曲の作曲を学ぶ。ピアノ曲、歌曲、器楽曲等の作曲および日本旋法を用いた作曲の学習を行う。有名な曲の様々なアンサンブル形態への編曲といった、実践を中心に学習を行う。以上の活動を通して、完成した作品を共有したり、評価し合ったりするための演奏や発表の場を設けることも併せて行う。その企画等も学生にゆだねる。		

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学科 科目 音楽 専門 コース	音楽科教育法 1	中学校・高等学校の教育における音楽科についての基礎的な知識を、その通時的、共時的諸問題とともに解説する。そのうえで、特に現行学習指導要領・音楽編（高等学校は芸術科音楽）について、適切な読み方を指導する。その趣旨に即し、音楽科の学習指導を歌唱・器楽・創作・鑑賞の4つの分野からとらえ、それぞれの活動に関する教材研究について、実例を検討しながら多様な方法があることへの理解を促す。さらに〔共通事項〕の意味するところ、教材研究におけるその扱い方にも触れながら、最も基礎的な段階の教材研究が自力で出来るように指導する。		
	音楽科教育法 2	音楽科教育法 1 で身につけた、中学・高等学校音楽科（芸術科音楽）についての知識と理解を深め、指導と評価を一体化させた授業の立案が出来るように指導する。音楽科の学習指導を、歌唱・器楽・創作・鑑賞の4つの分野からとらえ、それぞれを扱った基礎的な題材指導計画の実例を検討させるとともに、教材選択の方法を指導する。以上に基づき、基礎的でスタンダードなタイプの題材指導計画を立案し、その学習指導案を作成できるようにする。		
	音楽科教育法 3	音楽科教育法 1 および 2 で身につけた、中学校音楽科指導についての基礎力の上に、題材の指導計画力をつけ、よりよい学習指導案の作成法について練習を積むと同時に、模擬授業を通じた基礎的な実践力を養う。第 4 回～11 回の授業においては、歌唱・器楽・創作・鑑賞のそれぞれの活動分野を軸にした指導案を実際に作成し、部分的に模擬授業を行い、それについて協議していく。また、特に日本の伝統音楽の題材化について講じ、その代表的なジャンルについての基礎指導を行うとともに、資料の扱い方や指導計画に組み入れる方法を指導する。		
	音楽科教育法 4	音楽科教育法 1～3 で身につけた、音楽科指導についての基礎的な計画力・実践力をさらに高めるために、題材指導計画立案、指導案作成の経験を積み重ねるとともに、講義内では模擬授業とその協議を重ねる。歌唱・器楽・創作・鑑賞のうちの複数分野を1つの題材に含めたり、表現と鑑賞を一体化させた題材を立案したりできるように、優れた指導案の実例を示しながら指導する。また、特にアジア地域を中心に諸民族の音楽の題材化について講じ、代表的なものについての基礎的理解を促すとともに、資料の扱い方や指導計画に組み入れる方法を指導する。		
	初等音楽指導法研究 1	小学校第1学年から第6学年の児童の発達を踏まえながら、各段階にふさわしいスタンダードナンバー的な歌唱教材を中心として、その指導法を教える。1つ1つの教材曲の音楽的な魅力について考え、それを引き出す基礎的な教材研究を行い、さらに実際の授業において、どのように児童と共に音楽をつくり出すかについて研究する。学生自身が適切な発声法を身に付け、歌唱の技能を高めることが不可欠であるので、声楽の基礎技能についても随時指導を行っていく。		
	初等音楽指導法研究 2	小学校第1学年から第6学年の児童の発達を踏まえながら、各段階にふさわしい器楽および身体表現を中心としてその指導法を教える。現場で活用しやすい打楽器類、リード楽器類、リコーダーなどについては特に、その取り扱いや奏法を習得させる。また身体運動を活用した指導についてはゲーム的な要素の強い反応練習から始め、徐々に音楽のリズムの要素（拍、小節、リズムパターン、フレーズ、セクションなど）を感じ取り表現できるように指導してゆく。		
	美術	デッサン 1	鉛筆や木炭などの伝統的でシンプルな画材を用い繰り返しデッサンをすることで、絵画・彫刻のみならず、美術における様々な領域の基礎的な表現能力を培う。人物や静物を描写することを通し観察力を養い、表層の変化ばかりでなく骨格を発見するなど形態についての認識を深め、対象の造形的な美しさを感じ取り、表現する力を身につける。また、描き・確かめ・修正する作業の中で、バランスやプロポーション、面・空間・明暗といった造形表現の基本要素を学ぶ。	
		デッサン 2	デッサン 1 の内容を踏まえ、さらに粘り強くデッサンをつづけることで、造形表現の基礎技能をより確実なものにしてゆく。また、様々な素描の材料があることを経験的に認識させることでその特性を理解し、表現の幅の広がりや自分に合った風合いの表現ができるようにする。形をしっかりと描くことが大切であるが、単に目に見えるものを正確に描写するだけではなく、緊張感や動勢、量感をも感じ取ることができるようになる。	
		絵画 1	中学校・高等学校における美術科指導に必要な絵画の基礎的な技法及び表現力を学ぶ。デッサン 1 との関連を図りながら、対象をよく観察して感じ取った美しさや情感を表現したり、自らの内面に働きかけ主題を生成し表現できるようにする。その中で、絵画材料の多様性、各種用具の使い方や独自の用具の案出や使用法の工夫、表現するための技術等を自前のものにするための必要性を理解する。あわせて、絵画論の考察や絵画鑑賞も行う。	

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科 美術 専攻 コース	絵画 2	デッサン 2 及び絵画 1 との関連を図りながら、中学校美術科・高等学校芸術科美術における美術科指導に必要な絵画の基礎的な技法及び表現力を学ぶ。その中で、自然、自己、社会などを深く見つめ、自分なりの主題を生成し独自の表現世界を構想できるようにする。また、自らの構想に合う表現形式の選択や様々な技法を試みることで、絵画表現のもつ造形的な創造活動の原初的な価値観が芽生えることを期待したい。	
	映像メディア表現 1	カメラやコピー機・プリンター、ビデオやコンピュータ等のアナログ及びデジタル映像メディアを利用して、人間社会のコミュニケーションがどのように行われているか、また、それらの歴史の変遷をたどることで映像表現が果たしてきた役割等について理解する。そのうえで効果的な造形的映像表現を実現するためにどのような手法があるか、メディア表現の基礎技術を概観し初歩的な表現活動を通して機材の使用法等を習得しながら、その特性について考察する。	
	映像メディア表現 2	映像メディア表現 1 で概観把握した素材を利用し、種々の加工技術による描画・造形技法の経験的体得を学習する。簡単な描画や造形課題の制作を通してコンピュータを使うことによる発想や表現の広がりや、段階的なソフトウェアの利用による従来とは異なる造形表現感覚を体感させる。また中学校・高等学校の授業における映像メディアの利用は、教師と生徒の双方に、アイデアを練ったり編集したりするなど発想や構想の場でも力を発揮することを理解する。	
	彫塑 1	中学校美術科・高等学校芸術科美術の指導に必要な彫刻の基礎的な技法及び表現力を学ぶ。デッサン 1 との関連を図りながら、対象をよく観察して感じ取った美しさや情感を表現したり、自らの内面に働きかけ主題を生成し表現できるようにする。可塑性を有する素材を盛り付けて形成するモデリングと、種々の素材を刻み込んで形成するカービングの両方の手法を経験し、彫刻制作の基礎（絵画表現では得にくい実在感や躍動感の生成の感覚）を身につける。	
	彫塑 2	デッサン 2 及び彫塑 1 との関連を図りながら、中学校美術科・高等学校芸術科美術の指導に必要な立体表現の基礎的な技法及び表現力を学ぶ。その中で、自然、自己、社会などを深く見つめ、自分なりの主題を生成し独自の表現世界を構想し実立体として形成できるようにするために、三次元的空間の認識や、自らの働きかけによって現れるマッサ（塊量）やボリューム（量感）の実体感など、立体的な心象表現の創造的な価値観に気づかせる。	
	デザイン A	主にグラフィックデザイン（視覚的な伝達効果を主目的とするデザイン）についての理解を深め、その固有の目的のために視覚的なアイデアを考案し、具体的な表現のための色・形・質感・文字列などを的確に計画的選択をすることがデザインという作業であり意味であることを知らせる。グラフィックデザインの原形ともいべきポスターの制作を通して、ポスターデザインに求められる役割や表現効果を認識し、用途や条件に即した適応表現の社会性等も学習する。	
	デザイン B	主にクラフトデザイン（美的造形性や生産性を主眼とする立体造形のデザイン）についての理解を深め、計画力、設計作図・読図の能力や用途にあった加工材料・用具の使用法など、実制作の技能を高める。椅子のデザイン等のテーマに沿って、調査、構想、構成・造形、表現（サーベイ、アイデアスケッチ、レンダリング、モデル形成）の各局面の手法、技術の基本を習得するとともに、プロセス全体を考えて思考し作業する力を培う。	
	平面構成基礎	造形的な創造活動の基本となる諸要素（形体、配置、比率、リズム、動勢、テクスチュア、色彩）についての基本的な原理を、平面の制作を通して学ぶ。基本形体を分割し再構成する過程で、動勢・リズム・バランスの変化を捉える。また、彩色することにより初期の平面が構成を変貌させることを知り、色と形の相関関係を学ぶ。デザインの単なる初歩的学習という意味合いではなく、造形全般に通じる客観的な審美性に気づかせ、手作業の中から基本的な造形言語を発見し確認することを目的とする。	
	立体構成基礎	立体の制作を通して、造形的な創造活動の基本となる諸要素（形体、配置、比率、リズム、動勢、テクスチュア、色彩）についての基本的な原理を学ぶとともに、構造や機能の造形的可能性について研究する。ここでは、豊富な加工特性をもつ素材である紙類を用いて、どのような形状変工ができるかを探求し、曲げる、切る、組む、揉む、引掻くなどの素朴技法を中心に、紙のもつ繊細さや軽快さなどを生かしながら立体制作による空間への造形感覚を養う。	
映像メディア表現 3	主に写真（静止画像）を使った表現についての理解と技術を深める。被写体に対して、どのように興味関心を抱き感動したのか、訴えたいことを効果的に表現するための写真撮影の基礎技法を学ぶ。また、何枚かの写真を組み合わせ、物語性をもった組み写真を構成したり、写真家等のテーマに基づいた写真表現の鑑賞活動を通して、自他の作例の制作意図や表現意図を読み取りかつ味わいながら、改めて写真表現の役割と展開の可能性を考える。		

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科 科目 美術 専 門 コ ー ス	映像メディア表現 4	主に映像（画像）を動かして見せる表現についての理解を深める。模擬CMや短編記録映画等の制作を通して、ビデオ撮影および編集の基礎技能を獲得する。また、クレイアニメや人形アニメなどの簡単なストップモーションアニメの制作を通し、絵（画像）や人形などをアニメーション化することで、なぜ動いて見えるのか、アニメーションの語源が「命を吹き込むこと」をキーワードにしながら映像表現の有効性および発展可能性について考察する。	
	工芸基礎A	内外の民芸的な用途を前提とした造形表現が工芸であることを知らせ、制作において用いられる主たる素材である粘土・木・紙・金属等の基本的性質とそれぞれがもつ造形性について演習を通して研究する。その上で、ここでは特に陶芸の成形から焼成までの一連の工程を体験し、制作に必要な技法・表現方法などを具体的に学ぶ。窯の取り扱い方や焼成方法、窯入れなどを理解し、自分で操作できるようにする。	
	工芸基礎B	主に国内の工芸品について、素材をテーマとして検証する。また実際に素材に触れ、その加工技術を学ぶ。素材と技術と文化の関わりから、モノの在り方や日常生活の中でのその役割を考えると同時に、使用する人や場に求められる機能的な美しさ（用の美）を知らせながら、ここでは特に木材の加工法を学ぶ。計画から仕上げまでの全工程を通して、木工芸における素材や道具の基本的な扱いを学び、さまざまな表現方法を修得する。	
	工芸A	工芸基礎Aの延長として、内外の民芸的な用途を前提とした造形表現が工芸であることを知らせ、制作において用いられる主たる素材である粘土・木・紙・金属等の基本的性質とそれぞれがもつ造形性について演習を通して研究する。その上で、ここでは特に陶芸の成形から焼成までの一連の工程を通じて、制作に必要な技法・表現方法などを具体的に学ぶ。	
	工芸B	工芸基礎Bの延長として、日本の伝統的な工芸の基本的素材である木を用い、その性質や造形性、加工法などを学ぶ。作品主題を伝統的な社会・歴史的要因に思いを馳せたり、身近な生活環境のなかに思考することより始め、樹種や技法選択など行い制作する。様々な技法を学び、自ら生成した主題や自分なりのイメージを表現できるようにしながら、中学校美術科・高等学校芸術科美術の授業でどのような展開が可能かを考察する。	
	教職美術入門（鑑賞）	人間の創造的造形活動によって生み出されてきた文化遺産や美術作品を、様々な観点から鑑賞し理解を深め、それらのよさや美しさを深く味わう中で、感性を磨き、美術に接することの喜びや価値観を再認識する。また、講義内容を単に抽象的な言葉の解釈として学ぶのではなく、例えば作品の制作過程や表現の工夫などを、自らの手を動かし追体験する中で理解し、「なぜ、何のために」といった問題意識をもって考えることができるようにする。	
	美術理論 1	ここでは主に「造形の原理」について、イメージとしての認識と実態からの観察に関連性が持てるように学習する。たとえば、幼児期からの子どもの造形的な発達段階には、世界共通の普遍的な特徴があると学術的に定位されていたり、人が自然の風物や造形的に表現されたものに対して美しさを感じる時には、美的秩序の構成要素を見いだしている、など、人間はなぜに造形という手段に人類普遍的な価値観を以って表現活動をするのかを探ってゆく。	
	美術理論 2	ここでは主に「色彩論」を中心に他の造形要素である形体や材質、塊量との関連性について、論理的な解釈を促しながら、観察や小実験により体得的理解に結びつけ、かつ、これらの経験的方法論を以って児童・生徒への指導活動に活用する可能性があることを知らせる。また、客体（作品）としての造形要素への関心・理解ばかりでなく、人為的変工（造形活動）の主体である行動主（作者）にも実形体としての「身体」感覚の連環・関与を実感させたい。	
	美術史概論	古代エジプトから始まる人間の美意識と創造の展開をたどる。作品の意義の解析と後世への影響関係を把握することで、美術史の大きな流れを理解する。	
	日本・東洋美術史	日本および東洋の各地域における様々な美術の文化遺産を鑑賞し、表現方法および独自の美意識や創造の精神などを知り、あわせて時代的、文化的な社会背景についても理解する。我が国は多くの異文化を吸収、咀嚼、洗練しながら、独自の審美的文化を生み出してきた。日本美術を学ぶにあたっては文化の継承と創造の重要性を理解し、東洋美術との比較を行うことにより、美術を通じた国際理解についても中学校、高等学校の美術の指導との関連で考える。	
美術科教育法 1	美術科教育の在り方と方法について、主に、子どもが成長発達する過程で見る造形的表現活動の特性を理解することで教育の方法論を考察する。特に中等教育段階における生徒の表現及び鑑賞活動にかかわる特質的な問題点を探りつつこれらに関連づけながら、中学校及び高等学校の学習指導要領の内容に準拠した具体的な題材の開発・設定とその学習指導案の作成等を通して、美術科指導法に関する基礎的な能力と態度を養う。		

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学科 科目 美術 専 門 コ ー ス	美術科教育法 2	美術科教育がどのような歴史的過程を経て今日に至ったのか、自由画教育運動、児童中心主義の美術教育、創造主義美術教育など代表的な思潮や方法論・実施形態について取り上げ、具体的な教具・教材や作品内容を検討しながら、今後の課題と展望について考える。そのうえで、中学校および高等学校の学習指導要領の内容に準拠した、具体的な題材の開発とその学習指導案の作成を通して、美術科指導法に関する基礎的な能力と態度を養う。		
	美術科教育法 3	美術科教育法 1、2 の内容を踏まえ、さらに中等学校教育における美術教育を取り巻く現実的動向と、その新しい学力観・評価観および学習指導要領の理解のうえに、中学校美術科、高等学校芸術科美術の学習指導に必要な学習内容や題材について実制作をとおして研究する。また、クラスサイズや美術教室環境などを想定した学習指導案の作成や現場に即した模擬授業や作品の展示・発表活動を行うことで、美術科指導法に関する実践的な技能や判断力を養う。		
	美術科教育法 4	美術科教育法 1、2、3 の内容を踏まえ、美術科指導法に関するより実践的な技能や判断力・構想力を養う。具体的には、個々の学生が想定の授業場面で担当・直面する実技領域（絵画・彫刻、デザイン、工芸、映像メディア）や鑑賞領域についての教材研究を深め、学習指導案を作成し、模擬授業を行う。そのプランや導入法、授業展開や結果としての作品等について皆で意見を交換し、よりよい授業の在り方を探っていく。		
	初等図画工作指導法研究 1	学習指導要領に基づく図画工作科の指導法を実践的に研究するが、ここでは特に、中学校美術科・高等学校芸術科美術との内容的な関連を図りながら、初等教育・中等教育の領域を超えて美術教育を担当できる教員の養成を目標とする。初等図画工作指導法研究 1 では、「表現」及び「鑑賞」学習指導の目標と内容に関わりながら、いくつかの実践例を具体的に検討した上で、教材研究、作品制作、作品鑑賞、模擬授業等を行う。		
	初等図画工作指導法研究 2	学習指導要領に基づく図画工作科の指導法を実践的に研究するが、ここでは特に、中学校美術科・高等学校芸術科美術との内容的な関連を図りながら、初等教育・中等教育の領域を超えて美術教育を担当できる教員の養成を目標とする。初等図画工作指導法研究 2 では、主に教室での「表現」と「鑑賞」の活動を想定した「授業の実際」前提に、学生自らのテーマに沿った作品制作、教材開発、研究発表、協議などを行う。		
	保健 体育	教職体育実技 1	近年生涯スポーツとして、サッカーも大きな位置を占めてきている。生徒が体育の時間だけでなく、生涯にわたってサッカーを楽しむように指導する力をつけることを、この授業の目標とする。受講者は、サッカーとはどんなスポーツかを理解することから始まり、最低限必要な基本技術、基本戦術を習得した上で、わかりやすく指導する方法を模索していく。サッカーは、他のスポーツと比べて、技術、戦術ともに自由度が高いゆえに、指導が難しいスポーツの一つであると考えられる。少しずつ整理しながら、指導方法を構築していった欲しい。	
		教職体育実技 2	本授業では、「ゴール型」ボール運動の中でも、「バスケットボール」をテーマとした授業の進め方と、その効果的な指導法について学ぶ。特に、学習指導要領の基本的コンセプトである「学習内容の確かな習得」を目指し、「ボール操作の技能」と、「ボールを持たない動き」が楽しく身につけられるような下位教材の工夫や、教材配列の工夫について、模擬授業などを行うことで学習する。また、基本的な審判法、ゲーム分析の方法についても学習する。	
		教職体育実技 3	中学・高校の学習指導要領・保健体育編に示される体育分野の武道には柔道、剣道、相撲等が学習内容として取り扱われる。この授業は、中学・高校の武道を担当し、適切に効果的な指導を展開する知識と技能の獲得をめざす。特に日本の運動文化としての特性を持つ剣道の歴史性や伝統的な文化を学ぶことで、豊かな剣道観の確立を図り、剣道を実践的に多角的に追求しながら、自らの剣道技能の習得と剣道指導方法を学ぶことをねらいとする。授業では、日本剣道形や初心者指導の「コツ」、基本技能や対人技能の習得とその指導法等をテーマに、剣道指導に必要な学力を高める。	
		教職体育実技 4	中学校・高等学校の学習指導要領（保健体育・水泳）に示された目標に準じ、各種泳法の基本的な技術の理論と実践について学習する。受講者の基礎的な泳力の向上と共に、初心者への段階的な指導法の習得、生涯スポーツとして楽しめるような水中運動や水中レクリエーションの体験等も目的とする。また水中での安全管理や救助法について学習し、水泳事故防止に関する心得を守りながら、健康・安全に留意して練習、指導できる技術を身につける。	
	体育原理	現代の体育教育は全人教育としての学校教育における体育学習をなしている。これら体育教育の指導課題が客観的情勢の中での[体育とは何か]が問われている。特に心と体の一体が叫ばれている今日、より体育教育の基本原則を学習する必要がある。[体育とは何か]について、その本質・体育の意義・体育の目的・教育方法・指導方法の原理・スポーツと体育などの関係について歴史的背景意から考察する。		

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目 教 科 専 門 科 目 保 健 体 育 コ ー ス	体育経営管理学	本授業では、体育やスポーツ振興の上で経営管理がどのような意味を持っているのか、教員や社会体育指導者の免許・資格に、体育経営管理がどのようなかわりをもっているのか等、学校や地域等におけるスポーツ振興に必要な経営学の基礎理論を学習する。また、学校における体育・スポーツ事業の構成方法や演出方法についての理解を深めるとともに、効果的・効率的な生涯スポーツの振興を図るための経営過程についても理解を深める。	
	体育社会学	本講義では、体育・スポーツの社会的事実を実証、検討、研究事例等に沿って理解し、指導者として必要な資質・能力を身に付けることをねらいとする。スポーツはその公益性が広く認知され、制度化されてきた。現代社会におけるスポーツの在り方を歴史、文化、社会変動、地域社会、部活動、障害者福祉等について理解させ、指導者として即応できる指導力を養うことができるようにする。	
	体育心理学	運動やスポーツにおける身体活動の意識、態度、技能等の特性を、スポーツ心理学の分野で研究されてきた知見に基づいて講義する。特に運動に関する技能習得における学習のメカニズムや運動行動及びスポーツに伴うメンタルマネジメントについて理解を深める。またスポーツにおける「上がり」や「不安」などの心理的な事柄やさらには指導者としてのメンタルマネジメント等をさまざまな角度から科学的、加間的に分析・評価するための基礎的知識を身に付ける。	
	運動学（運動方法学を含む。）	スポーツや運動を指導する場合、学習者に運動のコツを効果的に内面化させることが必要である。指導者には、運動学習のプロセス・メカニズムの理解、学習者の「身体知」運動感覚知覚能力への働きかけ、「指導しつつ感じ、感じつつ指導する」指導センス、運動諸科学の知見など統合的な学力が必要となる。本授業では、運動学に必要な運動諸科学を学び、体育・スポーツ種目別の運動方法学も学ぶ。また、運動感覚（キネステーズ）を運動諸科学の手法を用いて理論化し、その理論に基づく指導技術の開発と学習成果の検証等も紹介する。	
	スポーツコーチング論	地域社会や学校では、スポーツ活動が多様化し適切で効果的なコーチングとその指導者が求められている。スポーツのコーチ（COACH）は、クライアント（プレイヤーや学習者=コーチングを受ける人）の運動パフォーマンスを高め、目標達成に導く能力が必要である。授業では、体育やスポーツの指導場面に必要な指導者の役割や指導計画の立て方、プレイヤー育成の指導法、コーチングスキルのマネジメント技術などを学び、さらに学習者やプレイヤーの自発的活動を効果的に涵養するための運動諸科学など統合的な学力の獲得もねらいに授業展開する。	
	バイオメカニクス	スポーツ指導や運動指導において、身体運動のしくみを科学的に理解しておくことは重要である。バイオメカニクスは人体解剖学、運動生理学、身体運動力学などの学問領域から、複合的に身体運動のしくみを解明しようとする学問分野である。本授業ではバイオメカニクスを学習することによって、身体運動や運動指導を科学的な視点からとらえる知識を身につけることを目標としている。ともすれば経験的・感覚的に陥りがちな運動指導において、経験や感覚だけでなく常に科学的な視点からも運動を観察できる力を養うことをねらいとしている。	
	スポーツトレーニング論	本授業ではスポーツトレーニング全般について概ね次の通り学習する。（1）体力とは何か（2）スポーツトレーニングの種類（3）目的に応じたトレーニング方法（4）トレーニング効果の現れ方とその評価法など。一方、人間の体力は幼少期から大人に至るまでの発育段階において発達著しい体力要素は異なることから、対象の年齢幅が広い学校教育（小～高校生）や地域スポーツ指導などにおいては、対象に応じた適切なトレーニング法を選ぶ必要がある。本授業では学生が将来直面する状況をも勘案し、これらに適切に対応できる能力を養うことをねらいとする。	
	生理学（運動生理学を含む。）	健康科学の基礎となる、生体のメカニズムについて理解を深めるために、身体の構造と生理的機能について学習する。具体的には、筋・骨格系、呼吸循環器系、神経系、内分泌系等に関する解剖学的・生理学的な内容を基礎とし、運動との関連について学習する。本講義を通じて、運動によって生体がどのように変化するのか、その現象とメカニズムについて理解することを目的とする。	
	運動生理学演習	身体の構造と機能、運動時の生体反応や生体適応に関する知識を基にしながら、運動が生体機能に及ぼす影響や運動時の生体反応の理解を深めるための生理学的測定法について学習する。国内外の研究成果について文献を読むことに加えて、実際に種々の測定を行ない、測定装置の使用法、測定手順、測定結果の解析と解釈・活用方法について理解する。本演習を通じて、保健体育教員・スポーツ指導者として身につけておきたい運動生理学に関する基礎的実験・分析方法と評価方法を習得することを目的とする。	

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科 科目 保健 体育 専 門 コ ー ス	衛生学（公衆衛生を含む。）	衛生学・公衆衛生学は個人と集団の両方を対象として疾病予防と健康の維持増進の実現を図る予防医学の一分野である。本講義では健康の概念を明確化し、衛生学・公衆衛生学の意義を理解した上で、国民の健康水準を把握する方法および各種疾病の予防対策について学ぶ。具体的には、衛生統計の各種指標について算出方法や意義を理解して集団の健康状態を正しく評価する方法を習得すること、感染症予防の為の法律・制度について理解を深めること、生活習慣病の発生状況およびリスクファクター等について学ぶこと等を目標とする。	
	スポーツ医学	現代社会においてスポーツは、生活習慣病予防や生活の質の向上を実現する身近な手段として関心が集まっている。しかしスポーツを安全且つ効果的に行う上での正しい知識や注意点等については十分に認知されているとは言えない。本講義ではスポーツに関する基礎的な医学知識を学び、スポーツ指導現場での予防法や対策等を理解することを目標とする。具体的にはスポーツ活動中に多い外傷や障害を理解し、予防や応急処置の方法を習得する。また競技スポーツでのコンディショニングや特殊環境下でスポーツを実施する際の留意点等を学ぶ。	
	学校保健A（学校安全・救急処置を含む。）	児童生徒が健康で安全な生活を送るために必要な安全教育、安全管理について学習し、児童生徒に発生し得る突発的な事故や怪我等に対処する基本的な知識と理解を深め、救急処置方法について習得する。具体的には、授業時の事故や登下校時の交通安全など児童生徒を取り巻く環境における危険因子を知り、リスクマネージメントの考え方や学校安全計画について学習する。また心肺蘇生法など応急処置の方法を学び、事故が生じた際に適切に対処できる能力を身につける。	
	学校保健B（小児保健・精神保健を含む。）	学校生活の中で、児童生徒は知識の習得のみならず様々な体験から身体的にも精神的にも健やかに成長することが望まれる。学校現場の抱える様々な問題について理解し、児童生徒の身体と心の健康問題に対する学校保健の重要性について理解を深める。具体的には学童期に見られる身体疾患や感染症とその予防法について学ぶ。また近年いじめや不登校等、不適応を来す児童生徒が増えており、その対策や教師の役割、家庭との連携等について学習する。	
	発育発達論	子どもの発育発達における、身体的・心理的特徴について学習し、スポーツ活動や運動が子どもの心身の成長に与える影響、発育発達期に起こりやすいスポーツ傷害・疾病についても理解を深める。さらに、発育・発達から加齢変化まで、生涯を通じた身体諸器官の機能の変化、およびそれらの性差についても学習する。	
	保健体育科教育法1	中学校及び高等学校の保健体育科の授業実践に必要な知識と方法について学び、教師としての資質や能力を身につけることをねらいとする。その第一段階として、学習指導要領に示されている保健体育の目標の理解や、目標実現に向けた授業のあり方について学習する。また、授業の年間計画・単元計画・学習指導案の立案方法についても学ぶ。	
	保健体育科教育法2	各運動種目の学習方法とその効果について、器械運動・陸上競技及び水泳の領域特性とそれぞれの運動技能習得のための指導方法を身につける。特に身体的発育・発達に激しい中学期と高校期の生徒に対し、運動種目の内容を理解させ、計画的で合理的な学習方法を身につけ、仲間との協力についての大切さを学習する。器械運動では、補助や協力の仕方を学び技能を高める。陸上競技と水泳では、各自の能力に応じた技能を高め競争し、勝敗にかかわる公正な態度のとり方を学習する。学習時の安全指導の方法をも十分に学習する。	
	保健体育科教育法3	本講義3では、中学校及び高等学校の保健体育科の授業実践に必要な知識と方法について、教師として必要な資質・能力を身につけることをねらいとする。特に、「体づくり運動」ならびに「球技」について、必要な知識と方法について理解し実践的指導ができるようになるために、両領域の機能的特性、学習内容、学習指導法、学習評価法、教科外の学習指導法等について教育の実践者として即応できる指導力を養うことができるようにする。	
	保健体育科教育法4	保健体育科教育法1～4は、中学・高校の教員免許「保健体育」を取得するため、新学習指導要領の趣旨や学習内容を正しく理解し、効果的に指導できるような知見を提供する。「保健体育科教育法4」では、中学・高校の運動分野の武道と体育理論の領域および保健分野を中心に、内容及び内容の取扱い、指導計画の作成、さらに学習指導に必要な知識と技能の基礎的知識をさらに発展させるため、課題研究や演習形式の授業を行う。	
初等体育指導法研究1	本講義では、小学校で体育授業を実践していく際に必要な知識と実践力を形成するための授業です。そのために、小学校で体育授業を実践する際に教師として必要な事柄を解説していきます。「領域としては、「器械運動」「表現運動」「保健」について、学習内容、学習指導法、評価方法等について学びます。 小学校体育科の学習指導要領 小学校各学年の運動領域と保健領域の内容と特性 運動領域及び保健領域の指導とその工夫		

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学科 科目	保健 体育 英語 専 門 科 目 コ ー ス	初等体育指導法研究 2	小学校体育科の授業実践に必要な知識と方法について、教師として必要な資質・能力を身につけることをねらいとする。体育科の運動領域の中で、体づくり運動、陸上運動、水泳、ボール運動について特性、学習内容、学習指導法、学習評価法、指導案の作成等を踏まえて教育の実践者として即応できる指導力を養うことができるようにする。	
		英語学概論	英語という言語を、音、語、文法、意味、コミュニケーションという側面から考察し、言語を分析する際の基本的な概念と、基礎知識を学ぶ。具体的には音声学、音韻論、形態論、統語論、意味論、語用論、英語史などを扱う。	
		英文法	科目としての英文法が指導要領から姿を消して久しいが、指導要領には「英語の言語構造に含まれてい」る文化的要素の理解を深めることが規定されていることから、教師には正確な文法体系が身につけていることが求められる。本講義ではいわゆる「学校文法」の体系を講義し、必要に応じて種々の課題等で知識の定着を図る。	
		英米文学 1	19～20世紀のアメリカ文学を中心に、異なる時代の作家による異なるジャンルの作品（詩、短編小説、長編小説の一節、エッセイ等）を原書で読む。文学作品を通して、多文化国家アメリカを多面的に体験するために、異なる民族的背景をもつ作家の作品を教材とし、作品の背景となる歴史上の出来事や作家の体験についても学ぶ。	
		英米文学 2	夫れ、文学は、洋の東西を問わず、豊かな人間性を育む。本講義では、英文学の代表的作品を英語で読み、作品の文化的背景や時代思潮に注意を払いつつ、その主題を考察し、イギリス人の考え方、ものの感じ方を知る。また、通学課程では、名文を音読する楽しさを体得するよう指導する。	
		英語コミュニケーション 1	アメリカの歴史と文化に焦点を当てるが、関連したグローバルな問題を取り上げ、総合的な英語力を伸ばし、世界で起きているさまざまな出来事や異文化への理解と関心を深める。理解した内容を要約したり、自分の考えを表現する練習を行う。テキストやテキストに付随するビデオ教材の他に、適宜海外のニュースや新聞の記事など生きた英語を教材として用いる。自らの学びを通して、教材の選び方や効果的な教育法について考える視点も身につける。	
		英語コミュニケーション 2	ニュージーランドの文化、歴史、教育、その他の様々なテーマについて学びながら、英語によるコミュニケーション能力を高める活動を行う。教員から知識や情報を与えられるだけでなく、学生は自らテーマを見つけ、日本との比較研究を行い、プレゼンテーションやディスカッションを通して、お互いに成果を評価し、フィードバックし合う。	
		英語コミュニケーション 3	グローバル化が進む情勢のもと、異なる文化の人々の考えを真摯に理解し、自分の考えを英語で適切に表現できる能力は必須である。話す・聞くことにとどまらず、読む・書く力もバランスよく取り入れて、自己表現力を養い、世界各国の人々に対して、決して卑屈になることもなく、また傲慢になることもなく、文化的にも人間的にも対等な関係で相互理解を図れるような英語の実践的コミュニケーション能力を養う種々の演習を行う。	
		英語コミュニケーション 4	ニュージーランドと日本の先住民族の文化や教育の問題に焦点を当て、侵略された側の視点からの異文化理解を深め、比較考察をする中で、英語によるコミュニケーション能力をさらに高める活動を行う。教員による講義中心の授業ではなく、セミナー形式で授業を進め、学生は自らテーマを選び、調べたことをまとめ、積極的に発表し、中心となってディスカッションを進めていくことが求められる。	
		異文化理解 1	言語としての英語の歴史の変遷をたどることで、表層に隠れた言語事象の奥を探り、その英語の母体となったイギリスおよびイギリス人の歴史を概観し、さらに16世紀以降の英国と日本との関係をも考察し、言語や文化に対する理解を深める。	
		異文化理解 2	多文化国家アメリカの歴史は、異文化間の衝突・交流・融合等の歴史でもあり、世界で起きてきたことの縮図とも言える。アメリカの歴史を、建国から現在に至るまで、重要な出来事や風潮をとりあげ多面的に学ぶ。アメリカという国を一面的にとらえて賞賛したり批評するのではなく、教科書や主要メディアの報道からは見えてこない、草の根の市民運動やマイノリティ（特に、アフリカ系、アジア系、アメリカ先住民、ヒスパニック）の視点にも目を向ける。	
		英語科教育法 1	19世紀半ばから現在に至るまで、日本国内外で提唱・実践されてきた英語(外国語)教授法を冷静な目で、歴史的に概観し、それぞれの長所・短所を理解し、時流に流されない実践への応用の手がかりを得る。通学課程の授業は発表形式で、1・2名で1つの教授法を担当し、発表者はその教授法の理論についての発表と、ロールプレイにより実際に教室でその教授法を実践する。	

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科 科目 英語 教 科 専 門 コ ー ス	英語科教育法 2	日本人学習者が、外国語として英語を学ぶ場合、指導要領にもある通り、日本語や日本文化との比較が行われ、日本語や日本の文化についての理解が深まらなくてはならない。本講義では、日本人の物の考え方や感じ方を英語で説明した文献を、文化的差異や言語表現上の差異に留意しながら読み、さらに、それらを英語で発信していく種々の方法を模索する。	
	英語科教育法 3	学習指導要領に掲げられている目標（聞き、話し、読み、書くという4つの基本的技能の習得）とそれぞれの技能習得のために掲げられている言語活動の内容を踏まえ、学生自身がこれまで英語を学習してきた状況や方法を振り返り、効果的な英語教育法を考え出していく力を養う。特に、母語と学習言語との相違から生じる問題に焦点をあて、英語話者への日本語教育法や日英語比較研究を参考にしながら、発音、聞き取り、文法、語彙、会話表現、文化的背景等について留意点を確認し、学習指導案の作成を行う。	
	英語科教育法 4	熟練した英語教師による、総括的な講義。日本人は英語の学びを通じて西洋文化を摂取し、近代日本の社会文化史を主体的に形成してきた。英語教育の歩みには各時代の社会文化状況が鏡のように反映されている。本講義では、日本人が英語をどう学んできたかの歴史を謙虚にふり振り返り、その足跡を確かめることで、日本の英語教育をどうすべきか、進むべき方向を見定める。	
特別 支 援 教 員 コ ー ス	知的障害者の心理	(1) 知的障害児者の認知・行動面に影響する心理的特性に関し学ぶ。(2) 個別の指導計画を立案する上での重要な資料となる、主要な知能検査・発達検査の解釈の基礎について学ぶ。(3) 行動観察の手法、知的障害や発達障害を主対象にした代表的な心理的アプローチについて学ぶ。(4) 上記の知識を基にして、校内委員会のシュミレーションを行い、個別の指導計画を作成する。	
	知的障害者の生理・病理	知的発達障害、軽度発達障害、認知機能、脳機能を中心に、本講義では、知的発達障害をはじめとする発達障害を持つ子どもの生理および病理学的な基礎を解説し、発達性および獲得性の知的発達障害とその障害機序を理解する。その上で、生物学的な基礎の上に教育的支援が実践的に展開され、個々の知的発達障害児が教育の場で有意義な指導・援助を得られるようになることを目標とする。	
	肢体不自由者の心理・生理・病理	肢体不自由児の心理・生理・病理・指導について、対象児の理解、心理の理解、指導の実際、保護者への支援など総合的に学び、肢体不自由児の教育における基礎的・実践的な力を養う。授業では肢体不自由児の学び養護特別支援学校や施設などを訪問する。また、発表、実際の指導方法に関するワークショップや実践研究の紹介を取り入れる。	
	病弱者の心理・生理・病理	病弱・身体虚弱の児童生徒の状態や生活環境等に応じた適切な教育を行うことは、学習の空白や遅れを補完するだけでなく、生活を充実させ、心理的な安定を促すとともに心身の成長・発達に好ましい影響を与えたり、健康状態の回復・改善等を促したりすることに有効だと考えられています。授業では、病弱教育の対象となる主な疾患について概観し、病弱児の自己管理能力を高めるための具体的な考え方、健康の概念、セルフケアについて理解を深めることを目指します。	
	特別支援学校教育課程論	まず、教育課程に関する法制について学んだ上で、学習指導要領等の内容を熟読玩味することにより、特別支援学校（特に、知的障害特別支援学校）の小・中学部における教育課程の編成と実施の仕方について、理解と認識を深める。なお、重複障害者や自立活動の指導のために使用される個別の指導計画等の重要性とその作成の仕方についても、理解と認識を深める。	
	知的障害者の指導法 1	知的障害の概要（概念、原因、類型）、知的障害児の実態と推移について概説した上で、知的障害児の指導支援にとって重要なアセスメントや学習・発達の心理的特性について解説する。さらに、知的障害児の教育課程や個別の指導計画、特別支援学校・特別支援学級における教科・領域を合わせた指導、自立活動の指導など知的障害児の指導支援について述べる。	
	知的障害者の指導法 2	知的障害児の指導法について、知的障害児の教育課程、教育方法、対象児の理解、指導方法の実際、保護者への支援方法を中心に総合的に学び、知的障害児の指導法における基礎的・実践的な力を養う。また、授業ではディスカッション、発表、実際の指導方法に関するワークショップを取り入れる。指導者自身の感性を磨くトレーニングとして、音楽療法や発達療法など体験し、指導者としての資質を磨く	

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 目	特別支援教員コース	〔肢体不自由教育の概要の理解〕肢体不自由特別支援学校等における教育の概要を把握し、肢体不自由者に対する教育課程の編成や個別の指導計画の作成の実態を理解する。〔各教科等の指導の工夫〕各教科等における肢体不自由の特性を考慮した指導方法や指導の形態等の工夫を理解する。〔肢体不自由者に対する自立活動の指導〕肢体不自由特別支援学校等では、どのような自立活動の指導が行われているのかを把握し、健康の保持、身体の動き、コミュニケーションの指導等の指導法を理解する。〔職業教育と進路指導〕肢体不自由特別支援学校卒業生の進路状況を把握し、職業教育や進路指導の要点を理解する。〔情報機器等の活用〕肢体不自由者の指導における、補助用具や補助的手段、情報機器の活用について理解する。	
	病弱者の指導法	病弱の子どもの実態とその教育について理解し、病弱の子どもを支援する心構えを身につけることをねらいとする。このため、病弱教育に関する歴史、教育制度、教育課程、教育内容・方法及び保健管理などを内容とする。	
	視覚障害教育総論	主として高等教育機関の視覚障害学生を対象とした授業において、視覚障害を補うための配慮、教材・教具の工夫と評価、問題点、将来展望について、実践例を示しながら講義する。	
	聴覚障害教育総論	本授業では、(1)聴覚障害教育の教育課程については、学校教育法と学習指導要領にもとづき解説を行う。(2)指導法については、学校・特別支援学校(聴覚障害)で行われている各教科、自立活動、交流及び共同学習、職業教育、コミュニケーション手段、言語指導法を軸にすえ、幼児期から高等部までを見通した全体的な指導法の解説を行う。(3)児童生徒の実態把握では、指導計画の展開に必要な聴覚障害に関する生理・病理面の基本的事項をふまえ、聴覚の活用・発音指導・手話の活用に関する基礎的な指導方法について解説を行う。	
	重複障害教育総論	障害の概念・種類、障害児の実態の変化について概説する。引き続き、重複障害の概要(概念、原因・病理、分類)と診断・状態把握、心理・生理・病理について、重複障害児の学習・発達特性(コミュニケーション、行動・行動障害、発達)等について解説した上で、重複障害児に対する特別支援教育の基本的視点、教育課程や個別的教育支援・指導計画、実際について述べる。	
	LD等教育総論	(1)LD・ADHD等発達障害の定義・特性を把握し、アセスメントを含む実態把握の仕方、学習・行動面への対応を学ぶ、(2)学習リディネス等の涵養・児童生徒の学習意欲を育む基本姿勢を学ぶ、(3)小集団SST或いはリソースルーム指導方法の立案、指導案作成など、教師等の専門家に求められる基本的技能、姿勢の在り方を身につける。	
	特別支援教育実習	特別支援教育に携わる教師としての望ましい資質や専門性を身につけるため、協力の得られた実習校にて教育実習を実施する。実習の事前・事後指導は前後期を通じて所定の時間を設定して行う。事前指導では、実習の心構え、学部ごとの教育課程、教員の服務、記録の取り方、指導案の書き方や記録などを学習する。事後指導では、自らの実習を振り返り、教員としての目標、今後の学習のあり方などについて、ディスカッションや発表を通じて、反省する。	
子 ど も 臨 床 コ ー ス	社会福祉論	社会福祉とは何か、社会福祉の対象は誰か、社会福祉のあり方について、子ども・障害・高齢、そして貧困といった各分野における人々の生活構造とその実際から理解する。とりわけ、保育や福祉労働に従事するものに求められるケア(生活支援援助)とは、どのようなものかを考える力(ものの見方・考え方)を養う。	
	社会福祉援助技術論	社会福祉援助技術の意味と方法について、保育と社会福祉援助技術との関連もふまえながら概説する。また、個別援助技術(ケースワーク)、集団援助技術(グループワーク)、地域援助技術(コミュニティワーク)、ケアマネジメントについて、その意義と機能、援助媒体、展開過程などについて概説し、あわせて、保育所における児童・家庭への援助の方法について事例研究などを通して学ぶ。	
	子ども福祉論	児童・家庭の生活実態とこれを取り巻く社会情勢、福祉需要と実際、制度発展過程、児童の定義と権利、児童福祉法、児童虐待の防止等に関する法律、配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律、母子及び寡婦福祉法、母子保健法、児童手当法、児童扶養手当法、特別児童扶養手当等の支給に関する法律、次世代育成支援対策推進法、少子化社会対策基本法、売春防止法、児童・家庭福祉制度における組織及び団体の役割と実際、児童・家庭福祉制度における専門職の役割と実際、等について講義を行う。	
	養護原理	子どもへの社会的な援助が必要となる社会構造と個別のニーズを理解する。また、養護の基本理念や展開・現状、児童福祉施設の特性や援助の実際等を学習し、児童養護における保育士の役割について検討する。	

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目	子ども臨床コース		
	保育者論	保育者とは何かについて全般的に理解する。具体的には、保育者養成の歴史と現状、保育者の職務と専門性などについての概論のほか、実際に保育者になるにあたって必要な子どもや保育に対する見方、考え方などについても学習する。さらに、保育者としての悩みや成長、これからの保育者のあり方について考察する。近年、保育者には、単なる子どもの養育だけでなく、保護者に対する保育に関する指導や、地域への子育て支援など、多くの役割が期待されている。どのような専門性が必要なのかを総合的に考えていきたい。	
	保育課程論	本授業は、保育士資格取得のために必要な「保育の本質・目的の理解に関する科目」に分類されている科目として位置づけられている、本学が独自に開講した必修科目である。ここでは教育課程論や保育実習で習得した知識や能力を基礎に、保育所の保育課程について学ぶことになる。	
	幼児教育思想史	幼児教育の流れについて先ず取り上げる。そして学生が現在の幼児教育とのかかわりを理解できるようにする。目標は学生が幼児の生きる意味と幸せを考える力がつくようになることである。そのために、時代、社会と大人、幼児が生きることとの関係を話し、各幼児教育思想家の人間観、子ども観、幼児教育観、幼児教育方法論、遊び論などを取り上げる。中でも、世界で最初に幼稚園を作ったフレーベルについて詳しく取り上げる。	
	学童保育論	この授業では、まず、日本社会において学童保育が果たしてきた役割について理解を深めながら、その学童保育の目的を明確にしていく。次に、学童保育は法制化される前とされた後でどのように位置づけが変わったのか、子どもたちの生活との関連はどうかに注意しながら、歴史について全般的に理解し、その上で、学童保育をめぐる政策的動向や制度現状と課題について明らかにする。また、学童保育の保育指針や保育内容、生活と遊びなど蓄積されてきた実践内容を学ぶ。さらに、学童保育指導員の地位や具体的業務、仕事内容など、学童保育を直接担う専門職の在り方についても理解を深め、今日的到達点と今後の課題について考察する。	
	発達心理学	人は生物学的な基盤の上に、社会文化的環境との相互作用を行いながら、生涯にわたって自己を変容させ発達し続ける。そのしくみを理解するための基本的な諸理論を解説する。誕生から死に向かって、人の心や行動がどのように形成され変化していくのかについて、特に、著しい変化を遂げる乳幼児期から児童期を中心として、基本的な発達のプロセスを解説する。子どもを教え育てる保育士・教諭として、発達の視点から人間の行動と心を捉えるために必要な基礎知識を習得する。	
	小児保健1（講義）	小児保健1（講義）では、保育活動において小児の健康を保持・増進し、日常の観察から異常の早期発見に努めることができるよう小児保健の基本を学ぶことを目的とする。また、小児が心身共に健全に保育・発達するためには、育児環境の問題点を明らかにし、子ども一人ひとりの個性を重視した多角的アプローチが重要となる。授業では、小児保健の基本的知識の他、小児を取り巻く現代社会の問題点について日本と諸外国を比較して解説する。更に、グループワークを取り入れ、健康づくりのあり方について意見交換する。	
	小児保健2（講義）	小児保健2（講義）では、小児保健1で学んだ知識を基礎に小児の心身の健康について学習する。小児期に起こりやすい疾病とその予防策、遭遇しやすい事故と安全管理について理解する。また、地域と家庭との密接な関係を促し、社会的な視点で育児支援を考えていけるよう、母子保健行政の歴史や保健サービスについて学び、母子保健活動及び子育て支援の今後の展望について考えていく。	
	小児保健（実習）	小児保健実習では、小児保健1・小児保健2で学んだ知識を基礎に、実習を通して乳幼児の保育に必要な知識・技術・態度を習得することを目的とする。保育と保健・看護の連携について知り、乳幼児の健康観察の方法、成長・発達の測定法と評価、生理機能の観察と測定方法、養護技術、病気や事故に対する予防と対処方法の実際を学ぶ。更に、乳幼児が不測の事態に陥ったときに敏速に判断し、適切な救急処置が実施できるよう基本原則と技術を習得する。	
小児栄養（演習）	小児期は食生活の基礎が身につく重要な時期である。小児の発達段階に応じた適切な食事が提供できる保育士になるため、講義や実習を通して、発達に見合った食品の選択や調理法、食事の与え方などが判断できる力をつけていく。具体的には、食物・栄養の基本的な知識を学ぶとともに、離乳食を始め乳幼児食の実習を行う。子ども達が楽しく食べる習慣を身につける指導ができるように、食育に関わる専門職としての資質を養う。		
子どものメンタルヘルス	現代社会では、子どもも様々なストレスを抱えて生きている。本講義では、子どものメンタルヘルス（精神的健康）について、幅広く学習していく。具体的には、メンタルヘルスの概念、ライフサイクルとメンタルヘルス（主に、幼児期、児童期、思春期の特徴と問題）、適応と不適応、そして心のケアと援助法等について学ぶ。ロール・プレイも実施し、その体験をふまえながら、子どもとの関わり方、保育のあり方についても理解を深めていく。		

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目	子ども臨床コース		
	子育て支援論	量的調査を読むことで、現代家族の子育て支援ニーズのコアが親子の孤立と育児の不安定にあることをつかみ、そのニーズに対する子育て支援施策、特に自治体の次世代育成支援行動計画を検証する。合わせて、少子化対策と子育て支援対策が連動していることを学び、その限界と問題点を明らかにする。さらに、保育園、幼稚園、保健センター等での具体的な支援実践事例の検討を通して、有効な支援の方法をさぐり、これからのあるべき子育て支援のデザインを試みる。	
	保育者・教師のメンタルヘルス	子どものメンタルヘルスに続く科目である。現代社会では、保育・教育現場において、保育者・教師は様々なストレスにさらされている。本講義では、主に、人間関係に焦点をあて、保育者・教師のメンタルヘルス（精神的健康）について学習していく。心の病やその対処法についても、カウンセリングの視点をふまえ、学ぶ。あわせて、学生が自身のメンタルヘルスを振り返りながら、自己理解、他者理解を深め、将来、保育士、教師として働いていくために必要な対策を自ら考えていけるようになることを目標とする。	
	子どもの発達臨床	主に乳幼児期から児童期・思春期までの時期における、子どもの発達上に現れる様々な臨床的問題を取り上げ、背景にある病理のメカニズムと、教育・保育・育児現場における具体的な支援の方法を学ぶ。実践事例を紹介しながら、発達の視点からどのように問題を捉え、どのように対応していくかに関する発達臨床の理論と方法の基礎を理解する。具体的には様々な発達障害を中心とし、心身症などの心理的問題、愛着障害を含む家庭養育問題等を取り扱う。	
	家庭教育論	本授業は教育学や心理学・社会学以外の家庭教育に関する様々な学問的アプローチを知る。その学習を通じて、子どもが社会人として自立するまでに、家庭で行われること、親に求められていることを考えることを通じて、家庭教育のあり方について考えることができることを目標とする。	
	乳児保育 1	乳児保育 1 では、まず新生児期から幼児期までの乳幼児の全般的な発達過程を理解しながら、特に乳児期の発達の内容とおとなのかかわりの重要性について理解する。また、乳児保育の人的環境と物的環境のあり方や、乳児保育の方法・内容について実際に演習形式で学ぶ。	
	乳児保育 2	乳児保育 2 では、乳児保育を取りまく様々な思想や制度、また、乳児保育の歴史と今後のあり方について学ぶ。少子化社会対策大綱を踏まえて、乳児保育が社会に果たすべき役割や、今後のあり方について理解する。また、後期末に行われる保育所実習を想定し、乳児保育担当者としての職務や保育の流れの実際、保育方法や保育教材についても学習する。	
	障害児保育	障害のある乳幼児について、障害の特性の理解と発達の理解、基本的な指導方法の理解、保護者や地域での連携のあり方について、個々の子ども達の発達と障害特性に応じた理論と実践の基礎を学ぶ。授業はディスカッションや実技も含み、様々な障害のある子ども達の保育に対する実践的な力を養う。	
	養護内容	多様な専門職が援助対象となる子どもと関わる中で、直接援助を行う保育士の役割は重要である。そこで、保育士による援助の計画や実践を想定したり、援助に関連する課題について調べ、討論することにより、児童福祉施設における保育士の役割の理解と実践能力を身につける。	
	乳児保育実践論	乳児期は心身の成長・発達が著しい時期であり、この時期に人への信頼感・愛着が形成され人間としての基礎が育まれる。そこで授業では、育ちを支え伸ばす保育について、人的、物的なあり方を実践的に学ぶ。	
	子どもと文化	子どもの文化の一つとして 幼稚園、保育園で大きな関わりのある絵本、紙しばいについてとりあげる。乳幼児の成長・発達にとって 絵本、紙しばいの果たす役割、年齢と絵本の選び方および読み聞かせの意義を保育計画に具体的にどうとりあげていくかを考えながら、自分自身がまず絵本を好きになっていくことを中心に実践的に学習する。	
	子どもと環境	子どもをとりまく様々な環境と、その中での子どもの成長について概観する。特に自然環境の豊かさが子どもの感性にどう影響するのかについて、実際に体験しながら学ぶ。	
子どもと遊び	子どもの遊びを取りまく今日の環境について学習しつつ、子どもにとってのあそびの役割を理解する。人とのかかわりを育てる遊び、物を媒介にして楽しむ遊びなど様々な遊びの種類と内容について演習形式で理解する。特に、近年地域や家庭で伝承されなくなってきた集団遊びやわらべうた遊びなどについても学習し、遊びを通して子どもの発達を促すネットワークや保育者・指導員の役割についても学ぶ。		

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 目	子ども臨床コース		
	養護方法論	児童福祉施設において、援助者がどのように児童と関わったらよいかを学ぶ。まず、児童に関わる際の方法の基本原則を確認し、実際に関わる際の留意点を学ぶ。さらに、個別指導と集団指導の両者について学ぶ。特に児童養護に関わる問題として「いじめ」を取り上げる。多くの具体的な事例検討を通じて、養護のあり方への理解を深めつつ、実践能力を身につける。	
	子どもと表現	音楽や造形による表現活動だけでなく、ここでは子どもの成長発達に大きな影響を及ぼす児童文化財を用いた表現活動について学びます。さらに、児童文化財の中から、保育によく用いられるお話・絵本・紙しばい・人形劇・ペープサート・パネルシアター・エプロンシアターなどを中心として、実際に制作しながら、お互いに表現しあい、学びます。乳幼児期の子どもたちにとって、児童文化財との出会いがかわりがどのような意味を持つのかということについても考えていきます。	
	幼児の体育	子どもにとって、体育・運動・スポーツ活動と遊びとの間に境界線はない。むしろ生活の中における遊びの一つとして運動が位置づけられる。本講義では、運動遊びの実践を通じて、乳幼児期の発育・発達と運動との関係について知り、各発達段階に応じた運動遊びを提供できるようになることをねらいとする。そして、幼稚園や保育園などにおける保育者の「運動遊びの仲間・指導者」として望ましい資質を身につけることを目的とする。	
	幼児の音楽	幼児の音楽的な成長や発達上の特性について理解を深め、幼児の感性、創造性を豊かに伸長させることのできる「幼児の音楽」のあり方について学ぶことを目的とする。幼稚園や保育所における様々な音楽表現活動（手遊び歌、リトミック、わらべうた、器楽合奏、コレオグラフィ、ボディパーカッション等）を演習形式で体験するとともに、保育者に必要とされる音楽表現力を養う。	
	幼児の造形	造形に関する基本的な知識や技能について学ぶ。具体的には以下の四つについて学ぶ。 1．造形活動を行う上で必要な材料や道具などに関する基本的な知識 2．描き造るために必要な絵画や工作、彫塑などに関する知識や技能 3．様々な造形活動を通じての楽しさや喜びの経験 4．造形玩具、遊具、ペープサート、影絵など保育実践において必要な知識や技能	
	保育実習	実習の種類、流れ、目的、目標、段階、内容を取り上げる。さらに、実習生の身分を理解させ、かつ実習施設の理解を図る。そして、施設実習（保育所を除く）と保育所実習の内容と方法を理解させる。その際に施設別の内容と方法、保育所での実習の内容と方法を理解させる。具体的な内容として実習日誌の書き方、観察の方法、実習園での反省会での学生のあり方についても理解を図る。実習後の学内での反省会についても理解させる。	
	保育実習 2	学生が保育所を除く児童福祉施設を選ぶ実習のため、各施設のかかり専門的な内容について学習することに力を入れる。特に、各施設の特徴を細かく理解させるため、児童や利用者の具体的な動きや言葉、要求、人間関係を観察し、記録することの重要性について取り上げ理解を図る。記録は、その日のテーマに基いて、絞って書くことの重要性について理解させる。	
保育実習 3	90時間の「保育実習3」の施設での実習が円滑に進むことを図る。特に保育実習2との選択実習なので、この実習では指導実習の内容をも理解できるようにする。そして、学生が自ら選んだ実習なので、自分で課題意識が持てるようになることに主眼を置く。特に施設の種類をも学生が選ぶ実習なので、具体的な細かい内容を学習することに力を入れる。		

授 業 科 目 の 概 要			
(教育学部 教育学科 (通信課程))			
科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 目	教育学入門	教育学を概観することにより、教育の本質について考え、自分に向き合いながらその基礎・基本を理解します。そこで、自らの教育観を求め、めざすべき目標に向けて自発的に学ぶ意欲、自律と自立を目標に、教育の課題を理解し、教育者になるための動機づけの明確化、自尊感情や命の大切さなどの見識を深めます。同時に、発達課題についての基礎的な知識、子どもを取り巻く環境の変化、現代の社会、学校や教育の課題などについて講義や討論を通じて総合的に学びます。また、4年間を見通した学習ポートフォリオを作成します。	
	教育原理	受講生は教育学の初学者であることに留意し、また教職の「教育の基礎理論に関する科目」であることに留意し、教育原理の内容としての基本的・基礎的な知識の習得と、教職への意欲を高めることをねらいとして講義する。平易に説明するために、学校教育の実践と先人の思想の関連付けを図りながら具体的に論じたい。例えば、教育の考え方の説明においては教育実践の一場面を紹介し、先人の思想との関連付けを試みたい。教育の現状を考える契機として、歴史的視点での重要性も強調する。	
	教育の制度と経営	我が国教育制度の構造と特質を明らかにしつつ、学校が公教育の目的の実現に向かって、組織としてまとまった活動を実施・展開することの重要性等を考察する。具体的には、我が国公教育制度の基本的枠組みと今日的課題、社会的環境の変化に伴う学校経営の課題、学校の組織編制と管理運営の仕組みと課題、組織マネジメントとリーダーシップの在り方、学校におけるPDCAサイクルの導入と「評価・公開」の在り方、地域人材の活用と学校経営への地域参画、予算と裁量権の拡大による自立的経営の課題等について講義する。	
	教職入門	本授業は、「教員とは何か」「教員の専門性」「教職の魅力と責任」等を探りながら、教員としての力をどう備えるかを学んでいくことがねらいとなる。具体的には、現在の教員に何が求められているか等基本的な内容を理解すること。教員の専門性や教職の魅力と責任について理解を深めること。教員の適格性を身に付けるために何を努力すればよいか自己課題を知ること。授業を通して思考力、洞察力、分析力をつけることなどである。	
	自立と体験2	「自立と体験1」を継承し、「体験教育」の実践と理論の構築により「自己実現と社会貢献ができる人の育成」をめざし、体験ワークショップを通じて、自然や子どもと触れ合い、自ら企画立案した体験プロジェクトの実行により、職業・人生観の基礎を培います。実験教室、模擬授業、自然観察、野外活動、キャンプなどを通じ、またフレッシュマン・キャンプの体験を活かし、人間関係構築と問題解決・段取り力、課題を見つけ実践的に学び合う態度の基礎を養います。また、ポートフォリオを作成しまとめます。	
	教育学基礎演習1	教育の基本的な課題について教え合い学び合うことを通して、教員として必要な資質能力の基礎と、豊かな人間性を備えた実践力ある指導者の育成を期して体験的指導を行います。小論文の書き方、文献の調べ方などを学び、さらに総合的な力を養うために、教育の課題に関して、個人の発表やグループディスカッション、プレゼンテーションを行うことにより、それらのスキルとともに、批判的思考力や相手に対する受容的態度の基礎を養います。また、担当教員がポートフォリオ作成とまとめも行い、学生生活の指導や教育相談も担当します。	
	教育学基礎演習2	教育の基本的な課題について教え合い学び合うことを通して、教員として必要な資質能力と、豊かな人間性を備えた実践力ある指導者の育成を期し、「教育学基礎演習1」を発展させて指導します。文献の調べ方などを発展させ、教育と子どもに関する知識を身につけ、総合的な力を養うために、グループディスカッションやディベート、学習指導案作成と模擬授業を行い、それらのスキルとともに批判的思考力や受容的態度などを養います。また、担当教員がポートフォリオ作成とまとめも行い、学生生活の指導や教育相談も担当します。	

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 共 通 科 目	教育心理学	本講義では、教育心理学の基本的な知識を習得するとともに、教育現場の諸問題を教育心理学的な視点から理解し考察することを目的とする。具体的には、1)教育心理学の歴史と研究法、2)心身の発達、3)学習意欲と学習のメカニズム、4)教授と学習の方法、5)教育評価、6)知的能力、7)パーソナリティ、8)社会性、9)不適応と心理臨床、10)障害児の心理と特別支援教育に関するテーマについて学習し、教育現場の様々な問題との関係性について考察する。 本講義では、教育心理学の基本的な知識を習得するとともに、教育現場の諸問題を教育心理学的な視点から理解し考察することを目的とする。具体的には、1)幼児、児童及び生徒の心身の発達、2)学習意欲及び学習のメカニズムと教授法、3)教育評価の目的と方法、4)知的能力、パーソナリティ、社会性の理論と測定法、5)学級集団における教師と子ども・子ども同士の関係、6)不適応と心理臨床、7)障害児の心理と特別支援教育に関するテーマについて学習し、教育現場の様々な問題との関係性について考察する。	
	教育実践ゼミ 1	卒業研究としての論文、フィールドワーク卒業研究報告書や制作テーマの設定に向けた取り組みの基礎を養うために、進路や教育実践、興味・関心を踏まえた課題に基づき基本的な指導をコースの担当教員の専門に応じ行います。学生は自分の取り組むテーマに沿って研究領域を設定し、コースの中から専門領域を選択できるようにします。また、学校や幼稚園と連携もしくは「教育インターンシップ」と関連させ、教育現場をフィールドとした省察的授業による「体験教育」理論と実践の融合を図ります。ポートフォリオ作成も行います。	
	教育実践ゼミ 2	卒業研究として、論文、フィールドワーク卒業研究報告書や制作テーマに向けた発展的な取り組みを通して、進路や教育実践、興味・関心を踏まえた課題について基本的な指導をコースの担当教員の専門に応じて行います。学生は自分の取り組む課題に沿って選択した研究領域の基本的知識と技能を学びます。また、学校や幼稚園と連携もしくは「教育インターンシップ」と関連させ、教育現場をフィールドとした省察的授業による「体験教育」により理論と実践の融合を図り、実践的研究のスキルも学びます。ポートフォリオ作成も行います。	
	教育実践ゼミ 3	卒業研究として、論文、フィールドワーク卒業研究報告書や制作テーマに向け、さらに発展的な取り組みを通し、進路や教育実践、興味・関心を踏まえた課題を掘り下げた指導を各コースの担当教員の専門に応じて行います。学生は選択した取り組むべき課題について、論文作成や制作のための知識と技能をさらに発展的に学びます。学校や園と連携もしくは「教育インターンシップ」と関連させ、教育現場をフィールドとした省察的「体験教育」による実践的研究として卒業研究報告書にまとめるスキルを学びます。ポートフォリオの作成も行います。	
	卒業研究	学修の集大成として、卒業研究として、卒業論文、フィールドワーク卒業研究報告書、卒業制作の課題を設定・推進し、完成することが目標です。一人ひとりの将来の進路や教育実践、興味・関心を踏まえて課題を設定し、進捗状況に応じた柔軟な指導を各コースの担当教員が行います。また、学校や幼稚園と連携もしくは「教育実践ゼミ」「教育インターンシップ」や「教育実習」と関連させ、教育現場をフィールドとした実践的研究とそれをまとめるスキルを指導します。実証的な研究活動や、制作活動などを推進することが求められます。	
	教職実践演習（教諭）	教職課程全体を通じた教職指導と履修カルテ（ポートフォリオ）に基づき、少人数の演習できめ細かな指導を行って、教員としての使命感・責任感、教育的愛情をもって教科及び生徒指導等を実践できる資質能力を形成することがねらいです。模擬授業、ロールプレイング、事例研究、グループディスカッション、また教育委員会・学校・園と連携したフィールドワークや現職・前教員の講義も取り入れた主体的で実践的な授業の成立を図ります。また、個々人の履修カルテや学校種に応じて、本授業目的達成のための補完的な個別指導も実施します。	
	人材教育研究	人材はあらゆる組織の経営にとって大変重要な資源です。産業界・教育界における人材を重要な経営資源として教育的側面から、人材教育システムと教育の在り方について取り上げます。企業や教育委員会、保育施設などにおいて、その人材をいかに育成するののかについて研究し、理解することを目標とします。グループディスカッション、ディベートや発表などにより、企業などが求める人材の理解と自分自身のキャリアデザインを結びつけて、人材教育システムと職業観についての知見を深めることもねらいとします。	
	教育哲学	難解とされがちな教育哲学を身近な学問として理解することをねらいとして、先人の理論と教育の実際の関連付けに留意して講義する。そのために現在では自明とされている教育的考え方の源泉を検討し、今日の教育課題を再考する契機を提供したい。論じる視点としては、大人にとって「子ども」が教育の対象としてどのように考えられてきたか、を主として考察する。具体的には、今日の「子ども観」形成に影響を与えたと考えられる思想家への言及や、日本の学校教育における「子ども＝児童観」の変遷などを検討したい。	

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科 科目 共通 科目	教育社会学	教育社会学と教育社会社会学の最も基本的な考え方である「社会化」について初めに講義します。教育社会学とその基本的な考え方について理解してもらった上で、次に教育社会学の多様な研究分野の中から「社会集団における子どもの社会化」について取りあげ、その基本的な姿を現代的状況・問題点について講義します。次に「学校・学校教育に関する教育社会学的考察」として、学校・学校教育に関して教育社会学的な視点から見るとどのようにとらえられるかについて講義します。	
	比較教育制度	公教育制度は、一国の歴史的・社会的・文化的文脈の中で形成される特性があるものの、グローバル化した今日の世界において、各国における教育制度・教育内容改革の取組みの現状と課題に学び、我が国の教育制度・内容の改革に生かしていくことの重要性を踏まえ、授業においては、英国・米国・フランス・ドイツなどの主要国における教育行政の仕組み、学校教育制度の特色と運用の実際、教育課程行政と教育課程編成の実際と特色、教育改革の課題と取り組みなどについて講義する。	
	環境教育論	(概要) オムニバス形式で環境教育について学ぶ。 (オムニバス方式 / 全15回) (13 金子慶之 / 4回) 最近の地球環境問題である「地球温暖化問題」と「オゾン層の破壊」を取り上げる。 (20 篠山浩文 / 4回) 循環型社会形成にかかわる諸問題と可能性について、地球環境、生活環境の側面から概説する。 (22 清宮義博 / 4回) 最新科学技術によって進められている環境回復状況についていろいろな例を基に解説する。 (35 柳澤伸 / 3回) オゾン層の破壊や「環境ホルモン」が生物に及ぼす影響について概説する。	オムニバス方式
	健康と食育	近年、児童生徒の偏食や朝食欠食等の食生活の乱れが、学力低下や生活習慣病を引き起こす一因であることが懸念されている。家庭だけでなく学校教育においても「食育」を推進することが健全な学校生活を送る上で重要となってきた。本講義では食育基本法成立の背景と内容について学び、現在の児童生徒の食生活や心身の健康状態を調査結果から把握し、問題点や対策について考える。またライフステージ別の栄養摂取の意義やスポーツ選手における食生活についても理解を深める。	
	臨床心理学	発達段階、脳と心、発達障害、鑑別診断をキーワードに、児童期・青年期の心の問題に関する理論を学ぶとともに、人間発達という視点に立って、臨床発達心理学、教育臨床心理学にかかわる観点から講義を進める。学生は、自らの人間発達をみつめ、児童・青年期の心の適応の問題を考える。	
	人材教育論	産業社会で働くとはどういうことか。その意味を考えながら、人材教育のあり方を学ぶ。実際に企業がどのような人材像のもとにどのような人材能力を求めているか、その具体的な実態を演習によって把握する。その上で、教員が企業の第一線で携わっている人材教育プログラムを事例体験する。これらを踏まえ、学生自らが人材教育プログラムを企画デザインし、相互発表、相互評価を行う。授業にあたっては、授業テーマにそって自分の考えをまとめたり情報収集をし、授業後に受講感想を記入することで、予習と復習ができるようにする。	
	企業内教育論	企業、行政をはじめ、そこにおける個人・集団・組織は、いかにしたら元気になるか。現在の産業社会では、「活性化」ということが叫ばれ、その教育論が求められている。この授業では、企業組織におけるマネジメントの姿と組織開発教育を学ぶ。企業の生態とマネジメントの基礎知識を習得後、教員が企業と行政で実際に取り組んでいる組織開発教育プログラムを実例として演習体験し、企業内教育の素養を養う。演習体験では、随時事前調査や発案作業を行い、演習テーマごとにレポートをまとめることで、予習と復習ができるようにする。	
	障害者教育総論	障害の概要(概念、種類・原因)と障害児の心理・生理・病理について、障害児教育の現状について総説した上で、現在わが国で進められている特別支援教育の基本的考え方とシステム、対象となる障害、教育課程や個別の教育支援計画と個別の指導計画などについて触れ、さらに特別支援学校と小・中学校の特別支援学級における教育、通級における指導等を対比しながら、障害児の教育支援について解説する。	
	発達障害論	発達障害について、医学・生理学的な基礎知識を学ぶ。具体的には、まず正常な小児の発達と成長を学び、次に発達障害の病因と疫学、診断、治療方法、及び予後予測を概観する。さらに、知的障害と個々の発達障害について詳細な理解を深め、発達障害児支援教育者としての基盤を形成する。	
障害児教育概論 1	教育実践にはそれぞれの障害が抱える特性を把握し、それに応じた教育方法を工夫するとともに、その一方で生徒個人に対しては「～障害の子供」という枠にとらわれない人間観を持つことが不可欠である。概論1では障害児教育の歴史と背景、身体障害(視覚・聴覚・言語・病弱虚弱・運動)及び知的障害の特性と教育に焦点を当てる。		

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 共 通 科 目	障害児教育概論 2	前期の概論1に引き続き、本講義では自閉症や軽度発達障害（LD、ADHDなど）の問題、特別支援教育の現状と課題、学齢期以後の障害者になった段階で問題となる様々な制約、健常者を中心とする社会の側にある偏見・差別などのバリア、それらを軽減する方策としての統合教育と障害理解教育、そして今後より重要な就労による自立を目指した学齢期後の支援、高等教育のバリアフリー化、障害者自身の社会参加の方策などについて学習する。	
	音楽療法	音楽療法とは何か概要を学び、子どもを中心として、実践的な演習を含みながら、音楽療法の実際について学ぶ。障害のある児童・生徒、保護者、指導者などを対象として、心身の健康と回復に効果的な実践力を身につける。音楽療法に使われる楽器、方法論、対象者に対する理解、療法の目的、セッションの組み立て、評価方法などについても学ぶ。	
	表現療法	(概要)表現の楽しさを体験し、直観力や創造性、表現力、人間理解を美術や音楽の体験学習から学ぶ。 (オムニバス方式/全15回・合同ガイダンス1回・各7回) (75 相澤つ子：7回) 表現アート療法の演習により感情の安全な表出方法を体験し、自己洞察を深めながら共感力や感性を養い、子どもの創造性を尊重した支援力を身につける。 (98 多田羅康恵：7回) 音楽療法の総合的な演習により、ノンバーバルな対話力のスキルを身につけ、様々なコミュニケーション方法を体験し、自己発見を通して教師の資質を磨く。	オムニバス方式
	発達指導支援法 1	学内の特別支援演習用のブレイルームで各月の第二・四土曜日に実施しているMSP（明星大サポートプログラム）の機会を利用し、実際に発達障害やいはその疑いのある児童に対し、ゲームを通じた小集団SST（社会的スキル訓練）のセッションを実施し、その補助トレーナーとして関わる。他の週はセッションの記録を分析し、指導方法に関する振り返りと次回への準備を行う。	
	発達指導支援法 2	MSP（明星大サポートプログラム）の機会を利用し、実際に発達障害やいはその疑いのある児童に対し、ゲームを通じた小集団SST（社会的スキル訓練）のセッションを実施し、支援法 で培った経験を基礎に、指導評価プログラムを立案し、担当教員の監督の下にメイントレーナーをつとめ、生活指導の方法について実践的に習得する。	
	教育行財政 1	国家行政の一作用としての「教育行財政」について、その歴史的沿革を踏まえながら、どのような制度的枠組みの中で成り立っているのか、その基本的構造の特質を明らかにする。このため、教育行財政の基本的事項について幅広く取り上げることとし、具体的には、我が国公教育制度の成立と発展、国と地方における教育行政と財政の基本的仕組み、学校制度や就学制度、学校の組織編制と管理運営、教職員の身分と職務、学校の評価と公開、地域の参画などの現状と課題を明らかにし、今後の教育行政の方向性・あり方について講義する。	
	教育行財政 2	国家行政の一作用としての「教育行財政」について、その歴史的沿革を踏まえながら、今日、どのような制度的枠組みの中で成り立っているのか、教育行財政の基本構造の特質を明らかにする。このため、具体的には、教育行政の「制度的事項」に加え、教育課程行政の基本的枠組みと運用の実際、生徒指導の在り方、学校評価と教員評価、学校の保健安全管理と「学校事故」、学校情報の取り扱いと個人情報・情報公開とのかかわりなどの課題について、その現状と課題を明らかにし、今後の方向性等を考察する。	
	教育の歴史と思想	教育の本質に関わる問題を考察するためには、長い歴史の中で鍛えられてきた教育思想などを振り返る作業が重要になります。教育史と教育思想について、主として西洋教育史を中心に概観します。それによって、日本国憲法第26条および教育基本法などに示されている高邁な教育理念や精神は、思想として歴史上に現れ、実現するために人類は長い闘いをしてきたことを学びます。我が国の現代の教育を支える理念、内容、方法意識などがどのようにして成立してきたかを、歴史的に考察します。	
	教育の最新事情	教職についての省察 子どもの変化についての理解 教育政策の動向についての理解 学校の内外での連携協力についての理解、に関する最新事情を理論的に考察する。教育の最新事情の検討には、その不易と流行の視点が重要だと考える。このような視点を踏まえて学習指導要領等に関連しつつ、さまざまな方法により、上記の内容に関する各種基準に従って探究する。	

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科 科目 共通 科目	教育法規 1	「教育政策として議会によって定立された法に則って、行政主体である国又は地方公共団体が教育政策を具体的に実現する作用」ととらえられる「教育行政」は、「法律主義」の原則に従い、執行される性格のものであることを具体的に明らかにする。このため、教育行政と教育法とのかかわり、教育法の基本原理としての憲法の教育条項と教育基本法の基本的枠組み、学校制度と就学の仕組みと法、学校の組織編制・管理運営と法、教職員の意義・役割並びに身分・服務と法、国と地方の教育行財政と法について講義する。	
	教育法規 2	「教育政策として議会によって定立された法に則って、行政主体である国又は地方公共団体が教育政策を具体的に実現する作用」ととらえられる「教育行政」は、「法律主義」の原則に従い執行される性格のものであることを具体的に明らかにする。このため、学習指導要領の意義・役割と各学校の教育課程編成とのかかわりや教科書等の問題、在学関係と児童生徒の基本的権利をめぐらる問題を含む生徒指導の在り方、学校の保健安全や学校事故の問題、学校情報の取扱いと情報保護・情報公開とのかかわり等について、「教育法」の視点から考察する。	
	情報教育 1	情報通信技術の進歩による情報活用方法の多様化、高度化に支えられている情報化社会における教育の考え方、学習内容、学習方法を学び、情報化社会が教育へもたらす影響について光と影の両面から考える。具体的には、情報教育の実践について挙げられている3原則である、情報化の進展に即応した教育、教育の活性化への情報通信技術の活用、情報化の影響への対応に関して、教師自身が身に付けるべき情報活用能力と教師が児童生徒に学ばせるべき実践的な内容を考察する。	
	情報教育 2	情報通信技術の教育への主な適用分野である、CAI：コンピュータ支援による学習とCMI：教授者活動の支援に関して、情報教育実践の観点から学ぶ。情報教育を推進する上で活用する各種教育ソフトを実際に利用体験し、それら教育ソフトの個々の評価を通じて、CAI、CMIの現状を評価分析し、実際の学校現場での有効性と適用上の課題を学習する。また、総合的な学習の時間、普通教室における各種教科等、実践的な場面での情報教育の進め方や、情報公開、個人情報保護等の法制度の学校教育において配慮すべき点についても具体的に学ぶ。	
	授業研究 1	内容として、大きく 第二次大戦後から昭和26年まで、昭和33年から昭和43年まで、昭和52年から平成15年まで、今回平成20年の学習指導要領の改訂の特質の4期に分け、それぞれの時期の教育的特質や理論的背景を解説するとともに、各学校で教育課程を編成する際の基本を解説することにする。	
	授業研究 2	内容としては、わが国における「指導要録」の歩みとその特質、問題解決評価・その意義、最近の評価の3つの機能と絶対評価の導入、評価の観点、ポートフォリオ評価の意義、ルーブリックの作成、授業と評価の実際に分けて解説することにする。	
	外国語活動指導法研究 1	小学校で英語を教えることの意味や問題点を話し合い、各自が目的、内容、目標を設定する。英米の絵本や児童文学、アニメーション、歌など、子どもたちが興味を持つ内容を扱いながら、英語の音に慣れ、基本的な単語や表現例を用いて英語で聞き話すことを中心に言語活動を行い、異なる言語や文化に対する関心を高め、異文化を尊重する姿勢を身につけられるような教材を考え、教育法を工夫する。指導案を作り、模擬授業を行い、お互いにフィードバックしながら、さまざまな状況に対応できる実践力をつけていく。演習形式で行う。	
	外国語活動指導法研究 2	小学校で英語を教える教員は、実践に振り回されることなく、確固たる理論に裏付けされた授業を行なう必要がある。小学校英語教育に関する賛否両論を、1つ1つ分析することを通して、地域や学校が置かれた教育環境を冷静に捉え、よりよい授業を行うための素地を養成し、必要に応じて実践への具体的手がかりを考える。	
小学校 教員 コース	国語（書写を含む。）	「国語教育」と「国語科教育」の違いは何か。国語科教育はどのような教科なのか。国語としての日本語の特質はどのようなものなのか。日本語についての一般的包括的な基礎的な素養を身につけ、国語科教育の役割、意義を考察する。とりわけこれらの社会によりよく生き、自己実現するためになくてはならない自分自身の学びとしての国語科の指導の在り方について考究する。以上のような観点から、国語及び国語科について、小学校及び中学校、高等学校の国語科教科書に掲載された教材をとりあげ国語を学ぶ魅力を伝える。	
	社会	小学校の社会科は、社会生活についての理解を図り、公民的資質の育成の基礎を養う教科であり、学習者の身近な社会事象や産業などを教材とする。実際の場合では、学習者が自ら活動し、主体的に学ぶ姿勢を重視する。このような社会科の特色を常に意識しながら、目標と内容を考察し、社会科に対する認識の深化をめざす。社会科の意義や史的展開に関する基本原理と、他の教科目との関連などの諸課題を学び、基礎的な素養を身に付ける。同時に社会的現実も加味しながら、社会科という教科のあり方も考察する。	

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目 小 学 校 教 員 コ ー ス	算数	学習指導要領「算数科」をもとに、その目標と内容を取り上げ、その特徴について取り上げる。また、算数の教育評価や5段階評価や偏差値など算数教育全体の中から取り上げる。 算数の教材研究だけでなく、算数科教育の目標、内容、指導法、評価、算数教育の歴史などについて幅広く考察する。	
	理科	本講義では学習指導要領が示すところの「理科の目標及び内容」を理解し、理科教育の役割とその指導法や方法論を学ぶ。理科教育の具体的な内容や指導法や優れた教材、実践例などを通して、「たのしい科学の学び方・教え方」について学習する。「教材研究のあり方」「いかにしたら生徒が興味・関心を示す理科の授業を創造することができるか」「実験とは何か」「科学的に考えるとはどういうことか」「評価論」などについても学ぶ。「理科離れ」を克服する理科教育のあり方についても学習する。	
	生活科	内容としては、まず生活科の誕生の意義や背景を取り上げ、次に生活科の目標や内容を、さらには生活科の方法（教師像、個に応じた指導、チーム・ティーチング等）を、さらに生活科の評価の特質、生活科の単元指導計画の作成等を理論的側面から検討します。また、必要に応じ、話題や題材を学校現場に求めることにします。	
	音楽	教育および保育の現場で必要とされる音楽に関する知識と基本的技能を、ソルフェージュおよび楽典を中心にしながら学ぶ。「表現」および「鑑賞」の活動を行い、子どもたちのなかに音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるためには、指導にあたる教員が音楽に関する基本的知識と技能を十分に身につけていることが必要である。この授業においては音を感じ取ること、聴き取ることから初め、記譜、視唱や視奏などを行いながら、楽典、楽式などについての認識を深め、音高、音程、旋律、基本的な和声についても学ぶ。	
	音楽実技 1	授業運営、生徒指導の成果に大きな影響を与え得る教員の「声」。一般教科においては教育内容の伝達、音楽教科においては楽器、それ以外の時間は子供達とのコミュニケーションに使われる。ここでは腹式呼吸を中心に、徹底した声のトレーニング、およびそれを使った表現、そして音楽的な「声」による表現を考え、実践する。	
	音楽実技 2	ピアノ実技を行う。小学校歌唱共通教材の演奏、弾き歌いの実習を行う。ピアノ初心者においては「バイエルピアノ教則本」を用いて基礎から学習を始め、ある一定レベルに到達した後に歌唱共通教材の弾き歌いに移行する。	
	図画工作	図画工作科は「表現」と「鑑賞」活動を通して、児童それぞれの個性的なものの方、感じ方、考え方、表し方に気づかせ、造形的な創造活動の基礎的な資質・能力と、豊かな感性・情操を育む教科である。よって、造形的表現活動の本質・本源的な意味・価値・効用や原理的表現型を、子どもの造形的表現に見出せることが当該教科の理念的な前提であり、児童それぞれにとっての豊かな表現性を、自分らしくかつ他者に通じることがたけで発現できるように涵養することの可能性を研究する。	
	家庭科	少子高齢化等に対応する観点から新学習指導要領においては家族と家庭に関する教育の一層の充実が目指されたが、その趣旨を踏まえて再構成された「内容」にある「A家庭生活と家族」「B日常の食事と調理の基礎」「C快適な衣服と住まい」「D身近な消費生活と環境」を平易に解説・講義する。中教審の「答申」にある「改善の基本方針」に示されている家庭科の今日における意義・役割を、各「内容」の説明において具体的に強調したい。	
	体育	小学校の体育授業を担当するための基本的な知識の獲得を目的とする。特に現代社会では、運動と健康の関連が指摘され、小学校においても運動領域と保健領域を一層関連させた内容で指導することが求められる。運動と健康については、生理学的・心理学的な観点からも、アプローチする。そして、機能的な発育・発達というものは、児童・生徒各個人がどのようにして獲得していくのか、その経緯と特徴を把握するとともに、この時期の子どもたちにどのような運動が必要か、またどのような運動種目が最適かを理論的に学習する。	
	児童心理学	本講義では、人生全体の発達段階の中でも特に児童期に焦点を当て、(1)児童期に特徴的な心と体の発達、言語・認知機能の発達、学習・学業達成と動機づけ、社会性の発達、パーソナリティと自己の発達、家族関係・仲間関係、問題行動、発達障害に関するテーマについて概観するとともに、(2)現代の子どもの様々な問題を心理学的な視点から考察することを目的とする。	
保育学 1	本科目ではまず、子どもの現状、保育の現状を取り上げる。現在の子どもの生活の現状、家庭保育、幼稚園教育、保育所保育の現状を取り上げる。これらの現状をまず知って、そのあとで、何故保育が必要なのかを、子どもとはどういう存在かという視点を中心にして取り上げる。人間としての子どもがどういう存在かという問題と、現代社会との関係をも視野に入れて取り上げる。		

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科科目 小学校教員コース	保育学 2	本科目では、先ず子どもの育ちの理解として発達の基本的な理解と特徴を取り上げる。次に保育と環境の問題を、自然環境、物的環境、人的環境に分けて取り上げる。三番目には、保育内容と方法を取り上げる。その際に保育の諸原理を先ず述べ、次いで「幼稚園教育要領」と「保育所保育指針」の保育内容と方法を取り上げる。四番目に保育の計画と実践・評価を取り上げ、最後に園と家庭、学校との連携について取り上げ、保育者の在り方に繋げる。	
	初等教育課程論	教育課程という語はきわめて多様に使われている。歴史的に見ても学校が社会の中で果たす役割や機能の変化につれてその意味は変遷をみせているし、現在の意味内容も実態もまた多様である。およそ教育が意図的、組織的で継続的に行われているところでは、教育は「誰に」対して、「誰が」働きかけるのか、それは「何の目的のために」、「何を媒介としてどんな内容で」、「どんな技術を駆使して」その目的を達成するのか、そしてそれを支える行政・制度はいかなるものかといった初等教育課程の諸問題について考えたい。	
	初等国語科教育法（書写を含む。）	小学校学習指導要領に示されている国語科教育の「目的」・「内容」・「言語活動」・「言語文化と国語の特質に関する事項」等の基本を学ぶ。とりわけ、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」、「書写」の内容を概括的に理解し、自ら言語活動を通して、今求められる指導法の基礎的な素養を習得し、教師として必要な国語科教育についての指導観を身につける。また、将来教師となる上での自分自身の課題を見つけるとともに、国語に対する関心を一層深め、国語を尊重する態度を育てる。	
	初等社会科教育法	初等社会科は、科学的・合理的な社会認識と社会参加力の形成を通して公的資質の基礎を育成する教科です。「国際社会に生きる民主的、平和的な国家・社会の形成者として必要な公的資質の基礎を養う」ために、教育方法についての実践的な知識を養うことを目標にします。地理、歴史、公的知識を、子ども自身の生活に生きて働くものにする教育の成立を図るための初等社会科の教育方法と、社会・自然環境の中で、自己実現と共生を担う自律的な人格の基礎を養う「生きる力」をめざす初等社会科教育について具体的に学びます。	
	初等算数科教育法	算数科の四領域の内容から主要なことがらを取り上げる。また「算数的なものの見方・考え方」については、児童の具体的な解答例をもとに検討し、解説を加える。そして、学習指導案を作成する。	
	初等理科教育法	教材研究や学習指導案の作成などを通して、「具体的な指導法」や「子どもの科学的認識」「優れた教材とは」「子どもが興味・関心を持つ理想的な理科の授業とは」などについて学んでいきます。その学習の過程で実践的な指導力を身につけてもらいます。また、自分でも「たのしい授業ができる」という自信を持ってもらったり、「早く先生になって授業をしたい」と思ってもらえたらと考えています。「学習指導要領」のねらいについても学習します。	
	初等生活科教育法	内容としては、まず生活科の誕生の意義や背景を復習した後、生活科の年間指導計画の作成（目標や内容等の研究、単元の開発、T T、指導時数の割り振り等）、生活科の学習指導の検討（問題解決学習の展開、個に応じた指導の展開、T Tの展開等）、生活科の評価の進め方、以上を踏まえた単元指導計画の作成作業やその指導面及び評価面からの検討をします。また、必要に応じ、話題や題材を学校現場に求めることにします。	
	初等音楽科教育法	小学校の教育における音楽科についての知識を得ると同時に、授業実践に必要な基礎的な技能を身につける。音楽科の変遷、目標、内容、指導法、評価について解説し、授業実践についての考え方、捉え方などを学ぶ。そして、そこから「表現」および「鑑賞」の各々の活動の中で、子どもたちの音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるための授業の実践的内容について検討する。	
	初等図画工作科教育法	図画工作科は「表現」と「鑑賞」の活動を通して、児童それぞれの個性的なものの見方、感じ方、考え方、表し方に気づかせ、造形的な創造活動の基礎的な資質・能力と、豊かな感性・情操を育てる教科である。よって、すべての児童にその子なりの成就感を味あわせ、自己表現が可能であるところに当教科独自の性格と役割がある。その実現のための基礎的な理念、指導の内容と方法について、実制作を含む教材研究、指導案作成などを通して学ぶ。	
初等家庭科教育法	小学校家庭科の教員としての実践的な知識・技術の習得をねらいとして授業を構成する。新学習指導要領にある家庭科の目標、内容の趣旨を踏まえて、まず、カリキュラムの考え方、学習指導の実際、評価のあり方などの基礎的な検討を行う。次に、授業の実際を学習するために、年間や単元など、指導計画の作成を体験する。これらの内容を通じて現代の社会生活における家庭科教育の重要性の理解を深めていく。		

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科科目 小学校教員コース	初等体育科教育法	体育及び体育科では、現在の子どもたちの置かれている生活環境の劣悪化に伴う、心と体の諸問題について取り組む。生きる力・工夫する力などの問題解決が出来る力を身につける指導を見つけます。また保健領域の拡大についての考え方と各学年及び各領域別種目の特性を理解し、合理的で効果のある運動指導が出来るよう指導する。特に運動種目の特性とそれぞれの教材内容を理解し、単元計画と学習指導案(時案)の作成方法も学習する。	
	道徳教育の指導法(小学校)	新学習指導要領において、「道徳教育は、道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行うものである」ことが明示されました。そこでまず、小学校学習指導要領「道徳」の目標や内容、及び指導計画の作成、道徳の時間の指導の特性等について理解を深めます。次に、実際に授業で使用する資料の分析・検討方法を追求します。そして資料分析を基に発問を精選し、板書計画を盛り込んだ学習指導案を作成します。さらに、道徳実践に結び付けるために教育活動全体を通じて行う指導のあり方、家庭や地域社会との連携の仕方等を追求します。	
	特別活動の指導法(小学校)	特別活動はその目標に「望ましい集団活動を通して」とあるように、学級を単位とする集団や学級・学年の枠を超えた集団による活動をするところにその特徴がある。つまり、特活では実際の生活経験や体験経験による学習、「なすことによって学ぶ」(learning by doing)ことを通して、全人的な人間形成を図るという点が強調される。このことを達成するために特活の内容は〔学級活動〕〔児童会活動〕〔クラブ活動〕〔学校行事〕となっている。特別活動の内容それぞれがもつ固有の価値について理解するように進める。	
	初等教育方法学	(概要)初等教育における教育方法の理論的・実践的課題を考察し、授業展開能力の育成をめざす。学校での教育方法の種類と現状や、情報機器の活用方法を学ぶ。 (オムニバス形式/全15回) (1 大橋有弘/7回)情報通信技術を活用した教育の考え方や指導方法を習得する。情報通信技術を活用したデジタル教材の作成方法や、それらを使った授業の実践方法を学ぶ。 (31 菱山寛一郎/8回)学校教育の中心である授業を多角的に分析し、具体的な学習指導法を習得する。教材研究の手順と方法、学習指導案の作成なども扱う。	オムニバス方式
	児童・進路指導論	本講義では、小学校の教員として学校における様々な生活指導上の課題や進路指導に関する内容について、その対応と指導ができる資質・能力を習得することを目的とする。 児童理解に関する内容 児童の問題行動や不適応に関する内容 進路指導(キャリア教育)に関する内容 その他	
	初等教育相談の基礎と方法	1. カウンセラーとは異なる教師・保育士の行う教育相談の役割と特徴を理解し、教育相談の方法の基礎にある理論を学ぶ。2. 乳幼児期から児童期までの子どもとその家庭に関する臨床的問題の実際、及び現代の教育・保育現場における諸問題を理解する。3. 多様な保護者・様々な困難を抱える子どもとのつながり方・理解の仕方の原則を理解し、内外の資源と連携しながら支援するための知識と技能を習得する。	
	幼児理解の理論と方法	本授業は、教職に関する科目である「生徒指導、教育相談及び進路指導に関する科目」を「教育相談研究」と共に構成している幼稚園教諭免許状取得のための必修科目として位置づけられている。幼児の発達の姿については、保育学・心理学で取り上げられており、ここでは、集団の中での幼児の実態への理解を通じて幼稚園の中での育ちとはどういうことかを知ることを目指す。	
	保育内容総論	現在の保育環境や幼児をとりまく社会環境について学習する。次に幼稚園現場の実践例をもとに保育の諸領域や保育計画を学び、そのなかで幼児がどう発達したのか(どのような力をつけたのか)、また、どんな問題が発生し、どう解決したのかを学習する。これらを通して、これからの乳幼児の健全な発達を保障する保育には、いかなる保育内容と保育計画が求められるのかを考える。	
	保育内容A・健康	保育内容の研究A(健康)の領域では、生まれて日の浅い未分化な幼児・園児の発育・発達について理解する。幼児・園児の生活能力に応じた、毎日の正しい生活習慣を学ぶ。また、未発達ながら身体を動かしたい、友達といっしょに運動をしたい気持ちになるような種目を挙げ、初歩的な指導理論を考察する。特に保育園・幼稚園内での安全教育について研究する。	
保育内容B・人間関係	乳幼児期にかかわる力(コミュニケーション能力)の発達過程を理解しつつ、幼児期にどのようにして豊かに人とかかわる力を育てるかについて考える。乳幼児期の愛着形成、幼児期の自己信頼と自立性が、子どもと保育者の相互作用、子どもと子どもの社会的相互作用によって形成されることを理解する。		

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科 科目	小学校教員コース	保育内容C・環境	本授業は、幼稚園教諭免許取得のための必修科目である「教育課程及び指導法に関する科目」として位置づけられている。ここでは、領域「環境」で示されているねらいと保育内容を理解する。加えて保育所・幼稚園における環境教育の意義について取り上げる
	保育内容D・言葉	乳幼児の発達全体をふまえながら、領域「言葉」の理解と考え方、言葉の発達と言葉を育てる保育のあり方、保育者の働きかけと言語環境、言葉と感性の問題等について理解する。その際、幼児期から小学校児童期への接続期の教育の現状も踏まえ、話し言葉から書き言葉への連続性と教育方法についても学習する。	
	保育内容E・表現1	保育の現場において、子どもたちの表現の活動を援助するために保育者が身につけるべき知識および技能を習得する。子どもたちが美しいものなどに対する豊かな感性を持ち、感じたことや考えたことを自分なりの表現で発露することを、子どもたちの発達過程に配慮しつつ援助することについて学ぶ。具体的には歌うこと、リズムに合わせて身体運動を行うこと、簡易な打楽器を活用した活動を行うことなど、子どもたちが表現を楽しむことができる場をつくることについて検討する。	
	保育内容F・表現2	幼児期における表出・表現活動の中でも、とくに絵を描いたりモノを作ったりする造形的な表現活動の、原理的な発達段階を中心に扱う。本来は誰しもにとって自由に自発的な表現活動であるが、特にこの時期の子どもの活発で意欲的な内発的要因・動因による表現活動に、喜びや自信を持たせながら、意欲的な表現活動を子ども自身のものとして定着させ、豊かな感性や表現力を育むための理論と方法論を研究する。	
	初等教育実習指導	(小学校) 本授業では、教育実習に向けての意識を高めるとともに、教職への知識や実践力の向上を図り、求められる教師としての資質・能力の育成を目的とする。 教育実習の意義や心構え、自己課題を明らかにする。 教材研究の在り方や指導計画・学習指導案の作成を通じた模擬授業教師としての基礎的な知識を習得し、資質・能力を培う。 (幼稚園) 初等（幼稚園）教育実習の事前教育として実施する演習科目である。幼稚園での実習に円滑に取り組めるように、対象となる幼稚園を取り巻く状況や幼児の理解をはかり、幼児教育の方法・技術・技能について演習する。幼稚園教師の役割を体感できるように、シミュレーション（simulation）授業を多用し、実践力・応用力のある幼稚園教師養成を目指して、その基礎演習を展開する。	
	初等教育実習	(小学校) この科目では、実際の教育現場での実習が意義ある充実したものとするための授業です。そのために、小学校で教育実習を行う際に必要な事柄を学びます。 指導案の作成等や模擬授業を通して、教育観や教師観を深め、教育実習の意義やその内容について理解する。 教育実習後は、授業記録や実践した指導案に基づき、自身の授業の検証と分析を行い、資質の向上を図る その他 (幼稚園) 実習の事前に実習前教育として、明星幼稚園における3歳児新入園児保育への補助を体験し、分離不安の高い幼児をターゲットに、行動観察を行い、記録する。その際、担任教師の対応方法についても、意を払う。その成果をもとに幼稚園教師のあり方について分析・考察し、4週間、幼稚園現場において教育実習を行う。	
	特別教育実習	東京都教育委員会の東京教師養成塾の教育実習生を対象に、同塾と連携して小学校への訪問指導をし、省察的授業を展開します。特別教育実習は1年間にわたって行われるため、教科と生徒指導などの準備と必要な取り組みを学びます。いかに教育実践や研修会においてそれを実現しているかを確認・省察することにより、実践的な指導力を養います。授業観、生徒指導観、教職観を実践的に育成します。事前には前年度の特別教育実習生の体験談を、後期には次年度の特別教育実習生も交えて模擬授業や実習経験を発表し、相互に課題を深め合います。	
教科 専門 コース	共通	中等教育課程論	教育課程という語はきわめて多様に使われている。歴史的に見ても学校が社会の中で果たす役割や機能の変化につれてその意味は変遷をみせているし、現在の意味内容も実態もまた多様である。およそ教育が意図的、組織的で継続的に行われているところでは、教育は「誰に」対して、「誰が」働きかけるのか、それは「何の目的のために」、「何を媒介としてどんな内容で」、「どんな技術を駆使して」その目的を達成にするのか、そしてそれを支える行政・制度はいかなるものかといった中等教育課程の諸問題について考えたい。

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学科 科目 共通 専 門 コ ー ス	道徳教育の指導法（中学校）	新学習指導要領において、「道徳教育は、道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行うものである」ことが明示されました。そこで先ず、中学校学習指導要領「道徳」の目標や内容、及び指導計画の作成、道徳の時間の指導の特性等について理解を深めます。次に、実際に授業で使用する資料の分析・検討方法を追求します。そして資料分析を基に発問を精選し、板書計画を盛り込んだ学習指導案を作成します。さらに、道徳実践に結び付けるために教育活動全体を通じて行う指導のあり方、家庭や地域社会との連携の仕方等を追求します。		
	特別活動の指導法（中高）	特別活動はその目標に「望ましい集団活動を通して」とあるように、学級を単位とする集団や学級・学年の枠を超えた集団による活動をするところにその特徴がある。つまり、特活では実際の生活経験や体験経験による学習、「なすことによって学ぶ」（learning by doing）ことを通して、全人的な人間形成を図るという点が強調される。このことを達成するために特活の内容は〔学級活動〕〔児童会活動〕〔学校行事〕となっている。特別活動の内容それぞれがもつ固有の価値について理解するように進める。		
	中等教育方法学	（概要）中等教育における教育方法の課題を検討し、情報活用能力を含めた教育的な実践力の育成をめざす。理論の把握と技術の習得を関係付けながら学ぶ。 （オムニバス形式／全15回） （1 大橋有弘／7回）情報通信技術を活用した教材作成や授業実践の方法を習得する。情報通信技術を活用した、学習結果の評価・分析方法を学び、指導方法、学習内容、教材等の評価改善方法を習得する。 （31 菱山覚一郎／8回）教育方法の理念及び歴史を学ぶだけでなく、教育現場の実態に即した学習指導方法を習得する。特別活動や「道徳」の教育方法も扱う。	オムニバス方式	
	生徒・進路指導論	本授業は中学校・高等学校の教員として生徒指導についての的確な指導ができる資質・能力を習得することを目的としている。生徒指導の本来の意味と、直面する問題行動や不適応行動についての指導法などについて学ぶ。また、学習指導要領（学級活動）に示す進路指導のあり方についても学習し進路指導計画・進路指導の組織とその運営についても理解する。		
	中等教育相談の基礎と方法	学校にいじめ、暴力等様々な問題が山積する中で、教師による教育相談の力が求められている。受講生は、思春期の生徒が育つ現代の背景を多面的に理解するとともに、発達障害を含めた子ども理解について科学的な知見を学ぶ。また、カウンセリングの基礎を学ぶ中で、学級経営や教科指導を支える教師の感性としての気づき、観察力、傾聴、ことばかけ等を事例を通して考察し、教師としての教育相談の実践力を培う。		
	中等教育実習指導	本授業では、教育実習に向けての意識を高めるとともに、教職への知識の深化や実践技術の向上をねらいとする。具体的には、教育実習の心構えや自己課題を明らかにした上で授業実践の方法を取得する。また、グループに分かれて教材分析や学習指導案の作成、模擬授業等を行うとともに、履修者どうして授業分析を行うなどして授業実践力を身に付ける。履修者が学びあいながら、教師としての資質を高めていく。		
	中等教育実習 A	本授業は、教育実習においてこれまで学んだことを実証的に検証し、机上では得られない教師としての能力や力量を育成することがねらいとなる。具体的には、事前指導として教育実習の意義や内容についての理解を深めるとともに、学習指導案の作成、模擬授業による授業実践、模擬授業の相互評価などを実施する。また、教育実習の事後指導として、実習中の成果や課題を整理・共有し、中学校・高等学校の教員となるための資質・能力の向上を目指す。		
	中等教育実習 B	本授業は教育実習の直前指導を通じ、教育実習に自信をもって臨めるようにするための授業である。そのために、指導案作成・模擬授業による授業実践・模擬授業の相互評価などを実施する。また、教育実習の事後指導として実習中の各々の収穫や課題を整理・共有し、中学校教師になるための資質・能力を習得する。		
	国語	国語学概論	日本語とはいかなる言語であるのか、その基本的な構造と特徴を体系的に学ぶだけでなく、日本語をできるだけ客観的に把握する方法を修得する。具体的には、日本語の音韻・文法・語彙などにおける特徴を概説し、それらの言語事象が受講生自らの言語にどのように現れているかを観察させる。そして、その言語事象のさらなる特徴はないか、新たな変化の兆しはないかなどを討論し、自らの日本語がいかに記述できるかという作業を通して、自分の言語と文化を見直す機会とする。	
	国語	日本文法 1	日本語文法の基礎知識を修得し、主として古典文学の解釈に必要な基礎的文法事項について、具体例をもとに学んでゆく。古典文法分析・考察の仕方を身につけるとともに、古典を読解する力の向上を図ることが目標である。また、現代語の文法についても、その概略と特徴を古典語文法と対比的に把握させ、文法的知識が机上のものとならないよう、現実の言語使用と結び付けて理解させることも目標である。そのために、実際の言語事象を文法的に説明する作業を取り入れ、文法の意識化を目指す。	

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科 科目 国語 専 門 コ ー ス	日本文法 2	古典の文法的解釈を実践的に学ぶ。具体的な材料には、中学校・高等学校の教科書に採録されることの多い『徒然草』『枕草子』『伊勢物語』『宇治拾遺物語』などの作品を用い、複数の注釈書を比較検討しながら読み進め、文法的解釈の方法論を実践的に修得することとする。また、可能ならば、注釈が公刊されていない作品を取り上げ、受講生自らが作品内容を文法的に把握する作業を通して、文法事項の理解を確認し、合わせて読解力の向上をはかりたい。	
	日本語表現法	日本語の表現法の基礎を実践的に学ぶ。日本語の基礎的知識を踏まえた上で、実用的な文章からレポート・論文等の文章作成の基本事項を修得し、具体的な問題設定と材料の組み立てを意識した課題レポートを作成する。また、書き言葉と話し言葉の差異を理解し、日常会話の表現技術を確かめるとともに、口頭発表や討論などにおける効果的な表現を修得する。併せて、日本語の表現力をさらに高めるべく、辞書の使い方やワープロの利用法等についても言及する。	
	国文学	短歌という小さな定型詩は日本人にとって、不思議な力を秘めた言葉の器であり、千数百年の遠い昔から現代に至るまで、私たちはこの器を、力ある言葉と美しい調べによって満たそうと繰り返し続けてきた。生活の希薄化や言葉の空疎化が叫ばれている現在、短歌の命脈の底に流れる、日本人の生と死に関わる心の真実を見つめ直すことで、日本人らしい生き方とは何かを学ぶ。	
	国文学史	日本の古代から近世までの代表的な文学作品を原典で講読する。日本最古の作り物語である『竹取物語』や随筆『枕草子』から俳文『奥の細道』まで、日本文学がどのように生まれ、どのように展開したのかを、主としてジャンルの生成という観点から捉え、個別の作品読解を通じて、その諸相を確認してゆく。古語辞典を引きながら、テキストをひとつずつ味読し、それぞれの受講者が基本的な文学史観を形成できるよう心がける。	
	日本文学概論	近代詩は、明治時代に西洋の影響によって生まれた。和歌や俳句といった日本の伝統的な詩歌とは異なる新しいジャンルである。その自由なスタイルは、いまなお人々を惹きつけてやまない。若い世代によって、詩は次々と生み出され、新しい感受性の発露として、時代を牽引するものとなっている。ここでは、そのような最先端の詩を書き続ける詩人13人を厳選し、その詩的世界に迫る。	
	古典文学	古典文学を概観し歴史や時代背景、特徴等を学ぶとともに、疎遠に成りつつある古文を自ら読み、分かる言葉を手がかりに未知を創造する読みの地平を拓くことを目的とする。なぜならば、読者が意味を見つけ創造することで、古文は現代に生き次の時代に受け継がれるからである。小学校・中学校学習指導要領「伝統的な言語文化に関する事項」を視野にいれ、昔の日本人が愛唱し、日本文化の根底を創った名詩、名文を読み、朗誦、暗唱、交流を通して古典文学についての素養を培う。	
	近代文学	日本の近代文学の見取り図を示した上で、詩「雨二モマケズ」や童話「銀河鉄道の夜」で知られる近代の代表的詩人・童話作家である宮沢賢治の作品を読む。大正13年に刊行された生前唯一の童話集「イーハトヴ童話『注文の多い料理店』」に収録された作品をはじめ、「雪渡り」「やまなし」「氷河鼠の毛皮」など、同時代のメディアに発表された作品を中心に取り上げ、近代文学のあり方について考える。	
	漢文学	故事成語とは、故き事の語と成れるもの、すなわち昔から伝わっている事柄が熟語となって慣用的に用いられているもの、という意味である。私たちが普段、何気なく使っている言葉の中には、中国の故事に基づいて成立したものが案外に多い。固有の文字を持たなかった日本人は、漢文との出会いによって初めて、書き言葉を手に入れたからである。その、日本の古典としての漢文について、ここでは代表的なものを学んでゆく。	
	書道 1	学習指導要領の内容や、国語科書写の指導に必要な知識、技能、学習指導法について概説するとともに、実技を通して書写力の向上を図る。また、基本的な学習指導法について考え、学習指導案を作成する。	
	書道 2	「書道 1」に引き続き国語科書写の指導法を概説するとともに、実技を通して書写力の向上を図る。また、学習指導内容に即した基本的な学習指導法について考え、学習指導案を作成し、模擬授業を実施する。	
国語科教育法 1	中学校・高等学校の国語科教員を目指すうえで必要な知識や教養を学ぶ。国語力は、あらゆる科目の基礎となる力である。国語科を教える者には、それ相応の重い責任が課せられていると言える。その国語科教育の意義や目標。そもそも国語科とは、どういう科目であり、生徒への教授を通じて、何ができるのか、などを考える。中学校・高等学校の学習指導要領を紐解きつつ、これからの国語科教育のあるべき姿を探る。		

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 専 門 コ ー ス	国語		
	国語科教育法 2	実際の授業を想定して、教材研究と学習指導案の作成を行う。著者研究と本文構成の検討、叙述と注解、発問及び板書の作成という手順で進めてゆく。事典や辞書を引いて調べたり、生徒に質問する事柄を体系的に考えることになる。取り上げる作品は、各社の教科書に採用されている現代文の小説の中から、芥川龍之介『羅生門』、川上弘美『神様』、江國香織『草之丞の話』、赤川次郎『記念写真』。	
	国語科教育法 3	実際の授業を想定して、教材研究と学習指導案の作成を行う。著者研究と本文構成の検討、叙述（訳述）と注解、発問及び板書の作成という手順で進めてゆく。事典や辞書を引いて調べたり、生徒に質問する事柄を体系的に考えることになる。取り上げる作品は、各社の教科書に採用されている現代文の評論の中から、山崎正和『水の東西』、大岡信『車座社会に生きる日本人』、古典の中から、清少納言『枕草子』、兼好法師『徒然草』。	
	国語科教育法 4	国語科教育法 2 及び 3 で作り上げた学習指導案に基づいて、模擬授業を体験する。教材研究の成果をいかに魅力あるものとして具体化してゆか。教師の視線や表情、身振り、手振りのあり方も含めて、検討してみたい。教師の出発点は、授業という空間を演出し、指導してゆく積極的な立場に立つことである。受講者同士の討議を重ねて、よりよい授業の実現を目指してゆく。	
	初等国語指導法研究 1	本科目は、小学校国語科の教材を実践的に考究し、必要な国語科に関する専門的な素養を培うものである。具体的には、小学校学習指導要領国語科の【内容】「A 話すこと・聞くこと」、「B 書くこと」、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の目的、内容、方法について講ずる。また、それぞれの実際に指導する場面を想定した教材研究を行い、指導案等を作成する。また、模擬授業を通して具体的な国語科の授業姿を描けるようにする。	
	初等国語指導法研究 2	本科目は、小学校国語科教育について実践的に考究することで、必要な国語科に関する専門的な素養を培うものである。具体的には、小学校学習指導要領国語科の【内容】「C 読むこと」について、その目的、内容、方法について講ずるとともに、また、それぞれの実際に指導する場面を想定した教材研究を行い、指導案等を作成する。模擬授業を通して具体的に国語科授業の姿を描けるようにする。	
	社会		
	日本史概説	原始時代の日本から江戸時代の成立期まで前近代史を中心に各時代の基本的な事項と特徴、大きな歴史の流れについて旧来の理解と最近の研究動向との相違を意識しながら講義を行う。	
	日本史各論 1	日本史の具体的な展開を江戸・東京地域の中世史を通して理解させ、特に地域に残る様々な歴史資料（文書・記録のみならず石造物・建築物・棟札といった物的資料、遺跡など考古資料、祭りや伝承など民俗資料）の教材化の視点を含めながら講義を行う。	
	日本史各論 2	日本史上で13世紀後半～14世紀は激動の時期であるといえよう。初めての本格的な対外戦争であるモンゴルとの戦いが行われ、日本もいよいよ世界史の中に巻き込まれていく。政治もそれに対応することがせまれ、徳政が行われるものの、鎌倉幕府は滅亡し、建武政権を経て60年間に及ぶ戦争が開始され、日本をめぐる国際関係も大きく変化する。学習指導要領で国際関係の学習が重視されていることに対応し、この時期について講義を行う。	
外国史概説	本講義は、最初に歴史研究の学問的意味、歴史研究方法論、史料論等について説明し、外国史を理解する上での基礎的知識のみならず、外国史を教える際に把握しておくべきポイントをも明らかにすることを目的とする。具体的には、まず、外国史の西洋史、東洋史の地理的区分、それぞれの時代区分、特質等を説明し、次に、西洋史、東洋史両者に共通な要素をもつ古代四大文明についてその相違点とともに、後半は西洋史の古代ギリシャ民主制の発展とその特徴、古代ローマ共和制から帝政への変遷過程を概説する。		
外国史各論 1（東洋史）	近世から近代に至るまで、中国の歴史は、内陸民族間の対抗と融和、漢族文化の発展と変容、東西の経済および軍事の衝突など、一層波瀾万丈の激動状態にあった。講義では、今日のアジア大国である中国の諸相を理解するキー・ワードをその千年間の歴史に見つけること、さらにかつての朝貢体制や漢字文化圏は、現在のアジア諸国とのつながりを考える上で極めて重要であることを認識することを目的とする。具体的には、隋唐から、宋元、明清にいたる王朝の歴史とそれぞれの特質について説明する。		
外国史各論 2（西洋史）	本講義では、西洋史研究の事例として、中世以降のヨーロッパ社会の変遷、及び、市民革命等の問題を取り上げ、それぞれ詳細に説明する。具体的には、中世ヨーロッパの特性(封建制度の特質、ローマカトリック教会成立による中世権威的世界の理念)、ルネサンスにおける人文主義やルターによる宗教改革の社会的影響、最後に近代、現代の市民社会成立のきっかけとなった市民革命の一例としてロシア革命を取り上げ、ロシア革命の要因や勃発経過やソヴィエト政府の成立と諸問題について講義する。		

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 目 教 科 目 社 会 専 門 コ ー ス	人文地理学	この講義は教職課程の学生を主な念頭に、人文地理学の基本を解説する入門講義です。講義ではまず人文地理学の誕生・発展の経緯や、主なテーマについて概観した後、自然環境と人間生活との関係、地域のまとまりの形成、地域間のつながり、都市と村落の秩序、環境問題など、毎回テーマごとにわけて解説していきます。	
	自然地理学	地球の自然環境を構成する要素は、大きく岩圈、気圈、水圏および生物圏に分けられる。これらはそれぞれ内部に独自の仕組みを持ち、さらにそれぞれが相互作用を及ぼしあっている多様で複雑なシステムである。本講義では、自然地理学の基礎概念や自然環境の仕組み、そしてさまざまな自然環境とそのとらえ方・考え方を解説する。	
	地理学入門（地誌を含む。）	地理学は古代ギリシャ以来のきわめて古い伝統をもつ学問であり、古典的でオーソドックスな構成が今でも根強く残っているが、一方、地域社会で生起し、日々変化を遂げる諸事象を直接扱う学問であるため、そのデータの入手方法や、加工・検討の方法も、近年めざましい発展を遂げてきている。本講義では、地理学のそういう新たな側面にもできるだけ注目し、地図や統計、フィールドワークといった従来からの調査・研究手法とともに、地理情報システム（GIS）やGPSなど、最新の地理情報技術の動向についても紹介を行う。	
	地誌学概説	この講義は、将来中等教育で地理を教える学生を念頭に、特に人文地理的な側面から、世界各地の産業や政治、暮らしの特徴などを地域の地理的な特徴に結びつけて説明します。まずユーラシア大陸の地形的特徴を整理した後、世界地図を見ながら各回に地域ごとの特徴を解説していきます。	
	法律学概論1（国際法を含む。）	講義形式 国内法のみならず国際法を含めた法が私たちの生活の中でどのような役割を果たしているのかを明らかにしていく。たとえば、人権保障の分野で国内法と国際法がどのように連携しているのかを明らかにする。	
	法律学概論2（国際法を含む。）	講義形式 国内法のみならず国際法を含めた法が安全保障、環境保護、犯罪、紛争解決などどのように連動しているのかを検証する。	
	政治学概論1（国際政治を含む。）	政治学概論1では、政治の定義や現代政治学の特徴、さらには権力や支配といった政治の基本概念を詳しく学習し、基礎固めを行う。 なお内容的には抽象的・理論的な説明が中心となってしまうが、受講生は現実の政治問題に対する関心を常に持ち、本講座で学習した知識をもとに、偏った見方に陥ることなく政治を語れるようになってほしいと考えている。	
	政治学概論2（国際政治を含む。）	政治学概論2の主要なテーマは、政治学の歴史的発展である。すなわち古代ギリシアから現代に至る重要な政治思想や理論を詳しく学習し、政治学への理解を深める。	
	社会学概論	社会科学としての社会学の性格を、まず確認する。社会学的思考を身につけ、社会現象に対する科学的把握ができるようになる。まず、科学とは何か、その基本的枠組みを確認する。そして科学としての社会学の視点を自分のものにできるようにする。次に具体的な社会現象の内容について、家族、現代社会の特徴などを中心に検討していく。現代における家族の構造や機能、家族が抱える現代の諸問題などについて眺めていく。また、他の社会現象と家族との関係についても、考察していく。	
	経済学概論1（国際経済を含む。）	売り手と買い手が自由に競争する市場においては、必然的に双方が満足する「均衡」に至る。まずこの過程を解説し、このとき、社会的な満足が最大になること、そして、外国貿易が行われるならこれがさらに増大することを説明する。また現実には、近年の日本で進行してきた自由化に伴う問題、貿易・資本の自由化によって生じる問題をとりあげ、自由化は人びとの満足を高める一方で、不利益をもたらすこともあることを説明する。	
	経済学概論2（国際経済を含む。）	マクロ経済における国民所得決定の仕組みを学び、好景気、不景気が発生する仕組みを考える。次に、それに対して金融政策や財政政策がどう対応するかを学ぶ。そしてそれらの効果がかつてに比べて小さくなってきた事情を考える。また、対外取引の自由化によって、日本経済と外国経済との関係が緊密になってきたことから生じるグローバル化時代の経済問題について述べる。	
	哲学概論	哲学とは、人間が世界や人間自身について思いをめぐらせる思考の技法である。本講義では、哲学の基本的な理解を得るために、西洋哲学史の流れに即して哲学の個々の概念や学説の理解に努めたい。古代ギリシアより始まる哲学が中世・近代を経て、どのような変貌と深まりを見せるのかを通覧していきたい。そうした作業を通じて、人間の思考の可能性を探求することを目的とする。	
	倫理学概論	哲学の一部門である倫理学は、人間のあり方を中心に、その生の意味や価値を問い直すものである。本講義では、倫理学の基本思想を理解することを目標とし、倫理学の歴史に即しながら、それぞれの学説の理解を深めることにしたい。	

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科 科目 教科 専門 コース	社会 宗教学概論	宗教学とは何か、それはどのような出自を持ち、どのように展開してきた学問なのか。本講では、宗教学の成り立ち、その構造を確認するとともに、宗教現象を、信じる者、信じる対象、信じるということがそれを通して成立する儀礼・象徴へと分節し、それぞれに即して、宗教学の見方を提示する。	
	心理学概論	人がどのように出来事や世界を捉えているのか、個人が他者からどのように認識されるのか、またどのように他者と関わって生活しているのかなどについて取り上げる。その際、身近な事例や実際の研究例、実験例などを示しながら解説していく。	
	社会・地理歴史科教育法 1	本授業は、社会科の目的や歴史等について学習するとともに、学習指導要領を中心に中学校社会科（地歴分野）・高等学校地理歴史科の目的・内容及び指導法について理解することがねらいとなる。講義に際しては、実際の現場の授業の様子等を紹介しながら、教科に係る基礎的・基本的な指導の在り方とともに、創意・工夫のみられるより実践的な指導法についても学んでいく。	
	社会・地理歴史科教育法 2	本授業は、中学校社会科地理的・歴史的分野並びに高等学校地理歴史科の実際の指導法について、模擬授業等を通して体験・理解することが主なねらいとなる。具体的には、グループに分かれ学習指導要領を踏まえた教材分析や学習指導案の作成を行うこと。グループ内での授業の試行を経て、履修者全員の前で模擬授業を行うこと。授業後は、全員で授業分析（協議）や授業評価を行うことなどを通して授業実践力を身に付ける。	
	社会・公民科教育法 1	基礎的・基本的な知識、概念を習得させるとともに、現代社会に対する関心を高め、人間としての生き方を考えさせる授業づくりをめざします。そして教材の工夫をはじめとして、言語活動を多く取り入れた活動にも配慮した学習指導の在り方を追求していきます。普段の授業は講義形式で進めていきますが、我が国の抱えている諸問題などについては必要に応じグループ討議などを取り入れ、主体的に授業に参加する機会を設けます。	
	社会・公民科教育法 2	学習指導案の作成に関する指導の後、それぞれの班ごとに主題を決め、学習指導要領を踏まえて学習指導案を作成することになります。出来上がった指導案をもとに実際に授業を行います。ここで大切なことは互いに授業を観察しあうことで授業を評価する力も高めていくことにあります。この活動を繰り返していくことで授業の在り方、進め方などを学び、公的的分野の学習指導力を育てていきます。	
	初等社会指導法研究 1	本授業は初等社会科に関する講義と、初等社会科の授業実践（学習指導案の作成や模擬授業など）を中心に展開します。平成20年3月の学習指導要領改訂に伴い、「生きる力」の理念の継承と、その具体的な手だての確立が求められています。講義ではまず社会科の成立背景や初等社会科の特色について学習します。次いで、学習指導要領の変遷と今改訂について学び、小学校学習指導要領に見られる社会科の教育目標・教育内容を把握します。その上で、実践を想定した学習指導案の作成を行い、初等社会科の指導法を検討します。	
	初等社会指導法研究 2	本授業は初等社会科に関する講義と、初等社会科の授業実践（学習指導案の作成や模擬授業など）を中心に展開します。「生きる力」の理念の継承に伴い、主体性や個性を尊重した教科のあり方と、学習や生活の基盤となる知識・技能の習得が求められています。講義では、初等社会科の指導法の特徴を学習し、学習指導案作成の具体的なポイントや授業分析の方法を理解します。さらに、教材研究や評価、年間指導計画の作成を通じて、実践に即した指導法を検討します。	
数学	代数学 1	線形代数、すなわち行列・行列式及びベクトル空間の理論を学んだ後、いわゆる抽象代数学の群・環・体の概念に、具体例を多く取り上げることにより、慣れることを目標とする。準備的教材として写像概念を重視する。2項演算、群の定義、生成系と基本関係、有限置換群、シロー群の定理、正規部分群の列、準同型定理、群の行列表現、などの項目を学ぶ。	
	代数学 2	代数学1を学んだ後、ガロア理論を専門的ではなく、やさしく取り扱う。特に多くの具体例を学ぶ。5次以上の一般代数方程式が解の公式を持たないことと、群と体の相互双対性（ガロア対応）を強調する。すなわち、解たちを単に集合として考えるだけではなく、それら解たちの変換全体を新しい空間としてとらえる幾何学的アイデアを持って、ガロア群を考える。可解群、巾零群、有限体、円分体、環上の加群、作図問題、正規拡大体、分離拡大体、などの項目を学ぶ。	
	幾何学 1	ユークリッド幾何学についての講義を行う。主な内容は次の通りである。三角形の五心、三平方の定理（ピタゴラスの定理）、オイラー線、チェバの定理、メネラウスの定理等。ユークリッド幾何学に関する基本的な知識を学ぶことを目的とする。予備知識として、基本的な用語（平行、垂直、中点等）、記号（2本の直線が平行であることを表す記号、2本の直線が垂直であることを表す記号等）、基本的な定理（三角形の合同条件、円に内接する四角形に関する定理、円周角の定理等）は仮定する。	

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科 科目 教 科 専 門 コ ー ス	数学		
	幾何学 2	作図・作図問題についての講義を行う。内容は以下の通りである。作図のルール、基本的な作図（平行線・垂直の引き方、辺の2等分線・3等分線の作図等）、加減乗除と平方根の作図、具体的な作図問題（正五角形の作図等）、作図可能性と不可能性。講義は、実際にコンパスと定規を用いて作図を行いながら学習を進めていく。ギリシャの3大作図問題（角の3等分問題、立方倍積問題、円積問題）を考えていくことを通して、作図の不可能性（例えば、角の3等分線の作図不可能性）をどのように証明することができるのかを理解することを目的とする。	
	解析学 1	逆三角関数や指数関数や対数関数などいろいろな関数をとりあげる。また、媒介変数表示や極方程式、双曲線関数も取り上げた後に、それらの導関数、たとえば逆三角関数などの導関数も説明し、対数微分法にもふれる。	
	解析学 2	媒介変数の微分法や偏導関数を取り上げる。またいろいろな型の不定積分や定積分を取り上げた後、異常(特異)積分なども取り上げる。さらに2重積分計算まで行う。	
	確率論	確率論の本質を出来る限り平易に解説し、例題や問題演習を中心に行うことによって身につくような授業展開を目標とする。授業展開は初心者にとって具体的に確率論の理解ができるように、我々の日常生活の身のまわりにある具体的な例題を取り扱って学習する。	
	統計学	統計学の本質を出来る限り平易に解説し、例題や問題演習を中心に行うことによって身につくような授業展開を目標とする。授業展開は初心者にとって具体的に統計学の理解ができるように、我々の日常生活の身のまわりにある具体的なデータを取り扱って行なう。	
	コンピュータ演習 1	数学文書作成用に開発されたTeXの使い方を学習する。現在では直接TeXを用いるというよりも使いやすいLaTeXを用いることが一般的であるので、授業においてもLaTeXを使う。毎時間、様々な文章形式を取り上げLaTeXで実際に文書作成を行う。具体的には箇条書き・引用・表の作成などである。特に数式表現に長けているソフトウェアなので、数式表現（演算子・括弧・数学記号・行列など）は重点的に学習する。LaTeXはフリーソフトで、様々なOS上で動くので自宅PCでも使用することが可能である。	
	コンピュータ演習 2	C言語を用いて、簡単なプログラム作成の方法を学び、数学の問題をプログラム処理して解くことを学習する。まず、プログラム作成で基本となる演算・変数型、条件分岐、繰り返し・配列などの使用法を学習する。これらの演習を通して、プログラム作成とエラー修正及びプログラムの実行がスムーズに行え、エラー修正に関しては、エラーメッセージにより自らエラー修正が出来るようになることを目標にする。これらのプログラム処理を応用して、数学の問題を解いたり簡単なアルゴリズムについても学習する。	
	コンピュータ演習 3	数式処理ソフトウェアの基本的な使い方を取得し、それらを応用して数学教材作成などに応用できることを目標とする。数値計算、数式の簡略化と展開・因数分解、方程式、微分積分、行列、グラフなどを扱う。教材作成のためにWord、Powerpoint、LaTeXなどの連携使用についても学習する。数式処理ソフトウェアは結果が出るまでの途中経過が表示されないので、単に命令を入れて答えを出すだけに終わらず、結果が出るまでのアプローチを自分でフォローすることが必要である。	
	コンピュータ演習 4	この演習では、数値計算の基礎及びJavaアプレットの演習を行う。コンピュータ演習3では数式処理ソフトウェアを用いて方程式を解いたりしたが、この演習ではプログラム言語を用いて方程式を解く。二分法やニュートン法、逆行列やガウスの消去法による連立方程式の解法などを演習する。また、Web上で視覚的にわかりやすい数学教材を作成するためにJavaアプレットについての簡単なプログラム演習を行う。	
	数学科教育法 1	中学校や高等学校における数学及びそれらに関連する高等数学を取り上げ、その内容について学習する。高等数学での考え方は小・中・高校で学んだ算数・数学の考え方が基礎となっているので、それらの考え方を復習しつつ新たな数学の知識を得ることを目的にする。改めて「数」とは何かを考え、素数・命題論理・集合などについて取り上げる。	
	数学科教育法 2	中学校や高等学校における数学及びそれらに関連する高等数学を取り上げ、その内容について学習する。高等数学での考え方は小・中・高校で学んだ算数・数学の考え方が基礎となっているので、それらの考え方を復習しつつ新たな数学の知識を得ることを目的にする。図形やベクトル、微分法・積分法、確率・統計などについて取り上げる。	
数学科教育法 3	中学校における数学教育を取り上げ、学習指導要領にある目標・内容について理解し、実際に学習指導案を作成し模擬講義を行うことにより実践的な指導法を身につけることを目標とする。前半では、学習指導要領に書かれている目標や指導内容を押さえつつ、中学数学の教材研究や指導法について学習する。後半では、実際に学習指導案を作り模擬授業を実施する。		

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科 科目 コース	数学		
	数学科教育法 4	高等学校における数学教育を取り上げ、学習指導要領にある目標・内容について理解し、実際に学習指導案を作成し模擬講義を行うことにより実践的な指導法を身につけることを目標とする。前半では、学習指導要領に書かれている目標や指導内容を押さえつつ、高等学校における数学の教材研究や指導法について学習する。後半では、実際に学習指導案を作り模擬授業を実施する。	
	初等算数指導法研究 1	新学習指導要領算数科では、四領域の内容がどのようになっているかについて、1年から6年の内容の全体を見通し把握し、その特徴をつかむ。そして、算数科の目標や反復（スパイラル）がどのように扱われているか、また具体的に「算数的活動」の取り扱いや留意点について解説する。	
	初等算数指導法研究 2	A数と計算、B量と測定、C図形、D数量関係の教材研究を算数的活動と考えた授業、教材研究を行う。そして、具体的に「学習指導案」作りを行う。	
	理科		
	物理学概論 1	物理学概論 1 では古典力学の初歩を学ぶ、ニュートン力学の基本的な3法則から物体のさまざまな運動がどのように理解されるのかを知る。これらの事象について我々の日常生活でのいろいろな現象と結び付けることで力学理論をより身近なものとして感じる事ができると同時に興味や理解度が増し、その考え方を自然と身につけることができるように講義の中で解説する。	
	物理学概論 2	現代物理学はニュートン力学や電磁気学等の古典物理学を土台として、20世紀初頭の原子論、相対性理論、量子論を契機に広大な宇宙から極微の世界を対象に大きく発展してきた。物理学概論 2 で取り上げる諸概念は、我々の日常の感覚から懸け離れたものであるが、本講義はこの領域の幾つかの分野を取り上げ、我々の日常生活に応用されている測定機器や観察機器さらにはリニアモーターカーなどへの応用例を上げながら、その考え方の有用性について初心者にも分かりやすくかつ興味を持てるような内容として解説する。	
	物理学実験（コンピュータ活用を含む。）	物理学は近代実証科学の一つであり、理論的仮説と実験的検証を繰り返すことで、自然を記述する概念の理解を深めてきた。これは自然科学全体に共通する手法であるが、特に物理学実験は基礎的な概念と実験結果を結び付けることが比較的容易である。すなわち、この手法を実践するのに適している学問といえる。この物理学実験により、自然科学に共通して不可欠な、「現象を適切に観察・測定し、得られた結果を適正に取り扱い、客観的な結論を得ると同時にその過程を報告する」技能を修得することを目標とする。	
	化学概論 1	一見、常識と思われがちな学習者が抱く化学に関する疑問（例：「空気に重さはあるのか」「元素記号はいつから存在するのか」「モルは必要か」「水はなぜ常温で液体で、色々なものを溶かすのか」「有機と無機の違い」等）を教師のファシリテートにより学習者が主体的に解決していくという設定で、「理科教師として必要な化学の基本的なことば・考え方」「化学の歴史」「化学教授法」を総合的に学ぶ事を目標とする。また、内容によっては、分子模型による演習、簡単な実験・演示実験を行う。	
	化学概論 2	化学とは「物質とその変化」を対象とする分野である。本講義では、日常生活における「物質とその変化」を以下の具体的な事例で紹介し、受講生が化学をより身近なものとして感じ、将来の授業づくりのヒントとなることを期待する。取り扱う事例：食と化学（食品成分、食べ物のゆくえ、発酵と腐敗、肥料と農薬）；健康と化学（医薬品とサプリメント）；衣・住と化学；環境と化学（汚染物質、環境保全、地球温暖化）；生命の起源と化学進化。	
化学実験（コンピュータ活用を含む。）	基礎的な化学実験や衣食住に関わる実習を通して、化学実験に関わる基礎的な知識を得るとともに、実験器具の取り扱いや簡単な実験操作を習得することを目的とする。また、試薬の取り扱いや実験廃棄物の処理などの安全教育、環境教育も可能な範囲内で盛り込む。さらに、実験の意義、実験データの取扱い、レポートの書き方、コンピュータを用いた演習についてもあわせて指導する。教員になった時の演示実験を想定しながら実験に臨んでほしい。		
生物学概論 1	現代の生命科学において、共通の基盤となっている遺伝子の概念、遺伝子の実体、遺伝情報発現の調節が理解されるにいたる歴史を振り返り、さらに近年得られた知見までを紹介することで生物を考えるフレームワークを構築する。これは日常生活において遭遇する多様な生命科学諸領域の知見を自ら位置づけるために必須のものである。		
生物学概論 2	教科書の模式図にあるような細胞は存在するのか？植物と動物の違いは？そもそも生物とは？寿命とは？教育の現場でも直面するであろう多くの素朴な疑問に対する回答を探し求める力を養成することを旨として、生物を構成する単位である細胞を中心に据えた生物体の構造・生物の形態形成を考える。		

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目 教 科 専 門 科 目 理 科 コ ー ス	生物学実験（コンピュータ活用を含む。）	キャンパスの豊かな自然（特に植物相）を利用して、四季の移り変わりや生物間の相互作用を観察する方法を考える。身近な食材の解剖を行う事で生物の体のつくりを学び、顕微鏡を用いた観察を通じて生物を構成する単位が細胞であることを確認する。実験・観察で得られた結果（特に画像）をまとめ、発表するためにコンピューターを利用する方法についても演習する。これらを通じて、教育の現場において活用できる素材の蓄積、技術の向上をはかる。	
	地学概論 1	本講義は地学（地球科学）の基礎を学び理解することである。地学概論 1 では「地球表層、マントル、コアのダイナミクス」すなわち「プレートテクトニクス理論」と「ブルームテクトニクス理論」の概要と原理を学ぶ。さらに「太陽系誕生のメカニズム」と「46億年前の地球誕生から生命誕生」までをひも解く。最新の研究成果及び話題を織り交ぜ解説する。	
	地学概論 2	本講義は「46億年の地球史」を学び、「地震」と「火山」の概要と原理を学ぶ。とくに地球誕生から46億年かけて形成した気圏、水圏、地圏、生物圏における物質、エネルギー循環とその相互作用について学び、地球を一つのシステムとして捉え、地球環境の変動メカニズムについて理解する。最新の研究成果を織り交ぜ解説する。	
	地学実験（コンピュータ活用を含む。）	本実験では、フィールドワークとしての地学の本質を、野外実習や室内実験などを通して学ぶことを目的とする。実験の前半では、野外調査実習を集中的に行い、関東近郊に分布する世界的に注目されている地層の観察、さらに岩石・鉱物や化石の採集などを通して、フィールドワークにおけるもの見を身につけてもらう。後半はおもに実験室内において、岩石観察用薄片試料の作成と顕微鏡観察を行い、野外調査地の地質学的歴史（地史）を組み立てる作業を行う。また、地学データ等を活用し、コンピューターを用いたデータ処理の実験を学ぶ。	
	理科教育法 1	理科教育法は、物理、化学、生物、地学の各分野で修得した知識と体験をもとに、実際の教育現場である中学校、高等学校の生徒に「自然科学の基本原則と法則」や「自然科学の調査方法」を深く、楽しく、学んでもらえるような優れた方法論と指導力を養成する講義です。理科教育法 1 では自然科学領域の一つとして、地学分野教育について理解を深める。また、地学分野を実際に指導する場面を想定し、学習指導案の作成や教材研究を組み入れ実践的な指導力を身につける。	
	理科教育法 2	理科教育の現場は教室に限らない。日々の生活の中にある機会を生かし理科の楽しさを生み出すための実践的な方法を考える力を養成することを旨とする。理科教育法 2 では、「私達が生物であること」、「生きていくために他の生物を体に取り入れることが必要であること」に注目して、生物学領域の教育に資する指導案や教材の開発について食材を利用することを考える。	
	理科教育法 3	「理科が“得意”な先生」は、「理科好き」の子どもたちを育てているのだろうか。現在の科学体系を常識化し、その常識を疑問視する子どもたちの「なぜ」「本当か」を受け止めずに、「理科嫌い」を育成していないだろうか。本講義では、「科学・科学的に関する議論」「科学（化学）史における“常識”」「仮説展開型の化学教材」等を通して、科学は疑問から始まり、思考と行動で解決へ導くものであることを感じ、さらにその科学の楽しみを実感できる理科授業の可能性を探索する事を目標とする。	
	理科教育法 4	本授業では、理科の各分野の目標、教育内容、指導計画、指導方法、実験・観察、更には視聴覚教材の利用などについて授業のなかでどのように役立てて行くかについて学ぶ。各学校教育における理科教育、特に物理分野について新たな認識を持ち、教科書に出てくる現象や法則について常に実験・実証といった立場に立った教育手法を学ぶと共に「物理が楽しくなる」望ましい物理授業について、定理や法則を数式だけで説明するのではなく、簡単な実験を介して興味を持って学ぶことが出来るような実践的指導方法を身につける。	
	初等理科指導法研究 1	「初等理科教育法」に引き続き専門的な教材研究、実験の方法、指導案作り、模擬授業の訓練を重ねて、実践的な指導力を確実に身につける。まずは、「小学校・理科」の内容を学び合い、次に、その内容をどのように教えると、子どもたちが意欲的になり、かつ有効に学んでいくのか、の実践的な研究をする。理想的な指導案作り、実験の方法についても学ぶ。模擬授業を行いつつ授業力を高める。	
初等理科指導法研究 2	「初等理科指導法研究 1」に引き続き、さらに専門的な教材研究、実験の方法、指導案作り、模擬授業の訓練を重ねて、実践的な指導力を確実に身につける。「中学・理科」の内容を学びつつ、さらにそれをどのように教えると、子どもたちが意欲的になり、かつ内容を確実に自分のものにするのかなど実践的な研究、学習を行う。模擬授業をやることで、しっかりとした実践力を身につける。さらに中学理科を正面に据えることで、小・中連携教育を担当することの出来る力を身につける。		

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科 科目 教 科 専 門 コ ー ス	音楽 ソルフェージュ 1	音楽性豊かな表現をするための基礎的能力を養うために欠かせないソルフェージュの学習を、演習形式で多角的に展開してゆく。音程・リズム・フレーズ等、楽譜を見て歌うことが出来る力、すなわち正確な読譜力、音楽を形づくっている要素を聴き取る聴取力、さらに記譜の能力などを併せて養成する。また声楽を中心に、器楽や作曲などとの関連についても配慮して学習をすすめる。	
	ソルフェージュ 2	音楽性豊かな表現をするための基礎的能力を養うために欠かせないソルフェージュの学習を、演習形式で一層高める。正確に楽譜を見て歌う読譜力を伸ばし、曲の構成や美しさを感じ、音楽のもつ味わいを深く読み取ることを重視する。さらに音楽を形づくっている要素を聴きとる聴取力、記譜の能力などの充実をはかり学習する。	
	声楽・歌唱 1	声楽・歌唱表現においては、私たちの体内にある発声器官が楽器であるということを認識することが重要である。この授業においては肉体的機能、音声学的知識をふまえ、発声の基本である姿勢・呼吸法・共鳴法等、基本的な発声法を演習形式で学ぶとともに、楽曲の表現内容を明確化し、その意図を明確にしながら創造的な表現を行うことを学ぶ。また、歌唱においては歌詞が重要な関連を持っており、言葉におけるリズム・アクセント・イントネーション等どのように結びつけてゆくか、基礎的な技術を併せて習得する。	
	声楽・歌唱 2	声楽・歌唱表現においては、私たちの体内にある発声器官が楽器であることを前提とし、発声の基本である姿勢・呼吸法・共鳴法を重視し、日々のトレーニングと声に対する感性を高めることができるように指導を行う。歌詞や曲想にふさわしい表現を充実させるには、徐々に声域を広げ無理のない豊かな発声を身につけることである。さらに声楽・歌唱には言葉が重要な関連をもち、言語の発音・意味など言葉を音楽化する表現力を演習形式で習得する。	
	声楽・歌唱 3	声楽・歌唱 2 の履修によって得た発声を更に伸ばし、言語の発音等これまで習得した技術を応用し、歌唱体験で培われた諸能力を生かして、より一層充実した豊かな歌唱表現を追究する。さらに作品が作曲された意図を探り、曲の構成を把握するとともに、言葉のニュアンスが音程にどのように結び付いているかを感じ取り、感性を高めながら創造性と豊かな表現について学ぶ。	
	器楽 1	アルトリコーダーの基本奏法、合奏ならびに打楽器演奏法の基本を学習する。パロック（イギリス）式連指のアルトリコーダーを用いて、実習を行う。また、打楽器奏法の基礎をマスターし、Snare Drum（小太鼓）、Bass Drum（大太鼓）、Cymbal（シンバル）、Triangle（トライアングル）等を始めとする各種打楽器の取り扱い、演奏法をマスターする。	
	器楽 2	アルトリコーダーの独奏、合奏、アンサンブルならびに編曲法を学習する。パロック（イギリス）式連指のアルトリコーダーを用いて、独奏、合奏、アンサンブルを行うとともに、ソプラノリコーダー、テナーリコーダー、バスリコーダー等も加えた合奏、アンサンブルの実習を行う。また、リコーダーを中心としながら、編曲法の基礎をマスターする。	
	器楽 3	ピアノ実技を行う。歌唱教材の伴奏、弾き歌いを通じてピアノ演奏法、伴奏法の実習を行う。個別指導を中心とする。	
	器楽 4（和楽器）	中学校・高等学校音楽科表現活動における和楽器実技に対応するための箏を用いた器楽指導の基礎を学ぶ。我が国の伝統音楽の学習には、器楽の基礎指導に加えて、和楽器の指導を通じて子どもたちに「和の感覚」を伝えていくことが重要な視点である。本演習では、初めて和楽器および日本音楽に接するものを対象として、「箏」の基礎的奏法の実技指導を中心に、伝統的な歌唱・日本的な学習法を生かした器楽指導・鑑賞指導のポイントも含めた講義を行う。	
	指揮法	合奏、合唱等で必要な指揮法の基本を学ぶ。斉藤秀雄氏の「指揮法教程」を素に「予備運動」「叩き」「平均運動」「しゃくい」「先入」「引掛け」「数取り」「はね上げ」等の基礎運動をマスターし、実際の曲でどの様にそれぞれのテクニックを用いるかを学習する。講義科目ではあるが、実習が大半を占め、実技科目に等しい内容になる。課題曲、自由曲は受講生相互のピアノによる演奏とする。	
	音楽理論 1	音楽の基礎的な成り立ちと構造を解説し、グレゴリオ聖歌から始まるヨーロッパ音楽の歴史的発展の実例をまじえた幅広い音楽分析の能力を養う。CDの鑑賞、ピアノ演奏等を伴った基礎的かつ総括的な活動を取り入れた、より深い理解をもたらすための分析的授業を展開する。また、日本の古典的音楽についても実例をまじえ、鑑賞、分析、解説を行い、これらについて豊富な体験を通して学んでゆく。	
	音楽理論 2（楽典）	音程、音階、調性等の音の高さの関係の詳細な理論を音楽の鑑賞、分析、実践する立場から明解に解説し、楽曲の形式、拍子、様々な楽語、楽器等に関する事項はCD、DVD、ピアノによる実演等の実例をひきながら、より幅広く、具体的な理解を深めてゆく。	

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科 科目 音楽 専門 コース	音楽理論3(音楽史)	ヨーロッパのクラシック音楽の黎明からバロック、古典派、ロマン派、近代音楽から現代音楽までの流れを中心に、シャンソン、ポップス、ジャズ等クラシック以外の音楽までを視野にいれた音楽風景を講ずる。また、それらをCD鑑賞、ピアノなどの楽器による実演に触れることにより、総合的でより深い理解に導く活動を行う。 能楽、長唄、古典的な箏曲から現代邦楽に至る日本の音楽、あるいは中国、イラン、インドその他、非ヨーロッパ圏の音楽も視野に入れた学習を行う。	
	作曲・編曲法1(基礎)	簡単な2小節程度のメロディーのモチーフを与え、8~16小節のメロディーを作曲させる。主要三和音の適正な使用により、メロディーにピアノ伴奏を付ける。自作のモチーフによる16~32小節程度のピアノ、あるいは歌、あるいは他の楽器のための作曲を行う。 以上の活動を通して完成した作品を共有したり、評価し合ったりするための演奏や発表の場を設けることも併せて行う。	
	作曲・編曲法2(応用)	副三和音、副七の和音、借用和音及び転調の技術など、ある程度高度な和声を使用した楽曲の作曲を学ぶ。ピアノ曲、歌曲、器楽曲等の作曲および日本旋法を用いた作曲の学習を行う。有名な曲の様々なアンサンブル形態への編曲といった、実践を中心に学習を行う。以上の活動を通して、完成した作品を共有したり、評価し合ったりするための演奏や発表の場を設けることも併せて行う。その企画等も学生にゆだねる。	
	音楽科教育法1	中学校・高等学校の教育における音楽科についての基礎的な知識を、その通時的、共時的諸問題とともに解説する。そのうえで、特に現行学習指導要領・音楽編(高等学校は芸術科音楽)について、適切な読み方を指導する。その趣旨に即し、音楽科の学習指導を歌唱・器楽・創作・鑑賞の4つの分野からとらえ、それぞれの活動に関する教材研究について、実例を検討しながら多様な方法があることへの理解を促す。さらに〔共通事項〕の意味するところ、教材研究におけるその扱い方にも触れながら、最も基礎的な段階の教材研究が自力で出来るように指導する。	
	音楽科教育法2	音楽科教育法1で身につけた、中学・高等学校音楽科(芸術科音楽)についての知識と理解を深め、指導と評価を一体化させた授業の立案が出来るように指導する。音楽科の学習指導を、歌唱・器楽・創作・鑑賞の4つの分野からとらえ、それぞれを扱った基礎的な題材指導計画の実例を検討させるとともに、教材選択の方法を指導する。以上に基づき、基礎的でスタンダードなタイプの題材指導計画を立案し、その学習指導案を作成できるようにする。	
	音楽科教育法3	音楽科教育法1および2で身につけた、中学校音楽科指導についての基礎力の上に、題材の指導計画力をつけ、よりよい学習指導案の作成法について練習を積むと同時に、模擬授業を通じた基礎的な実践力を養う。第4回~11回の授業においては、歌唱・器楽・創作・鑑賞のそれぞれの活動分野を軸にした指導案を実際に作成し、部分的に模擬授業を行い、それについて協議していく。また、特に日本の伝統音楽の題材化について講じ、その代表的なジャンルについての基礎指導を行うとともに、資料の扱い方や指導計画に組み入れる方法を指導する。	
	音楽科教育法4	音楽科教育法1~3で身につけた、音楽科指導についての基礎的な計画力・実践力をさらに高めるために、題材指導計画立案、指導案作成の経験を積ませるとともに、講義内では模擬授業とその協議を重ねる。歌唱・器楽・創作・鑑賞のうちの複数分野を1つの題材に含めたり、表現と鑑賞を一体化させた題材を立案したりできるように、優れた指導案の実例を示しながら指導する。また、特にアジア地域を中心に諸民族の音楽の題材化について講じ、代表的なものについての基礎的理解を促すとともに、資料の扱い方や指導計画に組み入れる方法を指導する。	
	初等音楽指導法研究1	小学校第1学年から第6学年の児童の発達を踏まえながら、各段階にふさわしいスタンダードナンバー的な歌唱教材を中心として、その指導法を教える。1つ1つの教材曲の音楽的な魅力について考え、それを引き出す基礎的な教材研究を行い、さらに実際の授業において、どのように児童と共に音楽をつくり出すかについて研究する。学生自身が適切な発声法を身に付け、歌唱の技能を高めることが不可欠であるので、声楽の基礎技能についても随時指導を行っていく。	
	初等音楽指導法研究2	小学校第1学年から第6学年の児童の発達を踏まえながら、各段階にふさわしい器楽および身体表現を中心としてその指導法を教える。現場で活用しやすい打楽器類、リード楽器類、リコーダーなどについては特に、その取り扱いや奏法を習得させる。また身体運動を活用した指導についてはゲーム的な要素の強い反応練習から始め、徐々に音楽のリズムの要素(拍、小節、リズムパターン、フレーズ、セクションなど)を感じ取り表現できるように指導してゆく。	

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科 科目 美術 専 門 コ ー ス	デッサン 1	鉛筆や木炭などの伝統的でシンプルな画材を用い繰り返しデッサンをすることで、絵画・彫刻のみならず、美術における様々な領域の基礎的な表現能力を培う。人物や静物を描写することを通し観察力を養い、表層の変化ばかりでなく骨格を発見するなど形態についての認識を深め、対象の造形的な美しさを感じ取り、表現する力を身につける。また、描き・確かめ・修正する作業の中で、バランスやプロポーション、面・空間・明暗といった造形表現の基本要素を学ぶ。	
	デッサン 2	デッサン 1 の内容を踏まえ、さらに粘り強くデッサンをつづけることで、造形表現の基礎技能をより確実なものにしてゆく。また、様々な素描の材料があることを経験的に認識させることでその特性を理解し、表現の幅の広がりや自分に合った風合いの表現ができるようにする。形をしっかりと描くことが大切であるが、単に目に見えるものを正確に描写するだけではなく、緊張感や動勢、量感をも感じ取ることができるようになる。	
	絵画 1	中学校・高等学校における美術科指導に必要な絵画の基礎的な技法及び表現力を学ぶ。デッサン 1 との関連を図りながら、対象をよく観察して感じ取った美しさや情感を表現したり、自らの内面に働きかけ主題を生成し表現できるようにする。その中で、絵画材料の多様性、各種用具の使い方や独自の用具の案出や使用法の工夫、表現するための技術等を自前のものにするための必要性を理解する。あわせて、絵画論の考察や絵画鑑賞も行う。	
	絵画 2	デッサン 2 及び絵画 1 との関連を図りながら、中学校美術科・高等学校芸術科美術における美術科指導に必要な絵画の基礎的な技法及び表現力を学ぶ。その中で、自然、自己、社会などを深く見つめ、自分なりの主題を生成し独自の表現世界を構想できるようにする。また、自らの構想に合う表現形式の選択や様々な技法を試みることで、絵画表現のもつ造形的な創造活動の原初的な価値観が芽生えることを期待したい。	
	映像メディア表現 1	カメラやコピー機・プリンター、ビデオやコンピュータ等のアナログ及びデジタル映像メディアを利用して、人間社会のコミュニケーションがどのように行われているか、また、それらの歴史の変遷をたどることで映像表現が果たしてきた役割等について理解する。そのうえで効果的な造形的映像表現を実現するためにどのような手法があるか、メディア表現の基礎技術を概観し初歩的な表現活動を通して機材の使用法等を習得しながら、その特性について考察する。	
	映像メディア表現 2	映像メディア表現 1 で概観把握した素材を利用し、種々の加工技術による描画・造形技法の経験的体得を学習する。簡単な描画や造形課題の制作を通してコンピュータを使うことによる発想や表現の広がりや、段階的なソフトウェアの利用による従来とは異なる造形表現感覚を体感させる。また中学校・高等学校の授業における映像メディアの利用は、教師と生徒の双方に、アイデアを練ったり編集したりするなど発想や構想の場面でも力を発揮することを理解する。	
	彫塑 1	中学校美術科・高等学校芸術科美術の指導に必要な彫刻の基礎的な技法及び表現力を学ぶ。デッサン 1 との関連を図りながら、対象をよく観察して感じ取った美しさや情感を表現したり、自らの内面に働きかけ主題を生成し表現できるようにする。可塑性を有する素材を盛り付けて形成するモデリングと、種々の素材を刻み込んで形成するカービングの両方の手法を経験し、彫刻制作の基礎（絵画表現では得にくい実在感や躍動感の生成の感覚）を身につける。	
	彫塑 2	デッサン 2 及び彫塑 1 との関連を図りながら、中学校美術科・高等学校芸術科美術の指導に必要な立体表現の基礎的な技法及び表現力を学ぶ。その中で、自然、自己、社会などを深く見つめ、自分なりの主題を生成し独自の表現世界を構想し実立体として形成できるようにするために、三次元的空間の認識や、自らの働きかけによって現れるマッサ（塊量）やボリューム（量感）の実体感など、立体的な心象表現の創造的な価値観に気づかせる。	
	デザイン A	主にグラフィックデザイン（視覚的な伝達効果を主目的とするデザイン）についての理解を深め、その固有の目的のために視覚的なアイデアを考案し、具体的な表現のための色・形・質感・文字列などを的確に計画的選択することがデザインという作業であり意味であることを知らせる。グラフィックデザインの原形ともいべきポスターの制作を通して、ポスターデザインに求められる役割や表現効果を認識し、用途や条件に即した適応表現の社会性等も学習する。	
デザイン B	主にクラフトデザイン（美的造形性や生産性を主眼とする立体造形のデザイン）についての理解を深め、計画力、設計作図・読図の能力や用途にあった加工材料・用具の使用法など、実制作の技能を高める。椅子のデザイン等のテーマに沿って、調査、構想、構成・造形、表現（サーベイ、アイデアスケッチ、レンダリング、モデル形成）の各局面の手法、技術の基本を習得するとともに、プロセス全体を考えて思考し作業する力を培う。		

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科 美術 専攻 コース	平面構成基礎	造形的な創造活動の基本となる諸要素（形体、配置、比率、リズム、動勢、テクスチャ、色彩）についての基本的な原理を、平面の制作を通して学ぶ。基本形体を分割し再構成する過程で、動勢・リズム・バランスの変化を捉える。また、彩色することにより初期の平面が構成を変貌させることを知り、色と形の相関関係を学ぶ。デザインの単なる初歩的学習という意味合いではなく、造形全般に通じる客観的な審美性に気づかせ、手作業の中から基本的な造形言語を発見し確認することを目的とする。	
	立体構成基礎	立体の制作を通して、造形的な創造活動の基本となる諸要素（形体、配置、比率、リズム、動勢、テクスチャ、色彩）についての基本的な原理を学ぶとともに、構造や機能の造形的可能性について研究する。ここでは、豊富な加工特性をもつ素材である紙類を用いて、どのような形状変工ができるかを探求し、曲げる、切る、組む、揉む、引掻くなどの素朴技法を中心に、紙のもつ繊細さや軽快さなどを生かしながら立体制作による空間への造形感覚を養う。	
	映像メディア表現 3	主に写真（静止画像）を使った表現についての理解と技術を深める。被写体に対して、どのように興味関心を抱き感動したのか、訴えたいことを効果的に表現するための写真撮影の基礎技法を学ぶ。また、何枚かの写真を組み合わせ、物語性をもった組み写真を構成したり、写真家等のテーマに基づいた写真表現の鑑賞活動を通して、自他の作例の制作意図や表現意図を読み取りかつ味わいながら、改めて写真表現の役割と展開の可能性を考える。	
	映像メディア表現 4	主に映像（画像）を動かして見せる表現についての理解を深める。模擬CMや短編記録映画等の制作を通して、ビデオ撮影および編集の基礎技能を獲得する。また、クレイアニメや人形アニメなどの簡単なストップモーションアニメの制作を通じ、絵（画像）や人形などをアニメーション化することで、なぜ動いて見えるのか、アニメーションの語源が「命を吹き込むこと」をキーワードにしながらか映像表現の有効性および発展可能性について考察する。	
	工芸基礎 A	内外の民芸的な用途を前提とした造形表現が工芸であることを知らせ、制作において用いられる主たる素材である粘土・木・紙・金属等の基本的性質とそれぞれがもつ造形性について演習を通して研究する。その上で、ここでは特に陶芸の成形から焼成までの一連の工程を体験し、制作に必要な技法・表現方法などを具体的に学ぶ。窯の取り扱い方や焼成方法、窯入れなどを理解し、自分で操作できるようにする。	
	工芸基礎 B	主に国内の工芸品について、素材をテーマとして検証する。また実際に素材に触れ、その加工技術を学ぶ。素材と技術と文化の関わりから、モノの在り方や日常生活の中でのその役割を考えると同時に、使用する人や場に求められる機能的な美しさ（用の美）を知らせながら、ここでは特に木材の加工法を学ぶ。計画から仕上げまでの全工程を通して、木工芸における素材や道具の基本的な扱いを学び、さまざまな表現方法を修得する。	
	工芸 A	工芸基礎 A の延長として、内外の民芸的な用途を前提とした造形表現が工芸であることを知らせ、制作において用いられる主たる素材である粘土・木・紙・金属等の基本的性質とそれぞれがもつ造形性について演習を通して研究する。その上で、ここでは特に陶芸の成形から焼成までの一連の工程を通じて、制作に必要な技法・表現方法などを具体的に学ぶ。	
	工芸 B	工芸基礎 B の延長として、日本の伝統的な工芸の基本的素材である木を用い、その性質や造形性、加工法などを学ぶ。作品主題を伝統的な社会・歴史的要因に思いを馳せたり、身近な生活環境のなかに思考することより始め、樹種や技法選択など行い制作する。様々な技法を学び、自ら生成した主題や自分なりのイメージを表現できるようにしながら、中学校美術科・高等学校芸術科美術の授業でどのような展開が可能かを考察する。	
	教職美術入門（鑑賞）	人間の創造的造形活動によって生み出されてきた文化遺産や美術作品を、様々な観点から鑑賞し理解を深め、それらのよさや美しさを深く味わう中で、感性を磨き、美術に接することの喜びや価値観を再認識する。また、講義内容を単に抽象的な言葉の解釈として学ぶのではなく、例えば作品の制作過程や表現の工夫などを、自らの手を動かし追体験する中で理解し、「なぜ、何のために」といった問題意識をもって考えることができるようにする。	
美術理論 1	ここでは主に「造形の原理」について、イメージとしての認識と実態からの観察に関連性が持てるように学習する。たとえば、幼児期からの子どもの造形的な発達段階には、世界共通の普遍的な特徴があると学術的に定位されていたり、人が自然の風物や造形的に表現されたものに対して美しさを感じる時には、美的秩序の構成要素を見いだしている、など、人間はなぜに造形という手段に人類普遍的な価値観を以って表現活動をするのかを探ってゆく。		

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科 科目 美術 専 門 コ ー ス	美術理論 2	ここでは主に「色彩論」を中心に他の造形要素である形体や材質、塊量との関連性について、論理的な解釈を促しながら、観察や小実験により体得的理解に結びつけ、かつ、これらの経験的方法論を以って児童・生徒への指導活動に活用される可能性があることを知らせる。また、客体（作品）としての造形要素への関心・理解ばかりでなく、人為的変工（造形活動）の主体である行動主（作者）にも実形体としての「身体」感覚の連環・関与を美感させたい。	
	美術史概論	古代エジプトから始まる人間の美意識と創造の展開をたどる。作品の意義の解析と後世への影響関係を把握することで、美術史の大きな流れを理解する。	
	日本・東洋美術史	日本および東洋の各地域における様々な美術の文化遺産を鑑賞し、表現方法および独自の美意識や創造の精神などを知り、あわせて時代的、文化的な社会背景についても理解する。我が国は多くの異文化を吸収、咀嚼、洗練しながら、独自の審美的文化を生み出してきた。日本美術を学ぶにあたっては文化の継承と創造の重要性を理解し、東洋美術との比較を行うことにより、美術を通じた国際理解についても中学校、高等学校の美術の指導との関連で考える。	
	美術科教育法 1	美術科教育の在り方と方法について、主に、子どもが成長発達する過程で見せる造形的表現活動の特性を理解することで教育の方法論を考察する。特に中等教育段階における生徒の表現及び鑑賞活動にかかわる特質的な問題点を探りつつこれらに関連づけながら、中学校及び高等学校の学習指導要領の内容に準拠した具体的な題材の開発・設定とその学習指導案の作成等を通して、美術科指導法に関する基礎的な能力と態度を養う。	
	美術科教育法 2	美術科教育がどのような歴史的過程を経て今日に至ったのか、自由画教育運動、児童中心主義の美術教育、創造主義美術教育など代表的な思潮や方法論・実施形態について取り上げ、具体的な教具・教材や作品内容を検討しながら、今後の課題と展望について考える。そのうえで、中学校および高等学校の学習指導要領の内容に準拠した、具体的な題材の開発とその学習指導案の作成を通して、美術科指導法に関する基礎的な能力と態度を養う。	
	美術科教育法 3	美術科教育法 1、2 の内容を踏まえ、さらに中等学校教育における美術教育を取り巻く現実的動向と、その新しい学力観・評価観および学習指導要領の理解のうえに、中学校美術科、高等学校芸術科美術の学習指導に必要な学習内容や題材について実制作をとおして研究する。また、クラスサイズや美術教室環境などを想定した学習指導案の作成や現場に即した模擬授業や作品の展示・発表活動を行うことで、美術科指導法に関する実践的な技能や判断力を養う。	
	美術科教育法 4	美術科教育法 1、2、3 の内容を踏まえ、美術科指導法に関するより実践的な技能や判断力・構想力を養う。具体的には、個々の学生が想定的に授業場面で担当・直面する実技領域（絵画・彫刻、デザイン、工芸、映像メディア）や鑑賞領域についての教材研究を深め、学習指導案を作成し、模擬授業を行う。そのプランや導入法、授業展開や結果としての作品等について皆で意見を交換し、よりよい授業の在り方を探っていく。	
	初等図画工作指導法研究 1	学習指導要領に基づく図画工作科の指導法を実践的に研究するが、ここでは特に、中学校美術科・高等学校芸術科美術との内容的な関連を図りながら、初等教育・中等教育の領域を超えて美術教育を担当できる教員の養成を目標とする。初等図画工作指導法研究 1 では、「表現」及び「鑑賞」学習指導の目標と内容に関わりながら、いくつかの実践例を具体的に検討した上で、教材研究、作品制作、作品鑑賞、模擬授業等を行う。	
	初等図画工作指導法研究 2	学習指導要領に基づく図画工作科の指導法を実践的に研究するが、ここでは特に、中学校美術科・高等学校芸術科美術との内容的な関連を図りながら、初等教育・中等教育の領域を超えて美術教育を担当できる教員の養成を目標とする。初等図画工作指導法研究 2 では、主に教室での「表現」と「鑑賞」の活動を想定した「授業の実際」前提に、学生自らのテーマに沿った作品制作、教材開発、研究発表、協議などを行う。	
	英語	英語学概論	英語という言葉や音、語、文法、意味、コミュニケーションという側面から考察し、言語を分析する際の基本的な概念と、基礎知識を学ぶ。具体的には音声学、音韻論、形態論、統語論、意味論、語用論、英語史などを扱う。
英語	英文法	科目としての英文法が指導要領から姿を消して久しいが、指導要領には「英語の言語構造に含まれている文化的要素の理解を深めることが規定されていることから、教師には正確な文法体系が身につけていることが求められる。本講義ではいわゆる「学校文法」の体系を講義し、必要に応じて種々の課題等で知識の定着を図る。	

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科 科目 英語 専 門 課 程	英米文学 1	19～20世紀のアメリカ文学を中心に、異なる時代の作家による異なるジャンルの作品（詩、短編小説、長編小説の一節、エッセイ等）を原書で読む。文学作品を通して、多文化国家アメリカを多面的に体験するために、異なる民族的背景をもつ作家の作品を教材とし、作品の背景となる歴史上の出来事や作家の体験についても学ぶ。	
	英米文学 2	夫れ、文学は、洋の東西を問わず、豊かな人間性を育む。本講義では、英文学の代表的作品を英語で読み、作品の文化的背景や時代思潮に注意を払いつつ、その主題を考察し、イギリス人の考え方、ものの感じ方を知る。また、通学課程では、名文を音読する楽しみを体得できるよう指導する。	
	英語コミュニケーション 1	アメリカの歴史と文化に焦点を当てるが、関連したグローバルな問題を取り上げ、総合的な英語力を伸ばし、世界で起きているさまざまな出来事や異文化への理解と関心を深める。理解した内容を要約したり、自分の考えを表現する練習を行う。テキストやテキストに付随するビデオ教材の他に、適宜海外のニュースや新聞の記事など生きた英語を教材として用いる。自らの学びを通して、教材の選び方や効果的な教育法について考える視点も身につける。	
	英語コミュニケーション 2	ニュージーランドの文化、歴史、教育、その他の様々なテーマについて学びながら、英語によるコミュニケーション能力を高める活動を行う。教員から知識や情報を与えられるだけでなく、学生は自らテーマを見つけ、日本との比較研究を行い、プレゼンテーションやディスカッションを通して、お互いに成果を評価し、フィードバックし合う。	
	英語コミュニケーション 3	グローバル化が進む情勢のもと、異なる文化の人々の考えを真摯に理解し、自分の考えを英語で適切に表現できる能力は必須である。話す・聞くことにとどまらず、読む・書く力もバランスよく取り入れて、自己表現力を養い、世界各国の人々に対して、決して卑屈になることもなく、また傲慢になることもなく、文化的にも人間的にも対等な関係で相互理解を図れるような英語の実践的コミュニケーション能力を養う種々の演習を行う。	
	英語コミュニケーション 4	ニュージーランドと日本の先住民族の文化や教育の問題に焦点を当て、侵略された側の視点からの異文化理解を深め、比較考察をする中で、英語によるコミュニケーション能力をさらに高める活動を行う。教員による講義中心の授業ではなく、セミナー形式で授業を進め、学生は自らテーマを選び、調べたことをまとめ、積極的に発表し、中心となってディスカッションを進めていくことが求められる。	
	異文化理解 1	言語としての英語の歴史の変遷をたどることで、表層に顕れた言語事象の奥を探り、その英語の母体となったイギリスおよびイギリス人の歴史を概観し、さらに16世紀以降の英国と日本との関係をも考察し、言語や文化に対する理解を深める。	
	異文化理解 2	多文化国家アメリカの歴史は、異文化間の衝突・交流・融合等の歴史でもあり、世界で起きてきたことの縮図とも言える。アメリカの歴史を、建国から現在に至るまで、重要な出来事や風潮をとりあげ多面的に学ぶ。アメリカという国を一面的にとらえて賞賛したり批評するのではなく、教科書や主要メディアの報道からは見えてこない、草の根の市民運動やマイノリティ（特に、アフリカ系、アジア系、アメリカ先住民、ヒスパニック）の視点にも目を向ける。	
	英語科教育法 1	19世紀半ばから現在に至るまで、日本国内外で提唱・実践されてきた英語(外国語)教授法を冷静な目で、歴史的に概観し、それぞれの長所・短所を理解し、時流に流されない実践への応用の手がかりを得る。通学課程の授業は発表形式で、1・2名で1つの教授法を担当し、発表者はその教授法の理論についての発表と、ロールプレイにより実際に教室でその教授法を実践する。	
英語科教育法 2	日本人学習者が、外国語として英語を学ぶ場合、指導要領にもある通り、日本語や日本文化との比較が行われ、日本語や日本の文化についての理解が深まらなくてはならない。本講義では、日本人の物の考え方や感じ方を英語で説明した文献を、文化的差異や言語表現上の差異に留意しながら読み、さらに、それらを英語で発信していく種々の方法を模索する。		

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科科目 教科専門コース	英語		
	英語科教育法 3	学習指導要領に掲げられている目標（聞き、話し、読み、書くという4つの基本的技能の習得）とそれぞれの技能習得のために掲げられている言語活動の内容を踏まえ、学生自身がこれまで英語を学習してきた状況や方法を振り返り、効果的な英語教育法を考え出して力を養う。特に、母語と学習言語との相違から生じる問題に焦点を当て、英語話者への日本語教育法や日英語比較研究を参考にしながら、発音、聞き取り、文法、語彙、会話表現、文化的背景等について留意点を確認し、学習指導案の作成を行う。	
	英語科教育法 4	熟練した英語教師による、総合的な講義。日本人は英語の学びを通じて西洋文化を摂取し、近代日本の社会文化史を主体的に形成してきた。英語教育の歩みには各時代の社会文化状況が鏡のように反映されている。本講義では、日本人が英語をどう学んできたかの歴史を謙虚にふり振り返り、その足跡を確かめることで、日本の英語教育をどうすべきか、進むべき方向を見定める。	
特別支援教員コース	知的障害者の心理	(1) 知的障害児者の認知・行動面に影響する心理的特性に関し学ぶ。(2) 個別の指導計画を立案する上での重要な資料となる、主要な知能検査・発達検査の解釈の基礎について学ぶ。(3) 行動観察の手法、知的障害や発達障害を主対象にした代表的な心理的アプローチについて学ぶ。(4) 上記の知識を基にして、校内委員会のシュミレーションを行い、個別の指導計画を作成する。	
	知的障害者の生理・病理	知的発達障害、軽度発達障害、認知機能、脳機能を中心に、本講義では、知的発達障害をはじめとする発達障害を持つ子どもの生理および病理学的な基礎を解説し、発達性および獲得性の知的発達障害とその障害機序を理解する。その上で、生物学的な基礎の上に教育的支援が実践的に展開され、個々の知的発達障害児が教育の場で有意義な指導・援助を得られるようになることを目標とする。	
	肢体不自由者の心理・生理・病理	肢体不自由児の心理・生理・病理・指導について、対象児の理解、心理の理解、指導の実際、保護者への支援など総合的に学び、肢体不自由児の教育における基礎的・実践的な力を養う。授業では肢体不自由児の学ぶ養護特別支援学校や施設などを訪問する。また、発表、実際の指導方法に関するワークショップや実践研究の紹介を取り入れる。	
	病弱者の心理・生理・病理	病弱・身体虚弱の児童生徒の状態や生活環境等に応じた適切な教育を行うことは、学習の空白や遅れを補完するだけでなく、生活を充実させ、心理的な安定を促すとともに心身の成長・発達に好ましい影響を与えたり、健康状態の回復・改善等を促したりすることに有効だと考えられています。授業では、病弱教育の対象となる主な疾患について概観し、病弱児の自己管理能力を高めるための具体的な考え方、健康の概念、セルフケアについて理解を深めることを目指します。	
	特別支援学校教育課程論	まず、教育課程に関する法制について学んだ上で、学習指導要領等の内容を熟読玩味することにより、特別支援学校（特に、知的障害特別支援学校）の小・中学部における教育課程の編成と実施の仕方について、理解と認識を深める。なお、重複障害者や自立活動の指導のために使用される個別の指導計画等の重要性とその作成の仕方についても、理解と認識を深める。	
	知的障害者の指導法 1	知的障害の概要（概念、原因、類型）、知的障害児の実態と推移について概説した上で、知的障害児の指導支援にとって重要なアセスメントや学習・発達の心理的特性について解説する。さらに、知的障害児の教育課程や個別の指導計画、特別支援学校・特別支援学級における教科・領域を合わせた指導、自立活動の指導など知的障害児の指導支援について述べる。	
	知的障害者の指導法 2	知的障害児の指導法について、知的障害児の教育課程、教育方法、対象児の理解、指導方法の実際、保護者への支援方法を中心に総合的に学び、知的障害児の指導法における基礎的・実践的な力を養う。また、授業ではディスカッション、発表、実際の指導方法に関するワークショップを取り入れる。指導者自身の感性を磨くトレーニングとして、音楽療法や発達療法など体験し、指導者としての資質を磨く	
	肢体不自由者の指導法	〔肢体不自由教育の概要の理解〕肢体不自由特別支援学校等における教育の概要を把握し、肢体不自由者に対する教育課程の編成や個別の指導計画の作成の実態を理解する。〔各教科等の指導の工夫〕各教科等における肢体不自由の特性を考慮した指導方法や指導の形態等の工夫を理解する。〔肢体不自由者に対する自立活動の指導〕肢体不自由特別支援学校等では、どのような自立活動の指導が行われているのかを把握し、健康の保持、身体の動き、コミュニケーションの指導等の指導法を理解する。〔職業教育と進路指導〕肢体不自由特別支援学校卒業生の進路状況を把握し、職業教育や進路指導の要点を理解する。〔情報機器等の活用〕肢体不自由者の指導における、補助用具や補助的手段、情報機器の活用について理解する。	

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目	特別支援教員コース	病弱者の指導法	病弱の子どもの実態とその教育について理解し、病弱の子どもを支援する心構えを身につけることをねらいとする。このため、病弱教育に関する歴史、教育制度、教育課程、教育内容・方法及び保健管理などを内容とする。
	視覚障害教育総論	主として高等教育機関の視覚障害学生を対象とした授業において、視覚障害を補うための配慮、教材・教具の工夫と評価、問題点、将来展望について、実践例を示しながら講義する。	
	聴覚障害教育総論	本授業では、(1)聴覚障害教育の教育課程については、学校教育法と学習指導要領にもとづき解説を行う。(2)指導法については、聾学校・特別支援学校(聴覚障害)で行われている各教科、自立活動、交流及び共同学習、職業教育、コミュニケーション手段、言語指導法を軸にすえ、幼児期から高等部までを見通した全体的な指導法の解説を行う。(3)児童生徒の実態把握では、指導計画の展開に必要な聴覚障害に関する生理・病理面の基本的事項をふまえ、聴覚の活用・発音指導・手話の活用に関する基礎的な指導方法について解説を行う。	
	重複障害教育総論	障害の概念・種類、障害児の実態の変化について概説する。引き続き、重複障害の概要(概念、原因・病理、分類)と診断・状態把握、心理・生理・病理について、重複障害児の学習・発達特性(コミュニケーション、行動・行動障害、発達)等について解説した上で、重複障害児に対する特別支援教育の基本的視点、教育課程や個別的教育支援・指導計画、実際について述べる。	
	LD等教育総論	(1)LD・ADHD等発達障害の定義・特性を把握し、アセスメントを含む実態把握の仕方、学習・行動面への対応を学ぶ、(2)学習リソース等の涵養・児童生徒の学習意欲を育む基本姿勢を学ぶ、(3)小集団SSTはいはりソースルーム指導方法の立案、指導案作成など、教師等の専門家に求められる基本的技能、姿勢の在り方を身につける。	
	特別支援教育実習	特別支援教育に携わる教師としての望ましい資質や専門性を身につけるため、協力の得られた実習校にて教育実習を実施する。実習の事前・事後指導は前後期を通じて所定の時間を設定して行う。事前指導では、実習の心構え、学部ごとの教育課程、教員の服務、記録の取り方、指導案の書き方や記録などを学習する。事後指導では、自らの実習を振り返り、教員としての目標、今後の学習のあり方などについて、ディスカッションや発表を通じて、反省する。	
子 ど も 臨 床 コ ー ス	社会福祉論	社会福祉とは何か、社会福祉の対象は誰か、社会福祉のあり方について、子ども・障害・高齢、そして貧困といった各分野における人々の生活構造とその実際から理解する。とりわけ、保育や福祉労働に従事するものに求められるケア(生活支援援助)とは、どのようなものかを考える力(ものの見方・考え方)を養う。	
	社会福祉援助技術論	社会福祉援助技術の意味と方法について、保育と社会福祉援助技術との関連もふまえながら概説する。また、個別援助技術(ケースワーク)、集団援助技術(グループワーク)、地域援助技術(コミュニティワーク)、ケアマネージメントについて、その意義と機能、援助媒体、展開過程などについて概説し、あわせて、保育所における児童・家庭への援助の方法について事例研究などを通して学ぶ。	
	子ども福祉論	児童・家庭の生活実態とこれを取り巻く社会情勢、福祉需要と実際、制度発展過程、児童の定義と権利、児童福祉法、児童虐待の防止等に関する法律、配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律、母子及び寡婦福祉法、母子保健法、児童手当法、児童扶養手当法、特別児童扶養手当等の支給に関する法律、次世代育成支援対策推進法、少子化社会対策基本法、売春防止法、児童・家庭福祉制度における組織及び団体の役割と実際、児童・家庭福祉制度における専門職の役割と実際、等について講義を行う。	
	養護原理	子どもへの社会的な援助が必要となる社会構造と個別のニーズを理解する。また、養護の基本理念や展開・現状、児童福祉施設の特性や援助の実際等を学習し、児童養護における保育士の役割について検討する。	
	保育者論	保育者とは何かについて全般的に理解する。具体的には、保育者養成の歴史と現状、保育者の職務と専門性などについての概論のほか、実際に保育者になるにあたって必要な子どもや保育に対する見方、考え方などについても学習する。さらに、保育者としての悩みや成長、これからの保育者のあり方について考察する。近年、保育者には、単なる子どもの養育だけでなく、保護者に対する保育に関する指導や、地域への子育て支援など、多くの役割が期待されている。どのような専門性が必要なかを総合的に考えていきたい。	
	保育課程論	本授業は、保育士資格取得のために必要な「保育の本質・目的の理解に関する科目」に分類されている科目として位置づけられている。本学が独自に開講した必修科目である。ここでは教育課程論や保育実習で習得した知識や能力を基礎に、保育所の保育課程について学ぶことになる。	

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 目 子 ど も 臨 床 コ ー ス	幼児教育思想史	幼児教育の流れについて先ず取り上げる。そして学生が現在の幼児教育とのかかわりを理解できるようにする。目標は学生が幼児の生きる意味と幸せを考える力がつくようになることである。そのために、時代、社会と大人、幼児が生きていることとの関係を話し、各幼児教育思想家の人間観、子ども観、幼児教育観、幼児教育方法論、遊び論などを取り上げる。中でも、世界で最初に幼稚園を作ったフレーベルについて詳しく取り上げる。	
	学童保育論	この授業では、まず、日本社会において学童保育が果たしてきた役割について理解を深めながら、その学童保育の目的を明確にしていく。次に、学童保育は法制化される前とされた後でどのように位置づけが変わったのか、子どもたちの生活との関連はどうかに注意しながら、歴史について全般的に理解し、その上で、学童保育をめぐる政策的動向や制度現状と課題について明らかにする。また、学童保育の保育方針や保育内容、生活と遊びなど蓄積されてきた実践内容を学ぶ。さらに、学童保育指導員の地位や具体的業務、仕事内容など、学童保育を直接担う専門職の在り方についても理解を深め、今日的到達点と今後の課題について考察する。	
	発達心理学	人は生物学的な基盤の上に、社会文化的環境との相互作用を行いながら、生涯にわたって自己を変容させ発達し続ける。そのしくみを理解するための基本的な諸理論を解説する。誕生から死に向かって、人の心や行動がどのように形成され変化していくのかについて、特に、著しい変化を遂げる乳幼児期から児童期を中心として、基本的な発達のプロセスを解説する。子どもを教養する保育士・教諭として、発達の視点から人間の行動と心を捉えるために必要な基礎知識を習得する。	
	小児保健1（講義）	小児保健1（講義）では、保育活動において小児の健康を保持・増進し、日常の観察から異常の早期発見に努めることができるよう小児保健の基本を学ぶことを目的とする。また、小児が心身共に健全に発育・発達するためには、育児環境の問題点を明らかにし、子ども一人ひとりの個性を重視した多角的アプローチが重要となる。授業では、小児保健の基本的知識の他、小児を取り巻く現代社会の問題点について日本と諸外国を比較して解説する。更に、グループワークを取り入れ、健康づくりのあり方について意見交換する。	
	小児保健2（講義）	小児保健2（講義）では、小児保健1で学んだ知識を基礎に小児の心身の健康について学習する。小児期に起こり易い疾病とその予防策、遭遇しやすい事故と安全管理について理解する。また、地域と家庭との密接な関係を促し、社会的な視点で育児支援を考えていけるよう、母子保健行政の歴史や保健サービスについて学び、母子保健活動及び子育て支援の今後の展望について考えていく。	
	小児保健（実習）	小児保健実習では、小児保健1・小児保健2で学んだ知識を基礎に、実習を通して乳幼児の保育に必要な知識・技術・態度を習得することを目的とする。保育と保健・看護の連携について知り、乳幼児の健康観察の方法、成長・発達の測定法と評価、生理機能の観察と測定方法、養護技術、病気や事故に対する予防と対処方法の実際を学ぶ。更に、乳幼児が不測の事態に陥ったときに敏速に判断し、適切な救急処置が実施できるよう基本原則と技術を習得する。	
	小児栄養（演習）	小児期は食生活の基礎が身につく重要な時期である。小児の発達段階に応じた適切な食事が提供できる保育士になるため、講義や実習を通して、発達に見合った食品の選択や調理法、食事の与え方などが判断できる力をつけていく。具体的には、食物・栄養の基本的な知識を学ぶとともに、離乳食を始め乳幼児食の実習を行う。子ども達が楽しく食べる習慣を身につける指導ができるように、食育に関わる専門職としての資質を養う。	
	子どものメンタルヘルス	現代社会では、子どもも様々なストレスを抱えて生きている。本講義では、子どものメンタルヘルス（精神的健康）について、幅広く学習していく。具体的には、メンタルヘルスの概念、ライフサイクルとメンタルヘルス（主に、幼児期、児童期、思春期の特徴と問題）、適応と不適応、そして心のケアと援助法等について学ぶ。ロール・プレイも実施し、その体験をふまえながら、子どもとの関わり方、保育のあり方についても理解を深めていく。	
子育て支援論	量的調査を読むことで、現代家族の子育て支援ニーズのコアが親子の孤立と育児の不安定にあることをつかみ、そのニーズに対する子育て支援施策、特に自治体の次世代育成支援行動計画を検証する。合わせて、少子化対策と子育て支援対策が連動していることを学び、その限界と問題点を明らかにする。さらに、保育園、幼稚園、保健センター等での具体的な支援実践事例の検討を通して、有効な支援の方法をさぐり、これからのあるべき子育て支援のデザインを試みる。		

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目	子ども臨床コース 保育者・教師のメンタルヘルス	子どものメンタルヘルスに続く科目である。現代社会では、保育・教育現場において、保育者・教師は様々なストレスにさらされている。本講義では、主に、人間関係に焦点をあて、保育者・教師のメンタルヘルス（精神的健康）について学習していく。心の病やその対処法についても、カウンセリングの視点をふまえ、学ぶ。あわせて、学生が自身のメンタルヘルスを振り返りながら、自己理解、他者理解を深め、将来、保育士、教師として働いていくために必要な対策を自ら考えていけるようになることを目標とする。	
	子どもの発達臨床	主に乳幼児期から児童期・思春期までの時期における、子どもの発達に現れる様々な臨床的問題を取り上げ、背景にある病理のメカニズムと、教育・保育・育児現場における具体的な支援の方法を学ぶ。実践事例を紹介しながら、発達の視点からどのように問題を捉え、どのように対応していくかに関する発達臨床の理論と方法の基礎を理解する。具体的には様々な発達障害を中心とし、心身症などの心理的問題、愛着障害を含む家庭養育問題等を取り扱う。	
	家庭教育論	本授業は教育学や心理学・社会学以外の家庭教育に関する様々な学問的アプローチを知る。その学習を通じて、子どもが社会人として自立するまでに、家庭で行われること、親に求められていることを考えることを通じて、家庭教育のあり方について考えることができることを目標とする。	
	乳児保育 1	乳児保育 1 では、まず新生児期から幼児期までの乳幼児の全般的な発達過程を理解しながら、特に乳児期の発達の内容とおとなのかかわりの重要性について理解する。また、乳児保育の人的環境と物的環境のあり方や、乳児保育の方法・内容について実際に演習形式で学ぶ。	
	乳児保育 2	乳児保育 2 では、乳児保育を取りまく様々な思想や制度、また、乳児保育の歴史と今後のあり方について学ぶ。少子化社会対策大綱を踏まえて、乳児保育が社会に果たすべき役割や、今後のあり方について理解する。また、後期末に行われる保育所実習を想定し、乳児保育担当者としての職務や保育の流れの実際、保育方法や保育教材についても学習する。	
	障害児保育	障害のある乳幼児について、障害の特性の理解と発達の理解、基本的な指導方法の理解、保護者や地域での連携のあり方について、個々の子ども達の発達と障害特性に応じた理論と実践の基礎を学ぶ。授業はディスカッションや実技も含み、様々な障害のある子ども達の保育に対する実践的な力を養う。	
	養護内容	多様な専門職が援助対象となる子どもと関わる中で、直接援助を行う保育士の役割は重要である。そこで、保育士による援助の計画や実践を想定したり、援助に関連する課題について調べ、討論することにより、児童福祉施設における保育士の役割の理解と実践能力を身につける。	
	乳児保育実践論	乳児期は心身の成長・発達が著しい時期であり、この時期に人への信頼感・愛着が形成され人間としての基礎が育まれる。そこで授業では、育ちを支え伸ばす保育について、人的、物的なあり方を実践的に学ぶ。	
	子どもと文化	子どもの文化の一つとして 幼稚園、保育園で大きな関わりのある絵本、紙しばいについてとりあげる。乳幼児の成長・発達にとって 絵本、紙しばいの果たす役割、年齢と絵本の選び方および読み聞かせの意義を保育計画に具体的にどうとりあげていくのかを考えながら、自分自身がまず絵本を好きになっていくことを中心に実践的に学習する。	
	子どもと環境	子どもをとりまく様々な環境と、その中での子どもの成長について概観する。特に自然環境の豊かさが子どもの感性にどう影響するのかについて、実際に体験しながら学ぶ。	
	子どもと遊び	子どもの遊びを取りまく今日の環境について学習しつつ、子どもにとってのあそびの役割を理解する。人とかかわりを育てる遊び、物を媒介にして楽しむ遊びなど様々な遊びの種類と内容について演習形式で理解する。特に、近年地域や家庭で伝承されなくなってきた集団遊びやわらべうた遊びなどについても学習し、遊びを通して子どもの発達を促すネットワークや保育者・指導員の役割についても学ぶ。	
養護方法論	児童福祉施設において、援助者がどのように児童と関わったらよいかを学ぶ。まず、児童に関わる際の方法の基本原理を確認し、実際に関わる際の留意点を学ぶ。さらに、個別指導と集団指導の両者について学ぶ。特に児童養護に関わる問題として「いじめ」を取り上げる。多くの具体的な事例検討を通じて、養護のあり方への理解を深めつつ、実践能力を身につける。		

科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 目	子どもと表現	音楽や造形による表現活動だけでなく、ここでは子どもの成長発達に大きな影響を及ぼす児童文化財を用いた表現活動について学びます。さらに、児童文化財の中から、保育によく用いられるお話・絵本・紙しばい・人形劇・ペープサート・パネルシアター・エプロンシアターなどを中心として、実際に制作しながら、お互いに表現しあい、学びます。乳幼児期の子どもたちにとって、児童文化財との出会いがかわりがどのような意味を持つのかということについても考えていきます。	
	幼児の体育	子どもにとって、体育・運動・スポーツ活動と遊びとの間に境界線はない。むしろ生活の中における遊びの一つとして運動が位置づけられる。本講義では、運動遊びの実践を通じて、乳幼児期の発育・発達と運動との関係について知り、各発達段階に応じた運動遊びを提供できるようになることをねらいとする。そして、幼稚園や保育園などにおける保育者の「運動遊びの仲間・指導者」として望ましい資質を身につけることを目的とする。	
	幼児の音楽	幼児の音楽的な成長や発達上の特性について理解を深め、幼児の感性、創造性を豊かに伸長させることのできる「幼児の音楽」のあり方について学ぶことを目的とする。幼稚園や保育所における様々な音楽表現活動（手遊び歌、リトミック、わらべうた、器楽合奏、コレオグラフィ、ボディパーカッション等）を演習形式で体験するとともに、保育者に必要とされる音楽表現力を養う。	
	幼児の造形	造形に関する基本的な知識や技能について学ぶ。具体的には以下の四つについて学ぶ。 1. 造形活動を行う上で必要な材料や道具などに関する基本的な知識 2. 描き造るために必要な絵画や工作、彫塑などに関する知識や技能 3. 様々な造形活動を通じての楽しさや喜びの経験 4. 造形玩具、遊具、ペープサート、影絵など保育実践において必要な知識や技能	
	保育実習	実習の種類、流れ、目的、目標、段階、内容を取り上げる。さらに、実習生の身分を理解させ、かつ実習施設の理解を図る。そして、施設実習（保育所を除く）と保育所実習の内容と方法を理解させる。その際に施設別の内容と方法、保育所での実習の内容と方法を理解させる。具体的な内容として実習日誌の書き方、観察の方法、実習園での反省会での学生のあり方についても理解を図る。実習後の学内での反省会についても理解させる。	
	保育実習2	学生が保育所を除く児童福祉施設を選ぶ実習のため、各施設のかなり専門的な内容について学習することに力を入れる。特に、各施設の特徴を細かく理解させるため、児童や利用者の具体的な動きや言葉、要求、人間関係を観察し、記録することの重要性について取り上げ理解を図る。記録は、その日のテーマに基いて、絞って書くことの重要性について理解させる。	
	保育実習3	90時間の「保育実習3」の施設での実習が円滑に進むことを図る。特に保育実習2との選択実習なので、この実習では指導実習の内容をも理解できるようにする。そして、学生が自ら選んだ実習なので、自分で課題意識が持てるようになることに主眼を置く。特に施設の種類をも学生が選ぶ実習なので、具体的な細かい内容を学習することに力を入れる。	